

ハイスクールD×D ～を
神操機〈ドライブ〉を
宿す者～

仮面肆

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて、天使と悪魔、堕天使は争いを繰り返し、やがて種族の激減や戦力の疲弊を招いた。

無論、それは3種族の神々から信頼されていた“シキガミ”達も同じであり、絶滅する運命だった。

しかし、神は最後の力を振り絞り、残ったシキガミ達を助ける為に“とある神器”へと宿し、ある人の子へと送った。

そして……3種族の戦争から時は流れ、シキガミ達は1人の少年の中に宿っていた。

これは……とある悪魔の眷族達と、シキガミ達を宿した少年の物語である……。

※タグにヒロイン追記。 増える可能性大です。

目次

登場人物紹介【第2章迄記載】※初見閲	
覧注意	1
旧校舎のディアボロス　　くシキガミ、降 神します！く	
第1話：駒王に降りた四季の神	13
第2話：グレモリー眷属との出会い	35
第3話：舞う赤札と黒い羽	56
第4話：闘神士、八雲	82
第5話：さよなら日常	101
第6話：よろしく非日常	117
第7話：悪魔のお仕事・契約編	141
第8話：悪魔のお仕事・討伐編	166
第9話：はぐれ悪魔祓いへエクソシス	202
ト	
第10話：再会、聖女と墮天使	222
第11話：聖女の救出、オカ研VS墮天	249
使集団	
第12話：目覚めし黒き白虎	276
第13話：聖女の転生	299

戦闘校舎のフェニックス　く謎の少女、

現れます！く

第14話：使い魔の森の合成獣へキメラ

——— 318

第15話：お世話主任、八雲　——— 362

第16話：悩める紅髪の滅殺姫ヘルイ

ン・プリンセス　——— 389

第17話：婚約者は不死鳥へフェニックス

——— 416

第18話：修行の始まりin人間界

437

第19話：特訓の成果　——— 462

第20話：開幕、レーティングゲーム

495

第21話：炸裂、真終牙黄流拳法

515

第22話：片鱗、くうろの力　——— 538

第23話：発動、禁手へバランスプレイ

カー　——— 560

第24話：反撃、2人の切り札

583

第25話：芽生えた想い　——— 604

月光校庭のエクスカリバー　くダチの

為、闘います！く

第26話：勧誘、八雲　——— 621

第27話：球技大会の闘神士　——— 641

第 2 8 話：復讐の騎士へナイト

663

第 2 9 話：赤い来訪者

688

第 3 0 話：教会からの使者

717

第 3 1 話：結成、聖剣へエクスカリバー

破壊団

741

第 3 2 話：スケベ達の目標

765

登場人物紹介【第2章迄記載】※初見閲覧注意

【主人公編】

よしかわ やくも
吉川八雲

駒王学園に転校してきた2年生。一誠と同じクラス。

転校初日、はぐれ悪魔に襲われたところで自身の神器が目覚めてはコゲンタと出会い、その騒動中にリアスとも出会った。リアス達が墮天使に襲われていた所を救い、オカルト研究部へと入部した。

物心がついた頃から家に伝わる『真終しんつい牙黄流拳法』を父親から教わり、身体能力は高い。尚、毎朝の鍛練を欠かさず行っている結果、現在進行中で鍛えられている。

内にある魔力は大きく、闘神符を数枚合わせて繰り出す統合符といった技を編み出す辺り、魔力の扱いも上手い。

昔から動物に懐かれやすく、リアス達の使い魔もすぐに懐かれた。

“手が伸ばせる範囲は自分の世界”と決めており、傷付けた者には容赦ない。因みに、世界とは“友人や知り合った者達”である。

牛丼が好物。

所持神器 『シリーズン・ドライブの神操機』

全72体ものシキガミが宿る手甲型の神器。左右の色が黒と白、手の甲に嵌め込まれた勾玉の宝玉が白と黒といった、配色が左右非対称が特徴。

発動時、身体能力を倍加する事が可能の他、右腕はシキガミの力を開放する印の発動、左腕は様々な能力を持った赤札の『闘神符』を造り出せる。又、シキガミが司る同じ力を貸し付けたり、奪ったりする事も出来る。

【オリキャラ編・主人公陣営】

くうろ

使い魔の森で出会った子犬の様な生き物。ひよんな事から人間になっている。人間の名前は、いぬむた 狗牟田・オーキス O・くうろ。

何故か八雲達と出会う前の記憶が無いが、八雲を御主人様と呼んで慕って甘えてくる。そのスキンシップは過剰であり、人前ではしない様に八雲から言われているのだが、自宅に戻れば籠が外れ、甘噛みや膝枕等で思い切り甘えてくる。身体能力は高く、具現化系の魔力を得意としている。

使用武器 『とうじんじゆう 闘神銃』

くうろが魔力で具現化させたハンドガン。弾丸はボールの様に強く性質を持ち、跳ねる程速度が増す。闘神符を用いる事で弾丸の性質が変化する。

ナイフ

闘神銃と同じ様に具現化したサバイバルナイフ。

能力『半獣人化』

犬耳と尻尾、牙を生やしては戦闘力を強化する技。獣特有の力を発揮する。

【オリキヤラ編・一般人】

吉川おつる

和菓子店つる屋の店長をしている八雲の祖母。高齢にもかかわらず背筋は真っ直ぐで、八雲をかわいがっている。

吉川赤蘭^{せきらん}

和菓子店つる屋の和菓子職人をしている八雲の祖父。寡黙家だが、その雰囲気にな所でも人気がある。

【オリキャラ編・その他】

コウリユウ

『^{ジャツジ}審判^{メン}の^{ト・ド}四^ラ季^ゴ龍』と言われたドラゴン。シキガミ界の初代統治者。

【シキガミ編】

シキガミ

節季等を司る荒神や精霊の総称。陰陽五行を基礎として生を受けている。

悪魔、天使、墮天使とは大戦時に力を提供したが、その事で過激派に力の酷使や拉致等をされて、多くのシキガミが亡くなったが、絶滅寸前の所を神が助け、神器へと避難させられては絶滅を逃れた。

現在、シキガミの数は24種族72人しかいない。

【シキガミ一族一覧】

各一族は司る節季と力を持ち、司る力を契約者に貸し与えたり、指名された者に司る力を奪う事も出来る。

一部のシキガミが目覚める毎に、八雲に何かしらの影響を与える。

例) 〔一族名〕「節季」：説明

★影響有り

【椿】^{つばき}「立春2 / 4 / 2 / 18」：木属性。活力を司る熊の一族。斧を振り回し、強烈な力

を誇る。

椿のゴロウザ……2章登場。熊に似た獸人的な外見を持つシキガミ。戦いに豪快さを求む。武器は陰陽斧『月輪刃』と『日輪刃』。

【雷火】「雨水 2 / 19 / 3 / 5」：火属性。希望を司る猛禽類の一族。手槍を武器とし、最速を誇る。

雷火のフサノシン……2章登場。ハヤブサに似た鳥人的な外見を持つシキガミ。やんちゃで無鉄砲な所があるが、シキガミの中でも1、2を争う飛行速度を持っている。

武器は陰陽手槍『雷鳴王』。

【芽吹】「啓蟄 3 / 6 / 3 / 20」：土属性。才能を司る指導者の役目を担う爬虫類、両生類の一族。鞭を武器とする。

【青龍】「春分 3 / 21 / 4 / 4」：土属性。人望を司り東方を守護する。白虎と同等の戦闘能力を有し、矛を繰り出す。

青龍のブリユネ……1章登場。西洋のドラゴンに似た獸人的な外見を持つシキガミ。誇り高い軍人氣質で、卑怯卑劣を嫌う。武器は陰陽矛『ラ・マルセイエーズ』。

★【青錫】「清明 4 / 5 / 4 / 20」：金属性。適応力を司るトンボ、バッタ、オケラの一族。戦闘を巧みに読み、ボーガンを使用する。目覚める毎に過酷な環境でも適応出来る。

青錫のナナヤ……1章登場。オニヤンマに似た機械人的な外見を持つシキガミ。語学に優れ通訳としての才能があり、八雲に言語翻訳の能力を与えた。武器は陰陽ポーガン『三毬杖』。ポーガン以外に、背中の短剣による接近戦も得意。

青錫のジユウゾウ……2章登場。バツタに似た機械人的な外見を持つシキガミ。強かな傭兵的な思考を持ち、狙撃を得意とする。武器は陰陽ポーガン『黄昏』。

【消雪】「穀雨4 / 21 ~ 5 / 5」・水属性。安定を司る海に生きる脊椎動物の一族。自然を脅かす者には銛で切り裂く残酷さも持ち合わせる。

【榎】「立夏5 / 6 ~ 5 / 20」・木属性。学問を司る類人猿の一族。シキガミ一の知恵者集団で、軍師、参謀タイプ。長槍を扱う。

榎のコンゴウ……2章登場。ゴリラに似た獣人的な外見を持つシキガミ。多くの戦闘経験と優れた頭脳を持ち、目覚めては『二十四気の神操機』の性質を調査した。武器は陰陽長槍『無双樹』。

【大火】「小満5 / 21 ~ 6 / 5」・火属性。援助を司る夜行性一族。脛に一傷ありそうな連中。算盤を武器に使う。

【繁茂】「芒種6 / 6 ~ 6 / 21」・土属性。成長を司るげっ歯類一族。努力家集団で、巻物を武器に扱う。

【朱雀】「夏至6 / 22 ~ 7 / 6」・土属性。再生を司り南方を守護する。土属性で唯一飛

行能力を持つ。手裏剣を扱い、再生能力も使える。

★【赤銅】あかがね「小暑7/7〜7/22」・金属性。心を司るカブトムシの一族。金属性の硬度を誇る。重量級鉄球を操り、一部念動力も扱える。目覚める毎に繋がった相手と以心伝心になる。

赤銅のイソロク……2章登場。カブトムシに似た機械人的な外見のシキガミ。酒豪で豪快だが、見た目によらずとても勘が鋭い。武器は陰陽鉄球『朝洞塊』。

★【甘露】かんろ「大暑7/23〜8/7」：水属性。加護を司る軟体動物の一族。錫杖を用し、予言も扱う。目覚める毎に【壁】の闘神符の性能が上がる。

甘露のクラダユウ……1章登場。クラゲに似た魚人的な外見を持つ巫女的なシキガミ。占いが得意で、行動する時は八雲の身の安全を常に考えている。武器は陰陽錫杖『祓々』。

【楓】かえで「立秋へりつしゅう」8/8〜8/22」・木属性。情熱を司る偶蹄目の一族。凄まじい動体視力を持ち、弓、双弓を操る。

【癒火】いやしび「処夏8/23〜9/7」・火属性。回復を司る白い羽の一族。針を扱い、治癒能力を有する。

癒火のヒヨシノ……1章登場。白鳥の雛に似た鳥人的な外見を持つ最年少シキガミ。御腕型船舶一級技師の資格を持つ。武器は陰陽針『痛点角』。

【豊穰】「白露9／8〜9／22」・土属性。協力を司る猫一族。鎖を扱い、美しさを併せ持つ。

【白虎】「秋分9／23〜10／7」・土属性。信頼を司り西方を守護する。剣を操り、最強の攻撃力を誇る。

白虎のコゲンタ……1章登場。虎に似た獣人的な外見を持つシキガミで、八雲と初めて出会った相棒。おおざっぱだが友情に厚い。武器は陰陽剣『西海道虎鉄』。

白虎のランゲツ……1章登場。黒い毛並みをした虎に似た獣人的な外見を持つシキガミ。強い者と戦う事を好む。武器は陰陽剣『曼珠沙華』。

【白銀】「寒露10／8〜10／23」・金属性。正義を司るハチ、チョウ、カマキリの一族。鎌、大鎌を持ち、美と残酷さを併せ持つ。

【秋水】「霜降10／24〜11／6」・水属性。根性を司る南米産水生動物の一族。三又を使い、騒がしいのを好む連中が多い。

秋水のエレキテル……2章登場。デンキウナギに似た魚人的な外見を持つシキガミ。趣味は特訓と音楽鑑賞。様々な根性に対して熱い。武器は陰陽三又『匹夫屠』。

★【柊】「立冬11／7〜11／22」・木属性。靈感を司る兎一族。数珠を持ち、内なる力を開放させる。目覚める毎に所持する魔力が上がる。

柊のホリン……2章登場。ロツプレイヤーウサギに似た獣人的な外見を持つシキガミ。

京都弁を扱い、清楚で可憐で乙女チックな性格。武器は陰陽数珠『嬰兒』。

【埋火】「小雪」11／23～12／6・火属性。生命力を司る派手な翼を持つ鳥類の一族。扇子を持ち、生粋の祭り好き。

【霜花】「大雪」12／7～12／21・土属性。進路を司る犬の一族。火器を扱い、嗅覚が敏感。

霜花のオニシバ……2章登場。柴犬に似た獣人的な外見を持つシキガミ。八雲を親分と呼んで慕う。武器は陰陽銃『回天三八式改』。

【玄武】「冬至」12／22～1／5・土属性。運命を司り北方を守護する。鉈を持ち、背中に共生する者と行動している。未来を予知する能力を持つ。

【黒鉄】「小寒」1／6～1／20・金属性。勝負を司るクワガタムシの一族。大剣を扱い、勝負事に拘る。

黒鉄のフジ……1章登場。ニホンクワガタに似た機械人的な外見を持つシキガミ。冷酷そうな姿だが、本当は仲間思い。武器は陰陽大剣『右兵衛』と『左兵衛』。

【凝寂】「大寒」1／21～2／3・水属性。理知を司る甲殻類の一族。槌、小槌を持ち、仲裁役を買って出る。

• • •

旧校舎のディアボロス　　くシキガミ、降神します！　く 第1話：駒王に降りた四季の神

はるか昔……天使、墮天使、悪魔と呼ばれる種族たちは争いを繰り返してきた。

この三つ巴の戦いはやがて種族の激滅、戦力の疲弊を理由に勝者の生まれなまま終結を迎えた。

その最中、『シキガミ』と呼ばれる種族もまた、争いにより数が激滅して滅びの一途を辿ってしまった。

しかし……シキガミの滅びを『神』が許さなかった。

「……主等にはとても世話になった……。この最後の力で、主等を滅ぼさせん……」
「お前……」

その言葉と共に、神はシキガミたちを助ける為に最後の力を使い、シキガミを『神器』へと避難させ、荒れ狂う争いの最中に誰にも知らせず、生まれてくるであろう人の子へと送ったのだった。

「……来るべき時まで、主等に宿る人の子を守ってやりなさい。それが最後の望みだ……」

「……分かったぜ。絶対にお前の願い、叶えてやつからよ！」

「……主等に、幸あれ」

これが、神とシキガミ達の最後の約束だった……。

そして……3種族の争いが終わり、神は死に、長い年月が流れると共にシキガミ達の存在も消えていったのだった……。

ある少年が目覚めるまで……。



「……あえ？」

隅に段ボールを山積んだ部屋。その窓際にはベッドがあり、一人の少年が上体を起こして欠伸した。

「……夢、か」

少年の名は、吉川よしかわ八雲やぐも。新しい生活の為に海外転勤となった母親の下を出た少年であ

り、昨日から祖父母が経営している小さな和菓子店に住んでいた。

「最近よく見るなあ」

そう言つて、八雲は夢の内容を断片的に思い出す。

荒れ狂う戦場。コウモリや鳥の様な翼を持つ者達が互いに争い、獣の様な姿をした者が他者に力を与えていく。そして――

「八雲ちゃん。朝ですよー」

扉越しから祖母に声を掛けられ、意識を戻した。

「……はーい」

八雲はそう言いつつベッドを出ると、これから通う学園の制服に着替えるのだった。



私立駒王学園くおうがくえん

女子高から共学になって間もない学園の廊下を、八雲は担任である教師と共に廊下を歩いていた。

やがて教師が2年B組の教室に止まると、八雲も同じく止まった。

「少し待っていなさい。呼ばれたら入るように」

「分かりました」

教師の言葉に八雲は頷く。呼ばれるまで待っていると、ふと窓の外を覗いた。

「……………ん？」

視界に映るは、外を歩く真紅の長髪をした女性と、黒髪で髪を結った女性。どちらも優れた美貌を持ち、同じ制服を着ているのが印象的だった。

「綺麗だなあ。見たところ片方は外国人だし、ここの留学生か？」

その女性達を八雲は見た瞬間、紅髪の女性の透き通るような碧眼が八雲を捉えていた。

「……………っ！」

その瞬間、八雲は『何か』を感じて辺りを見渡すが、辺りを見渡しても気配など全く無く、不思議そうに腕を組みながら首を傾げた。

「何だったんだ……………って、あれ？」

そして再び窓の外を覗くが、既に女性達の姿は消えていたのだった。

「……………？」

疑問を浮かべる八雲。だが、教師に呼ばれると思考を切り替えて教室へと入ったのだった。

◆ 「あー、疲れたなあ……」

あれから随分時間が経過し、夕暮れの放課後の学園に八雲は疲れた表情で教室に残っていた。

朝、無事に八雲はクラスメイト達に挨拶を済ませたのだが、休み時間毎にクラスの女子に質問攻めにされたり学園を案内させられたりと、授業終了まで続いて精神的に疲れていた。

話は変わるが、八雲は前の学校でも人気があり男子生徒としては羨ましい限りだ。しかし1回でも恋人を作った事など無く、男友達との約束を優先的にしていた。そのおかげか、八雲は男女問わず人気であり、そんな信頼と人望によってこの学園でもすぐ全員と仲良くなるだろう……。

「……そろそろ帰るかな」

背伸びをして立ち上がり、八雲は教室から出た。

「あれ？」

下駄箱前に到着。その直後、八雲は見知った人物が学園を出たのを目撃した。

「今のは、兵藤一誠……だったな」

その人物の名は、兵藤一誠。

学園に数少ない男子生徒の1人であり、八雲と同じクラスメイト。しかし女子達からの評判は悪く、別名『性欲の権化』、『変態3人組筆頭』などと呼ばれている。因みに変態3人組の残り2人は、『エロ坊主』こと松田と『エロメガネ』こと元浜の、同じ八雲のクラスメイトであり一誠の親友でもある。

(何だか嬉しそうな顔で出て行つたな。休み時間の間、何故か恨めしそうに俺を睨んでいたのに……………気になるな)

その睨みは八雲のモテっぷりに嫉妬していたのだが、八雲自身は気付いていない。

そして八雲は一誠が気になったのか、気付かれない様に跡を追うと、校舎裏へと一誠は向かっていた。

(ん？ 兵藤以外の声だと?)

校舎の陰で身を隠している八雲は気付かれないように様子を見ると、一誠と向き合っている艶やかな黒髪を持つスレンダーな少女がいた。

見つめ合う2人。夕暮れに包まれた良い雰囲気能耐え切れなくなったのか、少女がその雰囲気を破った。

「あ、あの……………イツセーくん。わ、私と付き合っていただけませんか？」

「……………え？」

(……………まずかったな)

少女の弱々しい言葉に一誠は一瞬思考が止まり、そんな青春の光景に八雲は好奇心故に少女の勇氣ある行動を見て若干の罪悪感に陥った。

「私と、付き合ってください！」

再び少女の告白。先程よりも強い決意が現れており、その言葉に八雲は静かにその場を離れた。

（おめでとう、兵藤。初日だからどんな奴かまだ分からないけど、心から祝うよ）

そう思いながら八雲は学園を出た……その瞬間だった。

「っ!？」

朝と同じ感じた『何か』。しかも朝に感じた時よりも強く、八雲の意識と関係無く両手が震えた。

「ぐっ、ああ……!？」

酷い頭痛に倒れそうになる八雲。しかし電柱を支えにして倒れるのを免れるが、八雲の頭の中には両腕に白と黒の籠手を装備した人物が、様々な生き物を模した姿をした者達と共に戦うイメージが流れ込んだ。

「はあ、はあ……!……何だ今のは?」

——気を付けろよ、八雲

「え?」

ふと、八雲は誰かの小さな声を微かに聞いた。だが辺りに誰もおらず、八雲は気のせいかもしれないながら帰路について行った。



暫く帰路にそって行く中、八雲はある違和感に気付いた。

「……………これで何回目だよ」

現在、八雲は登下校の道のものである公園にいた。しかし八雲は始めの違和感に気付いた。た。

その違和感とは、何故か公園に八雲以外の人がいなかったのだ。それに気付いた八雲は公園にあるベンチに鞆を置いて進んだが、何故か同じ場所へと戻ったのだ。

あり得ないと驚愕し、八雲は無我夢中で走り出した。その結果、同じ場所へと戻ってしまったのだ。

「暗くなってきたな。そろそろ帰らないとばあちゃん達が心配するし、どうしたものか……………」

ベンチに座り、この公園の脱出を考える八雲だったが、それはすぐに終わった。何故なら――

「ケケケ……。今夜の獲物は男ですか……」

「ん?」

背後から声が聞こえたのだ。八雲は心の中で安堵しながら後ろを振り返るが、声の主を見て驚愕と悪寒が走った。

何故なら、その声の主の身体の大きさは人間と大差無いが、全身は一目で人間とは違う存在だったのだ。

顔の形は蟹に近く、背中には蟹の脚を思わせる飾りが付いたメタリックオレンジの怪物。そして左手は人間と同じ形だが、右腕のみ大きく分厚いハサミであり、怪物は右腕を一振りしただけで、近くの木を切り倒してしまったのだ。

「ば、化け物!」

「ケケーツ!」

瞬間、蟹の怪物は八雲に襲い掛かってきたが、八雲は咄嗟に横へ飛び込むように避けると、直ぐ様この場所から雑木林へと逃げ出した。

「何処へ逃げても無駄ですよ!」

「ちよっ!?! 何で追い掛けて来るんだよ!?!」

追われる八雲に追い掛ける蟹の怪物。しかし八雲の持ち前の身体能力による驚異的な足の速さのおかげか、蟹の怪物の距離は一向に変わらなかった。

「何時まで逃げれば……つて、うおっ!!」

刹那、後ろを確認しながら走った八雲は躓いてしまい、目の前の木に激突して地面に尻餅をついてしまった。

「痛たた……」

「ふう……意外と速いんですね」

「げっ!」

振り返る八雲。その5メートル先に、蟹の怪物がハサミを撫でながら近付いていた。

「ですが獲物を追い詰めるこの感覚……癖になるんですよ。さあ……頂点へ押し上げる為に私の糧となりなさい!」

(くっ……ここまでなのか……?)

蟹の怪物が近付く中、八雲は走馬灯の様に思い出し出していた。

自分を産んで育ててくれた母。小さい頃に様々な事を教え、鍛えさせられ、今は世界中を旅している父。可愛がってくれた祖父。産まれ育った町の商店街の大人達や、小・中・高と仲が良かった友人達。そして初日に出会った新しいクラスメイト達等々……頭の中はこの人生で出会った信頼を築いてきた人々の思い出だった。

(まだ人生の半分も経ってないのに……まだ青春を謳歌しきれてないのに……こんな所で終わるのか?)

その悔しさが、その絶望が、八雲は目を閉じ叫び出した。

「くっそおおお!!」

「終わりです! ケケケケーツ!!」

蟹の怪物は巨大なハサミを突き出す。心臓目掛けて突き出したハサミに、八雲は為す術が無かった……………かに見えた。

——イイイイイイン!!

「ギヤアアア!!」

「へっ?」

突如、叫びながら倒れた蟹の怪物。八雲は目を開けると、目の前が……………否、八雲自身^が光っていたのだ。

「な、何だこれ——」

八雲は光に包まれてしまい暫く目を閉じた。



そして次に目を開けると、八雲は公園では無い何処かに立っていた。

「(イイ)は、何処だ?」

白と黒が混ざった空間に並ぶ、見渡す限りの長い襖障子。その境の向こう側に蠢く影たちは、何故かこちらを見つめる気配を八雲は感じていた。

そして八雲の前から、八雲と同じ背丈の影が襖障子越しに現れた。

『やつと聞こえたんだな、吉川八雲』

「え？」

響く少年の声に八雲は思い出した。学園を出た際に微かに聞いた、気のせいだと思っただ声だ。

『オレ達は八雲が産まれる前からずっと見守ってきた。神の野郎に助けられた分まで、オレたちは宿主のお前を守るって約束したしな』

「見守ってきた？ それって一体……？」

『そんなのはどうでもいいだろ。今はこの危ない状況をどうするか……だろ？』

その者の声に、八雲はハッとする。

「そうだ……あの怪物はッ!？」

『一時的にだが、辺りの時間を止めてるぜ。だけどそろそろ動き出すぞ。——それで、お前は どうするんだ？ この場から逃げるんだったら、おれが出口まで導くぜ』

「俺は……」

襖障子越しの者の言葉を聞き、八雲は何故か蟹の怪物の言葉を思い出す。

今夜の獲物は男ですか……と。

蟹の怪物は八雲を見て確かに言った。それは、蟹の怪物は今まで人を襲い続けていたのだと確信してしまった。

そして、八雲は決意を宿した瞳でその者に言う。

「俺は……戦いたい。このままだと、あの怪物は別の人を襲うかもしれない。もし今まで見守ってくれたのなら、俺に力を……あの怪物を倒す力を……人を守る力を貸してくれ！」

暫しの沈黙。だがそれは、その者の笑い声で壊された。

『へへっ。そう言うと思っただけ、八雲！ だったらさっさとオレ様の名前を叫べ。『白虎のコゲンタ』様とな！』

「ああ……宜しくな、白虎のコゲンタ！」

『呼び捨てたあ上等だあ……。——承ったあ!!』

◆ 「い、今のは一体………なっ!？」

光が収まり、蟹の怪物は八雲を見て驚愕した。

八雲の左右の腕に現れたのは、白と黒の手甲。各々の手の甲には勾玉に似た黒と白の宝玉が嵌め込まれており、各々の宝玉から神々しい輝きが発した瞬間、八雲の頭に送る様に情報が流れ込んだ。

「行くぞ、コゲンタ……」

そして八雲はこの手甲の使い方を理解した瞬間、右腕を突き出し、宿る者の名を想いながら叫んだ。

「シキガミ、降神！」

瞬間、八雲の目の前に八卦の陣と襖障子が出現。それが開き、そこから光の玉に覆われた者が現れると、八雲は右腕を十字に動かした。

右に振ると光の玉から右腕が、上に振り上げると左腕が、左に振ると両足が、最後に下に力強く振り下ろした瞬間、現れた両腕がまるで殻を破る様に引き裂いた。

現れたのは、白い毛並みを持つ虎に似た獣人的な外見をした者。動きやすい装束に身を纏い、背中には巨大な剣を背負い、尻尾の先に拳並みの大きな鈴を付けていた。

そして、その者は八雲を守るかの様に現れ、高らかに自身を名乗った。

「白虎のコゲンタ、見参！」

今、長い年月を経て、シキガミが再び舞い降りたのだった。

◆ その頃……八雲がいる公園の入り口に駒王学園の制服を着た女性が、美しい紅い髪を靡かせながら何かを探す様に歩いていった。

「……全く。まさか私の縄張りに土足で踏み込んでくるだなんて、いい度胸してるわね」
 そう言いながら女性は公園の雑木林へ足を運ぶと、何かが聞こえた。

「……妙ね。普段は相手の領域に入ると静かなのに少し騒がしいわ。それに、この音………金属音かしら？」

周辺を警戒しながら歩く女性。しかし突然――

「ギヤアアアア!?!」

目の前に蟹の怪物が転がり込んできた。そして一目見ただけでも分かるくらいにロボロの状態であり、蟹の怪物は驚いている女性に目もくれずに立ち上がった。

「な、なんてデタラメな強さだ!?!」

絶望に染まった顔で見つめる怪物。そして女性も同じ方向へ視線を向けると、その正体が判明した。

「おらあああああつ!!」

飛び上がるのは白虎のコゲンタ。両手で愛用の武器である陰陽剣・西海道虎鉄さいかいどうてつを握りし

め、蟹の怪物の巨大なハサミを切断した。

「わ、私の自慢のハサミが!？」

「どうした？ 大人しく倒されるか？」

「ちいつ！ 凶に乗るなよ小僧おお!!」

コゲンタの挑発に乗り、怒りに染まった蟹の怪物は飛び上がった。

「震しん！ 坎かん！ 兌だ！ 離り！

「え？」

瞬間、コゲンタの後ろにいた存在の声に気付いた女性は視線を移すと、右腕を下に降り下ろした八雲が視界に写った。

「必殺、弧月拳舞!!」

瞬間、コゲンタは蟹の怪物目掛けてダッシュすると、体は無数の三日月の刃となり蟹の怪物に斬り掛かり、最後に拳を繰り出してメタリックオレンジの皮膚を破壊した。

「ギ、アア、ア……」

「へっ、意外と丈夫じゃねえか」

倒れた蟹の怪物を睨み付けるコゲンタ。そんな中、戦いを見ていた女性がコゲンタに声を掛けた。

「見かけない顔ね」

「あ?」

「あなたは悪魔? それとも墮天使かしら?」

「おいおい。いきなり現れて何言ってるんだよ……って、お前まさか!」

「どうしたコゲンタ……って、あれ?」

すると、コゲンタの反応に気付いた八雲は声を掛けたが、視界に女性が映り首を傾げた。

「あら、あなたは今朝見掛けた生徒ね。こんばんは」

「そう言うあんたは、今朝見た2人の内の、俺を見つめてた人だよな? どうしてここに?」

「私はそこで倒れてる『はぐれ悪魔』を討伐しに来ただけよ。それにしても、まさか^{セイクリッド・ギア}神 器を持っていたのね」

「はぐれ悪魔? それにセイ何とかって一体……?」

女性の言葉に理解が追いつかない八雲。

「こ、こんな所で……死ねんのだよ!!」

そんな中、蟹の怪物がゆっくりと立ち上がると、直ぐ様八雲は女性の正面に向かって跳び上がり、女性を庇う様に立った。

「すぐに逃げろ。ここは俺とコゲンタ^神が何とかするから、早く——」

「八雲が女性に避難を促すが、女性は八雲の肩に手を置き、堂々と八雲の前に立ち塞がった。」

「お気遣い感謝するわ。でも生憎、グレモリー家の悪魔はこの程度の雑魚に手こずる事は無いわ」

「え？」

「グ、グレモリーだ?!」

「なるほどな……」

何のことか理解出来ていない八雲に対し、蟹の怪物は明らかに怯えた反応を、コゲンタは納得した反応を示していた。

「はぐれ悪魔シザース。私の縄張りを荒らしたこと後悔しなさい」

すると蟹の怪物もとい、はぐれ悪魔のシザースを一瞥する女性の右手に、黒い塊のようなものが現れた。

「い、嫌だあああつ!!」

シザースは背を向けてその場から逃走を図ろうとした。だが――

「消えなさい」

女性の手から放たれた黒い波動が、逃げ惑うシザースに迫る。

「い、嫌だ! 私……絶対生き、延び……て……」

そして、シザースは女性の一言と共に放たれた黒い波動に飲み込まれ、シザースがいた場所には抉れた地面だけが残っていた。

「す、凄……」

凄まじい力に驚く八雲。そんな中、女性は八雲を見つめながら言った。

「それで、あなたは一体何者なの？ 見たところ学園の生徒のようだけど」

「え？ えつと、今日から駒王学園に転校した吉川八雲だ」

「あら、それじゃあ私の後輩ね。私はリアス・グレモリー。よろしくね」

その名を聞き、八雲はクラスメイト達から聞いた学園に在籍する人気の生徒の噂を思い出す。

リアス・グレモリー。

駒王学園に通うマドンナ的存在であり、男女を問わず生徒達の人気者の1人である。

「せ、先輩だったんですか……。——すいませんグレモリー先輩。馴れ馴れしく自己紹介を……」

一拍置いた後、八雲は謝罪しながらリアスに頭を下げると、リアスは気にせずと言った。

「気にしなくていいわ。あと名前でもいいわよ。名字で呼ばれるのはあまり好きじゃないの」

しかしリアスは気にしない風に言う、髪を掻き上げて八雲を見つめる。

「そんなことより一つ確認させて頂戴。あなたも悪魔なの？」

「悪魔？ いや、俺は——」

「やいやいやい！ オレの存在を忘れるたあいい度胸じゃねえのか？」

八雲とリアスが話していると、コゲンタの声が割り込んできた。

「コゲンタ！ さつきはありがとな。おかげで助かった」

「お、おう……。分かればいいんだよ」

コゲンタが照れる中、リアスがコゲンタを見つめる。

「へえ……。今気付いたけど、その猫ちゃんは悪魔じゃ無いのね」

「うおおおいつ!! 誰が猫だ、誰が！ オレは白虎……。シキガミの、白虎のコゲンタ様だ

！」

「シキガミ？ 聞いた事が無いわね……」

そう言いながら、何故かリアスはコゲンタの頭を撫でた。

「だ・か・ら……。猫扱いすんなああああ！」

頬を染めて怒るコゲンタ。瞬間、コゲンタの後ろから襖障子が現れると、コゲンタはそれを開けた。

「戻るか？」

「ああ。最後のが無かったら色々と教えたい所だけど、それはまた明日な。——んじゃあな、八雲」

「ああ。バイス、コゲンタ」

そう言い残してコゲンタは襖障子を乱暴に閉めると、八雲とリアスを残して襖障子は消えてしまった。

「……あの、リアス先輩。さっきの怪物の事を知っていた様ですが……何者ですか？」

「……そうね。あなたには知る権利があるから教えてあげるわ。でも今日は遅いから、明日の放課後、旧校舎に来てくれるかしら？」

「分かりました」

八雲とリアスは約束を交わすと、公園の入り口で別れようとして八雲は手を振った。

「それじゃリアス先輩、バイスです」

「ええ。また明日ね……」

こうして2人は解散し、各々明日の為に休むのだった。

これが……吉川八雲とリアス・グレモリーの出会いであり、悪魔、天使、墮天使、シキガミを巻き込む壮大な青春の幕開けであった。

「……………
バ・イ・ス・つ・て、
ど・う・言・う・意・味・か・し・ら・？」

第2話：グレモリー眷属との出会い

「……………マズイな」

リアスと別れてから暫くのことだった。

現在、八雲は祖父母が経営している和菓子店の前で悩んでいた。時間帯のこともあり、辺りに人はおらず、店は既に営業時間が過ぎて閉まっているのだが、八雲は一向に入る気配が無かった。

原因は、両腕に装備された手甲だ。一応制服の下で隠しているが、何時までも制服を着ている訳にはいかず、どのようにして祖父母に気付かれないようにするかが問題とされていた。

「この手甲の使い方は頭の中に流れて来たけど……何で戻し方は教われないんだよ。――思えば消えるのか？」

そう言つて一拍置くと、八雲は心の中で何度も消えろと唱えた。

「――消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ……」

何度も――

「――消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ……」

何度も何度も――

(――消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ……)

何度も何度も何度も――

『だあああああつ！　うるせーよ八雲！』

「へっ?」

刹那、八雲の頭をコゲンタの声が響き渡った。

「コゲンタ?　一体何処にいるんだ?」

『キョロキョロすんな。不審者だと思われるぞ。それにオレは目の前にいるぞ』

「目の前って………うおっ!」

コゲンタの言葉に従い八雲は真つ直ぐ目の前に向くと、確かにコゲンタはいた。だがコゲンタの体は向こう側がうつすらと見える程に透けており、下半身に視線を移すと足元が漂う煙の様になっており、八雲は驚いてしまった。

「ゆ、幽霊!」

『幽霊じゃねえ、シキガミだ!　コゲンタ様だ!　それに何だよ消えろ消えろって……』

ついさつき言った礼は偽りだったのかよ!』

若干涙目のコゲンタに対し、八雲は発する。

「いや違う、誤解だ!　この手甲が消えなくて家に入れないから、念じれば消えるか

な一っと思つて試ただけだ！ それにコゲンタは俺の命の恩人だし、さっきの感謝は偽つたりしないぞ！ 絶対に！」

『……そう面と向かつて言われると、やっぱ照れるな』

視線を逸らしながら照れ臭げに頬をポリポリと搔くコゲンタに、八雲は質問する。

「ところでコゲンタ。手甲こねを外す事つて出来るのか？」

『え？ そうだな……外すつて言うより、物を大切に仕舞う様に思えばいいんじゃないやねえの？』

「仕舞う様に、か……。やってみよう」

コゲンタの助言を信じ、八雲は手甲を大事にするイメージをした。すると手甲は光の粒子となつて消え、何時もの両腕となつたのだった。

「おお、戻つた！ ありがとうコゲンタ」

『構わねえよ。——ああ、それとな八雲。普段オレ達は戦いに呼び出されない限り、こんな風に霊体として現れてんだ。霊体状態のオレ達と話す際は、さっきの消えろみたいに心の中で言えよ。そうじゃないと周りから変人だと思われるかもな』

(……そうか、気を付けるよ。——これでいいのか?)

『飲み込み早いな、おい』

そう言うコゲンタは姿を消し、八雲はやつと家へ入れるのだった。

◆ 「あ！ 吉川先輩、おはようございます！」

「ああ、おはよう」

「おっはよー、吉川くん♪」

「おはよー」

「おーっす、吉川」

「おはようございます、先輩」

翌日、学園に来た八雲はすれ違う生徒達に——主に女子が多いが——挨拶を交わしており、暫くして教室へと到着した。

『相変わらずだな。昨日転校したばつかなのに、もう女共に人気じゃねえか』

コゲンタの言葉に、八雲は苦笑しながら席についた。

（男冥利に尽きる……………とりたいけれど、実際は男の転校生が珍しいからだろ。卒業するまで、皆とほいい関係を築きたいけどな）

『なるほど、八雲らしいな……………つて、アイツ……………』

（どうしたコゲンタ？）

反応が気になったのか、八雲はコゲンタの視線を辿ると――

「〜♪」

鼻歌まじりで教室に入る一誠を見つけ、一誠は自分の席に座った。因みに、八雲の席の隣でもある。

「おはよう、兵藤」

「ん？ おお、確か……………吉川だったな」

「ああ。それにしても、朝からご機嫌だな。何かいいことでもあったか？」

「っ!!」

八雲の言葉を聞いた瞬間、一誠は満面の笑みをした。

「何かいいことだった？ そうなんだよ！ 可愛い女の子に出会ったんだよ！」

(……………ある意味、『(かわ)可愛い(おんなの)女の子と』だよな)

「名前は天野夕麻ちゃん。ツヤツヤで綺麗な黒髪、スレンダーにも関わらずなかなかのおっぱい、彼女いない歴〓年齢の俺にも、遂に……………彼女ができましたあ!!」

「おー、おめでどう」

「しかも次の休み、夕麻ちゃんと初デートなんだよ！ ああ、楽しみ過ぎて脳内妄想やべえよ。洋服の店とか雑貨店とか入って楽しんだり、昼はレストランでカップルがストロー2本で飲むジュースなんか頼んじやったりして、デートのクライマックスには別れ

際のキスなんかしちゃったりして——」

「取り敢えず落ち着け」

そう言うなり、八雲は一誠の頭にチョップを喰らわすが、一誠のテンションは維持されたままだ。

「おやおや〜？ 彼女いない歴0年の俺にジェラスイーかい？ まあ、俺みたいに彼女作って頑張りなよ！」

（……………うぜえ）

今の一誠に何を言っても駄目だ。そう確信した八雲は、授業開始まで延々と一誠の話し相手をするのだった。

コゲンタの眩きに気付かない程に……………。

『……………何だよ、こいつに隠れてる『符力』ふりよくは？』



「……が旧校舎か……………」

放課後、八雲は昨日リアスに言われた通り、学園の校舎裏手にある旧校舎へと足を運んでいた。

人気が無く、木々に囲まれた2階建て木造校舎は、見た目だけだと学園七不思議がある程の不気味な佇まいだった。

「旧校舎って言う割には、掃除が行き届いてるな。窓ガラスも割れてないし綺麗だ。——『KEEP OUT!!』のテープが貼られた教室が気になるが……」

旧校舎に足を踏み入れ1階を探索する八雲。だが1階には誰もおらず階段に向かっている、コゲンタが話し掛ける。

『気を付けろよ八雲。1階もそうだが、2階に強い符力を感じるぜ』

「ふりよく？ 浮くのか？」

『字がちげえよ。付けるに竹冠被せた字だ。——簡単に言えば魔力の事だ。シキガミ達は魔力の事を符力と呼んでんだよ。符力が強い奴程、潜在能力が強いんだ』

「へえ………つと、ここか？」

そうこうしている内に、八雲はある一室の前で足を止めた。

『オカルト研究部』と書かれたプラカードが戸に掛けられた一室。八雲はコゲンタに視線を送ると、コゲンタは頷いて確信した。

『ここがあの子のハウスだ』

そして八雲は扉をノックして言う。

「吉川です。約束通り来ました」

「どうぞ」

中から返答が返り、八雲は扉を開けた。

「お邪魔しまー……………おお」

オカルト研究部の室内に入った瞬間、八雲は驚いた。

床、壁、天井の至るところに八雲が見たこともない面妖な文字が記されており、中央には部室の大半を占める巨大な魔方陣が目立ち、そして隅には小さなバスルームが何故か設置されていた。

「いらっしやい。待ってたわよ、吉川くん」

その言葉に八雲は振り向くと、ソファーには八雲を呼びつけた張本人であるリアス・グレモリーが座っていた。

「どうも……」

「フフツ、そんなに緊張しなくてもいいわよ。適当な場所にでも座ってちょうだい」

「は、はい」

リアスと対面する様に八雲もソファーに座り室内を見回すと、リアスの他にも人物がいた。

「君だね、部長が言ってたお客さんは。よろしく」

1人は、爽やかに笑顔を向ける少年であり、制服から察するに八雲と同学年だ。

「……………」

もう1人は、綺麗な銀髪をショートカットにした小柄な体の少女であり、黙々と羊羹を食べながら八雲を見つめていた。

そんな2人を見て、八雲は学園の人気者達の噂を思い出した。

（確か同じ学年の木場祐斗と、後輩の塔城小猫か。ここにいてるって事は、リアス先輩と同じ部員みたいだな…………）

『初めて会うのに分かるのか？』

（遠目で見掛けたことはある。それに噂と特徴を照合すれば、な…………）

そう言って、コゲンタに2人の噂を教えた。

木場祐斗。爽やかな笑顔で多くの女子達のハートを魅了する学園一の『イケメン王子』であり、男子達——八雲は除く——にとって羨ましい存在である。

塔城小猫。一部の男子に人気が高く、女子の間でも可愛いと評判で、『学園のマスコツト』と言われる程に皆から愛されている。

『ふくん…………』

説明に納得したのか、コゲンタは祐斗と小猫を見ていると、八雲のもとに別の女子が歩み寄って来た。

「あら、あなたが吉川八雲くんね。リアスから聞いてますわ。初めまして、姫島朱乃と申

します」

「あ、どうも……」

姫島朱乃。長く美しい黒髪をひとつに束ね、リアスと共に『駒王学園の二大お姉様』と称されており、性格も外見と違わず落ち着いた物腰は大和撫子を体現している。

(確かこの人、リアス先輩と一緒にいたよな……)

「朱乃、彼に紅茶でも出してあげて」

「畏まりました」

リアスの言葉に朱乃は部室の奥に引つ込むと、八雲はリアスに訪ねた。

「えっと、3人はここの部員ですか？」

「ええ。それと、私の下僕悪魔達でもあるのよ」

「下僕悪魔？」

「今から説明するわ」

その後、八雲は朱乃が入れてくれた紅茶を飲みながら、リアスの口から様々な説明を受けた。はぐれ悪魔という存在……。悪魔、堕天使、神の存在と三者の関係性……。そして神セイリッド、ゼア器について説明した。

「……取り敢えず、これらがあなたの知りたがってた事よ」

「……………何と言うか、複雑ですね」

八雲は腕を組んで首を傾げる中、リアスは立ち上がり、祐斗、小猫、朱乃もリアスの横に並び立った。

「それじゃ、改めて自己紹介させてもらうわ。——祐斗」

「はい」

そして、3人はそれぞれ自己紹介した。

「僕は木場祐斗。吉川八雲くんと同学年だよ。えーと、僕も悪魔です。よろしく」

爽やかな笑顔を向ける祐斗。

「……1年生。……塔城小猫です。よろしくお願いします。……悪魔です」

小さく頭を下げる小猫。

「3年生、姫島朱乃ですわ。一応、研究部の副部長も兼任しております。今後ともよろしくお願いします。これでも悪魔ですわ。うふふ」

礼儀正しく深く頭を下げる朱乃。

そして、最後にリアスは紅い髪を揺らしながら堂々と言う。

「そして、私が彼らの主であり、悪魔でもあるグレモリー家のリアス・グレモリーよ。家の爵位は公爵。よろしくね」

瞬間、リアスたちは背中から悪魔の翼を広げた。その光景により4人は完全に人間ではないという証明になり、八雲は啞然と見つめると、暫くして自身の頬を引っ張った。

「……夢じや無いんですね」

「まあ、それが普通の反応よ……」

そしてソファーに座り直すリアスは紅茶を一口飲むと、八雲の横に視線を向ける。

「それで、あなたの横にいるのは昨日の猫ちゃんね」

「っ！」

その発言に八雲はピクリと反応した瞬間、コゲンタはリアスを睨んでいた。

『……やっぱり見えてやがったのか』

「見えるって、全員コゲンタが見えてるんですか？」

八雲の質問に全員が頷く。

「幽霊や悪霊の相手もした事があるからね。——それで、君が持つ神セイクリッド・ギア器なのだけど、

もう一度見せてもらえるかしら？」

リアスの言葉に八雲は申し訳なさそうに頭を掻く。

「あー、それなんですが………出ないんですよ」

「出ないって………出せないの？」

リアスの言葉に八雲は頷く。実は今朝、八雲はもう一度手甲を出せないかと試したが、結局は出せなかったのだ。

『昨日は八雲がピンチだったからな。オレ達が強制的に呼び出した分、まだ自在に出せ

ねえんだ』

コゲンタの言葉にリアスは口元に手を当て考えると、暫くして八雲にある提案をした。

「なら、ここで出してみない？ 私が教えてあげるわ」

「えっ、いいんですか？」

『いいんじゃないのか。いつまでもオレ達呼び出す訳にもいけねえだろうし……』

「分かったよ。——それじゃありアス先輩、お願いします」

そして、八雲はリアスから神器の出現方法を教わり始めた。

「それじゃあ、まずは手を上げて。それから目を閉じて、あなたの中で一番強いと感じる何かを心の中で想像してみてちょうだい。想像出来たら、それが一番強く見える姿を思い浮かべるのよ」

（一番強い存在、か……）

八雲は想像する。数年間、今の自分に鍛え上げてくれたその人を……、その者が得意としている技を……。

『……ちえっ。オレじゃないのかよ』

「静かにして。——想像することが出来ればゆつくりと腕を下げて、その場で立ち上がって。そして、その一番強く見える姿を真似るの。強く思いながら」

「……………」

リアスに従い、八雲は動きを見せる。

両足を横に向かせ、体を縮こめる様に腰を落とし、その上で胴体を思い切り捻り、正面にいるリアスに殆ど背中を晒してしまっていた。そして八雲は片方の拳を握り締め、もう片方の手で拳を包み込む様にして構えると、暫く体勢を保った。

「……………ふっ！」

刹那、八雲の体が動き目を開く。足を横に向けたまま、捻っていた胴体を一気に元に戻し、構えていた拳を開放し、リアスの後ろにある窓の外に見える木へと向けた。

砲台から発射された弾丸の如き拳の速度は、リアスと朱乃の髪を揺らしており、2人は啞然と見つめていた。

(あの拳の速度、『騎士』^{ナイト}の僕でも避けきるのは難しそうだ……)

武術に心得のある祐斗も八雲の拳を見て感嘆に思う中、八雲に変化が生じた。両腕が光り出して次第に形を成していき、光が収まると両腕には昨夜の手甲が装着されていたのだった。

「おお！ 出来ましたよ、リアス先輩！」

「一度ちゃんとした発現出来れば、後はあなたの意志で何処にいても発動出来るわ……」
言い終わると、リアスは八雲の右腕を取りつつ、ゆっくり優しく擦っていた。

「えっと、リ、リアス先輩?」

「見た目は『龍トウワイズ・クリティカルの手』に近いけど、触れると何だか不思議な感覚ね。悪魔が嫌う光を感じられるし、逆に好む闇も感じられるわ……」

戸惑う八雲をよそに、リアスは手甲に触れながら自身の感想を言うと、八雲の腕を離して視線をコゲンタに向けた。

「コゲンタと言ったわね。吉川くん、この場に彼を呼べるかしら? 直接話してみたいわ」

「いいか、コゲンタ?」

『……別にいいぜ』

「分かった。——シキガミ、降神!」

右腕を突き出しながら八雲は唱えると、目の前には昨日と同じ八卦の陣と襖障子が出現し、昨日とは違いゆっくりと開いてはコゲンタが現れた。

そして八雲はソファーに座り直すと、その隣にコゲンタがドサツと座り、リアスへと口を開いた。

「……それで、聞きたい事って何だよ?」

「シキガミの存在について。朱乃に聞いた事のある『式神』とは違うし、何より微量だけど、悪魔、天使、堕天使の魔力を感じたわ……」

「つまり、リアス先輩は3種族の力を感じるコゲンタの正体を知りたいんですか？」

八雲の言葉にリアスは頷くと、コゲンタは答えた。

「……節季せつきって知ってるか？」

「せつき？」

聞き慣れない言葉にリアスは疑問符を浮かべると、朱乃が答えた。

「確か、季節の運行を表す二十四にじゅうしせつき節季でしたわね。太陰太陽暦において月名を決定して、季節とのズレを調整する為の指標として使われていると……」

「へえ、そののねーちゃん詳しいんだな」

「これでも神社の娘ですので、その辺りの知識はある程度分かりますわ」

(姫島先輩って神社の関係者なのか。道理で皆から大和撫子と言われる訳だ……)

八雲が朱乃の出身を知る中、コゲンタは言った。

「オレ達シキガミは節季とかを司る荒神や精霊の総称だ。季節である四季の神だからシキガミ。まあ、魔界や天界の住人と比べたら、勢力は約500程度と極僅かだよ」

「確かに少ないわね。でも、私はシキガミなんて存在は知らないわ。もしかして、大昔の大戦で……？」

リアスが察すると、暫くしてコゲンタが頷く。

「……………ああ。種族の8割以上は滅んだ。3種族に力を提供して、それに巻き込ま

れた」

「力の提供って、あなたも大戦に参加したのね」

「参加しても、直接の戦闘はそんなに無かったぜ。力を与えたから狙われたり、拉致られたりして滅っていったんだ」

「力を与えるって、何か特別な力があるの？」

「ああ。オレ達シキガミは司る力を与えることが可能だ。——例えばオレは“秋分”を司ると同時に“信頼”も司っている。信頼があれば戦場の士気を上げさせ味方を有利にさせるのも出来るしな」

コゲンタの言葉に、リアスはシキガミの絶滅を悟った。

司る力を与える力を持つシキガミ。その力に目を付けた3種族はシキガミを自軍に入れ、力を無理矢理に行使した挙げ句、敵軍のシキガミを滅ぼしてを繰り返し、遂に絶滅してしまったのだと……。

すると、リアスはコゲンタに頭を下げた。

「ごめんなさい、コゲンタ」

「な、何だよ急に……？」

「理不尽に滅ぼされたのね。許されないことだけど、私たち悪魔にも責任があるわ。本当にごめんなさい……」

「……別にいいぜ。シキガミは使われてなんぼの存在だ。だから頭を上げてくれよ」

コゲンタの言葉にリアスは頭を上げる中、小猫が口を開いた。

「……シキガミは、あなただけなの？」

しかし、小猫の言葉にコゲンタは否定した。

「いや、オレを含む残り72体のシキガミは全て、神がこの『シーズン・ド神操機』に宿したんだ。完全に滅んだ分けじゃねえよ……」

コゲンタの言葉に、八雲を含む全員が両腕の神器……シーズン・ド神操機に驚愕の視線を移すと、八雲は口を開いた。

「そんなに宿っているのか。でも、姿が現れないのはどうしてなんだ？」

「オレが先に目覚めたのは、八雲が生まれた節季に関係あるぜ。一部の奴等も目覚めても普段は中にいるんだが、そのおかげでオレが霊体になれる切っ掛けでもあるんだ」

「じゃあ、残りのシキガミを目覚めさせる事って出来るのか？」

「簡単だ……。強くなるんだよ、八雲」

そう言った瞬間、コゲンタはソファアーを立ち上がると襖を出現させた。

「そろそろ戻るぜ。じゃあな、リアスのねーちゃん」

「……ええ、また話しましょう」

徐々に襖障子が閉まる中、最後にコゲンタは振り向いて言った。

「あ、そうだ。——グレモリー卿のおっさんにもよろしくな」

「え？」

その言葉を最後に、コゲンタは戻っていったのだが、リアスだけが目を丸くして襖障子があつた空間を見つめていた。



時刻は夕方。八雲に事情を説明してから少し時間が経っており、夕暮れの光が照らす部屋にはリアスと朱乃だけが残っていた。

「吉川八雲と、シキガミのコゲンタ、か……」

そう呟くと同時に、リアスはコゲンタが最後に言った言葉を思い出す。

——グレモリー卿のおっさんにもよろしくな

そう発したコゲンタは、確実にリアスの実父を知っている口振りであり、恐らくグレモリー家とシキガミは何か特別な繋がりを持っている証拠だった。

そんな考えをよそに、朱乃が紅茶をリアスに渡して言った。

「不思議な方々でしたね」

「不思議どころか異常よ」

「と言うと……?」

首を傾げる朱乃に、リアスは紅茶を一口飲んでから言った。

「昨日の今日で、私達やコゲンタの説明も理解してくれてよかったわ。でも、72なんて数の荒神や精霊達を宿してる事を知っても受け入れるなんて、普通は恐怖や不安で押し潰されると思うわよ」

「確かに……コゲンタちゃんの説明で驚いた顔をした部長、初めて見ましたわ」

「自己紹介の時だって、もうちよつと怖がってもよかったと思うわね。まるで夢でも見てる様な感覚で現実なのかと確認してたし……」

「あらあら。これでは公爵家の面目丸つぶれですわね」

「……うるさいわよ、朱乃」

「あら、照れてらしやるのですか? 顔が赤いですわよ?」

「ち、違うわよ! 夕日のせいよ、夕日の! ほら、紅茶おかわり!」

「うふふ。はい、かしこまりました」

その場を離れた朱乃を見送ったリアスは席を立つと、窓から茜色の空を見上げた。

「本当、変な子だったわ」

そう言いながらリアスは視線を正面に向けると、ある事に気付いた。

「あれって……?」

リアスの目に見えるのは、旧校舎の周りにある木々。その木の1本だけ、不自然に凹んだ傷を負っていた。

「……………まさか、吉川くん？」

直径が拳並みの大きさを持つ凹み傷。その傷を見たりアスは、神器を呼び出した際に放った拳を繰り出す八雲の姿を思い出していたのだった。

「……………そう言えば、吉川くんに聞くのを忘れたわね」

そして、リアスは八雲に聞いておこうとした質問を思うのだった。

(結局、バイスって何だったのかしら……………?)

第3話：舞う赤札と黒い羽

リアスと朱乃が部室で過ごしてから、再び時は進んで夜となり、夜空には綺麗な満月が昇っていた。

現在、八雲は食後に自室のベッドに腰掛け、今し方装着した神セイクリッド・ギア器……二十四気の神操機についてコゲンタから説明を受けていた。

「……なるほど。左右の手甲は各々役割があるのか」

『おう。——右腕の手甲は、オレ達シキガミの本来の力を解放させる『印』を切ってもらう為のもの。簡単に言えば、呪文詠唱や格闘ゲームのコマンド必殺技みたいなものだと思ってくれ』

「……頭に情報が送られた時に見た複数の文字の動きがそれか。あの蟹の怪物に強力な一撃を当てたのも、印のおかげだったんだな……」

『まあな。——次に左腕だけでも、簡単に言えば自衛用だ』

「自衛用？」

八雲の言葉にコゲンタは頷く。

『例えば、オレ達を降神したくても出来ない状況があるとするぜ。その場合、八雲自身が

戦うしかないだろ？ まあ昔からオレ達は見ても分からぬが、八雲の実力ならそのいの使い魔や低級悪魔なら渡り合える力と符力があるぜ』

「……そんなに強いと思つてないんだけどな」

『いや、お前とお前の親父さんが強すぎなんだつての。——話を戻すぜ。もし八雲しか戦えない状況でも、体は人間だから脆いし疲労困憊となつて危機に晒されることもある。そこで、この左腕の出番だ』

「何が出来るんだ？」

『それはだな………ん？』

左腕を突き出すコゲンタ。しかし、何かを感じたのかコゲンタは窓から夜空を見上げた。

「どうした、コゲンタ？」

『あれは………！』

コゲンタの視線を八雲は追うと、自身の視界に月をバックに飛ぶ何かが見えた。

「鳥にしてはデカイけど、まさかコゲンタ……あれが」

『ああ、八雲が思つてる奴だ。それと……奴の通つた空に、僅かだが血の臭いがした』

「何だつて!!？」

コゲンタの発言に八雲は驚くと共に神器を戻し、部屋を出ようとした。

『行くのか?』

「ああ」

『そうか。でも、これはリアスのねーちゃんたちが解決することだと思っただろうぜ?』

「それでもだ。——もう、あの人たちと関わったんだ。俺の手が届く範囲は、何が何でも絶対に守る」

『お前の親父さんの言葉、か……。分かったぜ、八雲!』

八雲の決意にコゲンタは頷き、八雲は部屋を出て玄関へと向かい靴を履いた……。その時だった。

「どこか出掛けるのかい?」

「っ!? お、おばあちゃん……」

振り返ると、そこに立っていたのは八雲の祖母であり和菓子店『つる屋』の店長でもある『吉川おつる』だった。高齢にも関わらず背筋は真っ直ぐであり、孫の八雲を可愛がっている可愛らしい人だった。

「えーつと、ちよつと運動がてら、ランニングをしようと思って、ね……」

咄嗟に考えた言い訳を口に出す八雲。すると、おつるは納得した様に頷いていた。

「そーかい。相変わらず息子に似て元氣やねえ。無理せんよう、気をつけんさいね」

「う、うん。それじゃあ、行ってきます」

そして八雲は出ると同時に心の中でおつるに謝罪すると、コゲンタの導きで目的地へと走って向かった。

「コゲンタ、奴はどこに……!」

『……あの軌道だと、どうやら昨日の公園の様だぜ!』

「急ぐぞー!」

その発言を聞いた直後、八雲の速度が上がるのだった。



場所は変わり、八雲が初めてはぐれ悪魔に襲われた公園。月明かりに照らされるその場所に、2つの影があった。

「さて、そろそろ終わりですよ。可愛らしいグレモリー眷属の悪魔さん」

1つは、サラリーマンのスーツを着た男性だった。だがその背中には、カラスの様に黒い翼が生えており、両手には不気味な光を放つ槍が握られていた。

そう、この男は『墮天使』だった。

「……………」

もう1つは、放課後に部室で八雲と出会った小猫だった。しかし制服の所々が破れ、

腕は負傷したのか血が滲んでおり、その場に膝をついていた。

何故、この様な状況なのか……？

それは時間を少し遡る。この名も無き墮天使は、ある者達の計画に賛同し、八雲が転校して来る前にこの駒王町にやって来たのだ。

その向かう途中、墮天使は力を得る為に駒王町へ着くまで多くの人間を殺し、快楽を満たすと共に殺した人間の魂を自分の力へと吸収していた。

そして、最後に墮天使は名のある悪魔かその眷属の死体を手土産にしようと考え、入手したグレモリー眷属の情報と自身の好みから、小猫を標的としたのだ。

「どうですこの力。多くの魂を糧としたおかげで、あなた位の悪魔など私の足下にも及ばないですよ」

「……………」

墮天使を睨み付ける小猫。しかし、墮天使は徐々に小猫へと近付いて行く。

「では、最後に言う言葉はありますか？」

「……………」

「黙秘権ですか。いやはや最近の悪魔はつまらないですねえ。——あの方の大願成就の為に死になさい」

冷酷に吐き捨てる墮天使。そして、両方の光の槍を小猫に迫ろうとした……その時

だった。

「私の下僕に手を出さないでもらえるかしら？」

小猫が聞き覚えのある声に気付くと共に、光の槍が弾かれて墮天使は小猫から距離を取ると、小猫を守るように朱乃と祐斗が現れ、墮天使の少し横にリアスが立っていた。

「大丈夫、小猫ちゃん？」

「……木場先輩」

「現れましたね。グレモリーとその眷属……」

「悪いけど、あなたと話すことは何もないわ。——下僕を傷付けた罪、あなたの死で詫びてもらおうわ」

リアスの言葉を切っ掛けに眷属3人は墮天使に殺気を放つが、墮天使は余裕に笑みを崩さずに言う。

「おお、怖い怖い。あなた達3人相手だと勝ち目は薄くなりますね。だから——」

瞬間、墮天使は指を鳴らすと空中に無数の透明な球体が現れた。

「そんな物っ！」

しかし、リアスは自身を守る為、朱乃は小猫と祐斗も守る様に障壁を張り、墮天使の攻撃を防ごうとした。だが——

「少し弱ってもらいましょう」

墮天使の言葉の直後、球体は一斉に割れた。どうやらガラスの小瓶らしく、中に入っている液体が、4人の体に降り懸かった。

「これは……!?!」

「つ……ああああああ!!」

「小猫ちゃん!?　ちっ、力が……」

そしてリアスが液体の正体に気付いた瞬間、小猫が苦痛の叫びを上げ、祐斗と朱乃が膝から崩れ落ちてしまった。

そう……液体の正体は、『聖水』だ。

「どうですか、私が直々に調査した聖水の威力……。傷に触れば強烈な痛覚が襲い、量によって体力を奪う特別製なのです。ですけど——」

すると、墮天使の視線は倒れている3人から立っているリアスへと移した。

「いやはや、さすがグレモリーと言うべきか。あれだけの量を浴びても尚、立っていると
は……」

「この程度で、私が倒れる訳に、いかないじゃない……!」

「素晴らしい!　まさに『王』^{キング}の風格……。ですが、その様に弱っていく様を見るのは好かないんですよ。私……」

その言葉を最後に、遂にリアスも崩れ落ちてしまった。

「部長!？」

「リアス!？」

崩れ落ちるリアスを見て叫ぶ祐斗と朱乃。だが、堕天使は一步、また一步とリアスへと近付き、歪んだ笑みをしながら新たな光の槍を構え、高々に宣言する。

「さてさて、まさか私がグレモリー眷属を一網打尽に出来るとは夢にも思ってませんでしたよ。——そこで見ているのですよグレモリー眷属の悪魔達! この私に倒される貴様達の主のさい——」

しかし、堕天使の宣言は言い終える事はなかった。

「……………え?」

何故なら、リアスの前にいた堕天使の姿が無いからだ。

「あ、朱乃さん。今のは……………」

「今、堕天使の横に、何かが来て……………」

祐斗と朱乃の反応に気付くリアスは2人の視線を辿ると、そこに堕天使がいた。公園の遊具と巨大なある物に挟まれている堕天使の姿が……………。

「な、何なのだ……………この8角形の魔方陣は一体……………」

「……………あれは!？」

目を白黒させる堕天使をよそに、朱乃はある物がやって来た軌道を辿ると驚愕した。

「…………ええっ!？」

「…………どう、して!？」

朱乃に続き、祐斗、小猫も気付き、リアスも視線の先に見つけて驚愕した。

「ど、どうして、ここに彼が…………!？」

「……………………え?？」

そこにいたのは、拳を突き出し、啞然と見つめている八雲だった。

何故、このような体勢をしているのか…………?？」

それにはまず、少し時間を遡らないといけない。



リアスたちが墮天使と対峙している頃、八雲は走りながらコゲンタの説明を聞いていた。

「お札?？」

『ああ。左手に符力を集中すれば出てくるんだ。火炎弾や氷水弾といった副次攻撃。身体機能の簡易強化。障壁による防衛とか、色々使えるぜ』

「用途が広いんだな。しかし、符力を集中つてどうすればいいんだ?？」

『そうだな……手に何かを持つイメージをすれば出てくると思うぜ』

コゲンタの言葉に八雲は試してみようと、走りながら左手を前に持っていき集中した。すると、左手には一枚のカードが現れて八雲は足を一時的に止めた。

「……お札なのか？」

そう言いながら、八雲は裏表と交互に見つめる。

お札の大きさは、トランプとほぼ同じ。裏の中央には陰陽を表す対極図を八卦の陣で取り囲んだ模様に対し、表には何も描かれてなかった。

「……想像してたお札と違うな。どちらかと言うと、細長い紙で難しい文字が書かれた物だと思ったぞ」

『携帯しやすいからいいじゃねえか。——今出た札は、投げつければ障壁を作り出す【壁】の札だな。堕天使から誰かを守るとか思ってたからか、【壁】の札が出たんだろうな……』

「意外と的を射てるんだな。このお札……」

八雲の心理を的確に当てたお札に感心した直後、コゲンタの声が荒げた。

『……ッ！ いたぞ、八雲！』

「なッ!? リアス先輩ッ！」

視線を向ける八雲。公園まで約10メートルの地点で視界に映ったのは、崩れ落ちた

リアスに近付き槍を構える墮天使の光景だった。

「くそっ！　ここだと間に合うかどうか……！」

『八雲、その札を投げるんだ！』

「投げるつても、距離が……いや、あれならいけるか！」

何かを閃いたのか、八雲は構えた。

初めて神器を呼び出す為に行った構え。突き出させる拳にはお札が上手い具合にセツトされ、目を閉じて精神を集中させた。

『おいおい……まさか拳圧で飛ばすのか？』

「……………その——」

そして目を開いた瞬間、捻った胴体を元に戻すと同時に——

「まさかだあああああああつ!!」

コゲンタの質問を叫ぶように肯定し、拳を突き出した。瞬間、お札が一直線に向かい墮天使との距離が半分になった頃、お札から八卦の陣が現れ、そのまま墮天使に激突してしまったのだ。

「……………え？」

『マ、マジかよ……』

墮天使を押し潰す光景に唾然と見つめる八雲とコゲンタ。だが、この状況を見てコゲ

ンタはハツと気付いた。

『つて、今のうちだ！ ねーちゃんたちを助けにいくぞ！』

「お、おう。そうだな……」

そして、八雲は公園へと向かうのだった。



「大丈夫ですか！」

リアスに駆け寄る八雲。手を取り立ち上がらせると、リアスは口を開く。

「あなた、どうしてここに……？」

「コゲンタが墮天使の気配と血の臭いに気付いたんです。そして追い掛けてたら、この状況に出くわしたので……」

「そう、助かったわ。ありがとう……。——でも、この問題は私たちの問題なの。部外者であるあなたに関わってもらいたくない」

鋭い視線の言葉を向けるリアス。しかし、八雲は臆する事なく前を見据える。

「……関係なくないでしょ」

「え……？」

「例え国や種族が違つても、茶を飲み交わして話し合えば知り合いだ……。それに、目の前で危険に晒されてる奴を、俺は無視なんて出来ない！」

そして八雲はリアスたちを守る様に前へ出ると、解放された墮天使は八雲を見つけるなり憎悪を宿した視線をぶつけた。

「……ま、まさか仲間がいたとは計算外でした。しかし、よくも私に傷を付けましたね。その罪は死でもつて償つてもらいましよう！」

「血の臭いを漂わせる野郎に、これ以上は先輩たちに指一本触れさせない。——いくぞ、コゲンター！」

右腕を突き出す八雲。しかし、墮天使は槍を構えて八雲へと向かった。

「見た事のない術ですが、隙だらけですよ！」

「「吉川くん（先輩）!?!」」

迫り来る墮天使の凶刃。悲痛に叫んだリアス達だが、八雲は臆する事なく唱える。

「シキガミ、降神！」

そして、墮天使の繰り出す槍は八雲に届かなかつた。

「なっ!?!」

「八雲に……。手を出すな！」

何故なら……。現れたコゲンターが墮天使の槍を、西海道虎鉄で防いでいるからだ。

「ぜらああああっ！」

そして右薙ぎにより槍を弾き飛ばした瞬間、コゲンタは墮天使の懐へと飛び込み、腹に蹴りを一撃与えた。

「ぐげえっ！」

蹴り飛ばされ、顔を苦痛で歪ませる墮天使。間合いも元に戻る中、墮天使は余裕の笑みを浮かばせていた。

「魔獣使いでしたか。魂を糧とした私に一撃とは、その魔獣は強力ですね……。——しかし、魔獣ならこれで対処出来ますよ！」

取り出したのは聖水が入れられた小瓶。墮天使は小瓶をコゲンタに投げつけると小瓶が爆ぜ、中の聖水がコゲンタへと八雲に降りかかった。

「フハハハハ！ これであなた達の死は確定した！ 男はすぐに殺した後、女共には——」

その瞬間……勝利を確定した墮天使の発言は最後まで言えなかった。

「ごちやごちやうっせーんだよ!!」

何故なら、悪魔でも魔獣でもない八雲とコゲンタには聖水など効かず、コゲンタは墮天使の頬を力強く殴ったからだ。

「ば、馬鹿な!! 何故、私の聖水が効かないのですか!？」

「残念だけど、私は彼が悪魔だなんて一言も言っていないわ」

混乱している墮天使の質問に、朱乃たちを立ち上がらせるリアスが答えた。

「彼は私の眷属でもなければ悪魔でもない、只の人間よ」

「何だと!？」

「そう言うこつた。シキガミに聖水なんて効かねえよ！ 一気に決めるぜ、八雲！」

「ああ！」

印を空に切る八雲。その腕の速度は前回より素早く、コゲンタの力を解放した。

「必殺！」

「ひっ、ひいいいいっ!？」

恐怖のあまり動かない墮天使に対し、コゲンタはスライディングキックの要領で墮天使を空中へと蹴り上げ、コゲンタ自身も追い掛ける様に跳んだ。

「怒涛疾風牙!!」

跳躍直後、コゲンタは墮天使に一撃を当てると、空中を蹴る様にして急速ターンを行いまた一撃。

「オラオラオラオラ！」

縦横無尽に空中を駆け巡り、墮天使は空中に留まる様にコゲンタの攻撃を受け続け、翼の羽が舞っていた。

「これで……終わりだあああああっ!!」

そして、コゲンタは墮天使に止めの一撃を行おうと仕掛けた。

「……………ッ!」

「うおッ!」

しかし、最後の攻撃を墮天使は力を振り絞り回避し、コゲンタの爪は空を切った。

「ここ、こんなところで死ぬるかあつ! 絶対に貴様を殺してやるからな! 覚えてろ!」

そのような捨て台詞を言い、墮天使は八雲たちの前から逃げ出した。

だが、コゲンタは八雲に言った。

「追い掛けるぞ、八雲。あれを野放しにしてたら、また犠牲者が出るぞ」

「ああ、分かっている」

「待って!」

動き出す八雲達に、リアスが声を掛ける。

「私も連れて行きなさい。このまま舐められては、グレモリー家の恥だわ」

「でも先輩、その体じゃあ——」

「お願い」

真つ直ぐに八雲を見つめるリアス。強い意思と決意を感じ取り、八雲は頷く。

「……分かりました。一緒に追い掛けますか」

「ありがとう。——朱乃、小猫の治療をお願い。祐斗は2人を守って」

「畏まりました」

「分かりました。部長、気を付けて下さい」

リアスの指示に従う朱乃と祐斗。そして、八雲もコゲンタに指示を出す。

「追い掛けられるか、コゲンタ？」

「空を飛んでるしな。全力で走れば、オレは行けるぜ」

自信満々に宣言するコゲンタ。暫く考えた八雲は、コゲンタに声を掛けようとした。

「分かった。じゃあ——」

——待たれよ、八雲殿。

「ん?」

「え?」

刹那、八雲は名を呼ばれて反応し、リアスと祐斗も八雲の方へ目を向けた。

「部長、今のは……?」

「……はつきりと何か聞こえたわよね?」

「僕の場合、ノイズが掛かったみたいではつきりとは……」

——すまないな、グレモリーの娘とその眷属の剣士よ。今の状態では八雲殿や

我輩^{シキガミ}たちの他、純血の種族にしかよく聞こえんのだ。

「じゃあ、あなたもシキガミなのね」

——いかにも。……して、八雲殿。あの墮天使、我輩が倒してみせましょう。よいか、

コゲンタ。

「……………」

謎の言葉に若干コゲンタは乗り気ではなかったが、墮天使を確実に追う為には空を飛べるシキガミが必須だった。

暫くして、コゲンタは舌打ちをする。

「ちっ、分かったよ。交代だ、交代……………」

——では八雲殿。札に我輩を思い浮かべ、コゲンタへ投げて下さい。然すれば別のシキガミへと入れ替えが可能です。

声に従い、八雲は目を閉じて集中し、声の主を思い浮かべた。

声色からイメージして、誇り高い軍人氣質。そして見えた青い鱗を持つ者を……………。

「……………はあっ!!」

お札をコゲンタに投げ付けた瞬間、コゲンタと入れ替わる様にして新たなシキガミが現れた。

◆ その頃、駒王町上空に逃げた墮天使は、弱りながらも逃げていた。

「くそつ、下等種族ゴとときに無様な姿にされるとは……」

墮天使の憎悪は、現在八雲とコゲンタに向けられていた。

初めて自身の戦績に黒星を付けられた相手であり、この事実を自身が慕う墮天使に知られてしまえば全てが終わってしまう。そう思いながら、墮天使は新たな策を練っていた。

（傷を癒したら、まずはこの辺りの人間を殺して力を蓄えなければ……。そして、いつか必ずあの者達を葬って——）

「チエストオオオオオツ!!」

「な——」

ザシユツ!

「ぎゃあああああつ!!」

しかし……策に夢中のあまり、墮天使は迫り来る者に気付かず、片翼を斬られてしまった。

「い、一体何が………つ!」

落下しながらも、墮天使は翼を切り落とした犯人を見て驚愕する。

「な、何……だと……!?!」

墮天使の視界に映るのは、青い鱗を持つ西洋の竜を思わせる獣人的な外見を持つ者。背中の翼を大きく広げ、手には変わった形の矛を持ち、その者の視線は墜ちていく墮天使を終始見つめていた。

そして、墮天使は偶然にも駒王学園のグラウンドへと墜落したのだった。



「墜ちてますね、先輩」

その頃、八雲はリアスと共に墮天使を追跡しており、墮天使が墜落している中、八雲たちも学園へと向かっていた。

「そのようね。——それにしても便利ね、そのお札。移動用の魔方陣も展開出来るだなんて……」

言葉の通り、八雲とリアスの移動は八卦の陣に乗って移動していた。無論、これは八雲のお札から出した【動】のお札の効力である。

そして2人は学園に到着した直後、土煙の中に落下した墮天使が倒れていたが、ふら

つきながらも立ち上がった。

「逃げてても無駄だ。大人しく諦めろ」

「……………つたんだ……………」

「ん？」

何かを呟く墮天使に八雲が反応した瞬間、墮天使は激昂した。

「貴様が現れなかつたら、私はあの方のお側に近付けたんだ！ それを貴様が……………貴様があああああつ!!」

半狂乱になりながらも、墮天使は槍を新たに出して八雲へ駆けてくる。しかし八雲は臆する事なくその場に立ち、右腕を動かした。

「震、兌、震、離」

「終わりだあああああつ!!」

「危ない!？」

八雲が発し、墮天使が凶刃を向け、リアスが叫ぶ。そして――

「必殺、螺子式貫通波!!」
スクリューかんつうは

上空から竜巻が一直線に地上へ向かい、墮天使に直撃した。

「外道め……………八雲殿に触れるな!」

その言葉と共に1人のシキガミが八雲の前に降り立つと、墮天使が八雲に手を伸ばそ

うとした。

「……す、みません、でした………………。ど、どうか助けて——」

「駄目だ。多くの命を奪った罪……自分と、お前の仲間の命で償え」

しかし墮天使の命乞いを切り捨て、八雲は最後の断罪を言い放つ。

「最後だ、ブリユネ。——坎、坎、離、震」

青ざめる墮天使。そしてシキガミである『青龍のブリユネ』が光り輝き、それは現れた。

「必殺、究極竜護符変化!!」

青いドラゴンの姿を象ったオーラとなったブリユネ。巨大な口が開いた瞬間、墮天使を喰らい急上昇した。

「欲に埋もれ、人々の命を奪った墮天使よ。——塵となり滅せよ——」

刹那、墮天使は天高く放り出され、急下降したドラゴンの口から飲み込まれた。

「レ、レイナーレ様ああああ!!!?」

断末魔と共に消滅する墮天使。そしてドラゴンが通った跡に舞う黒い羽を、八雲とリアスは見たのだった。

◆
それから暫くして、八雲とリアスは眷属たちが待つ公園へと戻ると、治療を終えた小猫が口を開いた。

「すみません、部長。ご迷惑を掛けました」

「謝ることなんてないわ。それに、私たちを助けてくれたのは彼よ」

「ありがとうございます、吉川先輩」

「別にいいよ。俺はただ、皆を助けたかっただけだしな……」

「それでもよ。今回は本当に助かったわ。私からも礼を言わせて」

「は、はあ……」

小猫とリアスの言葉に八雲は照れて視線を背けると、暫くして八雲がリアスと向かい合った。

「リアス先輩」

「……何かしら？」

「俺、これからもシキガミたちと一緒に守っていきますよ。この町の皆を……先輩たいを……」

「……………」

決意と覚悟が宿った八雲の瞳。朱乃、祐斗、小猫が見つめる中、暫くしてリアスは小

さな溜め息を吐いた。

「覚悟は本物みたいね。分かったわ……。——吉川八雲くん。それにコゲンタ」

「はっ」

『え、オレも?』

そして、リアスの声色で何かを悟った眷属たちも微笑む中、リアスは2人に言った。

「私達はあなた達を、オカルト研究部の一員として歓迎します。これから『シキガミ使』として活躍してもらう予定だから……。覚悟しておきなさい、八雲!」

「……………はい!」

『ちよつと待ったあ!』

リアスの笑顔に八雲は返事をする中、コゲンタが異見した。

「どうしたコゲンタ? そろそろ終わる頃なのに……………」

『ちよつとした訂正だ、八雲。——リアスのねーちゃんよお……。その『シキガミ使』って呼び方はやめてくれ。八雲にそんな二つ名は似合わねえんだよ』

コゲンタの言葉にリアスは口元に手を当て、暫く考えると納得した。

「……………確かにそうね。あなたたちと八雲の関係って、そこらの魔獣使いと別物の雰囲気を感じたし……………」

「では部長。もつと洒落た名を考えてはどうでしょうか?」

「そうね。新しい部員に相応しい名を、私たちで考えましょう」

「はい！」

「……はい」

「……えーつと、俺はどうすれば……」

朱乃の言葉にリアス、祐斗、小猫が賛同する中、八雲は戸惑っていた。

「『シキガミ戦隊』はどう？」

「では、『吉川一座』ではどうでしょうか？」

「……『八雲先輩と愉快な仲間たち』」

「『シキガミマスター』。……いや、なんだかゲームの称号みたいだね……」

リアス、朱乃、小猫、祐斗が考え出した名を次々と言う中、八雲はそんな光景を見て微笑んでいた。

「……本当に、守れてよかった」

『……ああ、そうだな』

「コゲンタ。……俺、もつと強くなるよ。だから——」

八雲はコゲンタに手を差し伸べて言った。

「これからよろしくな」

『……ああ！ オレ達と一緒に、悪党と闘って町を守ろうぜ。——だから八雲。親父さ

んみたいな士つわものになろうぜ！」

そしてコゲンタが八雲の腕を取り、決意と約束を願った握手をした。霊体にも関わらず、八雲とコゲンタは互いの心に暖かさが染み込んだのだった。

「「「……………」」」

「……………」

『お前ら……………何見てんだよ』

そんな中、2人の光景を見た4人の内、リアスが口を開く。

「シキガミ達と共に闘う士、ね……。——決まったわよ、八雲」

自身に満ち溢れ、リアスは改めて八雲に言った。

「あなたはこれから、『闘神士』とうじんしとして活躍してもらうわ。皆もいいわね？」

リアスの言葉に朱乃たちも頷くと、改めてリアスは八雲に手を差し伸べた。

「よろしくね、八雲！」

「はい！ こちらこそ、よろしく願います！」

そして、八雲は全員に握手を交わすのだった。

第4話：闘神士、八雲

墮天使を倒した翌日。リアスに認められ、晴れてオカルト研究部の一員となった八雲は、いつものように学園で授業を受けていた。

「……………ふあああ……………」

そして3時限目が終わる頃、八雲は盛大なあくびをしていると、コゲンタが声を掛ける。

『……………これで11回。大丈夫か、八雲？』

(……………昨日は色々あったからな。慣れないこともしたせいで……………ふあああああ……………)

『思考でもあくびかよ……………。——でもよ、初めての割には『闘神符』とうじんふを上手く使ってるじゃねえか。センスがあるぜ』

(そうか……………つて、何だよ『とうじんふ』つて?)

『いやな。リアスのねーちゃんが八雲を闘神士つて決めただろ？ だから、闘神士が使う札だから闘神符』

(ふーん……………。センスあるな)

『へへっ。オレたちが決めたんだぜ』

照れながら鼻を擦るコゲンタに対し、八雲は小さく微笑んだ。

そんな中、八雲の反応に隣の一誠が気付く。

「ん？ どうしたんだ？」

「いや、ちよつと寝不足だな。——それより兵藤、もうすぐ彼女とのデートだろ？」

「っ!!」

(あつ……)

発してしまつたが、もう遅い。一誠は昨日と同じ反応をして語り出した。

「そうなんだよ！ 初デートだから絶対に成功させたいから事前にデートコースをチエックしたんだよ！ 夕麻ちゃんを楽しめそうなお店。カッブルにオススメなスポット。どこをどう行けばいいかのスケジュールも、もうすぐ完成だぜ。——おっと、楽しみすぎて涎が溢れて………………じゅるり……」

(…………やっぱりうぜえ)

『……八雲。ドンマイ』

八雲の心中を察して、コゲンタは肩に優しく手を置き同情した。そして次の授業まで、八雲は一誠の話を聞くのだった。

◆
暫くして、4時限目終了の昼休み。八雲は昼食の為、学園にある学食で食事をして
た。

「相席、いいかな？」

「ん……？」

声を掛けられ八雲は振り向くと、そこにいたのは八雲とは違う学食のプレートを持っ
た祐斗だった。

「よお、木場。いいぞ」

「それじゃ、失礼して」

机にプレートを置いて椅子に座ると、祐斗は八雲の食事を見つめた。祐斗が頼んだの
はよくある洋食セットであるのに対し、八雲が食べているのは単品である牛丼であり、
牛丼を頬張る毎に幸せそうな表情をしていた。

「八雲くんって牛丼好きなの？」

「ん？ ああ、大好きだぞ。早いし安いし美味しいからな。木場は何か好きな物はあるか
？」

「僕は特に……。それと、僕の事は祐斗でいいよ。同じ部員じゃないか」

「そうか。——それじゃあ、祐斗」

「何かな？」

一 拍置き、八雲は口を開く。

「剣術でもしてるのか？」

「え？ よく分かったね。けど、どうして分かったんだい？」

「手を見て気付いた。剣ダコが幾つか出来てる。余程の訓練を積んだと考えるな、俺は

……」

「……凄いな、八雲くんって。一見ただけでそこまで分かるなんて……」

「親父に観察力を鍛えさせられたからな。ある程度なら分かるさ」

「親父にとって……八雲のお父さんって何かしてるの？」

「ああ……」

すると、牛井の最後の一口を食べ終えてから八雲は話した。

『真終牙しんついがおうりゆう黄流拳法』って知ってるか？」

「しん、つい……？ ごめん。知らないな……」

「まあマイナーな武術だし、知らないのが普通さ。一応、俺の家に代々続いてる武術らしいんだが、俺も全部は知らないんだよ。ただ……」

「ただ？」

八雲は上を見上げて嬉しそうに言った。

「真終牙黄流の教えに……と言うか、親父の教えにこんなのがあるんだ。——『何かを守ることを願う程、この武術の力は発揮する』。俺が一番好きな言葉で、この流派は俺の誇りだ……」

そう言った後、八雲は祐斗にニツと笑みを向ける。その表情はどこか明るく、まるで幼い子供の様だった。

「……とても大事にしてるんだね」

「ああ。——お、そうだ。機会があれば一度手合わせしようぜ。お互いの力も知れば、討伐にも役立つだろうし」

「うん。その時は、お手柔らかにね」

「ああ!」

そして、八雲と祐斗はお互い微笑んで約束を交わしたのだった。

「見て! 木場くんが転校生の吉川くんと一緒に笑ってるわ!」

「これはもしかして、木場くん×吉川くんの誕生!?!」

「ううん、もしかして吉川くん×木場くんかも!」

そんな光景を、その手が趣味な女子達から、キャツキャウ腐腐フッと言った黄色い歓声が上がっていたが、八雲たちは知らない。

「ちつくしよおおっ！ 何なんだよ、あの金髪爽やかイケメンとイケメン転校生は！
ってか、短期間であんなに女子から反応されるって、どんだけイケメンオーラを撒き
散らしてるんだよ、転校生は！」

「この世に神も仏もありはしないのか!? あんな奴らだけえっ！」

無論、そんな女子達の反応に八雲たちを嫉妬する松田と元浜のことも知らない。

（まずは待ち合わせの3時間前に到着だろ？ そこから洋服とか小物を色々見て回っ
て、ファミレスで食事して……）

一誠に至っては、今日で既に15回目のデートのシミュレーションを行っていた。



そしてまた時間が経過し、放課後。八雲は旧校舎へ向かい階段を降りきった……その
瞬間だった。

「きゃっ!？」

一階に到着した瞬間、横から誰かが八雲にぶつかってしまい、プリントの山が空へと
舞ってしまった。

「おっと」

しかし八雲は瞬時に手に持っていた紙袋を置き、透かさずプリントを全てキャッチした。

「……大丈夫か？」

「え、ええ。ごめんなさい。前が見えてなくて……」

尻餅をついた女子に八雲は手を差し伸べて立ち上がらせると、女子は八雲を怪訝な目で見つめていた。

「……君、あまり見掛けない生徒ね」

「転校してきたばかりなんで……って、3年の方でしたか」

八雲は立ち上がらせた女子を見て、自身の先輩だと知ると同時に容姿も確認した。

眼鏡を掛けた知的でスレンダーな女子。日本人離れた美貌の持ち主であり、どこか冷たく厳しいオーラを発していた。

その結果、八雲はリアスや朱乃と同じく学園内の人気者の一人を思い出した。

「えつと……確か生徒会長の支取蒼那先輩……ですよね？」

「あら？ 転校してきたと言う割に、よく知ってるわね」

「皆の会話を聞いたりしたので……。あ、俺は吉川八雲と言います。以後、お見知り置きを……」

「そう。よろしくね、吉川くん」

頭を下げる八雲に蒼那は薄く微笑むと、八雲はある質問をした。

「このプリントの山はどこか運ぶんですか？」

「生徒会室よ。でも、何でそんな事を……？」

「いや、一人で運ぶのは大変そうなので……。手伝いますよ」

「……お気遣いだけ受け取るわ。それにその紙袋、どこか向かう途中でしょ？」

蒼那の指摘に八雲は反応した。因みに八雲が持っていた紙袋の中身は、つる屋で売られている和菓子詰合せであり、親睦を深める為に八雲が用意した物だ。

「困ってる姿を見過ぎせませんよ。それに場所は旧校舎のオカルト研究部ですので、時間もあまり掛かりませんし……」

「っ……」

一瞬、蒼那は八雲の言葉に何か反応すると、暫くしてから八雲の顔を見つめた。

「……えっと、何か顔に付いてますか？」

「……いえ、そうじゃないの。ごめんなさい。——それじゃあ、お言葉に甘えようかしら」

「え？ あ、はい」

いきなり提案を受け入れた蒼那に八雲は一瞬戸惑うも、すぐに了承してプリントの山を持ち、特に会話も無く生徒会室に到着した。

偶然にも生徒会室には誰もおらず、八雲は机にプリントを置いた。

「それじゃあ、俺はこれで——」

「待って」

生徒会室を出た矢先、蒼那に声を掛けられて八雲は廊下で足を止めると、蒼那が八雲の横に並んだ。

「私も丁度、オカルト研究部に用があるのを思い出したわ。一緒に行きましょう」

「はい。いいですよ」

そして八雲が歩き始めて暫くすると、蒼那が話し掛ける。

「あなたは どうしてオカルト研究部に所属したの？」

「そうですね……。先輩達の活躍に、俺も力になりたいと思って入部しました」

「活躍、ね……。雰囲気とかはどう？」

「仲睦まじい関係でいいと思いますよ。受け入れてくれたリアス先輩には感謝してます」

その後、蒼那の質問に八雲は答え続けていった……。



暫くして、八雲と蒼那はオカルト研究部の部室前に到着した。

「おじやまします」

「いらつしやい、八雲」

「うふふ。いらつしやい」

「やあ、八雲くん」

「……どうもです」

部室に入るなり八雲はリアスたちに迎えられると、持っていた紙袋をリアスに渡した。

「今日からよろしくお願いします、リアス部長。これ、つまらない物ですが」

「あら、つる屋の和菓子ね。あそこの和菓子、私も好きなのよ」

「ええ。よく小猫ちゃんも食べてますからね」

「はい……。ありがとうございます、八雲先輩」

「祖父母の家なんですよ。欲しかったらいつでも言ってください」

リアスたちの反応に笑みを溢すと、八雲は伝えた。

「あ、リアス部長。生徒会長が来てますよ」

「ソーナが？」

「失礼します」

リアスが疑問符を浮かばせていると、蒼那が部室へと入った。

「どうしたのソーナ。連絡も無しに……」

「それはこちらの台詞よ、リアス。人間である彼が、どうしてあなたに協力してるの？」
蒼那の言葉に反応してか、八雲はリアスに尋ねた。

「……リアス部長。もしかして蒼那会長って……」

「ええ。私と同じ悪魔で、支取蒼那とは仮の名前。本名は——」

「ソーナ・シトリーです。改めてよろしくお願いしますね、吉川くん」

蒼那……もとい、ソーナの言葉に八雲はグレモリー眷属の他に悪魔がいることに驚く。そんな中、コゲンタがソーナに言う。

『へえ……あんた、シトリー家の悪魔だったのか』

「誰？」

「彼はコゲンタ。八雲の持つ神器に宿った、四季を司る精霊のシキガミよ」

『よろしくな！』

「え、ええ、こちらこそ……」

ソーナが一瞬戸惑う中、リアスは八雲の経緯を話した。

「……………と、言う訳よ。これから八雲とシキガミたちは、私たちに協力してくれるのよ。今のところは、はぐれ悪魔討伐が主体になると思うわ」

「なるほど………分かったわ。私の眷属にも、彼のことを伝えておくわ」
「ええ、お願いするわね」

リアスの言葉にソーナは頷くと、部室の扉へと向かった。

「それじゃあ、私はこれで戻ります」

「ええ。今度はゆつくりしていきなさい」

「機会があればね。——それじゃあね、吉川くん。コゲンタくん」

「はい。また来てください」

『おう。またな、ソーナのねーちゃん』

そして、最後にソーナは微笑んで部室を出たのだった。



暫くして、リアスたちは八雲から貰った和菓子を開けてお茶をしていると、唐突に八雲が言葉を発した。

「あれから何か変わったことはありませんか?」

意図を察したのか、リアスが答える。

「いいえ。堕天使を倒してからは被害者の増加は無いわ。でも、急にどうしたの?」

「あの墮天使が気になることを言ってみましたのでね」

「気になること？」

八雲の言葉に、隣に座る祐斗が尋ねた。

「確か、『あのお方』とか言って激昂しました。もしかしたら、この町に昨日の墮天使が言っていた『あのお方』がいるんじゃないのかと思っただけ……」

「黒幕が何かを企んでいる訳ね。一応、使い魔にはこの町に入った墮天使の動きを探らせているわ。何か見つけければ良いのだけれど……」

「取り敢えず様子見、ですか……」

「でも、無いにしろ私の縄張りで勝手なことは許されないわ。その時はよろしくね、八雲、コゲンタ」

「はい」

『分かったぜ』

リアスの言葉に八雲とコゲンタは頷いた。



それから少し経過して、リアスたちは悪魔の仕事を始め出した頃、八雲は『二十四気

の神操機』を装着してソファーに座っていた。因みに、部室にいるグレモリー眷属は朱乃と小猫だけである。

「……………ふんっ！」

勢いよく声を発する八雲。瞬間、左手に鬩神符を出現させてテーブルに置くと、数枚の内の一枚を朱乃が手に取る。

「それにしても、その神器が作り出すお札は便利ですわね……」

その後、朱乃は念じる様に鬩神符に意識を向けると、中央に【壁】と書かれた八卦の陣が目の前に現れ、それを朱乃は指先でコツンとつついていた。

「作り出した本人しか使われないのが一般的ですが、他の悪魔……いえ、誰でも使える札なんて見掛けませんわ」

「俺の許可無しじゃあ使えませんよ。姫島先輩やリアス先輩、祐斗と塔城に使える様に、俺が許可してるんでね」

「そうでしたか。いざと言うときには使わせてもらいますわ。それと、私のことは朱乃と呼んで構いませんわ」

「え？ ありがとうございます、朱乃先輩」

話は変わるが少し前、八雲は改めて鬩神符の使い方をコゲンタに教わっており、次の事が判明した。

「1つは『1度作り出せば使用されるまで消えない事』。ある程度ストックを作り出せば、『二十四気の神操機』を出さなくても悪魔や墮天使に抗うことが可能である。」

もう1つは『符力、魔力を持たない者でも扱える事』。無論、八雲が許可しないと他者に闘神符は使えないのだが、例え魔力が低い者でも扱えることは魅力的だ。

「……種類が色々ありますね」

「塔城？」

すると、小猫も闘神符を気になったのか八雲達の会話に参加した。

「小猫でいいですよ、八雲先輩」

「そうか。——一応、確認出来た性能は【壁】と【動】。それにシキガミを別のシキガミに交代させることだな。上手く使えば戦況を変えられる分、状況判断能力を高めないとな……」

「うふふ、熱心ですわね」

「努力は怠らないようにしています。家周りの地形も把握したんで、明日以降から早朝鍛練をしますので」

『そうだな。引越す前も、八雲は朝早くに運動してたしな』

「努力家ですね。八雲先輩は……」

『親父さんの影響が強いんだよ。八雲は……』

「……先輩のお父さん？」

首を傾げる小猫。そして八雲の父親に興味を示したのか、朱乃が八雲に訊いた。

「八雲くんのお父様は、今どうなされてるんですか？」

「自分を鍛える為、世界中を行ったり来たりしてます。たまに家に戻って来ては、俺の成長を見るとか言って組み手したり修行を教わったりしますね」

「……強いんですか？」

「ああ、強い。恐らく人類の中でも上位だと自信を持って言えるよ。……何しろ巨大な滝を拳だけで割ったのを、小さい頃に見たからな……」

（拳だけで……）

（滝を割った……）

八雲の言葉に朱乃と小猫は啞然とすると同時に、八雲の父親の姿をイメージした。

全身筋肉質の巨体で野性溢れるオーラを纏い、ゴツイ拳を突き上げて滝を割った姿は、人間と言うより巨人だった。

「何だか、想像するだけでも凄い存在感ですね……」

「……本当に人間？」

「人間じゃなかったら、俺も人じゃないですよ……」

2人の反応に八雲は苦笑すると、再び鬪神符の生成に取り掛かるのだった。

「ふう……さつぱりした」

あれから部屋で随分過ごし、現在は夜10時過ぎ。風呂上がりの八雲は自室に戻ってベッドに腰掛けると、今回の事を振り返っていた。

「……今日も色々発見したな」

『ああ。まさか学園でリアスのねーちゃんたち以外に悪魔がいたなんてな』

「それと、悪魔の仕事も知れた」

『最近じゃあ命を払ってまで強い願いを請う契約者が出ないって、リアスのねーちゃんが言ってたな。オレが知る限り、昔の悪魔は契約者の命をバンバン貰ってたけどな』

懐かしむ様に頷くコゲンタ。すると、八雲はコゲンタに訊いた。

「……そう言えば、シキガミは司る力を与えることが出来るんだったよな。悪魔みたいに人間と契約を結んでたのか？」

八雲の質問にコゲンタは首を横に振る。

『いや。あの頃は人間と契約する奴はいなかったな。寧ろ3種族との契約が殆どだ』

「対価は？」

『符力が宿った物しか対価にしなかったな。特に宝石の類いは強力な符力が宿ってるから、それが多かったぜ』

「そうなのか……」

すると、八雲は時計を見た。そろそろ寝ないと、朝早く起きて多くの鍛練が出来ない時間帯だった。

「さてと、俺はそろそろ寝るわ」

『分かった。早く起きろよ。——おやすみ、八雲』

「ああ。おやすみ、コゲンタ」

そして電気を消した八雲は、すぐに眠りにつくのだった。

こうして八雲の1日は終わった。

しかし八雲やリアス達の知らない所で、何者かが計画を進めていたことなど、知るところはなかった……。

第5話：さよなら日常

「ハア、ハア、ハア……」

草木も眠る丑三つ時。駒王町の隣町にあるビル内に、1人の男が逃げていた。

しかし、この男は普通の人間ではなかった。

耳が異様に尖っており、服装は研究者のような白衣を羽織った姿。懐にはカチャカチャと金属がぶつかり合う音がしており、走るたびに月明かりに照らされて反射するメスが見えた。

実はこの男、上級悪魔の下を逃げ出したはぐれ悪魔である。名前は『キヨニー』と言う。

しかし、そんな名前もすぐに無意味なので覚えなくていいだろう。何故なら――

「見つけたぞー！」

「ひっ!？」

キヨニーを捕縛する為に追い掛けて来るコゲンタが来たからだ。無論、捕まりたくないキヨニーはすぐに逃げ出した。

「あの野郎、まだ逃げるのか？」

そして、コゲンタを追い掛けるように八雲も走って来ると、イヤホンタイプの通信機器を使って連絡を入れる。

「こちら八雲。リアス部長。標的の誘導に成功しました」

『ご苦勞様。引き続き追跡をお願いね』

「了解」

短いやり取りを終えて八雲は再び追い掛けると、一緒に走るコゲンタは不満そうに言う。

「しっかし、今回は討伐じゃないから暴れ足んねえぜ」

「仕方ないだろ。依頼人からなるべく無傷で捕まえろって言われてるからな」

「何でだよ？」

「逃げた際に多くの私財やら道具やらを奪われたから、隠し場所を吐かせるんだとよ」

「でもよ、それらを売つ払ったかもしれないぞ？」

「かもな……。だけど部長命令だ。大きな抵抗をしない限り、威嚇のみだぞ」

「分かってるよ」

会話が終わり暫く走ると、曲がり角を行ったキヨニーがすぐに別の道へと向かっていった。どうやら曲がり角には朱乃と小猫が待ち受けていた様で、八雲たちは朱乃たちと合流した。

すると、八雲は小猫を見て口を開く。

「どうした小猫？ 不機嫌な顔をして」

「……何でもありません」

「……朱乃先輩。小猫の様子が……」

「うふふ、心配無用ですわ。この使い魔が私にちよつかいを出したくらいなので……」

朱乃の視線を辿ると、廊下に倒れている虫の様な使い魔が死んでいた。

「大丈夫ですか？ 怪我とか……」

「ええ。ただ私の胸をつついたくらいなので」

その言葉に八雲は朱乃の大きな胸を見てしまい、すぐに視線を逸らした。

「……仕方ないよな。男だもの」

コゲンタの呟きに八雲は羞恥で頬を染める中、朱乃が通信機器からの連絡を受けており、すぐに八雲たちに言った。

「……どうやら、部長と祐斗くんが標的の捕縛に成功しましたわ。こちらも向かいましょう」

そして、八雲達はリアスの下へと向かうのだった。

◆
「皆、お疲れ様。今日の昼には隠れ家から依頼人の私財を探すから、それまでよく休息しておいて」

「「「はい」」」

リアスがキョニーを捕らえて冥界へと転送した後、八雲たちはその場で解散となった。その際、朱乃たちは眷属のみが使える紅い魔方陣で帰って行く中、リアスと八雲だけがその場に残っていた。

「ご苦労様。八雲、コゲンタ」

「リアス部長も、ご苦労様です」

『……オレとしては、もう少し暴れたかったけどな』

コゲンタの不満にリアスは苦笑する。

「今回は特例だったのよ。仕方ないわ。それに犠牲者が出る前に捕まえられたし、相手も罪を認めていたから丸く収まっていいじゃない」

『まあ、そうだけだよ……』

「そう不貞腐れるなよ。何なら、俺と組み手でもして発散するか？」

『それは止めとくぜ。シキガミの掟に人間に危害を加えてはいけないんだよ』

「そうなのか。また新しくシキガミのことを知れたよ」

そうやって八雲は腕を組んで頷いた後、リアスの方へと体を向けて懐から一枚の闘神符を取り出した。

そして、八雲はリアスに闘神符を渡して言った。

「それじゃありアス部長、俺達は帰ります」

「ええ。気を付けるのよ」

「転送するので大丈夫ですよ。——それじゃあ、おやすみなさい。バイスです」

『じゃあな、リアスのねーちゃん』

「ええ。またお昼に」

そうやって、八雲は別の闘神符を地面に投げた瞬間に「転」と書かれた青い輝きをする八卦の陣が現れると、八雲が八卦の陣の上に乗った瞬間、青い光に自身が包まれた。

そして光が収まると、八雲の姿は無かったのだった。

……物語に支障は無いが、たまに八雲の口から発せられる『バイス』と言う単語は『さよなら』という意味を持ち、リアスたちも理解しているのだ。



八雲の自室の床に青く輝く八卦の陣が静かに現れると、八雲が現れた。

「……上手くいったな、コゲンタ」

『ああ。——それにしても、「転」の闘神符を使いこなすなんてな。神器を知ってから5日目で、いろんな種類を覚えたもんだな……』

そう言いながら、コゲンタは床に置かれた消滅中の闘神符を見た。

【転】の闘神符。その効果は、八雲がいる場所から違う【転】の闘神符へと転送出来る空間移動型の闘神符であり、先程リアスに渡したのも同じ【転】の闘神符である。今夜のはぐれ悪魔の捕縛場所までの移動も、その闘神符のおかげなのだ。

【防御の【壁】に、移動補助の【動】と【転】。攻撃用が無いのが駄目だな」

『……それじゃあ、攻撃用の闘神符を覚えることが次の目標だな』

「ああ。——さてと……取り敢えず、少し寝てから鍛練しないと」

『寝るって……3時間も無いんじゃないか？』

「昼寝で補うよ。——それじゃあ、おやすみ」

そして八雲はベッドに入るなり、意識を手放すと同時にある事に気付いた。

(……そう言えば、今日か。……兵藤の……デートは……)

これを最後に、八雲は完全に眠りについたのであった。

そして……1人の人物の運命の歯車が動き出した。



早朝、一誠は出掛けていた。理由は勿論、八雲が来た日から付き合いだした天野夕麻とのデートの為に待ち合わせ場所へと向かっていた。無論、3時間以上前に現地到着する様に計算して……。

「待っててね、夕麻ちゃ〜ん♪」

人が少ない道を浮かれながら進み、道のりである公園を突き抜けようとした途中、見知った人物が視界に入った。

「あれって……?」

白い柔道着に紅い帯。そんな人物が拳を交互に突き出し、蹴り上げ、様々なキレのある動きの型をする演武に、一誠は一瞬だけ見惚れて感動した。

そんな中、視線に気付いたのか人物が一誠に声を掛けた。

「兵藤か。おはよう」

「やっぱり吉川か。お前って、格闘技でもしてるのか?」

「一通りは親父に教わった物だ。——ここいらの地理も分かったから、少し前から鍛練してんだよ」

そう言うなり、八雲は演武を再開しながら一誠に訊いた。

「それより、兵藤。朝早く、出掛けるのは、彼女との、デートか?」

「おう! 今から待ち合わせ場所に向かうんだよ!」

「そうか。まあ、せいぜい、楽しんで、いけよ!」

「ああ! まあ、吉川。デートが終わったら、長々とデート初体験話を聞かせてやるからな! じゃあな!」

そう言い、一誠は待ち合わせ場所へと向かう中、再び一人となった八雲は動きを止めて一誠の背中を見つめていた。

「彼女かあ……」

『……………』

「俺も、いずれは女の子と付き合ってみたいなあ……」

『……………』

「……………コゲンタ?」

『え？ 何だ？』

「いや、俺が話してるのに何もリアクションが無いから……。どうした？」

『あ、ああ……。少しな……。』

そう言いながら、コゲンタは一誠の背中を睨み付けて誰にも知れずに呟いた。

『……………この符力、やっぱり昔どこかで感じたな』



八雲が鍛練をして時間が大分過ぎ、夕方の部室に八雲はいた。

現在、部室には八雲を含めてリアスと祐斗の3人だけであり、小猫と朱乃は仕事に出ている。

リアスは部長席で、祐斗は部室のソファに座りながら朝方リアスが用意していたケーキを食べており、そして八雲も祐斗と向かい合う位置でソファに腰掛けてケーキを食べていた。

すると、唐突に祐斗が昼間の仕事について話し出した。

「依頼も完遂しましたね。依頼主の私財も無事でしたし、キョニーの狙いも分かりましたし……」

「……ええ。——でも、依頼主の私財がねえ……」

呆れているリアスに、八雲も同調するように頷いた。

昼間、八雲はグレモリー眷属の手伝いでキヨニーの隠れ家から様々な物を押収しており、その際に依頼人の私財を見つけた。

その私財とは、『漫画やフィギュアといった萌え萌えな金髪巨乳のアニメ・ゲームのキャラクター関連の商品の山々』だったのだ。しかも日本製のみといった徹底振りで、どうやら依頼主は相当なおタクのようだ。

「……冥界は日本のサブカルチャーが大ブームなんですか？」

「一部の悪魔だけよ」

八雲の言葉にリアスは苦笑する。後に、リアス自身の兄も日本のサブカルチャーに触れ、『とある特撮番組』を作り出すなど知る由も無かったが……。

『それにしても、全世界の女の胸を大きくする為だけではぐれ悪魔になるなんて……。錬金術師の考えは分からないぜ……』

「それも、『合成獣』を作って人々から精气を取り出そうと考えていたみたいよ。……まあ、野に放たれる前に合成獣の苗は全部処分したから大丈夫ね」

リアスの顔が呆れた表情から安堵へと変わった。すると、突然部室の魔方陣が光りだした。

「あら？ まさか私が呼び出されるなんて……一体誰かしら？ まあ丁度いいわ。八雲、祐斗、今日はもう上がっていいわよ。また明日」

「あ、はい。お疲れ様でした」

『お疲れさん』

「部長、お気をつけて」

八雲、コゲンタ、祐斗が別れの挨拶をすると、リアスはそのまま転送されて部室には2人が取り残された。

こうして、八雲と祐斗は暫く部室で談笑すると、一緒に学園を出たのだった。



時は数分前に遡る。

夕暮れの町外れの公園には一誠と夕麻の姿があり、そして夕暮れが近いのか辺りに人はなかつた。

そんな中、ただ今一誠のボルテージは頂点に達しようとしていた。

夕麻に告白されてからの初めてのデート。思い出しようにとほとんどをスケベに侵食された脳みそを搾り出したプランを、数十回ものシュミレーションを重ねた結果、一

誠は夕麻との初デートを満喫した。

待ち合わせの3時間前に現地到着した後、手を繋いで歩き出した。洋服の店に入った。部屋に飾る小物を見たり、お昼は高校生らしくファミレスだった。が美味しそうにチョコパフェを食べる夕麻の笑顔に癒され、これぞ若者のデートだと痛感した。

そして現在、2人しかない公園で夕麻は一誠の手を離れて噴水の前へ歩く。

「今日は楽しかったね」

噴水をバツクに夕麻が微笑んだ。

「ねえ、イツセー君」

「なんだい、夕麻ちゃん」

「私たちの記念すべき初デートってことで、1つだけ私のお願い聞いてくれる？」

「っ!？」

来た!

初デート、夕暮れの公園、別れ際……等々のワードが脳内で変換して組み合わせり、エロい妄想が更にヒートアップする。一誠は、夕麻に悟られない様に妄想を抑えて平静を装う。

「な、何かな、お、お願いって」

しかし声は上ずり、バレないかと内心でヒヤヒヤとする。一誠に対し、夕麻は微笑むだ

けだった。

そして、夕麻ははつきりと一誠に向かって言った。

「死んでくれないかな」

「……………」

思考が止まった。

物騒なことを満面の笑みで言われ、一誠は一瞬何を言われたのか分からなかった。

「……………え？ それって…………あれ？ ゴメン、もう一度言ってくれない？ なんか、

俺の耳変だわ」

聞き間違いだと思い、一誠は訊き返す。

「死んでくれないかな？」

「……………」

どうやら聞き間違いではなかったらしい。

苦笑しながら「冗談きついなー、夕麻ちゃん」と、一誠が言おうとした瞬間、夕麻の

背中から黒い翼が生えた幻想的な光景を、一誠は直視した。

「楽しかったわ。あなたと過ごしたわづかな日々。初々しい子供のままごとに付き合え

た感じだった」

可愛らしい雰囲気から、冷たく怖い目つきに大人っぽい妖艶な声音となる夕麻。口元

は冷笑を浮かべ、なんとも冷たい雰囲気となった瞬間、夕麻の手に光が集まり槍の形へと形成していく。

「ゆ、夕麻ちゃ——」

一誠は何がなんだか理解出来ずに立ちすくんだ瞬間——

ドン！

「……………え？」

鈍い音がしたかと思うと、気が付いた時には光の槍が一誠の腹を貫いていた。

槍を抜こうとしたが、ふっと槍は消えてしまい、残ったのはポツカリと空いた腹だけ。そこからドクドクと血が噴き出す。

血、血、血……………。

痛みは無いが、頭が朦朧とし、視界もボヤけ、ついには足元が崩れて倒れてしまった。倒れ伏す地面に血の池が広がっていく中、ツカツカと一誠に近づく足音。そして耳に届くかすかな声は、夕麻のものだった。

「ゴメンね。あなたが私たちにとつて危険因子だったから、早めに始末させてもらったわ。恨むなら、その身に『神器』を宿らせた神を恨んでちょうだいね」

悪びれた様子もなくその場を去っていく夕麻に、残念ながら今の一誠には立ち上がるどころか問い質す事も出来なかった。

そうこうしている間にも血だまりは面積を広げていく中、意識が遠退くのを一誠は理解していた。

——マジかよ……。高校2年生で死ぬのか？

——まだ人生の半分には達してねえよ！

——こんな訳の分からない公園で、彼女に刺されてこの世とオサラバなんて笑えねえ

！

今にも消えそうな意識の中、一誠の頭に出会った人々が浮かび上がる。

悪友の松田と元浜。学園で自分が覗き見をした数々の女子達。自分の彼女の自慢話を聞き続けてくれた転校生の八雲。そしてスケベでどうしようもないこんな自分を育ててくれた両親。

——……。つーか、自室の各所に隠したエッチな本が死後に見つかるのはシャレにならねえ……。……。……。……。……。……。……。……。……。……。……。

そんな考えの中、一誠は最後の力を振り絞り、どうにか手だけは動かす事が出来ると、腹の辺りを手でさすり、顔の近くまで動かした。

紅い……。紅い、自身の血……。一誠の手のひらは彼の鮮血で染まっていた。

今際のきわ、一誠は1人の女性を思い浮かべた。

紅い髪をしたあの美人。学校で見掛ける度に、紅い髪が一誠の目には鮮烈に映っていた。

——……どうせ死ぬなら、あの美少女の腕の中で、死にたかったな……。

そんな事を思っていると、いよいよ視界がボヤけていき、一誠が意識を手放しかけた……その時だった。

「あなたね、私を呼んだのは」

突然、一誠の視界に誰かが映り込み、声を掛けてきた。目がボヤけてしまっているせいか、その声が誰なのか分からなかった。

「死にそうね。傷は……へえ、おもしろい事になっているじゃないの。そう、あなたがねえ……。本当、おもしろいわ」

興味ありげな含み笑いをしながら、声の主は言う。

「いいわ。どうせ死ぬのなら、私が拾ってあげるわ。あなたの命。私のために生きなさい」

鮮やかな紅い髪をなびかせ、リアス・グレモリーは言ったのだった。

第6話：よろしく非日常

『オキナサイ！ オキナサイ！ オ、オキナイト、キ、キススルワヨ！』

「……………うーん……………」

ツンデレボイス目覚まし時計に起こされた一誠は、気が付くと床でうなされていた。

(……………最悪の目覚めだ)

ここ最近、恋人である夕麻に殺されるという悪夢を見ている。

しかし、一誠はこうして生きている訳で、あれはやはり夢に過ぎない…………と、一誠は思った。

「起きなさい！ イッセー！」

「わーってるよ！ 今起きる！」

いつも通りの朝。最悪な目覚めに一誠は立ち上がると、制服の袖に腕を通しながら大きく溜め息をつき、朝食を食べて登校を始めた。

夕麻とのデートの日を境に一誠は変わった。無論、見た目ではない。

まず1つ目、朝に弱くなった。特に朝日が苦手だ。

日差しが肌に突き刺さり、鬱陶しいとさえ思ってしまうほどで、なかなか起きてこな

い一誠を母親が叩き起こしに来る毎日だ。

しかし、逆に夜になると力が湧き上がる。

試しに夜中に出た一誠は、足取りが軽く、夜の暗闇に溶け込んでいくと心身が高揚感で打ち震える。

夜の感覚が、以前と違うものだと言信出来たのだ。



「よー、心の友よ。貸したDVDはどうだった？ エロかっただろ？」

「ふっ……今朝は風が強かったな。おかげで朝から女子高生のパンチラが拝めたぜ」

教室へと到着するなり、一誠は自分の席の椅子に深く腰を降ろした直後、松田と元浜が声を掛けてきた。朝から悪友の顔を見て一誠は更にテンションが下がる中、松田は自分の鞆を開けて、その中身を一誠の机の上に置いていく。

『『ひっ』』

ドカドカと山積みされていくのは、見るからに卑猥な題名の本やDVD。クラスの女子達が軽く悲鳴をあげ、3人に蔑んだ声を発するが、松田と元浜は気にせず一誠に言う。

「いいもん手に入ったぞ。特にコレなんか、滅多にお目に掛からないDVDだぜ」

「おおっ！ 何だ、この秘宝は!? 凄いな！」

「……………」

テンション上昇中の2人に対し、最近朝が辛い為とその様な気分になれない一誠。そんなテンション低めな表情をする中、声を掛けられた。

「相変わらずだな、お前ら」

「ん……………? ああ、吉川か…………」

一誠が声の方へ振り向くと、教室に到着した八雲が声を掛けてきて、自分の席へと座った。

転校してから数日後、八雲とは随分と仲良くなった。最初は女子達の人気に嫉妬をしたが、話している内に嫉妬心は薄らぎ、今ではいいクラスメイトとなった。

因みに一誠の家と八雲の家は意外と近く、つる屋のお得意様の1人だと知った。

「んだよ吉川！ 俺らの楽しみの邪魔すんなよ！」

「邪魔はしないって、松田。…………ただ、学園に堂々とエロ本やAVを持つてくのはどうかと思うぞ」

「視線を逸らして言われても、説得力に欠けるな」

「うつせーよ、元浜…………」

変態3人組の2人と会話をする八雲。だが、そんなことで八雲の女子達の人気が減る

ことは皆無だ。

「……………」

そんな会話を聞いても尚、一誠のテンションは変わらず低いままであり、それを見た松田が嘆息する。

「おいおいおい。どうしたんだよ、イツセー」

「最近、ノリが悪いぞ。お前らしくもない」

松田の言葉に元浜も同調してつまらなそうに言う、八雲が何かに思い当たり発言する。

それが、もう一つの変わった事……。

「アレじゃないか？ 彼女が出来たとか何とか……」

「あー。俺には彼女がいましたーって例の幻想か？ やっぱり病院とか行った方が

いいんじゃないか？ なあ、元浜」

「そうだな」

八雲の言葉に松田と元浜が肯定する。

これがもう一つの変化。一誠以外の人物全員が、夕麻の事を忘れていた。

それを裏付けるかのように、彼女の電話番号やメールアドレスが一誠の携帯電話から消えていた。それを含め、一誠の記憶以外から彼女に関する痕跡が一切見つからなかつ

たのだ。

やはり解せない。深夜に沸き上がる得体の知れない力といい夕麻のことといい、何かがおかしい。

そう考え込む一誠の肩に、松田が手を置いて言う。

「まあ、思春期の俺らにそんな訳の分からない事が起きるかもしれない。よし、今日は放課後に俺の家へ寄れ。秘蔵のコレクションを皆で見ようじゃないか」

「それは素晴らしい。松田くん、是非ともイツセーくんを連れて行くべきだよ」

「勿論だよ、元浜くん。俺ら欲望で動く男子高校生だぜ？ エロいことをしないと産んでくれた両親に失礼というものだ」

「いや、それは違うだろ」

松田と元浜の会話に八雲は突っ込むと、一誠は松田の提案に半ばヤケクソ気味に賛同した。

「わーっつたよ！ 今日は無礼講だ！ 炭酸飲料とポテチで祝杯をあげながら、エロDVDでも見ようじゃねえか！」

「おおっ！ それだよ、それ！ それこそイツセーだ！」

「その意気だ。3人で青春をエンジョイしようではないか」

盛り上がる3人が結束を新たにした瞬間、授業開始の鐘が鳴ったのだった。

「……………すまねえ、兵藤」
八雲の呟きを隠して……。

◆ 「おっぱい揉みてえなあー！」

学園から帰宅してすぐ、一誠は悪友2人とエロDVD鑑賞会にしけ込んでいた。

テレビから女性の卑猥な声が聞こえてくる。しかし枚数を重ねていくうちに彼らの興奮は冷めていき、ついには「なぜ俺たちには彼女がないのだろうか？」と、真剣に思い出し、逆に泣けてきてしまった。

松田は3作品前辺りから涙が止まっておらず、元浜に至ってはクールに装ってはいるが、メガネの奥で涙を溢れさせていた。

「俺さ、この前女の子に体育館裏に呼ばれたんだ。……生まれて初めてカツアゲされたよ……」

30分前の元浜の呟きである。これには一誠も危うく泣き出すところだった。

3人のすすり声とテレビから女性の喘ぎ声が室内に響き渡る中、やがて最後の作品を見終えて解散することになった。

「じゃあな」

玄関で松田と別れると、一誠と元浜は歩き出す。

「じゃあ、また明日な」

「ああ、いい夢見ろよ」

そして帰り道の途中で元浜と別れて数分、どことなく元気の無い元浜に激励のメールでも送ろう考えていると、一誠の全身に悪寒が走った。

目の前の道の先からスーツを着た男が一誠を睨んでいる。視線を合わせるだけで本能が警報を鳴らしていた。

「これは数奇なものだ。こんな都市部でもない地方の市街で貴様の様な存在に会うのだから」

そう言いながら静かに歩み寄ってくる男。何を言われているのか理解出来ず、一誠は思わず後ずさる。

「逃げ腰か？ 主は誰だ？ こんな都市部から離れた場所を縄張りになっている輩だ、階級の低いものか、物好きのどちらかだろう。お前の主は誰なんだ？」

訳の分からない事を言いながら、男は一誠に殺気を飛ばしてくる。「訳分からないっつーの！」

身の危険を感じた一誠は振り向き様に来た道を全速力で走った。

夜の闇を掻き分け、見知らぬ街道を駆け抜け、ただひたすら逃げるのみ。そして15分ぐらい走ったところで開けた場所に出ると、一誠は駆ける足を歩みに変えた。

弾む息をと問えながら周りを見渡す。

「(ハハ)は……」

息を整えながら周囲を見渡す。今、一誠がいるのは夕麻とのデートで最後に訪れたあの公園だった。

「これって、偶然か奇跡か何かか………ッ!？」

戸惑いつつ噴水の近くまで歩みを進めると、背筋に冷たいものが走り、一誠はゆつくりと振り返ると、眼前に黒い羽が舞い、一瞬カラスの羽かと思った。

「逃がすと思うか? 下級の存在はこれだから困る」

一誠の目の前に現れたのは、黒い翼を生やした先程の男だった。

「お前の属している主の名を言え。こんなところでお前達に邪魔されると迷惑なんぞ。こちらとしてもそれなりの………まさか、おまえ、『はぐれ』か? 主なしならば、その困惑している様も説明がつく」

男が何か呟いたかと思うと、今度は勝手に一人で納得した。

ファンタジーな展開と緊張が支配する中、一誠はふと夢の出来事を思い浮かべていた。

あのデートの日、最後の最後に一誠はここで夕麻に殺されたのだ。よく考えると目の前の漆黒の翼にも見覚えがある。夕麻が一誠を殺す直前に、同じものを生やしていた。そうだとすると、一誠は自然と次の展開を容易に想像した。

「ふむ……。主の気配も仲間の気配もなし。消える素振りも見せない。魔法陣も展開しない。状況分析からすると、やはりお前は『はぐれ』か。ならば、殺しても問題あるまい」

明らかに物騒な事を口走る男が手をかざす。その先にいるのは勿論、一誠。空気を揺らす耳鳴りと共に男の手に光が集まり、やがて収束する光は槍の形に形成した。

（殺される！）

一誠がそう思った瞬間、既に槍が腹を貫いていた。

「ゴボ……ッ！」

一誠の口から大量の血が吐き出され、途端に激痛が走った。

痛い……。それだけが一誠の中を埋め尽くし、その場に膝をついた。

腹の中から焼けるような痛みを感じ、やがてその痛みは全身へ回り、耐え難いものになっていた。

手で槍を抜こうと触れてみたら、今度は手に痛みが走り、手を見ると触れていた部分

に火傷が生じていた。

「ぐ……ああああ……」

一誠はその場で呻く事しか出来ず、あまりの痛さに涙が止まらない。

そこへコツコツと男の靴音が近づいてくると、一誠は見上げた瞬間、男は新たに光の槍を作り出していた。

「痛かろう。光はお前達にとつて猛毒だからな。その身に受ければ大きなダメージとなる。——しかし悪かったな、痛い思いをさせてしまつて……。光を弱めで形成した槍でも死ぬと思つたのだが、意外と頑丈だ。では、もう一撃放とう。今度は少々光の力を込めるぞ。なに、怖がることはない。次は確実に殺してあげよう」

これ以上はマズイと察する一誠だが、激痛で体が言うことを聞かない。それと同時にあの夢の続きも思い出していた。

——鮮やかな紅が俺を……。

しかし、あれは夢だ。助けしてくれる訳でもない。そう諦めた……その瞬間だった。

「はあっ!!」

ひゅっ。

男の声と風切り音が聞こえたかと思うと、一誠の眼前で爆発が巻き起こり、男の全身が焦げて片腕から鮮血が迸っていた。

「その子に触れないでちょうだい」

一誠の隣を女性が通り過ぎていく。

鮮やかな紅い髪。後姿からでもすぐに理解し、夢では顔は分からなかったがこの人だ

と一誠は確信した。

「無事か、兵藤」

そして一誠を支えるように隣へ並ぶ男に、一誠は夢とは違う展開を感じると同時に誰なのか理解した。

「その紅い髪……グレモリー家の者と、その下僕か……」

「リアス・グレモリーよ。ごきげんよう、堕ちた天使さん」

「……………」

墮天使が憎々しげにリアスを睨み付けるが、しかしそんなことはどこ吹く風。リアスの代わりに八雲が睨み返す中、リアスは淡々と言葉を紡ぐ。

「この子にちよつかいを出すなら容赦はしないわ」

「……ふふつ。これはこれは。その者はそちらの眷属か。この町もそちらの縄張りという訳だな。——まあいい、今日のことは詫びよう。しかし下僕は放し飼いにしない事だ。私の様な者が散歩がてらに狩ってしまうかもしれないぞ？」

「ご忠告痛み入るわ。この町は私の管轄なの。私の邪魔をしたら、その時は容赦なくや

らせてもらおうわ」

「そのセリフ、そっくりそちらに返そう、グレモリー家の次期当主よ。——わが名はドーナシーク。再び見えない事を願う」

ドーナシークと名乗った墮天使は黒い翼を羽ばたかせ、夜の空へと消えていった。

危機が去り一誠が少し安堵すると、途端に目が霞み、ついに意識を手放した。

「リアス部長……兵藤の容態が！」

「確かにこれは少しばかり危険な傷ね。仕方ないわ。……八雲、この子の自宅まで運ぶわよ」

「なら、俺が担いで行きます。兵藤の家も知ってるんでね」



「……………」

どうしてこうなった？

今朝、目覚まし時計に起こされて一誠は目を覚ました。夕麻ではなく謎の男に追い掛けられる悪夢から覚めると、まず気付いた事は自分が裸だったことだ。

一切の衣類を身に着けていない、全てをさらけ出した状態。真っ裸で寝る習慣なんて

寝惚け眼を擦り、上半身を起こすリアス。そんな中、母親はこの光景を見て固まり目だけ一誠へと移ると、一誠は視線を逸らしてしまい、母親は退室して叫んだ。

「セセセセセ、セ、セッ〇スウウウウ！ イッセーがあああああ！ 外国のおおおお！」

「か、母さん！ 母さんどうした!?!」

「国際的iiiiiiii！ インターナショナルウウウウウ！」

「母さん!? 落ち着いて！ 母さあああああん！」

両親の叫び。家族会議決定と同時に、一誠はもう顔を両手で覆うしかなかった。

「随分と朝から元気なお家ね」

そう言うなり、リアスはベッドを抜け出して着替え初めっていると、不意に一誠に訊いた。

「お腹、平気？」

「え？」

「昨日、刺されていたから」

「っ！」

リアスの一言で一誠は一気に目が覚める。夢で見た内容と同じ、男に槍で致命傷を負わされた。

しかし、リアスは一誠の心を見透かす様に言う。

「因みに昨日の出来事は夢じゃないわ。致命傷だったけど、意外な程あなたの体は頑丈だったから、私の力でも一夜掛けて治療出来たの。裸で抱き合って、弱っていたあなたに魔力を分け与えた訳だけど、同じ眷属だからこそ出来る芸当よ」

「は、ははは裸で抱き合って、まさか——」

「大丈夫よ、私はまだ処女だから」

その言葉に何故か安心する一誠に、リアスは指先で一誠の頬を撫でながら言った。

「そんな不思議そうな顔をしないの。あなたが思っているよりも、この世界は不思議が多いのよ？」

指先で撫でられながら一誠は顔が紅潮すると、リアスは言った。

「私はリアス・グレモリー。悪魔よ。そして、あなたのご主人様。よろしくね、兵藤一誠くん。イツセーって呼んでもいいかしら？」

一誠はリアスの言葉をよく分からなかった。だが、そんな彼女の魔性の微笑みだけは本物だった。



暫くして、一誠はリアスと共に登校した。

一応、一誠の両親との家族会議はリアスの魔力によって解決したが、登校までに同じ学園の生徒から多くの厳しい視線を浴び、やっと教室へと到着した。

「おはよう、兵藤」

一誠が席に座るや否や、不意に八雲から声を掛けられた。

「お、おう……」

すると、今朝見た夢とリアスの言葉に、一誠は八雲の顔を見た瞬間、八雲は言う。

「昨日の傷は大丈夫そうだな」

「っ!? じゃ、じゃあ、先輩の使いつて……」

学園の玄関前でリアスは言った。「後で使いを出すわ。放課後にまた会いましょう」と……。

「使い? いや、俺は何も聞かされてないが……」

「……………あれ?」

予想外の発言に一誠は首を傾げてしまうが、リアスに言われたことを八雲に伝えた。

「なるほどね……」

「……………それで、吉川も先輩の仲間なのか?」

「まあな。——取り敢えず、放課後は空けとけよ。俺も一緒に行くから」

八雲にそう言い残され、一誠は放課後になるまで授業を受けたのだった。



「……………」

そして放課後、一誠は旧校舎までの道のりを歩いていった。正確には、前にいる八雲とリアスの使いで来た祐斗に案内されてなのだが……。

「そ、そんな……木場くんと吉川くんと兵藤と一緒に歩くんなんて！」

「汚れてしまうわ、木場くん！ 吉川くん！」

「木場くん×兵藤なんてカップリング許せない！ 木場くん×吉川くんじゃなきゃいや！」

「ううん、もしかしたら兵藤×木場くんか、兵藤×吉川くんかも！」

「待って！ 吉川くん×兵藤の可能性もあるわ！」

その道中に祐斗と八雲を慕う女子達の絶叫に、一誠はこの際無視した。

阿鼻叫喚の渦の中。何とか黙ってやり過ぎすと、目的地であるオカルト研究部のドアの前に到着した。

「部長、連れてきました」

「ええ、入ってちょうだい」

ドアの前で祐斗が確認を取ると、奥から聞こえてくるリアスの声に促され室内に入った。

部屋の不気味な雰囲気、霧囲気の装飾品に戸惑いながらも一誠は室内を見渡すと、ソファで最中を食べる小猫を見つけた。因みに、その最中もつる屋の最中である。

「こちら、兵藤一誠くん」

祐斗の紹介にペコリと無言で頭を下げる小猫。

「あ、どうも」

一誠も軽く頭を下げると、小猫はまた黙々と最中を食べ始めた。

そんな反応に軽く戸惑っていると、部屋の奥から水の流れる音が聞こえる。見れば室内の奥にはシャワーカーテン。そしてカーテンに映る女性の体の陰影。

(この部屋、シャワー付いてんの!?)

一誠が内心驚いていると、カーテンの奥から声が聞こえた。

「部長、これを」

「ありがとう、朱乃」

声の主は朱乃とリアス。しかし一誠はカーテンの奥に映る裸のリアスに興奮し、勝手にヒートアップしていた。

「……いやらしい顔」

鼻息を荒くする一誠に対し、ボソリと小猫が呟いて一誠の心が貫かれる中、カーテンの奥から制服を着こんだリアスが出てくると、リアスは一誠を見かけるなり微笑んだ。「ごめんなさい。昨夜、イツセーのお家にお泊りして、シャワーを浴びてなかったから汗を流していたの」

しかし、リアスの言葉よりも部屋にシャワーがあるのが気になる一誠。内心でそんなことを思いつつ、視線をリアスの後方にいる朱乃に移すと驚きで絶句した。

「あらあら、はじめまして。私、姫島朱乃と申します。どうぞ、以後、お見知りおきを」
「こ、こちらこそよろしくお願ひします！」

リアスと併せて『二大お姉様』の1人である朱乃のうつとりしてしまいう声色で挨拶され、一誠も緊張しながら再び挨拶を交わす。

「さて、これで全員揃ったわね。さっそくだけど、兵藤一誠くん。いえ、イツセー。私たちカルト研究部はあなたを歓迎するわ。もちろん、悪魔としてね」

そして、リアスの素敵な笑顔によって一誠は勧誘されてしまうのだった。



この世界には、悪魔、天使、墮天使と呼ばれる種族が存在している。

悪魔と墮天使は冥界……つまり『地獄』の覇権を巡り、太古の昔から争っている敵対関係であり、そこに悪魔と墮天使の両者を葬ろうと『天界』から神の命を受けた天使を含めた三竦みの戦いを、大昔から繰り返している。

さて、ここからが本題だ。

一誠を殺した夕麻の正体は墮天使だった。彼女は一誠の身に宿る『神器』を危惧して犯行に及んだらしい。

『神器』。特定の人間に宿る規格外の力。世界的に活躍している、あるいは歴史に名を遺した人物の多くが、神器の所有者だと言われている。

大半は人間社会規模でしか機能しないものばかり。だが、中には悪魔や墮天使の存在を脅かす物もあるらしく、一誠の場合は後者に当たり、それが原因で墮天使に殺され、役目を終えた夕麻は一誠の周りから自分に関わる記憶と記録を消した。しかし、悪魔であるグレモリー眷属と神器の力に守られた八雲だけが記憶消去を免れている。

しかし、殺された事が事実なら、何故一誠は生きているのか……？

その答えは、リアスが一誠に見せた一枚の『チラシ』だった。

チラシには『あなたの願いをかなえます！』の謳い文句と魔方陣が描かれており、部屋の床に書かれている魔方陣と同じだった。

これは『簡易版魔法陣』というものであり、人間が悪魔を召喚するための代物だ。偶然、一誠も初デートの日に夕麻との待ち合わせの時に同じチラシを貰っていたのだ。

これを用いて、一誠は死ぬ間に強く願ったのだ。

——……どうせ死ぬなら、あの美少女の腕の中で、死にたかったな……。

それにより召喚されたリアスは一誠を見てすぐに神器所有者だと気付き、悪魔としてリアス・グレモリーの眷属として一誠の命を救うことを選んだのだ。

以上、リアスを含むオカルト研究部による、一誠曰くファンタジー全開な話である。

そして現在、一誠は——

「ドラゴン波！」

オカルト研究部の部室でリアス達の目の前にて、『ドラグ・ソボール』の主人公、（でらまじ）（さしほろ）空孫悟の必殺技であるドラゴン波のものまねを全力でしていた。無論、神器を発現させる為に行った行動だ。

羞恥を殺し、やけくそ気味に声を張り上げドラゴン波のポーズを取った直後に、一誠の変化は起きた。

「なっ……!?!」

突然一誠の左腕が光りだし、やがて光は徐々に形を成して左腕を覆っていき、光が止んだ時には一誠の左腕は赤い籠手が装着されていた。

手の甲には宝玉が嵌め込まれており、周りもかなり凝った装飾が施され、見た感じは立派なコスプレアイテムだった。

「な、なんじゃ、こりやああああ!」

当然の神器の出現に一誠は驚きを隠せなかった。

「それがあなたの神器。一度ちゃんと発現が出来れば、あなたの意志で何処にいても発動出来るわ。そして、あなたはその神器を危険視されて、墮天使である天野夕麻に殺されたの。そして私があなたを生き返らせたの……悪魔としてね」

その瞬間、一誠と八雲を除くメンバーの背中に悪魔の翼が生え、八雲は拳と掌を手合わせの様にして神器を出現させると、すぐに一誠の背中からもリアス達と同じ様に悪魔の翼が生えたのだった。

「それじゃあ、改めて自己紹介するわね。祐斗」

「2年生、木場祐斗。兵藤くんと同じ2年生って事は分かっているよね。僕も悪魔です。よろしく」

リアスに名前を呼ばれ、一誠にスマイルを向ける祐斗。

「1年生、塔城小猫です。悪魔です。よろしくお願ひします……」

小さく頭を下げる小猫。

「3年生、姫島朱乃ですわ。研究部の副部長も兼任しております。今後よろしくお願

いします。うふふ」

礼儀正しく深く頭を下げる朱乃。

「吉川八雲。俺たちは悪魔でもリアス部長の眷属でも無いが、協力者として入部している。神器を持つ者同士、よろしくな」

右手でシュツと敬礼の様なポーズで挨拶する八雲。

「そして私が彼らの主、リアス・グレモリーよ。家の爵位は公爵。よろしくね、イツセー」
最後にリアスが紅い髪を揺らして堂々と言った。

「どうやら自分ほとんどでもないことになってしまったようだ、一誠は自覚したと同時にリアスに質問した。」

「あの、リアス先輩。八雲の言った俺たちって、他にも部員がいるんですか？」

「いいえ。部員はこれで全員だけど、八雲の持つ神器にシキガミと呼ばれる種族が宿っているのよ」

「シキガミ？」

『オレがそうだけ』

一誠が首を傾げる中、霊体であるコゲンタが出て一誠に挨拶する。

『オッス！ オレは白虎一族のコゲンタだ。よろしくな』

「あの、リアス先輩。そのシキガミって今はいるんですか？」

『だから目の前にいるだろ！』

「それとも、八雲の神器の中で寝てたりして……」

『もしもーし。聞いているのかー？』

「「「「……………」」」」

『…………この野郎、まさか』

そして、一誠を除く全員が理解した。一誠は悪魔になったばかりのこともあるのか、コゲンタに気付いていなかった……。

第7話：悪魔のお仕事・契約編

「うおおおおおおおおおおおおおつー！」

深夜、一誠は自転車を全力で爆走していた。

理由は簡単。簡易版魔法陣のチラシ配りだ。

人間に召喚され、契約を結び、相手の願いを叶え、その代償としてそれ相応の対価をいただく。その為に、この簡易版魔法陣が必須なのである。

故に、一誠が手にしている携帯機器から導かれる欲深い人間の家に行き、例のチラシをポストに投函する毎日が繰り返されているのが、現在の一誠の仕事だ。

「ちくしよおおおおおおおつー！ 仕方ないよな！ 仕方ないもんな！ 俺、悪魔だもーん！」

そんな絶叫をしながら、一誠は夢中でペダルを漕ぐのだった。

何故、一誠がこのような仕事をしているのか？

それにはまず、一誠が悪魔だと認識した日にまで遡らないといけない……。



「私のもとに来ればあなたの新たな生き方も華やかになるかもしれないのよ!」

リアスたちが悪魔の翼を、八雲が神器をしまい、ソファーに座った後にリアスがウインクをしながら言った。だが、悪魔になったことで軽く頭を抱える一誠にとつては納得出来ないものがあるらしい。

墮天使に殺された一誠は、リアスに悪魔として転生させられた。その代わり、これからは彼女の下僕として生きていかなければならなくなった。これが悪魔のルール。悪魔に転生した者は、転生してくれた悪魔の下僕として生きねばならないのだ。

そんな中、リアスは一誠に説明する。

「いいことを教えてあげるわ、イツセー。悪魔には爵位と呼ばれる階級があるの。これは生まれや育ちも関係するけど、成り上がりの悪魔だっている。最初は皆、素人だったわ。——でも、やり方次第では、モテモテな人生も送れるかもしれないわよ?」

「……っ!」

リアスの最後の一言で脳内を駆け巡り、一誠は心中で思うよりも先に言葉が出た。

「どうやってですか!?!」

スケベ根性丸出しで無駄にテンションが高い一誠に、リアスは説明した。

その昔、3種族の戦争で純粋な悪魔の多くが亡くなってしまい、新しい悪魔を増やさ

なければいけなくなった。

だが悪魔の男女による自然出生で元の数に戻すには膨大な時間が必要であり、しかも極端に出生率が低いので墮天使に対応出来ないのも、悪魔たちは素質のありそうな者を悪魔に引き込む為、必然的に下僕を集めるようになった。

だが、下僕を増やすだけで力のありそうな悪魔を再び存在させることにはならない。だから悪魔は新しい制度として、力のある転生者でも爵位を授けることが可能となったのだ。無論、それ相応の努力と年月は掛かるが、やり方次第では一誠でも爵位を授けられるのだ。

「俺も爵位を!?」　じゃ、じゃあ、俺も爵位が貰えば下僕を持てるし、下僕に何を命令してもいいですよね?」

一誠は溢れ出る何かを抑え込むかのように訊くと、リアスは答えた。

「そうね。あなたの下僕にならないんじゃないかしら」

それを聞いた瞬間、一誠の中で雷が落ちた。

「う……うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おとおおおおっ!!」

部室の中心で一誠は叫んだ。椅子にふんぞり返り、自身の周りに数人の美女を侍らせては高笑いを上げるイメージを脳内で妄想しながら叫ぶその姿は、まさに部室の中心で

欲望を叫んだ悪魔だ。

「悪魔、最高じゃねえか！ 何、これ！ 何これ!? チョーテンション上がったよ、おい！」

一誠のボルテージは今までにない程に高まっていた。現実社会では、人間のままで、ましてや学園の女子たちに嫌われ元カノに殺されてしまった現在の一誠の目の前に、夢にまで見たハーレムが実現出来ることに興奮し、エロスなボルテージは臨界点を突破しようとしていた。

「あははは……」

「単純」

「全く、この煩惱オンリーめ……」

『学園の女子たちが引くのも分かるぜ……』

そんな一誠の姿に祐斗は苦笑いを浮かべ、小猫は小言を言い、八雲とコゲンタは呆れて溜め息を吐くが、今の一誠には通用しなかった。

「今なら秘蔵のエロ本も捨てられ……いや、アレは俺の宝だ。お袋にみつけれらるまではやっていける！ それとこれとは別だ。うん、別だ！」

「フフフ。おもしろいわ、この子」

先ほどのテンションから打って変わり考え込む一誠の姿を見ながら、リアスが本当に

おかしそうに笑う。

「あらあら。部長が先ほど仰っておられた通りですわね。『おバカな弟が出来たかも』だなんて。うふふ……」

然り気無く酷いことを言いながら朱乃もにこやかに笑うと、リアスは言う。

「というわけで、イツセー。私の下僕ということでもいいわね？ 大丈夫、実力があるなら

何れ頭角を現すわ。そして、爵位も貰えるかもしれない」

「はい、リアス先輩！」

「違うわ。私のことは『部長』と呼ぶこと」

『部長』ですか？ 『お姉さま』じゃダメですか？」

その問いにリアスは真剣に悩んだ後、首を横に振った。

「うーん。それも素敵だけれど、私はこの学園を中心に活動しているから、やはり部長の方がしつくりくるわ。一応、オカルト研究部だから、その呼び名で皆も呼んでくれているしね」

「分かりました！ では、部長！ 俺に悪魔を教えてください！」

一誠のその言葉にリアスは心底嬉しそうに小悪魔的な笑みを浮かべ、指で一誠の顎を撫でる。

「フッフ、いい返事ね。いい子よ、イツセー。いいわ、私があなただを男にしてあげるわ」

その瞬間、一誠の中で何かが弾けた。

「おっしやあ！ どうせ人間に戻れないなら突き進むのみ！」

意外にもすんなり状況を受け入れてしまう一誠。スケベ根性機能全開で、その勢いは止まらなかった。

「ハーレム王に、俺はなるっ！」

そして恥ずかしげもなく歪んだ野望を豪語する一誠は、リアスに訪ねてみた。

「で、俺は何をすればいいんですか？ 何でもやりますよ！」

「フフ、いい心掛けね。——取り敢えず、あなたには実績を積んでもらうことになるわ。心配しなくても、人間と契約して対価を得る……ただそれだけよ。そしてそれが私たち悪魔の力になるの。その実績が認められれば、あなたも爵位を得て下僕を持つことが許されるわ」

リアスが説明する中、八雲と小猫は端に動く。

「爵位は生まれも育ちも関係するけれど、成り上がりで爵位を得る悪魔もいる。勿論、イツセーのような人間から転生した悪魔にも、チャンスは与えられるわ」

「じゃあ、俺も爵位を持てばハーレムも夢じゃない!？」

「そういうことね。だから、これからイツセーには働いてもらおうわ。——八雲、小猫」

「はい。——ほら、兵藤」

ドサッ！

すると、端でなにやらゴソゴソしていた八雲と小猫は、リアスの言葉と共に一誠の目の前に数箱の段ボールを置いた。

重量感のあるそれらの中には先ほどの簡易版魔方阵のチラシが敷き詰められており、それを目の前にした一誠にリアスは言った。

「取り敢えず、まずはこれを配ってもらおうかしら」

「……はい」

「……まあ、頑張れよ」

大量のチラシを目の前に途方に暮れる一誠に、八雲は一誠の肩に手を置いて応援するのだった。

一誠のハーレムまでの道のりは、まだまだ遠い……。



冒頭から数日後の夜に、学園の校庭に2つの人影が動いていた。

「はあっ！」

周囲が結界に囲まれている中、祐斗と八雲が模擬戦をしており、その様子をリアスと

朱乃、何かに抱きついていて小猫が離れた場所で観戦していた。因みに、一誠はチラシ配りの為にこの場にはいない。

「ふんっ！」

祐斗の鋭く素早い剣撃を、八雲は『二十四氣の神操機』で受け流しては祐斗の隙を狙い拳や掌低を打ち込もうとするが、同じく祐斗も剣で受け止めては八雲の隙を突いた。

カキン！ ガン！ ガギン！

激しい攻防。お互い間合いを取りながらも素早い動きで接近し、拳と剣がぶつかりあう度に火花が散っている。

「くっ……！」

祐斗は翼を広げ空を飛ぶ。接近戦から一転し、一撃ヒット&アウェイ離脱へと戦法を切り替えた。

「逃がすかよー！」

しかし八雲は【動】の闘神符を使い、祐斗と同じ位置に飛んでは急接近した。

お互いに空中を旋回しながら再び拳と剣のぶつかり合いが続く中、八雲は新たに覚えた【火】の闘神符を拳圧で飛ばした瞬間、闘神符から火の弾が発生し、祐斗の剣を弾き飛ばした。

「しまっ——」

剣を弾かれて生まれた祐斗の一瞬の隙。透かさず八雲は祐斗を掴み、地上へ叩き付け

るが如く、祐斗を勢いよく投げ飛ばした瞬間、八雲自身も【動】の八卦の陣から高く跳んだ。

「だあつー！」

そして祐斗は空中で停止するが、その瞬間に八雲が跳躍からの急降下による跳び蹴りが迫り、咄嗟に祐斗は交差した腕で防ぐが、蹴りの勢いに負けて背中から地上へと激突してしまった。

「ぐあつー！」

受け身を取れずに仰向けになった祐斗。その瞬間、八雲の右手の手刀が祐斗の喉を捕らえていたのだった。

「勝負あり……だな」

「お疲れ様、2人共」

勝敗が決した2人のもとに、祐斗の剣を回収したりアスたちが近づいて来ると、八雲は神器を収めて横になった祐斗の手を掴み立ち上がらせた。

「いやあ、悔しいな。結構本気で向かったつもりだったんだけどな」

「いや、運が良かっただけだ。俺も結構ギリギリだったしよ」

そう言いながら、八雲は防御した腕の痺れを取る様に振る中、声を掛けられる。

「おつかれさま、やくもー！」

全員が声のする方へと……小猫に後ろから抱きしめられている者へと視線を向けた。

白鳥の雛に似た鳥人的な外見を持つ、大きなぬいぐるみのような者。下半身がすっぽり入る程の漆塗りの御腕を装着し、大きな針を備えた小猫よりも若干小さな者。

その名は『癒火いやしひのヒヨシノ』。鍛練の成果で出会った八雲の新たな仲間だ。

話は変わるが、『二十四気の神操機』に宿ったシキガミを目覚めさせるには様々な条件がある。しかし、大体のシキガミに対しては八雲が成長する度に目覚めており、現時点でコゲンタを含む計6人のシキガミが目覚めているのだ。

「ヒヨシノ。先に祐斗の具合を見てくれ」

「わかった!」

八雲の言葉にヒヨシノは了承すると、祐斗に近付いてはペタペタと体を触っていた。

「だいじよーぶ! このくらいなら、ぼくのはりでおおせるよ!」

そう言いながら、ヒヨシノは『陰陽針・痛点角つうてんかく』の切っ先で祐斗の背中をつついていくと、祐斗は穏やかな表情を浮かべていた。

「悪魔わたしたちでも癒せるのね」

「うん! いやしびいちぞくは、かいふくをつかさどるからね! かんたんなきざぐら
いなら、どんなしゅぞくでもちよちよいのちよいだよ! はい、おわり! つぎは、や

くもだよ！」

リアスの言葉に答えながらヒヨシノは祐斗の治療を終えて八雲に移ると、痛点角を八雲の両腕につついた。

「それにしても、祐斗くんを相手に勝つなんて凄いですわね」

「……八雲先輩。今度……機会があれば、私と組み手をお願いします……」

「ああ。約束だ」

朱乃は八雲の身体能力に感心し、小猫は八雲と模擬戦の約束をした。

「おわったよ、やくも！」

「ありがとうヒヨシノ、ご苦勞様。戻ってくれ」

「うん！ まったねー！」

ヒヨシノの頭を撫でた八雲はヒヨシノを帰すと、頃合いを見てリアスが言った。

「それじゃあ、今日はこの辺で切り上げて部室に戻るわよ」

「はい」

「そうですね」

「畏まりました」

「分かりました」

八雲、祐斗、朱乃、小猫は返事をし、リアス一行は部室に戻ろうとした………そ

の時だった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

全速力で自転車を漕いだ一誠が校庭に到着し、リアス達は足を止めた。

「部長！ 兵藤一誠。チラシ配りを全部終わらせて戻って来ました！」

「あら、もう配り終えたのね。あんなにあつたのに」

「ハーレムのためなら余裕です！」

全速力で自転車を漕いだにも関わらず、一誠は笑顔でリアスに敬礼した。

「それじゃあ、次のステップに移ってもらいましょか」

「もしかして……やっとならチラシ配りの下積みから脱出ですか!？」

「ええ。ひとまず、部室に戻ってから準備をするわ」

「はい！」

改めて、リアス一行は部室に戻っていくのだった。



「それじゃあ朱乃、お願いね」

「はい」

戻って暫くすると、リアスから指示を受けた朱乃は部室の魔方陣の中央へ移動して静かに詠唱を始めると、魔方陣が青白く淡く発行する。

「ど、どうしたんですか!？」

「今、イツセーの刻印を魔方陣に読み込ませているところよ」

刻印。眷属悪魔にとつての証であり、魔力を発動も全て魔方陣を絡めたものになるのだ。因みに、部室の床に書き込まれた魔方陣は、グレモリーの家紋を表している。

「イツセー、手のひらをこちらに出してちょうだい」

「え？ はい……」

言われるまま一誠は左手を差し出すと、リアスは一誠の手のひらを指先で軽くなぞつた瞬間、一誠の手のひらが光り出した。

そして光が収まると、一誠の手のひらにも青白く光る魔方陣が書き込まれていた。

「それは転移用の魔法陣を通して依頼者の元へ瞬間移動する為のものよ。そして、契約が終わるとこの部室に戻してくれるわ。——朱乃、準備はいい？」

「はい部長。いつでもいけますわ」

リアスの確認に返事を返した朱乃は、魔方陣の中央から身を引いた。

「さあ、魔方陣の中央に立って」

「はいー」

リアスに促され、一誠が魔方陣の中央に立つと魔方陣の青白い光が一層強く輝きを増し、その光に包まれた一誠は体の内側から力が溢れてくる感覚に見まわれる。

「魔方陣が依頼者に反応しているわ。イツセー、これからその場所へ召喚される訳だけど、到着後のマニュアルは大丈夫よね？」

「はい！ 依頼者と契約を結び、願いを叶えて、対価を貰う……ですよね！」

「結構よ。じゃあ、行つてきなさい！」

「行つてきまつす！」

「頑張れよ、兵藤」

「おう！」

一誠が八雲に返事した瞬間、一誠を包む光が最高潮に達した。

『うおつまぶしっ』

あまりの眩しさに思わず一誠やコゲンタも目をつむってしまったが、次に目を開けた時は依頼者のもとにいるはずだと一誠は思った。

瞬間移動に契約取り、何れにしても初めての体験に胸を躍らせる一誠は、依頼を無事完遂してみせようとした。

全て自分の『夢』^{ハレム}の為に……その実現の為に！

そして暫くして、恐る恐る目を開けた一誠の目に最初に映つたのは――

「……………あ、あれ?」

もう既に見慣れた木造づくりの部屋。そして額に手を当てて困り顔のリアスに、苦笑いを浮かべる朱乃。そしてキョトンとした表情を浮かべる八雲、祐斗、小猫の姿だった。要するに、一誠がいるのはこれから向かうはずだった依頼者のもとではなく、オカルト研究部の部室だったのだ。

「イツセー」

何が起こっているのか未だに理解出来ない一誠に、リアスが声を掛ける。

「は、はい…………」

「残念だけど、あなた、魔方陣を介して依頼者のもとへジャンプ出来ないみたいなの」

「え…………?」

怪訝な表情を浮かべる一誠に、リアスが説明する。

「魔法陣は一定の魔力が必要な訳だけど……………これはそんなに高い魔力を有するものではないわ。寧ろ魔方陣ジャンプなんて、悪魔なら子供でも出来るわ」

「えーつと、つまり……………どういう事でしょうか…………?」

「つまり、あなたの魔力が子供以下……………いえ、低レベルすぎて魔方陣が反応しないのよ。あまりにも低すぎるの」

「なっ!? な、なんじゃそりやあああああ!?」

衝撃の事実を突き付けられ、絶句してしまう一誠。

「あらら……」

「……無様」

追い打ちを掛けるかの様に、八雲の溜め息と小猫の無慈悲な言葉に打ちのめされてしまふ。

「あらあら、困りましたわねえ。どうします、部長」

さすがの朱乃も困り顔でリアスに尋ねると、暫し考え込んだリアスが一誠にハッキリと言ひ渡す。

「前代未聞だけれど、依頼者がいる以上、待たせる訳にはいかないわ。イツセー」

「はいー!」

「足で直接現場へ行つてちょうだい」

「はい………つて、足い!?!」

予想外の答えに驚愕してしまう一誠。

「ええ、チラシ配りと同様に移動して、依頼者宅へ赴くのよ。仕方ないわ、魔力がないんだもの。足りないものは他の部分で補いなさい」

「チャリでお宅訪問!?! そんな悪魔存在するんですか!?!」

『そりゃあ……』

「……………」

ビシィツ×2

コゲンタと共に、小猫は無言で一誠を指差した。未だにコゲンタの姿を見ていない一誠にはコゲンタの行動は知らないが、小猫のその行為が一誠の心を抉りに抉った。

そして、リアスは真剣な表情で一誠を急かした。

「ほら、行きなさい！ 契約を取るのが悪魔のお仕事！ 契約者を待たせてはダメよ！」

「う、うわああああん！ 頑張りますうううう！」

出世街道を出鼻から挫かれ、一誠は涙を流しながら部屋を後にしたのだった。

『……………いつその事、八雲に送ってもらったらいんじゃねえの？』

「ダメだ」

「ダメよ」

一誠が出て暫くした後、コゲンタの何気無い言葉に八雲とリアスは同時に言葉を発した。

「これは兵藤の仕事だ。俺が出る幕は、主にはぐれ悪魔討伐だ」

「それに、他の者に契約の手伝いをして貰うのは、あの子の為にならないわ。辛いと思うけど、イツセーには頑張つて貰うしかないわ」

「そう言う事だ。——それじゃリアス部長。俺達は帰ります」

そう言われ、リアスは時間を確認した。そろそろ戻らないと、幾ら部活動で遅くなる
と説明はしたが、遅すぎでは八雲の祖父母が心配してしまうからだ。

「ええ、ご苦勞様」

「また明日ね、八雲くん」

「お疲れ様」

「……八雲先輩。バイスです」

「バイス。それじゃあ……」

リアス、朱乃、祐斗、小猫に見送られ、八雲は部室を出たのだった。



八雲が帰った頃、目元を涙で濡らしながら一誠は全力で自転車を漕ぎ、依頼者のもと
へやって来た。

場所は学園から30分ほど離れたマンション。依頼者の機嫌を気にしながらも、ドア
の前に立ち呼び鈴を鳴らす。その際、こんな自分に虚しさを感じてしまったが……。

「えっと、こんばんはー。悪魔グレモリー様の眷属ですが、召喚された方はこちらですよ
ねえ？」

少ししてインターフォンから反応が来る。因みに、この一誠の言葉は依頼者以外には感知されないもので、関係ない者には迷惑が及ばないのだ。

『開いています。どうぞごにこよ』

返ってきたのは野太い声。それは明らかに男性のものだった。

「……………」

聞き間違いだらうと納得させながらもドアを開け、玄関で靴を脱いで中に進む一誠。部屋の扉を開けた瞬間、絶句した。

「ぐらっしやいこよ」

それは圧倒的な巨体に、圧倒的な存在感を放つ男だった。

鍛え抜かれた筋骨隆々な男が、ゴスロリ衣装を着こんでいる。しかも服の端々が今にも破れそうで悲鳴を上げており、ボタンもはちきれそうだ。

何よりも双眸から凄まじい殺意を一誠に向けているにも拘わらず、瞳は純粹無垢な輝きを放っていた。

そして極めつけには、頭部に装着されたネコミミ。しかもたまにピコピコと可愛らしく動いてるではないか。

そんな異常な存在感に一誠は生唾を飲み込み、頬に一筋の汗が流れる。手は緊張から小刻みに震えながらも、目の前にいる男を見て瞬時に理解する。

まさに……………おどじ漢だ。

「あ、あの……………あ、悪魔を……………グレモリーの眷属を召喚しましたか……………?」

本能が警報を鳴らす。圧倒的な存在感と死地に足をつ突っ込んでいる危機感にも拘わらず、今の一誠には逃げるという選択肢は存在しなかった。

そして一誠は勇気を振り絞り絞り恐る恐る訪ねた瞬間――

カッ!

「ヒイ!」

そんな効果音を立てる様に漢の目が光った。悪魔の身でありながら、一誠は情けない悲鳴をして身を守る様に体勢を作っていた。

「そうだによ。お願いがあつて、悪魔さんと呼んだによ」

漢の野太い声から不可解な言語が飛び出し、インターフォンから聞いたのは聞き間違いではなかったと一誠は内心驚愕した。

そして、漢は一誠に言った。

「ミルたんを魔法少女にしてほしいによ」

「異世界にでも転移してください」

一誠は即答した。

いきなりの規格外の願いに頭を抱えてしまい、漢の言動が一誠を混乱させる。

「それはもう試したによ」

「試したの!？」

「でも無理だったによ。ミルさんに魔法の力をくれる人はいなかったによ」

「いや、ある意味、今の状況が魔法的だけどき……」

「もう、こうなったら宿敵の悪魔さんをお願いするしかないによ」

「宿敵なの!？」

「悪魔さんっつー!」

「は、はいっ!？」

漢……ミルさんが発する部屋全体を震えさせる音量に、一誠は反射的に返事を返す。

「ミルさんに……ミルさんにファンタジーなパワーをくださいによおおおっ!」

「いや、もう十分にファンタジーですよ! ファンタジー通り越してホラーなんですけ

ど! つてか、泣いてもいいよね、俺!」

「によおおおっ!」

「ミ、ミルたん! ミルたん、落ち着いて! 俺で良かったら相談のるから!」

取り敢えず話を聞こうと一誠はミルたんを落ち着かせると、ミルたんは大粒の涙を拭い、強面に満面の笑みを浮かべながらある物を一誠に見せた。

「じゃあ、一緒に『魔法少女ミルキースパイラル7オルタナティブ』を見るによ。そこか

ら始まる魔法もあるによ」

こうして、一誠の長い夜が始まった。



「……………」

一誠の初仕事が終わって翌日の放課後。一誠はリアスの目の前に立ち、顔面蒼白となっていた。

「……………」

一方のリアスは、眉を吊り上げて無言のままであり、そんな2人の光景を八雲は黙って見ていた。

『なあ。どうしたんだ？』

コゲンタは小声で八雲に訊くと、八雲は答えた。

（昨日の仕事の事だよ。登校中に兵藤から愚痴を溢されたらどろ？）

『あー、あの事な』

そう……八雲の言う通り、登校中に兵藤と出会い、開口一番に昨夜の仕事内容で愚痴を聞かされた。

ミルたんと言う漢と共に朝までアニメ鑑賞し、真面目に見ようと思わなかったのに無駄に熱い演出と泣けるシナリオで大いに見入ってしまった、肝心の契約が破談してしまい、その時の一誠の表情はとてつもなく沈んでいた。

「……イツセー」

「は、はい！」

リアスの低く怖い声音に、一誠は返事した。

「依頼者とアニメを見て、それからどうしたのかしら？ 契約は？」

「け、契約は破談です……。その後、依頼者にとあるアニメの設定資料集やら色々見せられては教えられてました！」

真面目に説明し、涙目になる一誠。

「じ、自分でも情けなくて……。いえ、いち悪魔としても情けないとは思えてなりません！ は、反省してます！ すみませんでした！」

一誠は謝罪の言葉と共に深く頭を下げる中、リアスはとある用紙を向けた。

「……契約後、例のチラシにアンケートを書いて貰う事になっているの。依頼者の方に「悪魔との契約はいかがでした？」って。それで、チラシに書かれたアンケートはこの紙に表示される訳だけど……」

『ん？ どれどれ……』

内容が気になったのか、コゲンタも一誠と共にアンケートを見ると、こう書かれていた。

「楽しかったによ。またあくまさんと一緒に、ミルクースパイラルを見たいによ。これからもよろしくだによ（はあと）」

妙に丸っこく可愛らしい文字で書かれていたが、最大級の賛辞であり、不覚にも一誠は胸が熱くなった。

『うわあ……』

だが、コゲンタは内容よりも文体に引いてしまった。

「こんなアンケート、初めてだわ。ちよつと、私もどうしていいか分からなかったから、少し反応に困ってしかめっ面になってしまっただけでしょうね」

「えっ？　じゃ、じゃあ……怒ってなかったんですか？」

「でも、悪魔にとつて大切な事は召喚してくれた人間との確実な契約よ。そして代価を貰い、悪魔は永い間存在してきたの。……今回の事は私も初めてでどうしたらいいかわからないわ。悪魔としては失格なんでしょうけれど、依頼者は喜んでくれた……」

困惑顔のリアスだったが、ふつと笑みを漏らす。

「でも面白いわ。それだけは確実ね。イツセー、あなたは前代未聞尽くめだけれど、とても面白い子ね。意外性ナンバー一の悪魔なのかもしれないわ。けれど、基本の事は守つ

てね♪」

最後に可リアスは愛らしいウインクをすると、一誠のテンションは一気に舞い上がった。

「はい！ 頑張ります！」

そして一誠は決意を改めて固めた。悪魔として契約をバンバン取って取って取りまくり、成り上がって爵位を授かり、自分だけのハーレムを作るのだと……。

そんな一誠の想像を察したのか、八雲は呟いた。

「……エロスは程々にな」

第8話：悪魔のお仕事・討伐編

一誠が決意を改めた次の日の放課後。八雲と一誠は表向きの部活も終わり、ともに下校していた。

「はあ……」

しかし昨日張り切っていた一誠だが、溜め息をして気持ちが沈んでいた。

「……そろそろ気持ちを切り替えろよ、な？」

「でもなあ……部長があれだけ応援してくれたのに、昨日も契約が破談したんだぞ。部長に申し訳ないぜ……」

そう言つて、一誠は再び溜め息をした。

昨晚、一誠は契約を取る為の仕事をを行ったのだが、前回同様に契約は破談。しかし、アンケートには最大級の賛辞を貰うのだが、リアスは微妙な表情をして苦笑いしていたのが八雲の記憶に新しい。

「まあ、同じ人と何度も紹介されれば、何時かは契約は取れると思うぞ。根気よく頑張れ」

「そう簡単に言うなよ。……つてか、何で俺の依頼者は変態ばかりなんだよ！ 木場の

奴は美人のお姉さんに呼ばれる率が相当高いって朱乃さんに聞いたぞ、ちくしょう！」
『日頃の態度と気持ちの関係じゃねえの？』

聞こえない事を利用してコゲンタは突っ込むと、それを聞いた八雲が苦笑した時だった。

「はわうー！」

突然、八雲と一誠の後ろから声が聞こえ、同時にボスンと何かが転がる音がした。

「ん？」

「何だ？」

2人は気になり振り向くと、そこには手を大きく広げ、顔面から地面に突っ伏しているシスターの姿があった。正直、間抜けな転び方だ。

「……………えっと」

「大丈夫っスか？」

2人はシスターに近寄ると、一誠は起き上がれる様に手を差し出した。

「あうう。何で転んでしまうんでしょうか……………？ ああ、すみません。ありがとうございます
いますう……………」

声からして八雲達と同年代の少女。一誠は手を引いて起き上がらせると同時に、風でシスターのヴェールがずり落ちてヴェールの中で束ねていたであろう金色の長髪が露

になった。腰まであるストレートのブロンドが夕日に照らされ、キラキラと光っていた。

「……………」

一瞬、一誠はシスターの素顔に心を奪われた。金髪美少女が持つグリーンの双眸があまりにも綺麗で、一誠が理想する女の子像（金髪美少女版）に合致していたのだ。

「大丈夫か？ はい、これ」

そんな中、八雲は落ちたヴェールを手に取り、シスターに差し出した。

「ありがとうございます！」

ヴェールを受け取ったシスターは満面の笑みでお礼を述べると、一誠はさらに心を奪われてしまい、暫しの間シスターに見入ってしまった。

「あ、あの……………どうかしたんですか……………」

シスターが訝しげな表情で一誠の顔を覗き込むと、一誠は我に返った。

「あつ、ご、ごめん！ えつと……………」

言葉が続かない。見惚れていたなどと言える訳もない中、八雲は視界に映るシスターの持ち物を見て質問する。

「……………へは旅行かい？」

八雲の質問にシスターは首を横に振る。

「いえ、違うんです。実はこの町の教会に今日赴任することとなりました……あなたたちもこの町の方なのです。これからよろしくお願いします」

ペコリとシスターは頭を下げると同様に、2人も頭を下げた。

「この町に来てから困っていたんです。その……私って、日本語が上手く喋れないので……道に迷ってしまい、道行く人皆さんとも言葉が通じず困っていたんです……」

胸元で手を合わせる困惑顔のシスター。どうやら日本語が喋れないらしい。

なのに何故、一誠と八雲がシスターの言葉が通じているのか？

一誠の場合、悪魔になった特典の1つに『言語』という能力が追加され、全世界の言葉の壁を越えることが出来るのだ。

一方、八雲の場合は神器に宿るとあるシキガミが目覚めて以来、悪魔の『言語』と同じ能力が備わったのだ。

「教会……知ってるか、兵藤？」

引越して初めて教会の存在を知った八雲。すると、一誠は領いてシスターに提案する。

「教会なら知っているかも。よかったら案内しようか？」

「本当ですか！ あ、ありがとうございます！ これも主のお導きのおかげですね！」

涙を浮かべながらシスターが一誠に微笑む。

可愛らしい笑顔を浮かべるが、シスターの胸元でロザリオが光り、一誠がそれを見た瞬間に最大級の拒否反応を覚えてしまう。

そう……悪魔にとってロザリオ等々、神の祝福を得た聖なる力を放つ類の物に極端に弱い。

本来、悪魔とシスターは相いれない関係。しかし、それでも困っている女の子を放っておけないのが一誠の性分であり、困っている人を放っておけないのが八雲の性分だ。

こうして、一誠は美少女シスターを引き連れて教会に足向け、八雲もそれに同行するのだった。

◆ 「うわああああん」

3人が教会へ向かう途中、公園の前を横切ると、どこからか子供の泣き声が聞こえてきた。

「大丈夫、よしくん？」

どうやら、公園で男の子が転んで膝を擦りむいたようだ。

一誠は男の子の近くに母親もいるから大丈夫だろうと思っていた矢先、一誠の後ろに付いていたシスターが歩く方向を変えた。

「おいおい」

一誠が止めるのも聞かず、シスターはまっすぐ子供の側に近寄っていく。

「大丈夫？ 男の子がこれぐらいのケガで泣いてはダメですよ」

そう言い、シスターが子供の頭を優しく撫でる。言葉は通じていないだろうが、シスターの表情は優しさで満ち溢れていた。

すると、シスターがおもむろに自身の手のひらを怪我した男の子の膝に当てる。次の瞬間、シスターの手のひらから淡い緑色の光が発せられ、男の子の膝を照らした。

「へえ……」

その光景に一誠は驚く中、八雲はシスターの発する光とその正体に心当たりがあった。

『神器か……』

コゲンタの呟きに八雲は頷くと、一誠の反応にも気付いて辺りに聞こえない様に話し掛ける。

「どうした？」

「いや、何だか左腕が疼いてよ……」

「疼いてる？　もしかして、シスターの神器に共鳴してるんじゃないのか？」

そんなやり取りをしていると、いつの間にか男の子の傷は塞がり、怪我の痕は完全に消えてしまった。

男の子も、その母親もきよとんとしている。信じがたい現象が目の前で起これば、誰でもそうなるはずだ。

「はい、傷は無くなりましたよ。もう大丈夫です」

シスターは男の子の頭をひとなですると、一誠と八雲の方に顔を向ける。

「すみません、つい」

舌を出して小さく笑うシスター。そんな中、きよとんとしていた母親は頭を垂れると、子供を連れてその場をそそくさと去ってしまった。

「ありがとう、お姉ちゃん！」

その際、子供がシスターに感謝の言葉を送っていた。

「ありがとう、お姉ちゃん……だってさ」

一誠がシスターに翻訳すると、シスターは嬉しそうに微笑んだ。

「その力は……」

「はい、治癒の力です。神様から頂いた素敵なものなんですよ」

八雲の微笑むシスターだったが、その表情はどこか寂しげで影を落としており、それ

だけで彼女が苦勞人であることが八雲と一誠は感じた。

「……………」

すると一誠はそんなシスターの姿が見ていられなくなり、一誠は視線を自分の左手に移していた。

神器……。異質な力……。

一誠も初めて神器が装着された瞬間に酷く驚き、人によつては苦勞しているのではないのかと一誠は思った。

そして黙つて左手を握りしめ、気持ちを切り替える様にシスターへと声を掛けた。

「さ、行こうか！ こっちだよ」

「あ、はいっ！ お願いしますー」

そして、一誠は教会への案内を再開させた。

「……………」

『どうしたんだよ？』

そんな中、黙つてシスターを見つめる八雲にコゲンタは訊く。

「確かに神器「レ」は、人によつては不思議で奇妙な力だよな。さっきの母親も、彼女を気味悪がる視線をしてたし……」

『…………八雲は、神器オレ達を持って——』

後悔してるのか？

そう言おうとした瞬間、八雲はコゲンタの言葉を遮る様に言った。

「してねえよ。——何度も言うが、神器ゴレのおかげで助かったし、俺の手が届く範囲が広がった。本当に感謝してる……」

そう言った八雲は夕日に向けて右手をかざした。その時の表情はどこか誇らしげで、穏やかな笑みだった。

『……そうか』

そしてコゲンタも微笑むと、八雲は一誠たちの後を追うのだった。



「あ、ここです！ よかったあ」

「……………」

暫くして、3人は古ぼけた教会の前に到着した。地図の描かれたメモと照らし合わせながらシスターが安堵の息を吐く一方、一誠は全身を伝う嫌な汗と悪寒で体が震えていた。

それは悪魔としての純粋な拒否反応であり、神社や教会に近づくなと、以前リアスに

特に強く説明されたのを思い出す。

一誠は長居は出来ないことを悟り、厄介事に巻き込まれる前に退散することにする
と、八雲も一誠の状況を悟ってともに行動した。

「じゃあ、俺はこれで…」

「待つてください！ ここまで連れてきてくださったお礼をさせていただきます！」

別れを告げて教会から去ろうとした一誠と八雲を、シスターが呼び止めた。

「いや、俺らは急いでいるもんでね。気持ちだけ受け取るよ」

「……でも、それでは」

八雲の言葉に困った表情を浮かべるシスター。しかし、悪魔である一誠は彼女の言葉
を受け入れる事が出来ない。

「俺は兵藤一誠。みんなからはイツセーって呼ばれてるから、イツセーでいいよ」

「吉川八雲。俺も八雲でいいよ」

せめてもの2人は名前を名乗ると、シスターは笑顔で応えてくれた。

「私はアーシア・アルジェントと言います！ アーシアと呼んでください！」

「じゃあ、シスターアーシア。また会えたらいいね」

「はい！ イツセーさん、八雲さん、必ずまたお会いしましょう！」

「バイス。シスターアーシア」

深々と頭を下げるアーシアに、一誠と八雲が手を振って別れを告げると、アーシアは2人の姿が見えなくなるまで、ずっと見守っていてくれた。

そしてこの出会いが、一誠とアーシア・アルジェントの数奇な運命の始まりだった。



「二度と教会に近づいちゃだめよ!」

一誠と八雲がアーシアを教会へ送り届けたその日の夜、一誠は部室でリアスに怒られていた。

「教会は私たち悪魔にとって敵地。踏み込めばそれだけで神側と悪魔側の間で問題になるわ。今回はあちらもシスターを送ってあげたあなただけの厚意を素直に受け止めてくれたみたいだけれど、天使たちはいつも監視しているわ。いつ、光の槍が飛んでくるか分からなかったのよ?」

「……マジですか?」

一誠の状況の危機感をさらに煽るように、リアスは紅の髪を揺らしながら、青い双眸で一誠を直視する。

「教会の関係者にも関わってはダメよ。特に『悪魔祓い』エクスシストは我々の仇敵。神の祝福を受け

た彼らの力は私達を滅ぼせるほどよ。神器所有者がエクソシストなら尚更。それは死と隣り合わせることを意味するわ。……イツセー」

「は、はい」

「人間としての死は悪魔への転生で免れるかもしれない。けれど、悪魔祓いを受けた悪魔は完全に消滅する。無に帰すの。それがどれだけのことか分かる？」

「……………」

正直、そのことに一誠は分からない。そんな一誠の反応を見たりアスはハッと気づいたように首を横に振った。

「ごめんなさい、熱くなりすぎたわね。とにかく、今後は気を付けて頂戴」

「はい」

「あらあら。お説教は済みましたか？」

「おわっ」

一誠とリアスの会話が終わった途端、いつの間にか一誠の背後にニコニコ顔の朱乃が立っていた。

「朱乃、どうかしたの？」

リアスの問いに朱乃は少しだけ顔を曇らせた。

「討伐の依頼が大公から来ました」

◆ 『はぐれ悪魔』。

爵位持ちの眷属悪魔が主を裏切り、または主を殺して野良犬と化した悪魔のことを言う。はぐれ悪魔を見つけ次第、主人、もしくは他の悪魔が消滅させる。これも悪魔のルールの1つであり、天使側、堕天使側も見つけ次第殺すようにしている。

「……ね……」

現在、町外れの廃屋近くにリアスたちグレモリー眷属が魔方陣から現れると、一誠が口を開く。

「あの、部長。吉川はどうするんですか？」

八雲は人間である為、魔方陣ジャンプが出来ない。そのことを知っている一誠は心配そうに言うと、リアスは微笑む。

「心配いらないわ。そろそろ——」

瞬間、一誠はリアスを見て驚愕した。

「ぶ、部長!?! おっぱいが光ってますよ!?!」

そう……一誠の言う通り、リアスの胸——正確には胸ポケット——が青く光っている

のだが、リアスは驚く素振りを見せずにポケットから【転】の闘神符を取り出しては目の前に投げ付けた。

そして、一誠は初めて目にする青く輝く八卦の陣が現れた瞬間、一誠たちと同じように八雲が現れたのだった。

「こんばんは、リアス部長」

「吉川!?! え……吉川っていつもそうやって来るのか?」

「ええ。はぐれ悪魔討伐の時は私の使い魔で八雲に連絡して、独自で魔方陣ジャンプしてもらおうの」

「まあ、出入口として【転】の闘神符が最低2枚いるけどな」

「へえ……」

未だに自分で魔方陣ジャンプが出来ない一誠は羨ましそうに八雲を見つめると、八雲はリアスに訊いた。

「それで、リアス部長。今回の仕事は……」

「こちらですわ」

リアスの代わりに朱乃が大公の依頼状を見せる。

毎晩、この廃屋ではぐれ悪魔が人間を誘き寄せて食らっているらしい。今回はそのはぐれ悪魔を討伐するよう、上級悪魔からの依頼内容だった。

そして八雲は依頼状を読み終わると、リアスたちとともに廃屋へと近付いた。

「……血の臭い」

背の高い草木が生い茂る不気味な雰囲気の中、小猫が呟いて制服の袖で鼻を覆った。

周囲は静まり返っているが、廃屋から敵意と殺意がはつきりと感じられる。どうやら敵もこちらの存在に気づいているようで、それを感じた一誠は足をガクガクと震わしていた。

「イツセー、いい機会だから悪魔としての戦いを経験しなさい」

そんな中、堂々と腰に手を当てて立っているリアスと言う。

「マ、マジっスか!? お、俺、戦力にならないと思いますけどー!」

「そうね、それはまだ無理ね。でも、悪魔の戦闘を見ることは出来るわ。今日は私たちの闘いをよく見ておきなさい。ついでに下僕の特性を説明してあげるわ」

「下僕の特性? 説明?」

怪訝な一誠にリアスが悪魔の現状を語り始める。

「悪魔・天使・墮天使の三つ巴の関係は前に説明したわね? 長い戦いの期間争い合った結果、どの勢力も酷く疲弊し、やがて勝利する者もいないまま数百年前に戦争が終わったの」

リアスの言葉に祐斗、朱乃と続く。

「悪魔側も大きな打撃を受けてしまった。爵位を持った大悪魔の方々も、最早軍団を保てない程の大半の部下を長い戦争で失ってしまったんだ」

「純粋な悪魔はその時に多く亡くなったと聞きます。しかし、戦争は終わっても各勢力との睨み合いは現在でも続いています。幾ら各勢力が大半の部下を失ったとはいえ、少しでも隙を見せれば危うくなります」

そして再びリアスは語る。

「そこで悪魔は少数精鋭の制度を取ることにしたの。それが『イーヴィル・ピース悪魔の駒』……」

「イーヴィル・ピース？」

「爵位を持った悪魔は人間界のチェスの特性を下僕悪魔に取り入れたの。——主となる悪魔が『キング王』。私たちの間で言うなら私ね。そして、そこから『クイーン女王』、『ナイト騎士』、『ルーク戦車』、『ビショップ僧侶』、『ポーン兵士』と5つの特性を作り出したわ。軍団を持ってなくなった代わりに少数の下僕に強大な力を分け与えることにしたのよ」

リアスが説明する中、八雲とグレモリー眷属は各部屋の探索を続け、コゲンタも霊体で辺りを警戒する。

「この制度が出来たのはここ数百年。これが爵位持ちの悪魔に好評して、今では下僕を駒にして強さを競う大掛かりなチェス……『レーティングゲーム』を行うようになったのよ。これが地位や爵位に影響するようになり、駒集めと称して、優秀な人間を自分の

手駒にするのも最近流行っているわ。優秀な下僕はステータスになるから」

「……なるほど。じゃあ、俺もいずれはそのゲームに駆り出されて戦うことになるんですか？」

様々な用語と小難しい内容を何とか理解した一誠は訊ねるが、リアスは顔を横に振る。

「いいえ。私はまだ成熟した悪魔ではないから、公式の大会には出場出来ないの。それに、出場するにも色々な条件があるの。まずそれをクリアしないといけないから、当分の間はイツセーやここにいる私の下僕がゲームをすることはないわ」

「……………」

リアスの説明に一誠は想像していた悪魔の世界観が崩れつつあったが、それよりも気になることを訊いた。

「じゃあ部長。結局、俺の駒の役割や特性って何ですか？」

「そうね、イツセーは——」

『リアスのねーちゃん』

そこまで言うと同時に、リアスはコゲンタの発言前に歩みと言葉を止めた。

理由はすぐに分かった。目の前の暗闇から今まで立ち込めていた敵意や殺意がいつそう濃くなり、何かがリアスたちに近付いていた。それはもう、悪魔歴の浅い一誠でも

すぐに理解出来る程の……。

「不味そうな臭いがするぞ？　でも美味そうな臭いもするぞ？　甘いのかな？　苦いのかな？」

地の底から聞こえるような不気味な声が聞こえてくる。

「うっ！　何だよこの臭い!？」

周囲に立ち込める血腥い臭いに顔を顰めてしまう一誠だったが、リアスは一切臆さず声の主に言い渡す。

「はぐれ悪魔バイザー。あなたを消滅しに来たわ!」

「うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ……!!」

異様な笑い声が辺りに響くと同時に、何かガリアス達の方に飛んできた。

ドシャリッ!

最初は敵の攻撃かと思ったが違った。気持ち悪い音とともに一誠の足元へ転がってきたそれは、肉塊と成り果てた死体だった。

既に胸から下の体の部位がない死体。無造作に食い千切られたであろう断面からは鮮血が滴り落ち、内臓や肉片が零れ落ち掛けている。

「うっ……………」

「……………」

死体を視界に入れてしまった一誠は胃から逆流してくるモノを抑えるのに精一杯であり、同じく八雲も吐き気を抑えながら死体が投げられた場所を注視した。

「ぶひやひやひやひや……!!」

そして、暗闇からはぐれ悪魔『バイザー』の本体が姿を現す。

それは上半身裸の女性であり、そして巨大な獣の下半身を合わせた全長約5メートル以上はある異形の存在であり、両手には槍らしき得物を一本ずつ所持していた。

「主の下を逃げ、己の欲求を満たす為だけに暴れ回るその行為……万死に値するわ。グレモリー公爵の名に於いて、あなたを消滅させてあげる」

「ぶひやひやひやひや………小賢しい小娘如きがあああ！ その紅の髪のように、お前の身を鮮血で染め上げてやるわあああああ！」

吠えるバケモノだが、リアスは鼻で笑うだけだ。

「雑魚ほど洒落の利いた台詞を吐くものね。祐斗！」

「はー！」

まずはリアスに指示を受けた祐斗が飛び出す。

「イツセー、さっきの続きをレクチャーするわ」

祐斗とバイザーが戦闘している中、リアスが先ほど中断した説明を再開させた。

「祐斗の役割は『騎士』。特性はスピード。『騎士』となった者は速度が増すの」

リアスの言う通り、祐斗の動きは徐々に速度を増していき、遂には常人では目で追えなくなる程の速度まで到達していた。バイサーも槍を振るって攻撃するが、全然当たる気配がない。

「そして、祐斗の最大の武器は剣」

一度足を止めた祐斗の手には、いつの間にか手に西洋剣が握られていた。それを鞘から抜き放ち、長剣が抜き身となると、祐斗が再びその場から消えた。

「ぎやあああああああああああつー！」

瞬間、バイザーの悲鳴が木霊する。見れば、銀光を放つ祐斗の長剣が、バイザーの両腕を切断して槍と共に葬ったのだ。

「これが祐斗の力。目では捉えきれない速力と、達人級の剣捌き。2つが合わさる事で、あの子を最速の『騎士』となれるの」

「この……小虫めえええええつっ！」

両腕の傷口から血を噴き出しながらも、バイザーは巨大な足を振り上げる。すると、パフォーマンスを終えて背を向ける祐斗と入れ替わる形で、1つの小さな影が前に出る。

「……………」

小猫だ。

「小猫ちゃん!？」

ズズンッ!

小猫はそのままバイザーに踏み潰されてしまい、辺りに砂塵が舞う。

「大丈夫」

しかし、リアスはただ一言呟くだけ。

「なっ!？」

そして砂塵が晴れると、一誠は瞳に映る光景に驚愕した。なぜなら、そこには小さな体でバイザーの足を持ち上げる小猫の姿があったからだ。

「小猫の役割は『戦車』。特性はバカげた力と屈強なまでの防御力。あの程度の攻撃では小猫は沈まない。潰せないわ」

グンッ!

バイザーの足を完全に持ち上げた小猫は、そのまま体勢を崩させる。

「……吹っ飛べ」

そして空高く跳び上がり、その土手っ腹に拳を鋭く打ち込むと、バイザーの巨体が後方へ大きく吹っ飛んだ。

「いいパンチだ。組み手が楽しみだな……」

「……………」

八雲の素直な感想の眩きに、小猫は若干頬を染めた。

（超怪力少女。恐るべし……）

そんな中、埃を払うように手を叩く小猫を見ながら、一誠は絶対に小猫に逆らわないでおこうと心に誓った。

「最後に朱乃ね」

「はい、部長。——あらあら、どうようかしら？」

朱乃はいつもの笑顔で倒れこんでいるバイザーのもとへ歩み出す。

「朱乃は『女王』。私の次に強い最強の者。『兵士』、『騎士』、『僧侶』、『戦車』。全ての力を兼ね備えた無敵の副部長よ」

「ぐうううう……こんな者たちに……！」

朱乃を睨み付けるバイザー。しかし、朱乃はそれを見て不敵な笑みを浮かべる。

「あらあら、まだ元気みたいですね？ それなら、これはどうでしょうか？」

朱乃が天に向かって手を翳す。刹那、天空が光り輝き、バイザーに雷が落ちた。

「ガガガッガガガッガガッ！」

激しく感電するバイザー。上手に焼けましたと言わんばかりに、バイザーは煙を上げて全身丸焦げとなってしまう。

「あらあら。まだ元気そうね？ まだまだいけそうですね」

再び雷がバイザーを襲う。

「ギャアアツアアアアアツア!」

再び感電するバイザー。既に断末魔に近い声を上げているにもかかわらず、朱乃の雷が止むことはなかった。

「あら、まだ元氣そうですね? それでは次行ってみましょうか」

「グアアアアアアアアアアアツツ!」

3発目の雷を繰り出し、3度悲鳴を上げるバイザー。

(……あれ? 朱乃さん……)

すると、一誠はあることに気付いた。

よく見ると、雷を落とす朱乃の表情は冷徹で怖い程の嘲笑を作り出しており、頬は興奮で紅潮し、瞳は快感で煌めき、心の底からこの状況を楽しんでいた。

「朱乃は魔力を使った攻撃が得意なの。雷や氷、炎等の自然現象を魔力で起こす力ね。そして何より——」

今の姿の朱乃を見て、リアスはさらりと言う。

「彼女は究極の『S』よ」

「Sウ!! いや、Sってレベルじゃないんですけど!? っつかあれ、本当にあの朱乃さんですか!」

「ええ。——普段は優しいけれど、一旦戦闘となれば相手が敗北を認めても自分の興奮が収まるまで決して手を止めないわ」

「……うう、朱乃さん。俺、怖いっス」

「怯える必要はないわ、イツセー。朱乃は味方にはとても優しいから問題ないし、あなたのことでもとても可愛いと言ってたわ。今度甘えてお上げなさい。きつと優しく抱き締めてくれるわよ」

「あらあら、うふふ……。どこまで私の雷に耐えられるのかしらね？ ねえ、バケモノさん。まだ死んではダメよ？ トドメは私の主なのですから。オホホホホホッ！」

相変わらず、目の前で朱乃は高笑いをして雷を放ちながら絶頂していた。

(……いや、すいません。やっぱり心底怖いです……)

一誠が内心で怯える中、朱乃による雷が続いた……。……かに見えた。
フシユウウウウツ！

「あらあら？」

「あ、朱乃さん!？」

バイザーの戦意が失いそうになる直前、粘り気のある糸が朱乃の両腕に巻き付いたからだ。

「シャツシャツシャツ！」

すると、暗闇の奥から別の不気味な笑い声を発しながら、それは現れた。

背丈はバイザーより小さいの2メートル程の人型の怪物。しかも背中からはカサカサと動く細い何かが生えており、怪物の口からは朱乃に巻き付いている糸が繋がっていた。

「まるで蜘蛛だな……」

八雲の呟きに朱乃は確信すると、リアスに言う。

「部長。確かあれは……」

「ええ。もう一体のはぐれ悪魔……タランスね」

「シャツシャツシャツ！ その通りツシヨ！」

新たに現れた蜘蛛人間のはぐれ悪魔『タランス』はバイザーを一見するが、すぐに視線をリアス達に戻す。

「出掛けてる間に随分と知り合いを痛め付けてくれたツシヨ。あちしが代わりに、全員食ってやるツシヨ！」

憎しみを込めた瞳で睨むが、リアスは余裕な笑みを崩さなかった。それが気に食わなかったタランスは口の糸を引き寄せ、見せしめに朱乃を食らおうとした瞬間だった。

シユッ！

「ツシヨ!?!」

刹那、一筋の白い軌道が糸を切断し、タランズは驚き後ろへ下がった。

「はぐれ野郎め……。朱乃先輩に手を出すな」

「吉川!? いつの間に移動してたんだ!？」

そして、朱乃を守るように上から八雲が降りて来た。どうやら八雲はタランズや一誠に気付かれずに跳躍し、右腕の手刀で糸を切断したのだ。

「大丈夫ですか、朱乃先輩」

「うふふ。ありがとう、八雲くん」

「イツセー、よく見ておきなさい。あれが八雲たちの力よ……」

リアスに言われた通りに一誠は八雲を見つめると、八雲は右腕を前に突き出した。

「行くぞ、コゲンタ」

『おうよ!』

「シキガミ、降神!」

八雲が言葉を叫んだ後、右手の宝玉が光り輝くと同時に襖障子……外と『二十四氣の神操機』を繋ぐ『窓』が現れては開かれ、飛び出して来た。

「白虎のコゲンタ、見参!」

「ね、猫の悪魔!？」

「ちげえよ!!」

一誠は目の前の光景に驚きの声を上げ、コゲンタはそれに突っ込んだ。

「あれが八雲の神器に宿る精霊……シキガミよ」

「シキガミ……ってか、神器に宿ってるんですか!？」

「ええ。そして、シキガミたちと共に闘う八雲を私達はこう言うわ」

八雲とコゲンタはタランスを睨み付ける中、リアスは言った。

「『闘神士』と……」

「闘神士……?」

一誠が八雲の背中を見つめて言うと、朱乃は言った。

「八雲くん、コゲンタちゃん。あなた方はそちらの相手をしてもらえますか?」

「分かりました!」

「おうっ! 行つくぜええええっ!」

朱乃の提案を八雲は受け入れると、コゲンタは西海道虎鉄を構えて突き進んだ。

「そんな攻撃、効かないツシヨ!」

しかし、タランスはコゲンタの斬撃を回避すると同時に口から糸を吐くが、吐かれた糸をコゲンタは切り刻んでいった。

「震坎兌離!」

タランスが糸を止めた瞬間、八雲は印を切った。その速度は鍛練の賜物か、以前より

も早くて正確で力強かった。

「必殺、弧月拳舞!!」

そして発動するコゲンタの技。無数の三日月の刃となり、タランスを切り刻んでは拳を叩き込んだ。

「ギアン！ なかなかやるツシヨね……」

「効いてないのか？」

八雲の疑問にコゲンタは首を横に振った。

「いや、手応えはあった。どうやらコイツの体の再生機能が強いみたいだな」

「その通りツシヨ！ あちしの背中の再生器官全部を一瞬で破らない限り、すぐに癒えるツシヨ！」

そう言つてタランスは背中の突起物を動かすと、八雲に向けて駆け出した。

「召喚獣が相手なら、その術者を狙うのが基本ツシヨ！ シャツシャツシャツ！」

「吉川!?!」

タランスの凶刃な爪が八雲に迫る中、一誠は叫ぶ。だが八雲は微動だにせず、その場でタランスの攻撃に備えて構えた。

「シャアツ！」

「ふん」

ドン!!

「ツシヨ!?!」

タランスの攻撃は空を切った。八雲が最低限の動きでタランスの攻撃を回避し、懐へと飛び込んで拳をタランスの土手つ腹に小猫よりも鋭く打ち込み、タランスに膝を付かせた。

すると、リアスが八雲の説明を始めた。

「私を知る限り、八雲の身体能力は出会ってきた人間の中でも上位に値するわ。恐らく、下級悪魔なら一人で渡り合える程の力……………いえ、戦いの中で彼は少しずつ強くなっていき、力の枷が外れたはぐれ悪魔とも渡り合えてるわ」

「マジっスか!?!」

「そして、シキガミたちとの連携で戦闘バリエーションは無限と言っているわ。正に、シキガミたちと闘う土ね……………」

「すげえ……………」

リアスの言葉通り、八雲が徒手空拳でタランスを怯ませながら、八雲が離れた瞬間にコゲンタが西海道虎鉄の一撃を浴びせている。一誠から見ても息の合うコンビネーションであり、次第に胸が熱くなるのを感じていた。

そんな中、八雲とコゲンタは一旦タランスと距離を取った。

「どうする八雲。オレの持つ技じゃあ一瞬では無理だぞ」

「そうだな。だから……」

そう言いながら、八雲はシキガミを交代させる【窓】の闘神符を出した。

『『アイツ』を呼ぶ。いいか、コゲンタ』

「それしかないんだろ？ 構わないぞ」

「ありがとう。——交代するぞ、フジ！」

すると、八雲は闘神符をコゲンタへ投げると、コゲンタの目前に『窓』が現れ、コゲンタは臆する事なく通過した。

「ハアアアアアッ！」

すると、現れたのはコゲンタではなく、別のシキガミだった。

ニホンクワガタに似た機械人的な外見を持ち、背中に2本の太剣を背負ったシキガミがタランスに突撃して大きく吹き飛ばし、高らかに名乗る。

「黒鉄のフジ、見参！」

「シキガミの姿が変わった!?!」

一誠の驚きにリアスは否定する。

「いいえ。八雲の神器には72体ものシキガミが宿っているの。その内の1体が、コゲンタと交代したのよ」

「なな……ッ!? そんなにいるんですか!？」

「ええ。でも、あのシキガミは私も初めて見るわ。ふふっ……一体どんな力があるのかしら」

まるで八雲とシキガミたちの戦いを楽しむようにリアスが微笑む中、八雲はフジに指示していた。

「……と言う訳だ。いいか、フジ?」

「人を食らう下種には丁度いい、か……。あい分かった!」

「それじゃあ……。行くぞ!」

そして、合図とともに八雲だけがタランスに向かい走り出した。

「舐められっぱなしは好かんツシヨ!」

そう言い、タランスは背中に生えた細い突起物の先から粘液を飛ばした。無論、八雲は回避するが、粘液に触れた床が次第に腐食していくのを目の当たりにした。

「毒か……。だけど!」

臆することなく、八雲は軽快なフットワークで粘液を回避し、遂にタランスの懐に飛び込んだ。

「しまっ——」

そこまでだった。気付いた時にはタランスの体が宙に浮いていた。八雲がタランス

の懐に飛び込み、巴投げの要領で投げ飛ばしたからだ。

「来いー!」

その方向には『陰陽大剣・右兵衛うひょうえと左兵衛さひょうえ』を構えたフジが待ち構え、八雲は瞬時に体勢を立て直した。

「震離兇離!」

透かさず印を切る八雲。タランスが宙に舞う中、フジは右兵衛と左兵衛を回し始め、次第に速度を増していった。

「必殺、逆手下克上!!」
さかてげこくじょう

常人では捉えきれない速度の回転に達した右兵衛と左兵衛。そしてフジは器用に使い、投げ飛ばされたタランスを天高く弾き飛ばした。

「そんな攻撃、あちしには——」

ドン!!

「グベエ!」

弾き飛ばされたタランスに待っていたのは、腹部に響く衝撃と急降下だった。

「もう1回受けな!」

落下しながらタランスは見た。【壁】を空中の足場代わりにし、見下す八雲の姿が

……。そして——

ガキン!!

「ギャア!」

ドン!!

「グベエ!」

ガキン!!

「ギャア!」

ドン!!

「グベエ!」

フジに弾き飛ばされては八雲に叩き込まれ、また弾き飛ばされてはまた叩き込まれ、その行為が幾重にもされたことで、タランスの再生機能を持つ突起物が1度の斬撃で切り落とされた。

「そろそろいいか。——フジ!」

「応っ!」

八雲の最後の指示。フジは了承すると、タランスをある方向へと弾き飛ばした。この時、既にタランスの体は傷だらけで片腕も斬り落とされていた。

「……や……や……やっつと、終わった——」

「あらあら。満足したんですけどね……」

「ツシヨ?!?!」

ある方向……………バイザーがいる地点に飛ばされたタランスに待ち受けていたのは、あらあらうふとSな笑みを浮かべた朱乃だった。

「朱乃先輩。おかわりはどうですか？」

「うーん……………そうね。八雲くんがせっかく用意してくれたし……………それじゃあ」

「ま、待つて——」

刹那、タランスに雷が連続で落ちた……………。

暫くして、Sの衝動が収まった朱乃は雷を止めた。

「それでは、トドメは部長にお任せしますわ」

ようやくトドメということで、リアスは既に炭と化したバイザーの上に伏す、完全に戦意喪失のタランスに手をかざす。

「……………最後に言い残すことは？」

「……………殺せ……………ツシヨ……………」

タランスの答えはその一言だった。

「そう、ならば消し飛びなさい」

ドンッ！

冷徹な一言と共にリアスの手から巨大な黒い魔力の塊が撃ち出され、タランスの全身

を余裕で包み込んでいく。

そしてリアスの放った魔力が宙に消えると、2体のはぐれ悪魔の姿も完全に消え、確認したリアスは息をつく。

「終わりね。皆、お疲れ様」

「ふう……。ご苦労様、フジ」

「いえ、これも八雲の為だ。ともに戦えてよかった」

「凄いね、その剣術。僕には真似出来そうにないよ」

『騎士』の木場か。こちらでも1度、お手合わせ願いたいものだな」

「あらあら。祐斗くんが他の剣術に興味を持つのは、なかなか無いですね」

「……珍しいです」

リアスの言葉に一誠以外のメンバーはいつもの陽気な雰囲気を放っていた。そして暫くオカルト研究部員たちの戦いの凄まじさに驚愕していた一誠だが、ここであることを思い出した。

「そういえば部長。聞きそびれてたんですけど」

「何かしら？」

リアスは一誠に笑顔で応じる。

「俺の駒……というか、下僕としての俺の役割は何ですか？」

「ああ、イツセーの役割は……」

一誠の疑問に、微笑みながらリアスは言った。

『兵士』よ」

一番下っ端の駒と知り、一誠はガツクリと頭を下げた。

こうして、一誠の初めてのはぐれ悪魔討伐は幕を降ろした。

第9話：はぐれ悪魔祓いへエクソシスト

「はあ……」

はぐれ悪魔討伐から数日が経過した頃だった。

放課後、一誠は部室のソファ―に座っては溜め息をついていた。

「どうした、兵藤?」

「ん? ああ、吉川か……」

そんな中、2人っきりの部室できんつばを食べる八雲が声を掛けた。因みに、他のメンバーは諸事情により遅れるそうだ。

「何度も溜め息なんかしてお前らしくないぞ。何だ? エロスに飽きたのか?」

「馬鹿野郎!! あの至高な物を飽きるなんてあり得ねえよ!!」

「お、おう……」

八雲の冗談に大声で否定すると、一誠は気まずそうに頭を掻きながら言った。

「……………これでよかったのかと思って、な……」

「これでって、現状が楽しくないのか?」

八雲の言葉に一誠は顔を横に振る。

「楽しい……っちゃ、楽しいけど。美女に囲まれた職場だし、悪魔の割には優しいさ。——でも、俺の悪魔街道って波乱尽くめだろ？ 魔力が低いから依頼者の下へジャンプ出来ない前代未聞の最低悪魔。しかも一番下っ端の『兵士』から上を目指さないといけないし、正直……不安だらけだよ」

「……………」

再び溜め息をつく一誠に、八雲は口を開く。

「そんなに悩むなよ。最低からスタートなら、後は上がっていくだけだろ。小さな事からコツコツと努力すれば、自ずとそんな不安は解消すると思うぜ」

「そう……か？」

「そうだよ」

謎の説得力に、次第に一誠は前向きに考え始めた。

「……じゃあ、まずは魔方陣ジャンプする事を目標だ！ これしかない。うん！」

「俺も手伝える事があれば協力するよ。まあ殆どが、筋トレや鍛練だけだな」

そう言つて、八雲はとある闘神符を取り出すと、食べ掛けのきんつばに闘神符を触れさせると、中心に「巨」と書かれた八卦の陣がきんつばを包み、何倍もの大きさとなつたきんつばを切り分けては一誠に差し出した。

「間接キスじゃない方だから遠慮なく食え」

「おっ、おう……」

「……とここで兵藤。このきんつばを見て、どう思う？」

「凄く……大きいです……」

「そうだろう、そうだろう。最近出来た【巨】の闘神符だ。物でも体でも何でもでかくする事が出来るぞ」

「なっ、何だっ!? それを使えば、小さい胸に悩んでる女性達に幸せを——」

「そういうので俺は使わんぞ!」

それから部活終了までの間、八雲は一誠との話が弾むのだった。



「……放課後に吉川と話したものの、出世の道は遠いなあ……」

深夜。そんな事を言いながら、一誠は依頼者の場所へと自転車飛ばしていた。

そして今日こそ契約を取ると意気込んで到着したのは、マンションやアパートではなく普通の一軒家だった。

(他の人間に認知されないからって、この手の場合は大丈夫なのか?)

依頼者の家族に見つからないのか心配するが、一誠は早速ブザーを押そうとした瞬間

間、ふと気づいた。

「玄関が開いている……?」

普通に考えて、深夜に玄関を開けたまま放置していい訳がない。

何か言い知れない不安が一誠を襲う中、本当にこのまま入ってしまった方がいいのだろうかと思いつつも、気付いたら1歩足を前に踏み出していた。

玄関から中を覗き込むが、廊下に灯りはついていない。2階も同様のようだが、唯一1階の奥にある部屋から淡い光を確認出来る。

異常な空気を感じながらも、一誠は玄関で脱いだ靴を手に持ち、足音を立てないように廊下を進んでいく。

抜き足差し足忍び足。奥の部屋に行き着き、一誠は開いているドアから顔だけを出して中を覗き込むと、灯りの正体は電灯ではなくロウソクのものだと分かった。

「……ちわース。グレモリー様の使いの悪魔ですけど……。依頼者の方、いらつしやいます?」

自信のない声を出してみるが返事はなく、仕方ないので一誠は意を決して部屋の中へと入る事にした。

ソファやテレビ、テーブル等が置いてあり、何処にでもあるリビングの風景だ。

「……………!」

しかし、一誠がある箇所に視線を向けた途端、思考が一瞬吹っ飛んだ。
壁……。リビングの壁に、男性の死体があつたからだ。

死体が上下逆さまで壁に貼り付けられ、体中を切り刻まれ、傷口からは臓物らしき物が溢れ、巨大な釘が男性の四股と胴体の中心に打ち付けられて磔にされ、床は既に血溜まりとなつていた。

「っ……………っぽっ！」

先日のはぐれ悪魔達に食われた犠牲者の方がまだ幾分かマシだとさえ思つてしまふ程に、目の前の死体は無残なもので、とうとう一誠はその場で腹から込み上がってくるものを吐いてしまった。

「な、なんだ、これ……」

そして、口元を拭いながら一誠は気付いた。遺体が打ち付けられている壁に血文字がある事に……。

その言葉の意味は――

「『悪いことする人はおしよきよ』って、聖なるお方の言葉を借りたのさ」

突然聞こえてきた声に、一誠は振り向いた。

現れたのは、おそらく外国人であろう白髪の若い男であり、恰好を見て神父だと一誠は判断した。

そして神父は一誠を見るなり、ニンマリとイヤらしい笑みを浮かべた。

「んーんー。これはこれは、悪魔くんではあーりませんか!」

実に嬉しそうに喋る神父。どうやら一誠の事を悪魔と認知しており、一誠にとつて最悪の状況だった。

「俺は神父♪ 少年神父♪ デビルな輩をぶった斬り♪、ニヒルな俺が嘲笑う♪
お前ら、悪魔の首刎ねて♪、俺はおまんま貰うのさ♪」

突然、神父は訳の分からない歌を歌いだす。そして満足したのか、神父は名乗る。

「俺のお名前はフリード・セルゼン。とあるエクソシストの組織に所属している末端でございませすですよ。あ、別に俺が名乗ったからって、お前さんは名乗らなくていいよ。俺の脳容量にお前の名前なんざメモリしたくないから、止めてちょ。大丈夫、すぐに死ぬるから。俺がそうしてあげる。最初は痛いかもしれないけど、すぐに泣ける快感に変わるから。一緒に新たな扉を開こうZEE!」

一誠が出会った事のないタイプの人物……フリード・セルゼン。

ペラペラと滅茶苦茶な言動をするフリードに戸惑いつつも、一誠は生唾を飲み込んで物申した。

「……おい。お前が、この人を殺したのか?」

「YES! 俺が殺っちゃいました。だってー、悪魔を呼び出す常習犯だったみたいだ

しい、殺すしかないっしょ」

「な、なんだ、そりゃ!」

驚愕する一誠に、フリードは実に楽しそうに語る。

「あんれ? 驚いてるの? 逃げないの? おかしいねえ、変だねえ。——っーかね、悪魔と契約する時点で人間として最低レベル、クズ街道まっしぐらっすよ? その辺ご理解いただけませんかねえ? あー無理か。お前さん、クズの悪魔ですもんねえ」

「人間が人間殺すつてのはどうなんだよ! お前らが殺すのは悪魔だけじゃないのか?」

「はあああ? クソ悪魔の分際で俺に説教? ハハハ、マジでウケるんですけど。——いいか、よく聞けクソ悪魔。悪魔だって、人間の欲を糧に生きてるじゃねえか。悪魔に頼るつてのは人間として終わった証拠なんですよ。エンドですよ、エ・ン・ド! だから、俺が殺してあげたのさー。これ以上穢れる前に、俺が殺してあげた訳なんですよ。俺、悪魔と悪魔に魅入られた人間をぶっ殺して生活してるんで、お仕事でござんすよ、アーメン!」

「あ、悪魔でも、ここまでの事はしないぞ!」

「はあく? 何、言ってるの? 悪魔はクソですよ。常識ですよ? 知らないんですか

? マジ、胎児からやり直した方がいって。寧ろ、俺がお前さんを退治してやんよ!

なーんて、最高じゃね？ 最高じゃね？」

すると、フリードが懐から刀身の無い剣の柄と拳銃を取り出すと、空気を振動させる音と共に剣の柄から光の刀身が作り出された。

「さてさて、ではでは。俺的にお前がアレなんで、斬ってもいいですか？ 撃ってもいいですか？ OKなんですね？ 了解です。今からお前の心臓にこの光の刃を突き立てて、このカッチョいい銃でお前のドタマに必殺必中フォーリンラブしちゃいます！」

瞬間、フリードが一誠に向かって駆け出した。

光の刀身が真横に振るわれるが、一誠は悪魔化した身体能力のおかげで回避した直後、突然足に激痛が走った。

「ぐあああー！」

呻きながらその場で膝をつく一誠。見ると、フリードが持つ拳銃から煙が上がっており、どうやら撃たれたようだが銃声はしなかった事に疑問を抱いた。

「どうよ！ 光の弾丸を放つ悪魔祓い特製の祓魔弾は！ 光の弾だから銃声なんざ発しません！」

説明し終わると、フリードは歪んだ笑みをした。

「死ね死ね悪魔！ 死ね悪魔！ 塵になって、宙に舞え！ 全部、俺様の悦楽の為に！！」

フリードが狂った笑いを発しながら、一誠へ止めを刺そうと迫ってきた……その瞬間だった。

「やめてください!」

聞き覚えのある声が一誠の耳に飛び込んできたのだ。

そして一誠とフリードの視線が声の主の方へと向けられると、一誠は呟く様に言った。

「アーシア……」

そこにいたのは、あの日に八雲と共に出会ったアーシアだった。

「おんや、助手のアーシアちゃんじゃありませんか。どうしたの? 結界は張り終わったのかな? かな?」

しかし、アーシアがフリードの問いに答える事はなかった。

「! いやあああああつ!」

何故なら、アーシアは壁に礫にされていている死体を見て悲鳴を上げたからだ。

「かあいい悲鳴ありがとうございませす! って、あれれ? もしかして、アーシアちゃんはこの手の死体は初めてだったのかな? ならなら、よく、とくとご覧なさいな。悪魔に魅入られたダメ人間さんはそうやって死んでもらうのですよお」

「……そ、そんな……」

恐怖で顔を歪ませるアーシアを見て実に楽しそうにフリードが笑う中、アーシアの視線が一誠の姿を捉えた。

「……フリード神父……その人は……」

アーシアが一誠へと向ける視線に気付いたフリードは、アーシアの発言を否定する。

「人？ 違う違う。こいつはクソの悪魔くんだよ。ハハハ、一体何を勘違いしているのかなかな」

「……っ！ イッセーさんが……悪魔……？」

その事実がショックだったのか、アーシアは言葉を詰まらせてしまう。

「あつるえ〜？ もしかしてキミら知り合い？ マジで？ わーお。これは驚き桃の木

ファンタジスタ！ 悪魔とシスターの許されざる恋とかそういうの？ マジで？」

面白おかしそうにフリードが一誠とアーシアを交互に見る。・

「アハハ！ 人間と悪魔は相容れません！ それに俺らは神にすら見放された異端の集まりでまずい？ 墮天使様からの加護を受けないと生きてはいけなはみ出し者で半端者ですぞお？」

「墮天使？ それってどういう——」

「クソ悪魔くんには関係ねえぜ。——まあ、いいや。取り敢えず俺的にこのクソ悪魔くんを殺さないとお仕事完了出来ないんで、ちよちよいと殺っちゃいますかね」

光の剣を突きつけるフリード。恐怖が体を支配され、一誠は動けないでいた。

そんな2人の間にアーシアが一誠を庇う様に両手を広げて立ち塞がると、それを見たフリードの表情が険しくなる。

「……おいおい。マジですかー？　アーシアたん。キミは今、自分が何をしているのか分かっているのでしようかあ？」

「……はい。フリード神父、お願いです。この方を許してください。見逃してください」
「……っ!？」

その一言に一誠は声を詰まらせた。

「もう、嫌です……。悪魔に魅入られたとって、人間を裁いたり、悪魔を殺したりなんて、そんなの間違っています！」

「はあああああああああああつ!!　バカ言つてんじやねえよ、クソアマガ!　悪魔はクソだって、教会で習っただろうがあ!　お前、マジで頭にウジでも湧いてんじやねえのか!？」

暴言と共に、フリードの表情は憤怒と嫌悪に包まれていた。

「悪魔にだって、いい人はいます！」

「いねえよ、ヴァアアアアカ！」

「でも……それでも!　イツセイさんは違います!　イツセイさんは私を助けてくれま

した。悪魔だと分かってもそれは変わりません！ 人を殺すなんて許されません！
こんなの………こんなの主が許す訳がありません!!」

死体を目撃し、一誠が悪魔だと知ってもなお、アーシアは自分の意志を崩す事なくフリードに物言いした。

だが、それがフリードの怒りを買ってしまった。

「キャッー！」

「アーシアー！」

フリードは銃を持ったままの手でアーシアを殴つたのだ。床に転ぶアーシアに一誠が近付くと、アーシアの顔には大きな痣が出来ていた。

「……墮天使の姉さん達からはキミを殺すなど念を押されているけどねえ。でもそれって、裏を返せば殺さなきゃ何をしてもいいって事なんでござんすよ……」

アーシアの怯えた瞳が狂気のおかしな笑みを浮かべるフリードを見つめる中、その光景を見ている一誠は体の中で沸々と怒りが込み上げていた。

「ああ、そうだ。その前にそちらのクソ悪魔くんを殺さないとダメダメですよねえ」

思い出したかのようにフリードが再度、一誠に光の剣を向けてきたが、今の一誠にアーシアを置いて逃げるといふ選択肢はない。

「庇ってくれた女の子を前にして……逃げらんねえよな！」

一誠は激痛が走る体に鞭を打って立ち上がり構えると、フリードは嬉しそうに口笛を吹いた。

「ヒューツ！ 俺と戦うの？ マジ？ 楽に殺すつもりなんて俺様にはないからね？」

さてさて、どれくらい肉が細切れになるか世界記録に挑戦しましょうかねええええええ！」

不気味に言い放ち、フリードが飛び出してくる……その時だった。

「何事さ？」

突如、床が光りだした。疑問を口にするフリードをよそに、光は徐々に魔方陣へと形を変えていく。

そして、そこから現れたのは見知った者達だった。

「兵藤くん、助けに来たよ」

「あらあら、これは大変ですわね」

「……神父」

「み、みんな！」

何時ものスマイルを送る祐斗、『S』の笑みを浮かべる朱乃、フリードの存在に嫌悪の色を示す小猫。自分のピンチに颯爽と駆けつけてくれた仲間に、一誠は感動していた。

「ヒヤッハー！ 悪魔の団体さんに一撃目え！」

その矢先、さっそくフリードが光の刃で斬りつけてきた。

しかしその一撃を祐斗が剣で受け止めると、金属音が部屋に響いた。

「悪いね、彼は僕達の仲間でさ！　こんなところでやられてもらうわけにもいかないんだ！」

「おーおー！　クソ悪魔のくせに仲間意識バリバリですか？　アツイですなあ。もしかしてキミ達って、そういう関係？　どっちが受けでどっちが攻めなの？」

罅迫り合い合いを繰り返す最中にも関わらず、フリードは祐斗を馬鹿にした発言をする、その様子に珍しく祐斗は嫌悪の表情を浮かべた。

「……下品な口だ。とても神父とは思えない……。いや、だからこそ『はぐれエクソシスト』をやっているわけか」

「あいあい！　下品でござりますよ！　サーセンね！　でも、俺的にはクソ悪魔を狩って狩って狩りまくって快楽を得る事が出来れば満足満足大満足なんだよ、これがな！」
相変わらずフリードはケタケタと不気味に笑う。

「一番厄介なタイプだね、キミは。悪魔を狩る事だけが生き甲斐なんて……僕達にとつて1番の有害だ」

「はああああ!!?　てめえらクソ悪魔どもにどうこう言われる筋合いはねえぞんす！」

「悪魔にだって、ルールはあります」

微笑みながら言う朱乃だが、その視線は明らかに鋭く、敵意と戦意が込もっていた。だが、そんな殺意もフリードには意味が無かった。

「いいよ、その視線。お姉さんの殺意がピンピン伝わって来ちゃいますよお！ やっぱ殺意は向ける方も向けられる方も最高だね！ ピンツピンツにイキリタツね！」

「なら、消し飛びなさい」

フリードが興奮したその時だった。声と共に一誠の隣にリアスが現れた。

「ごめんなさい、イツセー。まさか依頼主のもとに、はぐれエクソシストの者が訪れるなんて計算外だったの」

謝るリアスは一誠の姿を見るなり、目を細めた。

「……イツセー、ケガをしたの？」

「あ、すみません……。その、ちよつと撃たれちゃって……」

半笑いで誤魔化す一誠。怒られるのではないかと思っていたが、リアスは一誠を咎める事をせず、冷淡な表情をフリードに向けた。

「……私の可愛い下僕をかわいがってくれたみたいね？」

一誠は一目で分かった。リアスが今、キレている事を……。

「はいはい。かわいがってあげましたよお。本当は全身くまなくザクザク切り刻む予定でござんしたが、どうにも邪魔が入りまして、それは夢幻ゆめまぼろしとなってしまうましたあ」

ボンッ！

ヘラヘラしていたフリードの後方、リビングの家具の一部が消し飛んだ。

リアスが魔力の弾丸を発射したからだ。

「私は、私の下僕を傷付ける輩を絶対に許さない事にしているの。特にあなたのような下品極まりない者に自分の所有物を傷付けられる事は、本当に我慢出来ないわ」

リアスの迫力と殺意がリビングを包み込む。周囲に魔力の波動を発生させる中、朱乃は言った。

「ッ！ 部長、この家に墮天使らしき者達が複数近付いていますわ。このままでは、こちらが不利になります」

それを聞いてリアスはフリードを一睨みすると、朱乃に指示する。

「……朱乃、イツセーを回収次第帰還するわ。ジャンプの用意を」

「はい」

リアスに促され、朱乃は魔法陣の展開に取り掛かった。

「部長！ あの子も一緒に！」

「無理よ。魔方陣を移動出来るのは悪魔だけ。しかもこの魔方陣は私の眷属しかジャンプ出来ないわ」

「そ、そんな……」

愕然とする一誠。その視線には、涙を流しながらも笑うアーシアの顔が映った。

「アーシア！」

「イツセーさん。また……また会いましょう」

それが一誠とアーシアが最後に交わした言葉だった。

刹那、朱乃の詠唱が終わり床の魔方陣が光りだした。

「逃がすかつ——」

「えい」

「ドウワツ!?!」

フリードが切り込んでくるが、小猫が近くのソファアを軽々と持ち上げては投げつけた。

だがフリードが光の刃で薙ぎ払う頃、既に転移は完了しており、一誠達は部室に戻っていた。

だが、一誠が思い出すのはアーシアの最後の笑顔だけ。

これが、一誠が己の弱さを痛感した瞬間だった。



「……まさか、そんな事があつたんですか？」

次の日、部室で八雲は昨夜の出来事の説明を聞いており、説明が終わると八雲はテールブルを叩いた。

「どうして呼んでくれなかつたんですか！ 仲間がピンチだつたつていうのに、俺だけ呼ばれないなんて……！」

一誠のピンチを救えず後悔する八雲。だが、リアス達が八雲を咎める事はなかつた。

「あなたが悔やむ必要はないわ、八雲。私達もはぐれエクソシストの存在に気付いた時点で急な事だつたの」

「だけど……！」

『落ち着けよ、八雲。こうして全員無事に生きて戻つて来たからいいじゃねえか』

「コゲンタの言う通りよ。イツセーを連れ戻す事は果たせたんだから、あなたもこれ以上引きずらないこと。いいわね？」

「……………分かりました」

「うん。よろしい」

しぶしぶだが納得した様子の八雲を見てリアスは微笑むと、八雲はリアスに訊いた。「ところで、さつきから話に出てきたはぐれエクソシストって一体？」

「そうね。いい機会だから話しておきましょうか。——まずエクソシストには2通りあ

るの。1つは神の祝福を受けた者たちが行う正規のエクソシスト。そしてもう1つ、はぐれエクソシストよ」

「はぐれ……………はぐれって事はやっぱり……………」

リアスの言葉の後、朱乃が続けて言う。

「ええ。八雲くんが予想している通り、エクソシストの中には悪魔を殺す事に生き甲斐や悦楽を覚えてしまう輩がいます。そうなれば、彼らは例外なく神側の協会から追放されてしまいますわ。でも、神の加護を得られなくなった彼らは今度は墮天使のもとへ走る。その集団が、はぐれエクソシストですわ」

「……………それって、はぐれ達と墮天使の悪魔を滅ぼしたいっていう利害が一致してるって事ですか？」

八雲の言葉にリアスは頷く。

「そうよ。そして墮天使の加護を得た彼らは、悪魔と悪魔を召喚する人間にまで手を掛けるの。正直、正規の連中よりも性質が悪いわ」

「……………はぐれは悪魔だけかと思っただんですが、まさか人間でそんな奴らがいるなんて……………厄介だな……………」

悪魔や墮天使ならシキガミ達と共に戦える。だが、例えば外道なはぐれエクソシストでも人間だ。人間相手ではシキガミ達は手出し出来ず、いくら八雲でも渡り合えるか分か

らなかった。

ふと、八雲はリアスに訊く。

「そういえば、兵藤の容態はどうですか？」

「体の方は完治とは言えないけど心配ないわ。でも、問題は心の方ね……。あのシスターを助けられなかった事がよっぽどショックだったよね。でも、あの子には頭を冷やす必要があるから、念の為に大事を取って学校を休ませたわ」

「そう、ですか……」

一誠の事を考えると、八雲は何も言えなかった。

だがそれ以上に、仲間の危機に駆け付ける事が出来なかった自身が惨めだった。

第10話：再会、聖女と墮天使

それは、八雲がリアス達に昨夜の事を説明している少し前まで遡る。

「はあ……」

昼時の公園。一誠はベンチで項垂れていた。

先日のはぐれエクソシストであるフリードにやられた銃傷が思いのほかダメージが残っており、悪魔の仕事も出来ないだろうとリアスから休む様に言い渡されてしまったのだ。

こうしている今も、一誠はアーシアの事を考えていた。

どうやってアーシアを助けようか……。そもそも今の環境をアーシアが憂いているのか……。様々な事を考えているのだが、一誠の心中を支配する思いがあった。

「……………強くなりてえな」

その呟きが、短い悪魔人生で一誠が感じた思い。

強くならないと、自分の生きる道を進めない。仲間迷惑を掛かる。女の子を守ってやれない。

そして次第に、一誠は前向きに考えていった。

「……よっしゃ！ 傷が癒えたら、吉川に筋トレを教えてもらおう！ んで、部長と朱乃さんに魔力の使い方を教えてもらおう！」

取り敢えずの目標が出来た。あのフリードよりも強く、最低でも墮天使と出会って逃げられる位は強くなるべきだと……。

ぐーっ。

「あ……」

すると、一誠の腹が鳴った。朝から色々考えたせいで朝から何も食べていなかったからだ。

目的も新たにし、何処かで昼飯を買って帰ろうと重い腰をベンチからあげた……その時だった。

「……イツセーさん？」

聞き覚えのある声と共に、一誠の視界に金色が映り込んだ。

ハツと思い、一誠は顔を向けると、そこには見知った金髪の少女が立っており、お互いがこの出会いに驚いていた。

「……アーシア？」



「姫君、こうやって包み神を少しだけずらして一気にかぶりつくのですよ」

一誠はアーシアと共に近くのハンバーガーショップで昼食を取る事にし、食べ方の分からないアーシアの為に、手本としてハンバーガーにかぶりついた。

「そ、そんな食べ方があるなんて！ す、凄いです！」

何とも新鮮な反応が返ってきた。すぐさまアーシアも一誠に習い、ハンバーガーに小さくかぶりつく。

「お、美味しいです！ ハンバーガーって美味しいんですね！」

目を輝かせながら感想を口にした。

「ハンバーガー食べた事ないの？」

「はい。テレビではよく見ていたのですが、実際食べたのは初めてです……」

そう言い、今度はポテトを口に運ぶアーシア。

「感動です！ 美味しいです！」

「……………」

美味しいに食べるアーシアを眺めながら、一誠は考えていた。

なぜ彼女はあの公園にいたんだ、と……。

休み時間だから出てきたと言っていたが、再会した時はどう見ても何かに怯えていた

様に見え、一誠を見掛けた瞬間、気が抜けた様に安心していた。

話を聞きたいが、アーシア自身から話してくれた方がいいかもしれない。だがリアス達の事もあり、なかなか気軽に訊けない。

「どうかしましたか？」

しかし、嬉しそうにハンバーガーを食べるアーシアの姿を見て悩んでいても仕方がないと思ひ、一誠は1つの結論を出した。

「アーシア」

「は、はい」

「今日は遊ぶぞ」

「え？」

「次はゲーセンだ」



それから一誠はアーシアを連れてゲームセンターで思いつ切り遊んだ。

「峠最速伝説イツセー！」

「速いです！ 速いです、イツセーさん！」

レーシングゲームで新記録をたたき出したり……。

『はい、チーズ!』

一緒にプリクラを撮ったり……。

「よっしゃあ!」

クレーンゲームで財布の大半を生贄に人形を獲得した等々、楽しい一時を送った。

「ほら、アジア」

そして手に入れた人形をアジアにプレゼントすると、心底嬉しそうに人形を胸に抱いた。

「ありがとうございます、イツセイさん。この人形、大事にしますね」

「おいおい。そんな人形ぐらいだったら、また取ってあげるよ」

一誠の言葉に、アジアは首を横に振る。

「いえ、今日いただいたこのラッチューくんは今日の出会いが生んだ素敵なものです。この出会いは今日だけのものですから、一生大事にしたいです」

何とも恥ずかしい台詞だが、アジアが言うと同様になる……と、一誠は思案中、アジアに話し掛ける。

「よし! まだまだこれからだ! アジア、今日は遊び尽くすぞ! ついて来い!」

「は、はい!」

そう言い、一誠はアーシアの手を引いてゲームセンターも奥へと向かった。



「あー、遊びすぎたな」

「は、はい……少し疲れました……」

茜の空の下、2人は苦笑しながら歩道を歩いていた。

ゲームセンターやいろんな店に赴くと、その度にアーシアの反応が新鮮で、一誠は横で見ているも飽きなかった。まさか夕麻とのデートで役立てようと蓄えた知識が存分に発揮出来たとは人生分らないな……と、一誠は思った。

「痛た……」

すると、一誠は不意に訪れた足の違和感に躓きそうになると同時に、痛みも走った。どうやら昨日受けた銃創がまだ完治には至っていない様だ。

「……イツセーさん、怪我を？ もしかして、先日の……」

アーシアの表情が曇る。まずい事をしたと一誠が思う中、アーシアはその場で身を屈めて一誠の患部を調べると掌を当てた。

「ちよつと失礼します」

そして、患部に温かく優しい光が照らされる。

「これでどうでしょうか？」

アーシアに言われ、一誠が軽く足を動かしてみた。驚く事に、既に痛みは無かった。すげえよ、アーシア。全然痛くない！」

大袈裟に足を動かす一誠の姿を見て、アーシアも嬉しそうに微笑んだ。

「治療の力、凄い力だよ。……これって、神器だよな？」

「はい。治癒の力を持った神器です」

「実は、俺も神器を持つてるんだ。今のところは、大して役に立ってないけど……」

一誠の告白にアーシアは目を丸くする。

「イツセーさんも持つてるんですか？ 全然、気づきませんでした」

「まだ効果がよく分からないんだ。それに比べたら、アーシアの力は凄いよ。これって、人や動物、俺みたいな悪魔でも治せるんだね」

「……………」

何気に呟くが、アーシアは複雑そうな表情をして、少しだけ俯いた。

そして、彼女の頬に一筋の涙が流れる。その量は次第に増していき、とうとうその場で咽び泣きだしてしまった。

一誠はどうしたらいいか分からなかったが、取り敢えずアーシアと一緒に街路樹に設

けられたベンチに腰を下ろした。

そこでアーシアの口から語られたのは『聖女』と祭られた少女の末路だった。

◇

欧州のとある地方で生まれた少女は生まれてすぐに両親に捨てられてしまった。教会兼孤児院でシスターと他の孤児達と共に育てられ、少女が8つの時に偶然、負傷した子犬を不思議な力で治療した事がカトリック教会の関係者に知られた。

それから少女の人生は変わりだし、多くの人から『聖女』として崇められた。

待遇に不満はなく、教会の関係者もよくしてくれる。それに少女は怪我した人を治す事に嬉しさを感じ、神様が授けてくれた力を少女は感謝した。

しかし、同時に寂しさを感じていた。この頃から少女には友達と呼べる者が1人もいなかったからだ。

理解していた。彼等が裏で少女の力を異質なモノを見る様な目で見ている事……。人ではなく『人を治療出来る生物』の様な感じで……。

そしてある日、少女に転機が訪れた。

たまたま少女は、近くに現れた悪魔を治療してしまったのだ。

それは少女が持つ優しさ故の行動だったが、その行動が少女の人生を反転させてしまった。

その光景を偶然見ていた教会関係者の一人が内部に報告し、司祭達はその事実を驚愕した。

「悪魔を治療出来る力だ?!」

「そんな馬鹿な事があるはずがない!」

治療の力を持つ者は世界各地にいた。治療の力は悪魔と堕天使には効果が無いと、教会内部では常識であり認知されていた。

しかし事例は過去にもあったようで、それは『魔女』の力として恐れられていた。そして司祭達は少女を異端視する様になった。

「悪魔を癒す魔女め!」

それを切欠に少女は『聖女』から『魔女』と罵られ、呆気なく教会から捨てられた。行き場を無くした少女が辿り着いたのは、はぐれ悪魔祓いの組織。つまり、堕天使の加護を受けなければならなくなった。

間違つても少女は一度も神への祈りも、感謝も忘れた事などない。

なのに、少女は捨てられた。神は助けてはくれなかつた。

しかし一番ショックだったのは、教会で少女を庇ってくれる人が誰もいなかった事

……。

少女……アーシアの味方は誰もいなかった。

◇

「……きつと、私の祈りが足りなかったんです。ほら、私、抜けているところがありますから……」

「……………」

語り終えたアーシアは笑いながら涙を拭う中、想像を絶するアーシアの過去を知った一誠は言葉を失っていた。

「これも主の試練なんです。私が全然ダメなシスターなので、こうやって修行を与えてくれているんです。今は我慢の時なんです」

笑いながら、自分に言い聞かせるようにアーシアは言う。

「お友達も何時かいっぱい出来ると思ってますよ。——イツセイさん。私、夢があるんです。お友達とお買い物したり、おしゃべりしたり……お友達と、いっぱい、いっぱい

……」

嗚咽を漏らすアーシアの目には涙で溢れていた。

そんな彼女の姿が見ていられなくなり、一誠はアーシアの眼を真つ直ぐ見つめながら言った。

「アーシア、俺が友達になつてやる。いや……俺達、もう友達だ！」
「え？」

一誠の言葉にアーシアはキョトンとなる。

「今日いっぱい話して、いっぱい遊んだ！ これからも買い物だつて何だつて付き合つてやるさ！ だから！」

一誠は自分の気持ちをアーシアにぶつける。

すると、一誠の気持ちが届いたのかアーシアは口元を手で押さえながら再び涙を溢れ出させていた。でも、今の涙は悲しそうなものではないと一誠には分かった。

「……イツセーさん。私、世間知らずです」

「これから俺と一緒に町へ繰り出せばいい！ いろんなものを見て回れば、んなもん問題ないさ」

「……日本語も喋れません。文化も分かりませんよ？」

「俺が教えてやるよ！ ことわざまで話せるようにしてやらあ！ 俺に任せろ！ んなら日本の文化遺産でも見て回ろうぜ！」

「……友達と何を喋つていいかも分かりません」

アーシアの手を一誠は強く握る。

「今日1日、普通に話せたじゃないか。それでいいんだよ。俺達はもう友達として話していたんだ」

「……私と、友達になってくれるんですか？」

「ああ。これからもよろしくな、アーシア」

アーシアの辛い過去の出来事。一誠にはどれ程辛かったのかは分からないかもしれない。しかし、これからアーシアを楽しませる自信はあった。相容れない関係だが、今の一誠にはどうでもいい。

（アーシアが笑ってくれるんなら、それでいい……。俺がアーシアを守る！）

そして、一誠はアーシアの手を握りながら、心の中で決意した……。その時だった。

「無理よ」

一誠の気持ちを否定するかの様に、第3者の声が耳に入った。

声が出た方に顔を向けた時、一誠は絶句した。

「ゆ、夕麻ちゃん……？」

そこにいたのは一誠を1度殺した張本人……天野夕麻だった。

「へえ、生きてたの。しかも悪魔？　嘘、最悪じゃないの」

一誠の驚いた声音に、夕麻はクスクスとおかしそうに笑いを漏らすと同時に、大人びた妖艶さを含む声音に一誠は違和感を感じた。

「……レイナーレ様……」

アーシアが怯えた顔で墮天使の名前を呟くと、夕麻……もとい、レイナーレは漆黒の翼を広げた。

「アーシア、逃げてても無駄なのよ」

「嫌です。人を殺めるような所には戻れません」

レイナーレの言葉に明らかに嫌悪の反応を見せるアーシア。やはり、アーシアははぐれ悪魔祓いの組織から逃げて来たようだ。

「ごめんなさい、イツセーさん。私、本当はあの教会から逃げ出して——」

「分かってるよ」

「え？」

アーシアの言葉を遮ると同時に、一誠は前に出る。

「アーシアがこんな、ろくでもない連中と一緒にいる訳がないもんな！」

背後に隠れ恐怖するアーシアを安心させる様に、一誠は強気の態度で接する。

「悪いけどその子、アーシアは私達の所有物なの。返してもらえるかしら？」

「ふざけんな！ どう見ても嫌がつてるだろ！ あんたこそ、この子を連れて帰って何をたくらんだ？ レイナーレさんよ」

「汚らしい下級悪魔が気軽に私へ話し掛けないでちょうだいな」

2人に近付いてくるレイナーレは、心底汚らしいものを見るかの様な侮蔑的な目で一誠を睨む。

「邪魔をするなら、今度こそ完全に消滅させるわよう？」

レイナーレが一度、一誠を殺した光の槍を形成する。

「セ、セイクリット・ギア！」

負けじと一誠が天に向かって叫ぶと、左腕を覆う光が赤い籠手へと変貌する。

「よし、成功！」

陰ながら練習した成果か、初めて神器を出す為に行つたポーズを取らなくても発動に成功する一誠。

そして一誠の神器を見たレイナーレは一瞬虚を衝かれるが、すぐに哄笑をあげた。

「何かと思えば、ただの『龍トウワイス・クリテイカルの手』じゃない。とんだ見当違いね」

心底おかしそうにレイナーレが嘲笑う。

「トウワイス……？」

「別名、龍の手。力を一定時間倍加する能力しかない下級悪魔にはお似合いの有り触れ

た神器よ。上からあなたの持つ神器が危険だからと言われて、あんなつまらないマネまですたのに……。——好きです。付き合ってください……。……なんてね。あの時のあなたの鼻の伸ばしようと言ったら……。アハハハハ！」

「うるせえ！」

「そんなものでは私にかないわしないわ」

レイナーレのおちよくるような態度に声を荒げる一誠に、今度は見下すような視線を向ける。

「素直にアーシアを渡して立ち去りなさい」

「断る！ 友達くらい守れなくてどうするんだ！ 動け、神器！ 力を倍にしてくれん
 だろ!? 動いてみせろ！」

【Boost!!】

一誠の叫びに応えるように、神器の甲部分にある宝玉が光りだして音声が発せられた。

「力が、流れ込んで……」

瞬間、一誠は体に力が流れ込んでくるのが分かった時だった。

ズンッ！

鈍い音と共に、あの時と同じ様にレイナーレの光の槍が一誠の腹部を貫いた。

「イツセーさん、イツセーさん！」

衝撃により吐血しその場で倒れ込む一誠にアーシアが駆け寄る。

「わかった？ 力が倍になっても……1の力が2になったところで大した違いはないのよ」

「ク……クツツ……」

皮肉をぶつけられ、悔しがる一誠は激痛と死を覚悟したが、体に痛みが走る事はなかった。

「アーシア？」

見れば、一誠の体は緑色の光に包み込まれており、アーシアが神器の力で治療してくれているのだ。

「大丈夫ですか、イツセーさん？」

「あ、ああ…… ———— すぐえ、光の痛みが消えていく……」

アーシアの温かさがだんだんと腹部の傷口を塞いでいき、やがて一誠が感じていた痛みは一切感じなくなった。

「アーシア。大人しく私と共に戻りなさい。あなたの『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』はその下級悪魔くんの神器と違って希少な」

黙ってその光景を見つめていたレイナーレが冷酷に提示してくる。

「やはり、あなた方は私の力が必要なだけだったのですね？」

「言うことを聞けば、その悪魔の命だけは取らないであげるわ」

「ふ、ふざけんな！ お、お前なんか——」

「分かりました」

一誠の言葉を遮ってアーシアはレイナーレの提示を受け入れた。

「アーシア！」

「イツセーさん。今日は一日ありがとうございました。本当に楽しかったです」

満面の笑みを浮かべたアーシアがいやらしい笑みを浮かべるレイナーレのもとに歩いていく。

「いい子ね、アーシア。それでいいのよ。問題ないわ。今日の儀式であなたの苦惱は消え去るのだから」

不吉な単語を聞き、一誠は必死に叫ぶ。

「アーシア！ 待てよ！ 俺達、友達だろう！」

「はい。こんな私と友達になってくれて、本当にありがとうございます」

そして、アーシアは一誠に振り返った。

「さようなら」

別れの言葉。

涙を流しながら笑みを浮かべるアーシアに、一誠は一瞬見入ってしまった。
すると、レイナーレの黒い翼がアーシアを覆った。

「この子のおかげで命拾いしたわね、下級悪魔。次に邪魔をしたら今度こそ本当に殺すわ。じゃあね、イツセーくん」

それだけ言い残し、レイナーレはそのまま空の彼方へと消えて行った。

後に残されたのは、黒い羽と地面に転がるラツチュークんのぬいぐるみ。

そして地面に膝を付き、悔し涙を流す一誠だけだった。

「ちくしょう……………何が、守るだよ…………」

今の一誠には神器を纏った拳で地面を殴るしか出来ず、空を見上げて叫んだ。

「アーシアアアアアアアアツツ！」

自分の非力さを呪いながら…………。

「兵藤」

「!？」

刹那、声を掛けられて一誠は振り返る。

「……………」

そこにいたのは、拳をキツく握る八雲だった。

「吉、川…………。どうして…………？」

「下校中、人払いの符力を感じたとコゲンタが教えてくれた。それに、今飛び去ったのは墮天使だよな。何があつたんだ？」

その言葉に、一誠は先程の詳細を八雲に話した。

話を聞き終えると、八雲は一誠を立ち上がらせて歩み始める。

「……行くぞ、兵藤」

「行くつて……何処にだよ？」

「決まってるんだろ。リアス部長に報告だよ」

そして、2人は学園へと向かった。

◆
パン！

部室に乾いた音が響いた。

音がした方を向くと、険しい顔をしたリアスと頬が赤く腫れた一誠が向かい合っていた。

あの後、八雲と一誠は部室に赴いて事の詳細を報告し、その上で一誠は教会に行く事を提案したのだ。

しかし、リアスが一誠の提案を受理する事はなく、勿論その答えに納得出来なかった一誠が詰め寄り、その結果に頬を叩かれたのだ。

「何度言えば分かるの？ ダメなものはダメよ。あのシスターの救出は認められないわ」

しかし、それでも今の一誠には譲れないものがある。

「なら、俺一人でも行きます。やつぱり儀式つてのが気になります。墮天使が裏で何かするに決まっています。アーシアの身に危険が及ばない保証なんて何処にもありませんから」

「あなたは本当にバカなの？ 行けば確実に殺されるわ。もう生き返る事は出来ないのよ？ 出来る訳ないでしょう」

リアスは冷静を装いながら、諭す様に一誠へ言う。

「あなたの行動が私や他の部員にも多大な影響を及ぼすのよ！ あなたはグレモリー眷属の悪魔。それを自覚しなさい！」

「では、俺を眷属から外してください。俺個人であの教会へ乗り込みます」

「おだまりなさい！」

しかし、なおも食い下がる一誠にリアスは遂に激昂してしまった。

「そんな事が出来る筈ないでしょう！ あなたはどうして分かってくれないの!?!」

「俺はアーシアと友達になりました。アーシアは大事な友達です。友達を見捨てられませんか！ それに、アーシアは敵じゃないです！」

「……………」

睨み合う2人。しかしそれは長く続かず、リアスは一誠に言う。

「イツセー。あなたに幾つか話しておく事があるわ。まず、あなたは『兵士』を弱い駒だと思っっているわね？ どうなの？」

一誠はリアスの問いを肯定する様に静かに頷く。

「それは大きな間違いよ。前に『悪魔の駒』は、実際のチェスの駒と同様の特徴を持つと言った筈よ」

一誠は以前、はぐれ悪魔討伐時にリアスの言っていた事を思い出す。

「実際の兵士の特徴って…………」

『昇格』プロモーション。兵士は敵陣地の最奥まで進めれば、『王』以外の駒に変ずる事が出来るの」

「俺が、他の皆の力を持てるって事ですか？」

「主である私とその場所を敵陣地と認めればね。そう……例えば、教会の様にね」

一誠は自分の中で希望が生まれるのを感じ、僅かだが表情に生気が戻った。

「それともう一つ。神器について。イツセー、神器を使う際、これだけは覚えておいて」

リアスが一誠の頬を撫でる。

「想いなさい。神器は持ち主の想いの力で動き出し、その力も決定するわ。あなたが悪魔でも、想いの力は消えない。その力が強ければ強いほど、神器は必ずその想いに応えるわ」

「想いの……力……」

すると、そこへそそくさと現れた朱乃がリアスに近付き、耳打ちする。

「……………そう」

耳打ちをする朱乃の表情は険しく、その報告を耳にしたリアスの顔も一層険しくなった。

そしてリアスはちらりと一誠を見た後、今度は部員を見渡すように言った。

「大事な用が出来たわ。私と朱乃は少し外へ出るわね。八雲、あなたも付き合いなさい」

「え、俺もですか?」

突然の指名に八雲が疑問の声を上げると同時に、この状況を放っておく事に抵抗を持った。

しかし、八雲が何時もの笑みを浮かべる裕斗と無表情を浮かべる小猫の顔を見つめる。そして先程のリアスと一誠の会話に何かを察したのか、視線を一瞬だが一誠に向けた後、2人に無言で頷いた。

「分かりました。じゃあ、また後で……」

八雲の言葉に、リアスと朱乃は魔方陣に足を向けた。

「部長！ まだ話は終わって——」

「最後にイツセー。これだけは絶対に忘れないこと」

一誠の言葉を遮り、リアスは語り続ける。

「『兵士』でも『王』を取れるわ。チエスの基本よ。それは『悪魔の駒』でも変わらない事実……。あなたは、強くなれるわ」

それだけ言い残し、リアスは朱乃と共に何処かへ向かう様に魔方陣が消えた。

部室に残ったのは一誠と八雲、祐斗、小猫の4人だけとなった。

そして一誠は大きく息を吐いた後、その場から去ろうと足を動かした……その時だった。

「行くのか？」

部室を出ようとする一誠を、八雲が呼び止めた。

「ああ、行く。行かないといけない。アーシアは友達だからな。俺が助けなくちゃならないんだ」

「……殺されるよ。いくら神器を持っていても、『昇格』を使っても、はぐれエクソシストの集団と墮天使を1人で相手には出来ない」

祐斗の正論をぶつけられても、一誠の意志が揺らぐ事はなかった。

「それでも行く。たとえ死んでもアーシアだけは逃がす」

「いい覚悟……と言いたいけど、やつぱり無謀だ」

「うるせえ！ だったら、どうすりゃいいってんだ！」

一誠が怒鳴りながら振り向くと、目の前には剣を携えた祐斗の姿があった。

「僕も行く」

「なっ……」

予想外の一言に言葉を失う一誠だが、祐斗は話し続ける。

「部長も『昇格』についておっしゃっていただろう？ これって、遠回しに教会を敵陣地として認めただよ」

「あっ」

一誠はやつと気付く。『昇格』の発現条件と、リアスの懐の深さに……。

「勿論、それは僕にフォローをしろって指示でもあるからね。じゃなければ、部長はキミを閉じ込めてでも止めていた筈だからね」

すると、苦笑いを浮かべる祐斗の横で八雲が1歩前に出ては手を差し出した。

「持っていけ」

八雲が一誠の手に渡したのは、1枚の闘神符だった。

「役に立てる筈だ。俺は共に行けないが、俺の分まで殴ってくれ」

「吉川……」

そんな中、小猫も1歩前に出る。

「もしかして、小猫ちゃんも?」

「……2人だけでは不安です」

一誠は心の中でリアスと目の前の3人の優しさに深く感謝した。

「これならいける! んじゃ、3人でいっちょ救出作戦といきますか! 待ってる、アー
シアー!」

こうして一誠達3人は教会に向かって動き出す為、部室を出るのだった。

◆
「……行きましたね」

一誠達が部室を出てすぐ八雲は眩くと、床から魔方陣が現れてはリアスと朱乃が八雲の後ろに現れた。

「何時から気付いたの? 私達が魔方陣ジャンプではなく、実際は姿を隠していた事を……」

「兵藤との会話辺りですね。あからさまに教会を敵地にしてみましたし、何より仲間を傷

付けさせた相手を、リアス部長は許さない」

八雲は振り返ると、リアスに訊いた。

「行くんでしょ。俺達も教会敵地に」

その言葉に頷くと、リアスは八雲に訊く。

「これから行く場所は、はぐれ悪魔討伐よりも厳しいわ。あなたを連れて行くのは、出来れば——」

「構いません」

リアスの言葉を遮り、八雲は拳をキツく握りながら話し続ける。

「兵藤の友達なら、俺の友達でもあります。絶対に助けてやりたい。そして——」

八雲は拳と掌を殴る様にぶつけて神器を現すと、決意の炎が宿った瞳を真っ直ぐリアス達に見せた。

「俺の『手世が届く範囲』を傷付けた奴は、絶対に許さない……い」

八雲は内心激昂していた。3度に渡る一誠の負傷時に八雲はその場におらず、役に立てなくて惨めな思いをしていた。

しかし、この機会に巡り合わせた瞬間、八雲は内心に積もらせた感情が漏れ始めた。友を救い出せる決意と、敵を倒せる怒りの感情を……。

「分かったわ。あなたの決意も硬い様ね。——朱乃」

「畏まりました」

「八雲。すぐに来なさいよ」

「言われなくても！」

そして、リアスと朱乃は魔方陣ジャンプを行い、それに追う様に八雲も【転】の闘神符でジャンプするのだった。

——この力……。^{バウワー} やつとワシも目覚める事が出来たぞ、八雲よ……。

『とあるシキガミ』が目覚めた事も知らずに……。

第11話：聖女の救出、オカ研VS墮天使集団

既に空は暗く、街灯の明かりが道を照らす時間となっている。

一誠、祐斗、小猫の3人は、教会の入り口が見える位置で様子を伺っていた。

「なんつー殺気だよ……」

「この気配からして、墮天使が中にいるのは確実だね」

一誠は全身に悪寒が走る事で、祐斗は気配を感じる事でここに墮天使がいる事を確信していた。

「神父も相当集まってるようだね」

「マジか。来てくれて助かったぜ」

「だって仲間じゃないか」

祐斗は照れ臭い言葉を満面の笑みを浮かべながら口にするが、次の瞬間には笑顔が完全に消え失せていた。

「それに、個人的に墮天使や神父は好きじゃないんだ。憎い程にね……」

「木場？」

祐斗の過去に一体何があったのだろうか和一誠は考える中、祐斗は教会の見取り図を

路面に広げた。

「怪しいのは聖堂だろうね。恐らく、この手のはぐれエクソシストの組織は決まって聖堂に細工を施しているんだ。地下で怪しげな儀式を行うものなんだよ」

「どうして?」

一誠の疑問に祐斗は苦笑する。

「今まで敬っていた聖なる場所。そこで神を否定する行為を行う事で、自己満足や神への冒瀆に酔いしれるのさ。憎悪の意味を込めて、わざと聖堂の地下で邪悪な呪いをするんだよ……」

「イカれてるな………つて、あれ?」

すると、一誠は気付いた。いつの間にか小猫が教会の扉の前に立っていたのを……。

「小猫ちゃん?」

「向こうも私達に気付いているでしょうから………えい」

そして、何の躊躇もなく扉を蹴り飛ばすのだった。

窓から差し込む月明かりに照らされた聖堂の内部は、長椅子と祭壇が設置されている、見たところ普通の聖堂だった。

ただ一つ、祭壇に位置する十字架に磔となつている聖人の彫刻。その頭部が破壊されている事を除いて……。

「何とも不気味な……」

聖堂内の雰囲気不気味がっていた時だった。

パチパチパチパチ……。

「!?」

突然、聖堂内に拍手が鳴り響き、柱の物陰から現れた人物の登場に一誠は気分が胸くそ悪くなった。

「ご対面！ 再会だねえ！ 感動的だねえ！」

何食わぬ顔で現れたその人物の名を一誠が叫んだ。

「フリード！」

「俺としては2度会う悪魔なんていないって事になってんだけどさ。ほら、俺、滅茶苦茶強いんで悪魔なんて初見でチョンパな訳ですよ！」

すると、フリードは一旦言葉を止めて再び口を開くが、ふざけた笑みは潜めていた。「でもさあ、お前等が邪魔したから俺のスタンスがごっちゃごちゃ。………ムカつくんだよ。俺に恥かかせやがった、お前からクソ悪魔のクズ共がよおおおおおおおおおつ！」

再び不気味な笑みを浮かべたフリードは懐から光の拳銃と柄だけの剣を取り出し、柄から光の刃を出現させた。

「てめえら、アーシアたんを助けに来たんだろう？ あんな悪魔も助けちゃうビツチな子を救うなんて悪魔様はなんて心が広いんでしょうか！」

「おい！ アーシアはどこだ！」

「んー、悪魔に魅入られたクソシスターなら、この祭壇から通じてる地下の祭儀場だぜえ。……まあ、行けたらですけど？」

祭壇を指差しながら、あつさりと儀式場の隠し場所を吐いたフリード。刺客の自覚が無いのか、あるいはこの場で一誠達を殺す自信からくるものなのかは分からない。

しかし、そんな事を考える暇もつもりも一誠達にはなかった。

「セイクリッド・ギアア！」

一誠の叫びに呼応して、左腕に赤い籠手が装着されると、祐斗も鞘から剣を抜き放ち、小猫は近くにあつた自身の何倍もあるであろう長椅子を持ち上げていた。

「……潰れて」

そして小猫はそのままフリードに向けて長椅子をぶん投げた。しかしフリードは投げ飛ばされた長椅子を光剣で両断してしまう。

「わーお、しゃらくせえんだよ！ このドチビ！」

「ドチビ？」

その一言が小猫の機嫌を損ねてしまった。その証拠に、手当たり次第に大量の長椅子

を投げまくる。

しかし規格外の攻撃方法にもかかわらず、フリードは小躍りしながら長椅子を次々と両断していく。

「そこだ」

しかし、長椅子の雨の中を祐斗は掻い潜り、フリードに斬り掛かる。

「邪魔くせえ！　しやらくせえ！　てめえら、何でそんなにウザイのよ！」

祐斗の剣とフリードの剣が火花を散らす。たまに音もなく発射される銃弾を自慢のスピードで回避しながら、祐斗は攻撃の手を緩めない。

しかし、その全ての攻撃をあしらうフリードの戦闘力も相当のものであり、そうこうしているうちに、遂に鏖競り合いにまで至った両者が睨み合う。

「やるね」

「アハハ！　あんたもやるねえ！　『騎士』か！　無駄の無い動きでもう最高！　マジでぶっ殺してえなあ！」

「じゃあ、僕も少しだけ本気を出そうかな。——喰らえ」

低い声音を発した後、祐斗の剣から黒いモヤの様な闇が出現し、刀身を覆っていき闇の剣となった。

その刹那、祐斗の剣の闇がフリードの剣に延び、光の刃を侵食しだした。

「な、何だよ、こりゃ!？」

目の前の光景にフリードが驚きの声を上げた。

『光喰 剣』ホーリー・レイザー。光を喰らう闇の剣さ」

「て、てめえも神器持ちか!？」

そしてフリードの光の剣は闇に侵食され、遂に元の柄だけの状態になったその時だった。

「兵藤くん!」

「セイクリッド・ギア! 動けえええ!」

【Boost!!】

祐斗の合図で一誠は駆け出する同時に、宝玉から音声が発生されて一誠の体に力が流れ込む。

「だからあああ! しゃらくさいんだってばあ!」

その動きに気付いたフリードが一誠に銃口を向け、光の弾丸を連射する。

「プロモーションッ! 『戦車』ッ!」

しかし『戦車』に昇格し、光の弾丸は一誠の体を撃ち抜く事は出来ずに無へと還った。

「昇格! テメエ、『兵士』か!？」

「『戦車』の特性! あり得ない防御力と、バカげた攻撃力!」

「ちいつー！」

一誠の拳がフリードの顔面を捉えた寸前、フリードは柄を盾にと即座に反応した瞬間、一誠が握っていた物が反応し、フリードは目を丸くした。

「マジです——」

目の前に迫るは、硬く握り締められた一誠の拳。

その拳が胸を容易く握れる程の大きさになり、フリードは言葉を遮られる様に顔面……もとい、上半身を捉えられた。

「ぎえあああああああつ——」

柄は盾としての役割を行えずに壊れる。悲鳴を上げながらフリードの体が後方へ大きく吹っ飛び、激突の衝撃で壁にヒビが入った。

「それと、これは仲間から託された力だ」

【巨】の闘神符を渡してくれた八雲に感謝すると、一誠は息を上げながら笑った。

「あの時はよくもアーシアを殴ってくれたな。1発殴れて、少しスッキリした！」

【巨】の闘神符の効果が切れ、元に戻る一誠の拳。

すると、フリードは怒声を張りながら立ち上がった。

「ぎっけんな……ぎっけんなよっ!! クソがあああああつ!! 何、悪魔の分際でチョーシくれてんだよおおおおつ! ぶっ殺してやんよおおおお!」

鼻が曲がり、口から血を流すフリード。懐から新たに柄を取り出しては跳び掛かってくる。

「えい」

「あいてえー！」

しかし、横から飛来してきた長椅子が直撃した。投げたのは勿論、小猫だ。

そして今の一撃で冷静さを取り戻したのか、周りを見渡すフリードは苦笑いを浮かべながら懐から球状の物体を取り出した。

「おーおー。ピンチってやつですか？ 俺的に悪魔に殺されるのは勘弁なのよねえ。退治出来ないのが心残りだけだよお、でも死ぬのが嫌だよね！」

球体の物体をフリードは床に叩きつける。

瞬間、眩い光が一誠達の目を襲い、視力が回復する頃には既にフリードの姿はなく、何処からかフリードの声だけが聞こえてくる。

「おい、イツセーくんだっけ？ 俺が絶対にお前を殺すから。絶対だよ？ 俺の事殴ったうえに説教たれたクソ悪魔は絶対に許さないよ！ んじゃ、ばいちゃ」

それを最後にフリードの声は途絶えた。

「逃げやがった！」

「とにかく、先を急ごう」

逃げられたのは気に入らないが、当初の目的を果たすため一誠は祐斗の言葉に同意した。

「えい」

小猫が祭壇をおもむろに殴り飛ばすと、そこから地下へと続く階段が出現。3人はお互い頷き合うと、隠し階段を下りて行ったのだった。



一誠達の目的地である教会の裏手の雑木林。丁度教会の屋根が見える位置の木の枝に、ゴスロリを纏った少女が腰掛けていた。

「あくあ、退屈う〜。どうしてウチが見張りなんて……ん？」

少女がぼやいていると、下の地面の一部が赤く発光し、やがて円形の魔方陣を形成してリアスと朱乃が現れる。

「これはこれは。私、人呼んで墮天使のミツテルトと申しますう〜」

ミツテルトと名乗った墮天使の少女が、スカートの端を摘み上げ挨拶をする。

「あらあら、これはご丁寧に」

「下僕があなたを察知したの。どうやら私達に動かれるのは一応は困るみたいね」

「ううん。大事な儀式を悪魔さんに邪魔されたらちよつと困るっただけえ……ん？」
すると、ミッテルトはリアスが投げた闘神符に気付くと、「転】の闘神符から八雲が現れては言い放つ。

「残念だけど、今俺の仲間がそっちに向かってる頃だと思っぞ」

「ウエ、本当!!? うっそ、マジっすかあ?」

八雲の言葉にミッテルトは平常を崩してしまった。

「はい、表から堂々と」

「しまったあ! 裏からこっそりやってくると予想してたのに!」

ミッテルトが悔しそうに地団太を踏むが、余裕の笑みを浮かべてすぐに止んだ。

「……まあ、三下なんざ、何人邪魔しようが無問題じゃねえ? うん。決めた、問題なし。何せ、本気で邪魔になりそうなのはあなた方お2人だけだもんねえ。ウフフ。わざわざ来てくれて、あっざーす」

「おいおい、俺は眼中に無いってか?」

ミッテルトの態度に若干呆れる八雲。

「無用な事だわ」

「え?」

「私は一緒に行かないもの」

リアスが自信満々にそう言い放った。

「へえ、見捨てるの？」

「どう解釈するかは、あなたの好きにすればいいわ」

「まあ、とにかくあれよお。主のあんたをぶっ潰しちやえば他の下僕つちはおしまいになる訳だし？」

そして、ミッテルトは指を鳴らした。

「出でよ、カラワナー！ ドーナシック！」

直後、リアス達の背後から気配を感じた。

「何を偉そうに」

「生憎、また見えてしまったなようだな、グレモリー嬢」

現れたのはコートを着込んだ男性墮天使のドーナシックと、際どいタイプのボディコンを着た女性墮天使のカラワナーだ。

「我等の計画を妨害する意図が貴様らにあるのは既に明白」

「死をもって購うがいい！」

ドーナシックとカラワナーの両者が毒つく。

「朱乃、八雲」

「はい、部長」

「……………」

リアスに促せられ、朱乃と八雲が前に出る。

朱乃の頭上に黒雲が現れ、一筋の雷が直撃する。今まで着ていた制服が消滅して一糸まとわぬ姿となるが、それは一瞬の出来事で、瞬時に巫女服へと切り替わっていた。

「リアス部長」

八雲も拳と掌をぶつけて『二十四氣の神操機』を出現させると、リアスに訊いた。

「何かしら?」

「ドーナあシークのの相手は、俺達に一任させてもらえますか?」

「分かったわ」

リアスの承諾の後、朱乃は印を結んだ両手をそのまま天に掲げた。

「はあっ!」

異変が起きた。無数の小さな魔方陣らしきものが周囲を覆ったのだ。

「結界だ?!」

「これって、かなりやばくねえ?」

閉じ込められた墮天使達が動揺の反応を示した。

「ウフフ、この檻からは逃げられませんか」

チロリと指先を舐める朱乃の表情は嗜虐的な笑みで満ちていた。

「貴様ら最初から……!」

カラワーナが吐き捨てる様に呟く中、八雲は右腕を突き出しながら言い放つ。

「大掛かりな掃除に近所迷惑はダメだろ?」

「ウチらはゴミかい!」

反射的にミツテルトが突っ込むと同時に、八雲はシキガミを呼び出した。

「シキガミ、降神!」

『窓』から現れたのは、クラゲに似た外見を持った女性シキガミ。クルクルと錫杖を回し

ては空飛ぶ箒の様に腰掛け、淑やかに乗った。

「甘露かんろのクラダユウ、見参!」

「召喚獣だ?!」

驚愕する墮天使達。

「頼むぞ、クラダユウ」

「お任せくださいませ。——墮天使の方々。そなた達の命運も此処で尽きまする!」

その言葉と共に、クラダユウは『陰陽錫杖・祓々はらはら』の先を墮天使達へと向けた。

「ふん、せいぜい余裕ぶつているがいい」

「儀式が終われば貴様達ですらかなう存在ではなくなるのだ」

「儀式?」

余裕の感情が含まれた言葉にリアスは疑問の声を漏らした。



祭壇の下にあつた地下への階段を下りる一誠達。

階段を駆け下りると、目の前に大きな扉が現れた。

「あれか」

「恐らく、奥には墮天使とはぐれエクソシストの大群が存在すると思う。覚悟はいい？」

祐斗の言葉に一誠と小猫は無言で頷き、気を引き締め直しては扉を開こうとした。

「!？」

だが、扉はひとりでに開きだし、重い音を立てながら儀式場の内部が見えてくる。

「いらつしやい。悪魔の皆さん」

部屋の奥からレイナーレが声を掛けてきた。

周りには部屋中にひしめき合う黒装束の神父軍団。

そして、最奥部には十字架に張り付けられたアーシアの姿を目にして、一誠が叫んだ。

「アーシアアアア！」

一誠の声に気付き、アーシアが顔を向ける。

「……イツセーさん?」

「ああ、助けに来たぞ!」

一誠が微笑みをアーシアに向けると、アーシアは涙を流した。

「イツセーさん……」

「感動の対面だけど、遅かったわね。もう儀式は終わるところよ」

その直後、アーシアの体が光り出した。

「……あああ、いやあああああつ!」

アーシアが苦しそうに絶叫を放った。

「アーシアに、何をするつもりだ!?!」

駆け寄ろうとするが、一誠を神父達が囲もうとしていた。

「邪魔はさせん!」

「悪魔め! 滅してくれるわ!」

しかし、一誠達は神父達の猛攻に対抗する。

「どきやがれ!」

「……邪魔」

「最初から最大でいかせてもらうよ。僕、神父が嫌いだからさ」

全面戦争勃発。だが――

「いやああああ……」

そうこうしているうちに、アーシアの体から大きな光が飛び出してはレイナーレがその光を掴んだ。

『聖母の微笑』。ついに、私の手に……！』

レイナーレは狂気に染まった表情で光で包まれたアーシアの神器……『聖母の微笑』を抱きしめると、途端に眩い光が儀式場を包み込んだ。

そして光が止んだ時、全身から淡い緑色の光を放つレイナーレがそこにいた。

「遂に手に入れた！ これこそ、私が長年欲していた力！ これさえあれば、私は愛を頂けるわ！ 至高の力！ これで、これで私は至高の墮天使となるわ！ 私をバカにしてきた者達を見返す事が出来るわ！」

「ぎげんな！」

高笑いをするレイナーレに向かって一誠は駆け出した。

神父達が立ちほだかるが、祐斗と小猫がフォローで神父達を吹っ飛ばす。

祐斗の闇の剣が光を喰らい、小猫の怪力が打倒する熟練のコンビネーションが、一誠の目の前に奥へと続く一本道を作り出した。

「サンキュー！ 2人共！」

それを見た一誠は一気に走り出す。

「アーシアー！」

たどり着いた一誠の目の前では、礫にされたアーシアがぐったりしている。

「ここまでたどり着いたご褒美よ」

レイナーレが指を鳴らすと、アーシアを捕えていた鎖が解かれ、一誠は拘束から解放されたアーシアを優しく受け止めた。

「……イツセー、さん……」

「アーシア、迎えに来たよ」

「……………はい」

返事をするアーシアの声はあまりに小さく、瞳には生気を感じさせなく、今にも消えてしまいそうな程に弱々しかった。

「待ってろ！ 此処を脱出したら病院に——」

「無駄よ」

刹那、一誠の言葉をレイナーレは否定する。

「その子、死ぬわよ。神器を抜かれた者は死ぬしかないわ」

「なっ!? ふざけんな！ この子の神器を返せ！」

「馬鹿言わないで。返す訳ないじゃない。『聖母の微笑』^れを手に入れる為に、私は上を騙してまでこの計画を進めたのよ？ あなた達も殺して証拠は残さないわ」

一誠が怒鳴るが、レイナーレはただ笑うだけ。

そして、一誠は俯きながら呟く。

「……初めての、彼女だったんだ」

「ええ、見ていてとても初々しかったわ。女を知らない男の子はからかい甲斐があったわ」

「……大事にしようよ、思ってたんだ」

「うふふ。私が困った顔をすれば即座にフォロワーしてくれた。でもあれ、全部私が仕組んでたのよ。だって、慌てふためくあなたの顔が可笑しいんですもの」

「……俺、夕麻ちゃんが本当に好きで、マジで念入りにプラン考えたよ。絶対いいデートにしようと思ってるさ」

涙を流す一誠だが、その一言を聞いてレイナーレが高笑いをする。

「アハハハ！ そうね！ とても王道なデートだったわ！ おかげでとつてもつまらなかったわ！」

「……夕麻ちゃん」

「夕麻……うふふ。あなたを夕暮れに殺そうと思っていたから、その名前にしたの。素敵でしょう？　なのに死にもしないですぐこんな金髪の彼女作っちゃって、ひどいわ イッセーくん……。——またあのクソ面白くもないデートに誘ったのかしらあ？　あ

あ、でも田舎育ちの小娘には新鮮だったかもね。こんなに楽しかったのは生まれて初めてですう、とかなんとか言ったんじゃない？ アハハハハ！」

その言葉で一誠の怒りは限界を超え、憎悪を増した瞳で睨み付ける。

「レイナーレエエエエエエエエエツ!!」

「アハハハハ！ 腐ったクソガキが私の名前を気安く呼ぶんじゃないわよ！」

嘲笑するレイナーレ。

目の前の墮天使が本当の悪魔ではないかと思う程の憎悪が一誠の中で生まれ、流す涙には様々な負の感情が入り乱れた。

「兵藤くん！ 此処でその子を庇いながらでは形勢が不利だ！ 僕達が道を開けるから、さあ、早く！」

一誠はレイナーレをひと睨みすると、アーシアを抱えてその場から駆け出した。

「小猫ちゃん、兵藤くんの逃げ道を作るぞ！」

「……了解」

祐斗と小猫の2人が一誠の邪魔をしそうな神父を薙ぎ倒していき、そのおかげで一誠は無事に儀式場の入り口にたどり着くことが出来た。

「木場！ 小猫ちゃん！」

「先に行くんだ！ ここは僕達で受け止める！」

「でも！」

振り返ると未だに神父たちと奮闘する2人の先輩悪魔の姿。

「いいから行くんだ！」

「……早く逃げて」

その言葉に一誠は言った。

「木場！ 小猫ちゃん！ 帰ったら絶対に、俺の事はイツセーって呼べよ！ 絶対だぞ

！ 俺達、仲間だからな！」

それだけ告げると2人が微笑んだ気がした。

一誠はその場を後にして、そのまま一気に地下の廊下を駆け抜けていった。



階段を上がりきり、一誠はアーシアを抱えたまま聖堂へと出てきた。

こうしている今もアーシアの様子はおかしい。顔を真っ青にしており、一誠は近くの長椅子にアーシアを寝かせた。

「アーシア、しっかりしろ！ ここを出れば、もうすぐアーシアは自由なんだ！ 俺と何時でも遊べる様になれるんだぞ！」

一誠の言葉にアーシアは小さく微笑み、一誠の手を取った。しかしその手から生気は感じられず、体温も失われつつあった。

「……私、少しの間だけでも……お友達が出来て……幸せでした……。もし、生まれ変わったら、また……友達に、なって、くれま、すか……？」

「な、何を言ってるんだ！ そんな事、言うなよ！ これから楽しいところに連れてくぞ！ アーシアが嫌だって言っても連れてってやるさ！」

笑いながら話し掛けている筈なのに、涙が止まらない。

もうじきアーシアが死んでしまうと理解しているが、心がその事実を否定する。

「俺ら、ダチじゃねえか！ ずっとダチだ！ ああ、そうさ！ 松田や元浜にも紹介するよ！ あいつら、ちよつとスケベだけど、すつげえいい奴らなんだぜ？ 絶対アーシアと仲良くなつてくれる！ みんなでワイワイ騒ぐんだ！ バカみたいにさ！」

「……この国で、生まれて……イツセイさんと同、じ、学校に行けたら……」
「行こうぜ、いや行くんだよ！」

アーシアの手が一誠の頬を撫でる。

「……私の為に、泣いて、くれる……私、もう、な、にも……」

頬を触れている手が、静かにゆっくりと落ちていく。

「……ありがとう……」

微笑みながら逝ってしまった。

それが、アーシアの最後の言葉だった。

「アー、シア……」

力が抜け、一誠はその場で呆然とアーシアの死に顔を眺めていた。

「何で、だよ……」

一誠の中に様々な『何で』が溢れだす。

何で、こんないい子が死なないといけない？

何で、そんな子と今まで誰も友達になつてあげなかった？

何で、今まで俺がこの子の近くにいなかった？

『何で』に埋め尽くされた一誠は、天井に向かって叫ぶ。

「なあ神様、いるんだろ！ これを見てるんだろ!? この子を連れて行かないでくれよ

！ 頼む！ 頼みます！ この子は何もしていません！ ただ、友達が欲しかっただ

けなんだ！ ずっと俺が友達でいます！ だから頼むよ！ この子にもつと笑顔に

なつて欲しいんだ！ なあ、頼むよ！ 神様！」

無我夢中で天へ訴え掛けるが、応じてくれる者はいなかった

「俺が悪魔だからダメなんスか!? この子の友達の俺が、悪魔だからナシなんスか!？」

一誠は悔しさに歯噛みした。だが後悔したところで、アーシアは戻らない。

「悪魔が教会で懺悔？ それともお願いでもしてたのかしら？」

その言葉に振り返ると、一誠を嘲笑するレイナーレの姿があった。

「見てご覧なさい。ここへ来る途中、下で『騎士』の子にやられてしまった傷……」

レイナーレは自身の傷口に手を当てた。その指には指輪が嵌められており、指輪から発する淡い緑色の光が傷を癒していく。

「素敵でしょう？ どんなに傷ついても治つてしまう。神の加護を失った私たち墮天使にとつて、あの子の神器は素晴らしい贈り物だったわ」

レイナーレは嬉しそうに嘲笑う。

「墮天使を治療出来る墮天使……これで私の墮天使としての地位は盤石。偉大なるアザゼル様、シエムハザ様の力となれるの！ こんなに素敵な事はないわ！ ああ、アザゼルスさま……。私の力を、私の力をあなた様だけの為に……」

「知るかよ」

一誠はレイナーレを激しく睨み付けながら、そう吐き捨てた。

「そんな事、知らねえよ。墮天使とか、神様とか、悪魔とか……。そんなもの、この子には関係なかったんだ」

「いえ、関係あったわ。神器を宿した選ばれた者の宿命よ」

「何が宿命だ！ それでも、静かに暮らす事だつて出来たはずだ！」

「無理ね。どんなに素晴らしい力でも異質なものは恐れられ、爪弾きにされるわ。それが人間という生き物だもの。こんな素敵な能力なのにね」

「……なら、俺が。俺が、アーシアの友達として守った!」

「でも死んじゃったじゃない。その子死んでるのよ? 守るとか守らないとかじゃないの。あなたは守れなかったの! あの時も! そして今も!」

悔しさを噛みしめると同時に、一誠は拳を握りしめる。

「……知ってるよ。だから、許せないんだ。お前も………そして俺も! 全部許せねえんだ!」

——想いなさい。神器は持ち主の想いの力で動き出し、その力も決定するわ。

リアスの言葉が脳裏を過る。だから一誠は、アーシアを強く想う。

「返せよ」

——あなたが悪魔でも、想いの力は消えない。その力が強ければ強いほど、神器は必ずその想いに応えるわ。

「アーシアを返せよオオオオオオオつ!!」

【Dragon booster!!】

一誠の叫びに応える様に左腕の神器が動き出し、宝玉から眩い光が放たれた。

籠手に何かの紋様が浮かぶと同時に、全身に力が駆け巡る。

そのまま嘲笑するレイナーレ向かって一気に駆け出し、拳を突き出す。しかし、レイナーレは繰り出された拳を華麗に避けた。

「言つたでしょう？ 1の力が2になっても、私にはかなわないって！」

【Boost!!】

レイナーレの言葉を無視する一誠に、2度目の変化が訪れた。

神器の甲の宝玉に浮かぶ文字が『I』から『II』へと変わり、同時に全身に流れ込んでくる力が増していく。

「うおおおおおおおおお！」

「へえ！ 少し力が増したの？ でもまだね！」

溢れる力を拳に乗せて一気に詰め寄るが、この攻撃も同じ様に避けられてしまい、次の瞬間にはレイナーレの両手に光の槍が形成された。

「力を込めてあげたわ！ 食らいなさい！」

そして、投擲された槍が一誠の両足を貫いた。

「ぐああああああああつ！」

全身に響く激痛に思わず声が漏れた。

「光は悪魔にとつて猛毒……触れれば忽ち身を焦がす。その激痛は悪魔にとつて最も耐え難いのよ？ あなたのような下級悪魔では——」

「それが、どうした……」

嘲笑するレイナーレの言葉を遮った一誠は、両足に突き刺さる光の槍を掴む。

手と足から肉を焦がす臭いが鼻につく。

「このくらい！ アーシアが苦しんだものに比べたら何だつてんだよ!!」

全身に走る激痛にいつ意識が飛んでもおかしくない。しかし一誠は握る手に更に力を込めては一気に槍を引き抜き、抜いた途端に両足の傷口から鮮血が溢れ出た。

【Booost!!】

槍に貫かれ、攻撃が止まってしまった今でも左腕の籠手は音声を発する。

しかし、ここで限界が来たのか体から力が抜け、その場でしりもちをついてしまう。

「……大したものね。下級悪魔の分際で墮天使に作った光の槍を抜いてしまうなんて。そこまで頑張ったのは褒めてあげる」

レイナーレはヤレヤレとした口調で言う。

「でもそれが限界ね。下級悪魔程度ならもうとつくに死んでもおかしくないのに。でも、今度こそこれで本当のお別れよ」

レイナーレは片手を軽く上げ光の槍を作り出し、夕麻の笑顔で言った。

「バイバイ、イツセ——」

ドガアアアン！

「ぎゃふんっ!？」

刹那、聖堂内に何かが崩れる音が響いた瞬間、レイナーレの頭上に何かが落下し、何とも間拔けな言葉と共に光の槍が消えた。

レイナーレの周りに立ち上る砂埃。その中から何者かが跳び出し、一誠を庇う様に現れた。

「……何か踏んだけど、問題無かったか……」

そして突然の来訪者の背中を、虚ろな瞳で見つめた一誠はその人物の名前を呟いた。

「……吉、川……?」

一誠の声に八雲は静かに返す。静かな怒りを内に秘めながら……。

「加勢に来たぞ、兵藤」

第12話：目覚めし黒き白虎

「加勢に来たぞ、兵藤」

天井を突き破り、その穴から降り注ぐ光がスポットライトの様に照らされている教会内。

何故、八雲が天井から現れたのか？

リアスと朱乃、墮天使達はどうなってしまったのか？

それを知る為には、一誠が地下の儀式場に突入した頃まで遡らなければならない……。

◇

協会の裏手の雑木林。既に墮天使との戦闘は行われていた。

「はあっ！」

飛び出したのは八雲。自慢のフットワークを駆使してドーナシークの懐に飛び込んで拳を突き出すが、避けられてしまい空を切る。

「人間にしてはいい動きだ。だが、前回の様に不意を突かれなければ……」

「えーい！」

そう言い、ドーナシークは回避先にいたクラダユウの攻撃を片手で受け止めた。

「どうという事はない」

「それはどうでしょうか？」

「何……………ぐっ！」

刹那、クラダユウの言葉と共に袂々から電撃が発生し、ドーナシークは感電してしまった。

「何やってんの！」

2本の光の槍が八雲に向かって飛んで来るが、すぐに【壁】の闘神符を投げて障壁を張り攻撃を防ぐ。

「やってくれちゃうじゃん」

「しかし、その程度の障壁が何時まで保てるか」

近くの巨木に腰掛けるミッテルト、カラワーナが見下す様な視線を向ける中、ドーナシークは八雲らと離れる。無論、その際に投げ付けられた闘神符に当たる事なく、ドーナシークはミッテルト達の側に戻る。

「貴様達の張った結界が仇となったな」

「ああ、それとも結界解いて逃がしてくれちゃう？ ノンノン、ウチらがあんたらを逃がさないわよ。あんたの下僕たちも、今頃ボロツカスになってる頃だろうしねえ。特にほらあ、レイナーレ姉様にゾッコンだったあのエロガキ。あいつなんてとつくに——」

「イツセーを甘く見ない事ね。あの子は私の……最強の『兵士』だもの」

ミツテルトの言葉を遮ったリアスは余裕の表情を浮かべている。

「『兵士』？ ああ、あんた達つて下僕をチエスに見立ててるんだっけえ？ 『兵士』つて前にズラア〜つて並んでるアレでしょ〜？」

「要するに捨て駒か」

墮天使たちが皮肉を口にするが、リアス、朱乃、八雲の3人は特に取り乱す様子もなく、ただ無言で墮天使たちを見上げていた。

「あらあら、うちの部長は捨て駒なんて使いませんのよ」

「坎兌震離！」

朱乃が言い終わる瞬間、八雲は空に印を切る。

「必殺、五色雲天竺二雨！！」

クラダユウの言葉と共に、袂々から虹が放たれ空に掛かると、結界内に暗雲が発生しては虹色の雨を降らした。

「なーんだ。ただの雨じゃ……!?」

ミツテルトは目を見開く。結界内に降り注ぐ雨に当たる木々が雨に当たる度に溶けていき、ただの雨ではない事を知った。

「ちよ、マジ〜!?」

雨を避けるにも範囲が広い。唯一、リアス達が立つ場所へは雨が降っておらず、ミツテルト達は酸の如く溶かす雨を浴びてしまう。

だが、咄嗟に張った光の障壁を傘の様に張り、少量の雨しか浴びずに済んだミツテルト達は暗雲を払う様に光の槍を空に放ち、クラダユウの技を掻き消した。

「これで空は我らの自由だ！」

ドーナシークの言葉と共に、墮天使達は黒い翼を広げてリアス達を見下す。

「貴様らは余程あの小僧をかつている様だが、能力以前にあいつはレイナーレ様に勝てやしない」

「だって元カノだもんねえ。レイナーレ様からあいつの話聞いた時は、もう大爆笑！」

「言うな、ミツテルト。思い出しただけで腹が振れる」

「まあ、酒の肴にはなったがな」

墮天使達はおかしく笑いながらも光の槍を作り出して投擲し、その向かう先にはリア

スがいた。

「部長！」

「リアス部長！」

朱乃と八雲が叫んだ直後、リアスから放たれた赤いオーラが墮天使達の光の槍を弾いた。

「弾いただと!？」

「……笑ったわね？」

放出されるオーラが、リアスの美しく長い紅髪を逆立てる。

「私の下僕を……笑ったわね？」

今のリアスの声色や雰囲気には明らかに怒気を含ませており、それに察した朱乃は言った。

「あらあら、怒らせる相手を間違えた様ですわね。お馬鹿さん」

刹那、リアスの黒い魔力の波動が墮天使達に目掛けて放たれ、悲鳴すら与えずにカラワーナが飲み込まれた。

「カラワーナ！ やってくれたな、グレモリー嬢……っ！」

仲間を倒され、リアスに憎悪を向けるドーナシックはある事に気付く。

「あの人間がいない？」

周りを見るドーナシックとミツテルト。だが、ドーナシックを覆う影にミツテルトは気付いた。

「上よ!」

「何——」

「遅いんだよ!」

「がはっ!?!」

ドーナシックの顔面を捉えた八雲の鉄拳。カラワーナがリアスの魔力に飲み込まれた瞬間、八雲は【動】の闘神符を解放しては瞬時に空へと上がったのだ。

「震災発震!」

そしてドーナシックが地面に叩き付けられる瞬間、八雲は印を切り、クラダユウは袂々をドーナシックの頭上目掛けて振り降ろした。

「悟りの境地に誘いまする! 必殺、ほんのうめつきやくうち煩惱滅却打!!」

ゴオオオオオオンツツ!!!!

凄まじい轟音。見た目はただの打撃技だが、本当の狙いは別のところにあつた。

「……………ぐぎやあああああああああ!?!?」

一拍の間の後、全身から浄化の光に包まれたドーナシックは頭を抑えながら強烈な苦痛に悶え苦しみ、地面を転がった。

これこそが、煩惱滅却打の能力。相手が持つ邪な悪意や欲望が大きく、多ければ、その威力は高まるのだ。

「これがあなたの煩惱です。悪意と欲望あなた自身の力で身を滅ぼしなさい。」

その言葉を最後に、ドーナシックの体は灰となりこの世から消滅した。

「ちよちよちよちよ、チヨ〜ヤバいんですけど!?!」

最後の1人となったミッテルト。一か八かと思ったのか、自分が持つ全ての魔力を込めた光の槍を結界へと投げ付けると、結界が破壊された。

「ぎゃあっ!」

「朱乃先輩!」

結界が破壊された影響で朱乃が地面に膝をついてしまい、心配した八雲は朱乃の側に寄っては手を取って立ち上がらせる。

「大丈夫ですか?」

「ええ、何とか……」

「……チャ〜ンス!」

すると、その隙にミッテルトは逃亡を図る。

「逃がさないわ!」

リアスは黒い魔力を飛ばすが、ミッテルトは回避してしまう。

「最初は驚いたけどお、そんな単調な軌道だったら簡単に避けられるわよー！」

そして月をバックにし、ミッテルトは逃亡した……………かに見えた。

「ねえねえ、おねーさん」

「へっ？」

ミッテルトは振り向く。この場にいる者以外の声が聞こえ、初めは地面を見下ろすが、八雲の側に『窓』が閉まる瞬間しか変わっておらず、リアス達3人しかいなかった。

「3人って…………あの女は何処よ？」

「こつちだよ、おねーさん」

「ウエツ!？」

クラダユウを探すミッテルトは声の方へと振り向くと、ミッテルトの頭上にその者はいた。

透明な羽を羽ばたかせる、オニヤンマに似た機械人的な外見を持つシキガミ。手にはボーガンを持つが、特に構える事なく、速度を落とさないで近づくミッテルトに語る様に言った。

「ねえ知ってる？ トンボってさー、瞬間的に時速100kmも出す種類もいるらしいよー。あんな小さな体で速いんだから、人間サイズのトンボはもつと速いんだらうねー」

「どくんだよお、虫けらがあ!!」

速度を上げながら光の槍を出すミツテルトにシキガミは難色を示した。

「ちよつ!!? ボーガン相手に接近戦なんて……!」

そして、ガキンと金属音が鳴り響いた瞬間、ミツテルトは目を見開く。

「……まあ、接近戦こんなのも得意なんだよねー。ボクは」

そのシキガミは背中に備えていた短剣を抜き、光の槍を防いだのだ。

「とりや、とりや!」

そして、シキガミはミツテルトが見せた隙を逃さず、無防備となった腹部に強烈な多段蹴りを食らわし、地上スレスレまで押し戻した。

「もう逃がさない」

ミツテルトが押し戻された瞬間、八雲は指をパチンと鳴らす。刹那、ドーナシックに投げ付けた筈の闘神符が反応し、闘神符から生えた数本の蔓がミツテルトをいやらしく縛り上げた。

【木】の闘神符。主に捕縛に使われる闘神符であり、八雲は万が一、墮天使が逃亡したら
と思いい投げ付けたのだ。

「んあ……つ。た、助け、て……」

「嫌だね」

悩ましい声を出すミツテルトだが、八雲は容赦なく空に印を切る。

「それじゃあ呑気にー」

そして、シキガミはゆつくりと『陰陽ポーガン・三毬杖』さぎちようの矢先を地上へ向けて矢を落とした。

「必殺ー、死線しせんじようまりや上鞆矢！」

しかし、その軌道はミツテルトに直撃する事なく、数本の矢はミツテルトがいる近くの地面に当たった。

その刹那——

チユドオオオオオン♪

「ぎやああ——」

チユドオオオオオン♪

チユドオオオオオン♪

チユドオオオオオン♪

チユドオオオオオオオオオン♪

様々な音符を出す爆発が発生してはミツテルトを飲み込み、爆発が止んだ時には既にミツテルトの黒い羽しか見当たらなかった。

「すいません、リアス部長。2人も貰っちゃいました」

【動】の闘神符の八卦の陣に乗る八雲の謝罪に、「別にいいわ」とリアスは顔を横に振る中、地上に降り立つシキガミを見ては朱乃が口を開く。

「あのシキガミ……初めて見ますわね。それに先程の爆発は一体……？」

「さっきの爆発は竜脈を狙ったんだ。魔の力を持つ相手に効く様にした矢で射ったから、墮天使には強力なんだよ………あ」

すると、朱乃の疑問に答えたシキガミはハッと思い出す様に名乗った。

「遅くなったけど、別にいつか。——青錫あおがねのナナヤ、けんぎょん………してたよ」

話は変わるが、ナナヤは語学に優れて通訳としての才能を持つ。そのおかげもあり、八雲は悪魔と同じ「言語」が備わったので、初対面のアーシアと話す事が出来たのだ。

そんな中、墮天使達の羽を回収したリアスが八雲に問う。

「私と朱乃は祐斗達のところに行くわ。八雲はどうする？」

「いえ、俺達は別方向から突入します」

「分かったわ。——行くわよ、朱乃」

「畏まりました。——八雲くん。気を付けてくださいね」

「はい、朱乃先輩」

リアス達は魔方陣ジャンプを行い姿を消すと、八雲はナナヤを戻しては【動】の八卦の陣で再び空を飛び、教会の屋根の上で止まるとコゲンタが話し掛ける。

『それで、何処から突入するんだよ?』

「入り口だと待ち伏せてる可能性がある。だったら……」

決意し、八雲は新たな闘神符を持つと、勢いよく【動】の八卦の陣から飛び降りた。

「屋根をぶち破る!」

上空約20mからの飛び降り。物や地面に激突すれば大怪我間違いなしの所業を八雲は躊躇なく行った。

無論、八雲はただ飛び降りた訳じゃない。新たに取り出した闘神符を八雲自身に当てた瞬間、八雲の体が金属の様に固く重くなった。

これぞ【金】の闘神符。この闘神符に影響したものは金属の様になり、重さも通常の数倍になる風変わりな闘神符だ。

ドガアアアン!

そして、八雲は【金】の闘神符のおかげもあり、無傷で教会から突入したのだった。

「ぎゃふんっ!」

その際、前話終盤の様な間拔けな声が聞こえたが……。



「怪我してるじゃないか!」

そして場面は戻り、一誠の状態に気付いた八雲は慌てて駆け寄ると、足から大量の血を流す一誠の姿がとても痛々しかった。

「……笑えよ、吉川」

一誠がやけくそ気味に笑いながら呟くが、その頬には溢れる涙が流れている。

「守るって決めたのに……結局、死なせちゃった。俺が……俺が弱いから、あの子を死なせちゃった……」

一誠の心は重症だった。今にも後悔の念に押しつぶされてしまいそうな程に……。

「俺……もう悲しくて……悔しくて……涙が、止まらねえんだ……」

「……………」

暫くして、そんな一誠に八雲は肩に手を置いては声を掛けた。

「兵藤……」

そして、一誠の虚ろな瞳にそれは映った。

「歯あ食いしばれえええええ!!!」

八雲の固く握った拳を……。

ドガッ!!

「ぶっ!!」

そんな八雲の行動に、一誠は頬を殴られては後ろに吹っ飛んでは仰向けになり、いきなりの事で一誠は動きを止めてしまった。

「……………いきなり何すんだよ!？」

暫くして一誠は上半身を起こしては八雲を涙目で睨む。その際、虚ろな瞳に少しだけだが光が戻っていた。

「……………目が覚めたか、兵藤?」

「え……………?」

「悲しかったり、悔しかったりすれば思う存分泣けばいい。だけど、それらに押し潰されそうになるのだけはやめろ。アーシアもそれは望んでないだろう……………」

そして一誠を見ていた八雲は振り返り、背中越しに言い放った。

「押し潰されそうになったら何時でも言え。殴ってでも、お前を引きずり戻してやるからよー!」

「吉川……………」

一誠は呟いた瞬間、立ち上っていた砂埃が止んではレイナーレが八雲を睨み付けて立っており、八雲に踏まれた傷痕は『聖母の微笑』で消えていた。

「……………よくも私に傷を負わせたわね」

「あんたが親玉か。兵藤の友達を解放しな」

「ふーん……どうやらその下級悪魔の仲間みたいね。でも残念ね。そのシスターはそこで死んでるわ」

レイナーレの言葉に八雲は視線を巡らせては止まり、その先に静かに眠るアーシアの姿が視界に入った。

「でも仕方ないわ。それが彼女の運命……。至高の存在となる私を輝かせる為に必要な道具だったのよ！」

「……ふざけるなよ」

レイナーレの言葉に、八雲は今までにない怒気を込めた鋭い視線を向けながら否定する。

「運命だと？ 人の命を奪った奴に運命を語るな。運命つてのはな、他人が奪つていいものじゃないんだ！ 誰も人の運命を奪う事は出来ない！」

そして、ゆつくりと構えながらレイナーレに言い放つ。

「お前が^{彼女}アーシアの^{運命}神器を奪つたなら、俺達がお前の野望を砕いて奪い返す！ 全身全霊、全骨、全肉、全血を以て、お前を倒す!!」

「っ!？」

一瞬、レイナーレは八雲の覇気に恐怖を感じた。だが、すぐに不快な表情を浮かべては声を荒げた。

「だ、黙りなさい！ 低級の存在が2人になったところで、至高の存在となったこの私に敵うわけ——」

——2人？ いや、3人だ。

「ん？」

レイナーレの言葉を遮る様に、教会内から知らない者の声が響いた時、八雲は右腕の『二十四気の神操機』に視線を向けた。

甲に嵌め込まれている宝玉が輝いている。その意味を、八雲は知っている。

「いつの間に目覚めてた？」

——お主が部室で決意を表した時だ、八雲よ。あの時に感じた激昂パウワーの力に、どれ程お主が仲間を大事にしているか分かった。ワシ達が司る信頼を上回る程にな……。

「そうか……。なら、俺に力を貸してくれるか？」

——無論だ。異論は無いな、コゲンタ。

『……いいいぜ。但し、絶対に負けんなよ……ランゲツ』

「ランゲツ……いい名前だな。——シキガミ、降神！」

『窓』が開き、燃え盛る炎の玉を纏うシキガミが現れると、八雲は右腕を十字に動かす。

左右上下の動きに連なり、炎の玉を四股で碎き、咆哮と共に全体が姿を現した。

「うおおおおおおおっ!!」

現れたのは、黒い毛並みを持ったコゲンタと同じく虎に似た獸人的な姿のシキガミ。巨大な剣の先を地に刺し、低く迫力のある声色で名乗った。

「白虎のランゲツ、見参！」

「びゃっ……………!!?!」

瞬間、レイナーレは恐怖した。発せられるランゲツの鬪志に当てられ、知らず知らずに額から汗が流れていた。

「ぬどりやああああ!!」

「っ!?!」

そして、ランゲツは『陰陽劍・曼珠沙華』まんじゆしやげを構えてはレイナーレに突っ込むと、レイナーレは光の槍で防ごうとした。だが、ランゲツの腕力に耐えきれず、レイナーレは宙に弾き飛ばされた。

「至高の存在となった私に……………よくも!」

「言っただろ。俺達が、お前を倒すつてなあ!」

「行こうか、八雲!」

起き上がったレイナーレに再度睨み付ける八雲とランゲツは、レイナーレに向かって同時に駆け出すのだった。

「……………」

同時に、目の前の戦いを見つめていた一誠は視線をアーシアの方へと動かすと、脳裏に皆の顔が浮かび上がった。

アーシア救出を許してくれたリアスと朱乃。自分のわがままに付き合ってくれた祐斗と小猫。悲しみから這い上がらせてくれた八雲。

そして、悪魔である自分に最後まで笑顔を向けてくれたアーシア。

みんなの顔が、一誠の脳裏に浮かんでいたのだ。

(このままじゃ、ダメだよな……)

いつの間にか、一誠はそんな事を思っていた。

(せっかく皆が協力してくれてるのに、俺がへばってたんじゃ格好がつかないもんな。

——うるさくてごめんな、アーシア。俺はもう、大丈夫だから。アーシアが悔しかった分は、俺が少しでも晴らしてやるから……)

瞳に宿る小さな光が、段々と元に戻っていく。

(神様……じゃダメか。やっぱ、悪魔だから魔王か？ いるよな、きつと……)

そして、天井を見上げながら一誠は独り言の様に呟く。

「魔王様……。俺も一応悪魔なんで、ちよつと俺の願いだけでも聞いてくれませんかね？」

当の昔に限界を迎えた体に力を入れる。

「頼みます……」

少しでも体を動かさそうとすれば全身を激痛が襲う中、それでも一誠は少しずつ体を床から持ち上げる。

「後は何もいりません。ですから……」

とうとう立ち上がった一誠の姿に、レイナーレが驚愕の表情を浮かべた。

「だから、あいつを……あのクソ墮天使を、1発殴らせてください！」

瞬間、叫ぶ一誠の背中に悪魔の羽が広がり、その姿が威圧感を放つてはレイナーレに恐怖を与える。

「っ！ う、嘘よ！ 立ち上がれる体じゃないのよ!? 全身を内側から光が焦がしているのよ!? 光を緩和する魔力を持たない下級悪魔が耐えられるはずがないわ!」

「あー、痛えよ。すっげー痛え。今にも意識がどつかに飛びそうだ……」

足をガクガクと震わせながらも、一誠は一步步、着実にレイナーレに近付いていく。「でもよ、それ以上に、てめえがむかつくんだよ!」

【Explosion!!】

その機械的な音声と共に、一誠の神器に嵌め込まれている宝玉が一層と光り輝く。

その輝きはアーシアの癒しの光に似ており、当たっているだけで安らぎ、力が溢れ、一誠の体に流れ込む。

今なら目の前の墮天使を倒せる、と思える程の力強さだった。

「凄い……」

『この光……まさか……！』

「まさか、あの時の奴が神器にされたか……」

八雲が感嘆の声を漏らし、コゲンタとランゲツが光に懐かしさを感じている側で、レイナーレは明らかに一誠に怯えていた。

「この肌に伝わる魔力の波……魔の波動は中級……いえ、上級クラスのそれ……。——あ、あり得ないわ。たかが『龍の手』なのに、どうしてあなたの力が私を超えているの!?」

咄嗟にレイナーレは光の槍を作り出しては勢いよく投擲したが、その攻撃はあっさりとし一誠の横殴りの拳に払われた。

その光景を見たレイナーレの表情が更に青ざめた。

「う、嘘よ！……こんなの嘘だわ！……至高の存在となった私が！……シエムハザ様とアザゼル様に愛される資格を得た私が！……あなたの様な下賤な輩に——」

「っ！」

しかし、レイナーレの言葉は一誠の一睨みによって続かなかった。

「い、いやー！」

危機感を本能で悟ったレイナーレは黒い翼を広げこの場から逃げ出そうとして飛び出した。

「少しでも勝てないと分かると撤退か……？ 逃がすかよ！」

しかし、その行動は阻まれた。八雲の驚異的な跳躍でレイナーレの頭上まで上がり、八雲は踵落としの要領でレイナーレを墜落させた。

「……加減はしてやろう。止めはその小僧だからな」

その真下に、拳を構えるランゲツがいる事を狙って。

「兌坎震離！」

そして、空中で八雲は印を切った。

【零発】

「必殺、爆碎ばくさい牙点穴がてんけつ!!」

【零点零零零秒】

【壹発】

瞬間、ランゲツの目にも止まらぬ拳の乱舞がレイナーレを捉える。

【零点零零零秒】

【捌発】

「てどりやあああああつ!!」

【零点参参伍秒】

【拾陸発】

片腕のみで、この速さ。

【零点伍式伍秒】

【式拾肆発】

1秒間に35発もの拳を叩き込むこそ、爆碎牙点穴の極意なのだ。

【零点陸陸零秒】

【参拾肆発】

無論、八雲によって態勢の取れないレイナーレは、ランゲツの全ての拳を食らってしまふ。

【零点玖零参秒】

【参拾伍発】

「はあっ!!」

【屯点零零零秒】

そして、最後の拳が当たった瞬間、レイナーレは一誠に向かって吹っ飛んでいく。

「行け、小僧!!」

「食らわせろ、お前の一撃を！」

叫ぶランゲツと八雲。

あつという間に、一誠とレイナーレの距離が縮まる。

「わた、しは……至高、の——」

「吹っ飛べ！ クソ天使っ！」

何かを言いかけていたレイナーレに、一誠は解放した全ての力を左腕に終結させ、左拳にそれらを乗せて振り切った。

「うおりやあああああああつ！」

ゴツ!!

正確に真つ直ぐ打ち込まれた拳が、レイナーレの顔面に食い込ませ、力強く押し出した。

ガツシャアアアアン!!

真つ直ぐな直線を描きながら、大きな破砕音を立てるステンドグラス。それを突き破り、レイナーレは夜空の彼方へと飛んで行った。

壊れたステンドグラスから射す月明かりが一誠を照らす。宛ら勝者に送られるスポットライトの様に……。

「ぎまーみろ」

一矢報いた事実、一誠は達成感を感じて笑みが溢れるのだった。

第13話：聖女の転生

「……アーシア」

レイナーレを倒した後、一誠は静かに涙を流していた。

目の前で眠るアーシアの名を呼ぶが、アーシアが返事を返す事はなかった。

「兵藤……」

八雲がそんな一誠を悲痛に見つめる中、完全に力を使い果たした一誠はその場に倒れようとした。

「おっと」

しかし、一誠の肩を優しく抱く者が現れ、倒れる事はなかった。

「無事だったか、祐斗」

「心配掛けたね、八雲くん。——お疲れ様。まさか一人で堕天使を倒しちゃうなんてね」

「よー、遅えよ、色男」

振り向いた一誠は何時もの笑顔を浮かべる祐斗に軽く毒づく。よく見れば、祐斗もポロポロだった。

「ふふふ、邪魔をするなって部長に言われていたんだ」

「部長に？」

「その通りよ。あなたなら、墮天使レイナーレを倒せると信じていたもの」

声のした方へ振り向く3人。すると、地下に続く入り口から、紅の髪を揺らしながらリアスが笑顔で歩み寄ってくる。

「用事が済んだから、魔方陣で祐斗の所へジャンプしてきたの。そしたら祐斗と小猫が大勢の神父達と大立ち回りしてるじゃない？」

「部長のおかげで助かりました」

「お疲れ様です。リアス部長、朱乃先輩」

すると、八雲はある事に気付く。

「リアス部長。小猫が見当たりませんが、何処に……？」

「あ、小猫なら黒幕を持って来てもらう様に言ったわ」

「黒幕………ああ」

リアスの説明に八雲は納得した。どうやら小猫は、一誠に殴り飛ばされたレイナーレをこの場に連れてくるらしい。

だが、八雲は頬を掻きながら言う。

「あー、リアス部長。レイナーレ黒幕の連行は新しく目覚めたシキガミが行ってますが……」

「そうなの？ そのシキガミって——」

「連れてきたぞ、八雲」

リアスの言葉を遮る様に、気絶したレイナーレを肩に乗せて歩くランゲツと、その側を歩く小猫が入り口から現れ、ランゲツはリアスの前に近付いてはレイナーレを投げ捨てた。

「これが、新しいシキガミですか？」

「はい、朱乃先輩。コゲンタと同じ白虎一族のランゲツです」

「ランゲツだ。一応、挨拶はしておく」

「そう。ありがとう、ランゲツ。——さて、起きてもらいましょうか。朱乃」

「はい」

朱乃が手を上へかざす。すると、魔力で宙に水の塊が発生され、それをそのまま気絶したレイナーレの顔に落とした。

「ゴホッ、ゴホッ！」

水音がした後、咳き込みながら目覚めたレイナーレをリアス達は見下ろしていた。

「ごきげんよう、堕天使レイナーレ。私はリアス・グレモリー。グレモリー家の次期当主よ」

「……グレモリー一族の娘か……」

「どうぞお見知りおきを。どうせ短い間でしょうが」

澄ました顔で物騒な言葉を口にするリアスは、続いて懐からある物を取り出す。取り出したのは3枚の黒い羽。それを見た途端、レイナーレの表情が曇った。

「それから、あなたに同調していた墮天使3人は、私達が消し飛ばしておいたわ」「消し飛ばした?」

一誠の疑問に祐斗が答える。

「その一撃をくらえばどんな者でも消し飛ばされる。滅亡の力を有した公爵家のご令嬢の部長は、若い悪魔の中でも天才と呼ばれる程の実力の持ち主なんだ」

祐斗の言葉に続く様に、朱乃ももうふふと微笑みながら言う。

「別名『紅髪ルイン・プリンセスの滅殺姫』と呼ばれる程の方なのですよ?」

「……俺、そんな人の眷属になつたんだ」

「確かに、あの時のリアス部長の表情は迫力だったな」

八雲も腕を組んでは頷きながら、リアスの異名に納得する。

「グレモリーの娘が……よくもつ!」

そんな中、レイナーレがリアスを恨めしく睨みながら声を荒げるが、そんな視線を気にする事なくリアスは嘲笑を浮かべる。

「イツセーが墮天使ドーナシックに襲われた以前から、複数の墮天使がこの町で何かを企んでた事は察してたわ。私達に危害を及ぼさなければ無視しておいたの」

言い終わり、リアスは何気なく一誠に視線を向けると、左腕の神器に目が行っては突然驚いた。

「……赤い龍。この間までこんな紋章はなかったはずだけど………そう、そういう事なのね」

だが、すぐの納得した表情を浮かべると、その内容をリアスは静かに述べ始めた。

「墮天使レイナーレ。この子、兵藤一誠の神器は単なる『龍の手』ではないわ」

「なに……？」

リアスの言葉に、レイナーレは怪訝そうに片方の眉を吊り上げた。

「それは持ち主の力を10秒毎に倍加させ、一時的に魔王や神すらも超える事が出来る力を有すると言われている『神滅具』ロンギヌスが1つ。『赤龍帝の籠手』ブーステッド・ギアよ。籠手に浮かんでいる赤い龍の紋章がその証拠。あなたでも名前ぐらいは知っているでしょ？」

その言葉を聞いたレイナーレが驚愕の表情を浮かべる。

「……あの忌まわしき神器が、こんな子供の手に宿っていたというの!？」

「まあ、どんなに強力でも時間を要する神器はリスクも大きいわね。早々増大するのを待ってくれる相手なんていないわ。今回は相手が油断してくれてたから勝てたようなものね」

一誠に若干釘を刺すリアスだが、レイナーレは嘲笑う。

「……確かに『赤龍帝の籠手』の存在は完全に計算外だったわ。でも、今の私にはこの『聖母の微笑』が——」

しかし、レイナーレの表情は途端に驚愕の色に染まる。

「……な、ない！ 私……私の『聖母の微笑』が!？」

そう……レイナーレが奪った『聖母の微笑』を嵌めていた指には、何もなかったのだ。全ての指をレイナーレ自身が確認しても、見つからなかった。

「探している物はこれか？」

「なっ!？」

そんな中、ランゲツは右の拳を開いては摘まんでレイナーレに見せる。『聖母の微笑』である指輪だ。

「一体、何時取り戻したんだ？」

八雲の疑問にランゲツは答える。

「ワシの技を受けている間に偶然拳が神器を掴んだのだ。それに、元々奪った神器だったのが助かった。既にこの神器の所有者は、元の持ち主の物になっている。」

「う、嘘よっ！ 儀式で完全に私の物になった神器が、あの子に戻る事なんて不可能よ！」

レイナーレの言う通り、『聖母の微笑』はレイナーレの物になったのは事実。だが、レ

イナールの言葉をランゲツは切り捨てる。

「物にも者との信頼関係がある。ワシは神器を掴んだ際、小娘レイナール娘とこの神器の信頼関係を断ち切ったまでだ」

ランゲツの言葉にその場にいた全員が驚愕の反応を見せる中、冷静に状況を分析したリアスが呟いた。

「白虎一族が司る力は信頼。どうやら、シキガミ達は司る力を与える事が出来ると同時に、相手が持つ司る力を断ち切る事が出来るみたいね」

「つまり……………わ、私はもう——」

「ああ。至高の存在ではない。ただの薄汚れた堕天使に過ぎない哀れな小娘だ」

ランゲツの言葉にレイナールの表情が一気に青ざめる中、リアスが前へ踏み出す。

「さて、ご自慢の切り札も無駄と分かったところで、そろそろあなたには消えてもらうわ、堕天使さん。私の、最後の勤めよ」

殺意を込めた冷たい口調。そんなリアスにガクガクと震えて怯えるレイナールが、媚びた視線を一誠に向けてきた。

「イツセーくん！ 私を助けて！」

しかも、声色を天野夕麻のものにしながら…………。

「あんな事を言ったけど、堕天使としての役目を果たすため仕方がなかったの！」

「夕麻ちゃん……」

途端に一誠は悲痛の表情を浮かべてしまう。

「まずい！ 小猫ちゃん」

「ストップ」

祐斗の言葉に頷き小猫も共に駆け出そうとするが、八雲は2人を一言で制した。

「信じよう、兵藤を……。2人もそれを望んでる」

八雲の言葉に、祐斗は無言で一誠を見るリアスと朱乃を見ると、それに何かを察した2人も成り行きを見守ることにした。

「私、本当にあなたの事が大好きよ！ 愛してる！ だから私を助けて……イツセーくん!!」

夕麻を再び演じるレイナーレが、涙を浮かべながら一誠に懇願する。

だが、一誠の答えは既に決まっていた。

「部長、もう限界っス……。頼みます……」

それだけ言い、一誠はレイナーレに背を向けた。その途端、レイナーレの表情が凍りついた。

「……私のかわいい下僕に言い寄るな」

そして、絶望感に浸るレイナーレを見下ろすリアスが掌に黒い魔力の塊を生み出す。

「消し飛ばへ」

ドンッ！

リアスの手から放たれた一撃はレイナールを跡形もなく吹き飛ばした。後に残ったのは、宙に舞う黒い羽だけだった……。

「……グッバイ。俺の恋……」

一誠が誰にも聞こえない声で呟く中、ランゲツは一誠に手を伸ばす。

「これを返してやれ。お前自身の手でな……」

ランゲツが手渡したのは『聖母の微笑』である指輪。一誠はランゲツから手渡された指輪をアーシアの指に嵌めると、リアスに向けて頭を下げた。

「部長、すみません。あんな事まで言った俺を、部長や皆が助けてくれたのに……お、俺、アーシアを……守ってやれませんでした……」

一誠は心から謝罪した。失礼千万な事を言いまくってしまった、でもリアス達は裏で動いてくれて、一誠は申し訳なかった。

しかし、リアスはその一誠の頭を優しく撫でては涙を指で掬い、優しく語り掛ける。「泣く事はないわ。今のあなたの姿を見て、誰があなたを咎められるというの？」

「でも……でも、俺……」

「いいのよ。あなたはまだ悪魔としての経験が足りなかっただけ。それだけよ。だから

強くなりなさい。これからもこき使うから、覚悟しなさい。私の『兵士』、イツセー」

その言葉に一誠は心の中で強くなると誓うと、リアスは懐からある物を取り出しては一誠に見せる。

「これ、なんだと思う？」

取り出したのは、リアスの髪と同じ紅いチエスの駒だった。

「これはね、イツセー。『僧侶』の駒よ。『僧侶』の力は眷属の悪魔をフォローすること。この子の回復能力は僧侶として使えるわ」

そう説明し、リアスはアーシアに近付いては「僧侶」の駒をアーシアの胸に置いた。

「部長、まさか……」

一誠の言葉にリアスは頷く。

「前代未聞だけれど、このシスターを悪魔へ転生させてみる」

リアスの体が紅い魔力が覆われると、アーシアの体の下に紅い魔方陣が現れる。悪魔転生の儀式が始まるのだ。

「我、リアス・グレモリーの名において命ず。汝、アーシア・アルジェントよ。いま再び我の下僕となる為、この地へ魂を帰還させ、悪魔と成れ。汝、我が「僧侶」として、新たな生に歓喜せよ！」

『僧侶』の駒が紅い光を発しながら、アーシアの胸に沈んでいくと同時に、『聖母の微笑』

も淡い緑色の光となって彼女の体へ入り込んだ。

「あれ？」

そして少しして、もう開く事がなかったアーシアの瞼が開かれた。

「アーシア！」

もう聞けないと思っていたアーシアの声に、一誠は込み上げてくるものを止められなかった。

「悪魔をも回復させるその力が欲しかったからこそ、私は転生させたわ。イツセー、後はあなたが守ってあげなさい。先輩悪魔なのだから」

リアスが優しい笑みを一誠に向ける中、アーシアが上半身を起こしては一誠を捉えた。

「……イツセーさん？」

何が起こったのか分からないのか、怪訝そうに首をかしげるアーシアに一誠は抱きしめていた。

「帰ろう。アーシア」

本日何度目かの涙を流す一誠。だが、今回の涙に込められているものは全くの別物であり、この場にいた者達は安堵の笑みを溢した。

「……はい」

アーシアは考える事を止め、今は一誠の抱擁を受け入れる事にした。こうして、グレモリー眷属と墮天使達との戦いは終わりを告げたのだった。

◆ 「あら、ちゃんと来たわね」

次の日の早朝、一誠は部室を訪れていた。

室内にはリアスだけがソファアに座り、優雅にお茶を飲んでいた。

「おはようございます、部長」

「ええ、おはよう。——どうやら墮天使にやられた傷は大丈夫みたいね」

「はい。アーシアの治療パワーで完治です」

一誠は笑顔で答えながら、自身の太股を軽く叩く。

「さっそく『僧侶』として役立つてくれたみたいね。いち墮天使が上に黙ってまで欲するのも頷けるわ」

リアスの言葉に一誠も頷くと、対面の席へ腰掛けてはリアスに質問する。

「あの部長。気になってたんですけど、チェスの駒の数だけ『悪魔の駒』もあるのだったら、俺の他にも『兵士』があと7人存在出来るんですよね？」

「いえ、私の『兵士』はイツセーだけよ」

しかし、一誠の質問にリアスは首を横に振った。

「人間を悪魔に転生させる時、『悪魔の駒』を用いるのだけれど、その時の転生者の能力次第で駒を通常よりも多く消費しなくてはいけなくなるの」

「駒の消費？」

「チエスの世界にはこんな格言があるわ。『女王の価値は兵士9つ分。戦車の価値は兵士の5つ分。騎士と僧侶の価値は兵士の3つ分』。この価値基準は『悪魔の駒』においてもそれは同様。転生者においてもこれに似た現象が適応されるの。駒との相性もあるわ。2つ以上の異なる駒の役割は与えられないから、駒の使い方は慎重になるのよ」

「それと俺がどういう関係にあるんですか？」

「イツセー、あなたを転生させる時、『兵士』の駒を全て消費したのよ。それが分かった時、私はあなたを絶対に下僕にしようと思ったの。初めは『兵士』全部の消費に疑問したけど、今なら納得出来る。至高の神器と呼ばれる『神滅具』の1つ『赤龍帝の籠手』を持つイツセーだからこそ、その価値があつたのね」

一誠は視線を自身の左腕へと向ける中、リアスは説明し続ける。

「あなたを転生させる時、私の持つ駒は『騎士』、『戦車』、『僧侶』が1つずつ。『兵士』が8つしかなかったわ。でも『兵士』を8つ消費しなければ、あなたを転生させる事は出

来なかったの。『兵士』の力は『昇格』も含めて未知数。私はその可能性に賭けたわ。結果、あなたは最高だったわ」

リアスは一誠の頬を撫でながら嬉しそうに微笑む。

「『紅髪 of 滅殺姫』と『赤龍帝 of 籠手』。紅と赤で相性はバッチリね。イツセー、取り敢えず最強の『兵士』を目指しなさい。あなたなら、それが出来るはず。だって、私のかわいい下僕なんだから」

そう言ってリアスの顔が少しずつ一誠の顔に近付き、やがて唇が一誠の額に触れた。

「これはお呪いましな。強くおなりなさい」

あまりの展開に、一誠は一気に顔を紅潮した。

（うわ、うわ、ふおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！）

生涯初めてのキス。その嬉しさに脳内がお祭り騒ぎとなり、一誠は感動の涙を堪えながら最強の「兵士」になる事を誓うのだった。

「と、あなたをかわいがるのはここまでにしなないとね。新人の子に嫉妬されてしまうかもしれないわ」

リアスの言葉に一誠は疑問を浮かべる。

「イ、イツセーさん……？」

一誠の背後から聞き覚えのある声。振り返ると、笑顔を引きつらせたアーシアが立つ

ていた。

「ア、アーシア？」

「そ、そうですね……。リ、リアス部長は綺麗ですから、そ、それはイツセイさんも好きになってしまいますよね……」

アーシアの纏う雰囲気、一誠は何となく理解した。彼女は今、怒っていると……。いえ、ダメダメ。こんな事を思っただけじゃない！ ああ、主よ。私の罪深い心をお許してください。——あうっ！」

すぐに手を合わせて神に懺悔するアーシアだが、その途端に痛みを訴え、頭を押さえる。

「大丈夫か、アーシア？」

「頭痛がします」

「当たり前よ。悪魔が神に祈ればダメージくらい受けるわ」

さらりとリアスが言う。

「うう、そうですね。私、悪魔になっちゃったんです。神様に顔向け出来ません」

「後悔してる？」

少し複雑そうな顔をするアーシアにリアスが訊く。だが、アーシアはリアスの問いに首を横に振った。

「いいえ、ありがとうございます。どんな形でもこうしてイツセーさんと一緒にいられるのが幸せです」

思わぬ讃辞に一誠は再び頬を紅潮させ、その隣でリアスも嬉しそうに微笑んだ。

「そう、それならいいわ。今日からあなたも私の下僕悪魔としてイツセーと一緒に走り回ってもらおうから」

「はい！ がんばります！」

元氣よく返事をするアーシア。すると、ここで一誠はアーシアの変化にようやく気付いた。

「アーシア、その恰好……」

そう、アーシアは駒王学園の制服を着ていたのだ。

「に、似合いますか……?」

一誠の指摘にアーシアは恥ずかしそうに訊ねると、一誠はサムズアップをしながら言った。

「最高だ！ 後で俺と写メを撮ろう！」

「え、は、はい」

あまりの可愛さに興奮する一誠に、アーシアは困惑してしまふ。

「アーシアにもこの学園へ通ってもらおう事になったのよ。あなたと同年みたいだから

ら、2年生ね。クラスもあなたのところにしたわ。転校初日という事になっているから、彼女のフォローをよろしくね」

「マジですか！ 分かりました！」

「よろしくお願いします、イツセーさん」

「ああ、後で俺の悪友2人も紹介するからな」

「はい、楽しみです」

ぺこりと頭を下げるアーシアを見ながら、一誠の脳内では悪友の悔しがる姿が想像される。

（ふふふ、松田、元浜、俺はモテない男子高校生を止めるぞーっ！）

一誠が脳内妄想をしていると、部室に祐斗、小猫、八雲とコゲンタ、朱乃が入ってくる。

「おはようございます、部長、イツセーくん、アーシアさん」

「……おはようございます、部長、イツセー先輩、アーシア先輩」

「おはようございます、リアス部長、イツセー、アーシア」

『おーっす！』

「ごきげんよう、部長、イツセーくん、アーシアちゃん」

それぞれが挨拶をリアス達3人にした。皆が一誠を「イツセー」と呼び、アーシアを

一員と認めてくれていた。

「ぬわっ!? 吉川! 隣に幽霊がいるぞ!」

『幽霊じゃねえ……………つて、お前、オレが見えるのか!』

「つて、その声は……………まさかこの前のシキガミ?」

一誠とコゲンタのやり取りにアーシア以外の者が驚く中、最初に理解したのは八雲だった。

「どうやら、イツセーが持つ神器が覚醒したから、霊体のコゲンタが見えるのか」

「そうみたいね。でも、その事は後で考えましょう。まずは…………」

立ち上がったリアスは指を鳴らすと、テーブルの上に大きなケーキが出現した。

「全員が揃ったところで、ささやかなパーティを初めましょうか。新しい部員も出来た事だし、ケーキを作ってみたから、皆で食べましょう」

「部長の手作り! ありがたくいただきます!」

「おいちよつと待てイツセー! そのケーキの配分はおかしいだろ!」

「大丈夫。吉川の分は俺の次に大きい方だから。それとこっちはアーシアの分」

「ありがとうございます、イツセーさん」

「ええ!? じゃあ、この小さいのは僕のかい? それはちよつと…………」

「イケメンは小さいので十分だ」

「うふふ。一段と賑やかになりましたね、部長」

「ええ。楽しくなりそうだね」

「……うるさすぎだと思えます」

『あつはつはつは！』

こうして、グレモリー眷属に新たな仲間が加わった。

そして、一誠は最強の『兵士』を指すべく、皆と共に頑張る事を誓うのだった。

「……………」

リアスが一瞬だけ、誰にも知らずに顔を暗くした事に気付かずに……。

旧校舎のディアボロス

くシキガミ、降神します！く

【完】

戦闘校舎のフェニックス　　謎の少女、現れます！　　

第14話：使い魔の森の合成獣へキメラ

そこは暗闇の空間だった。

地面に立つ感覚はあるが、辺りを見渡しても暗闇で何も見えない。

「ワンっ！」

すると、背後から声と気配を感じて振り返るが、誰もいなかった。

「ワンっ、ワンっ！」

しかし視線を下げると、その正体は何なのか理解した。

暗闇とは違う色の、黒く小さな子犬がちよこんと足下に座っていたのだ。

「クウーン……」

愛くるしい瞳に見つめられ、可愛さに負けて頭を優しく撫でると、子犬も気持ちよさそうに目を細めた。

刹那、暗闇に赤い光が輝く。

眩い光で全貌が確認出来ない。だが、徐々に赤い光が近付くにつれて輝きが収まり、その姿が鮮明に現れる。

耳まで裂けた口に生え揃った鋭い牙。

頭部には太い角が並び、全身を覆う真っ赤な鱗。

巨木の様な四股に備わる凶悪な爪。

巨大な体が一層巨大に見える両翼。

巨大なドラゴンが、悠々と目前を横切ろうとした。

『……ん？』

知らない声が聞こえた瞬間、目の前に蹲るドラゴンの視線がこちらに向いた。

大きく血の様に赤い瞳。ドラゴンはこちらに気付いたのか口を開く。

『珍しいな。こんな所に人間が入ってくるなんて……』

どうやら先程の声は、このドラゴンだったみたいだ。

『俺の相棒が世話になってるな。まあ、機会があれば会おうぜ。闘神士さんよ』

その言葉を最後にドラゴンは飛び去って行き、何とも言えない空気が残ったのだった。



「……………ん？」

その直後、八雲は目覚めた。

「……………何だったんだ、今の？」

首を傾げる八雲は夢の内容を思い出そうとする。だが思い出すのは子犬と共に遊び、戯れる事しか思い出せなかった。

（他にも誰かいたと思っただけだな……………）

そう思いながら、八雲は時計に視線を向けた。

時刻は早朝4時。普段から行ってる朝の鍛練には少し早い、最近はこの時間なので苦にならない。

「それじゃあ、今日もやりますか……………」

そして、八雲は鍛練の準備を終えて玄関に向かう途中だった。

「おや。おはよう、八雲ちゃん」

「……………」

「おはよう、おばあちゃん。おじいちゃん」

声を掛けられて振り向くと、そこにいたのは割烹着姿のおつると、八雲の祖父である『吉川赤蘭』せきらんだった。

赤蘭はつる屋の和菓子職人であり、滅多な事でしか喋らないとても寡黙な人だ。しかし、寡黙だからこそその人気があり、近所付き合いもいい関係に築いていた。

「最近早起きやねえ。何かあったんかい？」

「まあね。友人と一緒に鍛練してるんだよ」

「……………」

赤蘭の視線に八雲は苦笑する。

「彼女？ 違う違う。同じクラスメイトの男子で、同じ部の仲間だよ」

「そうかい。気をつけんさいね」

「はい。それじゃあ、行ってきます」

そして、八雲は何時もの公園へと向かった。



暫く時間が経過した、八雲が毎朝使っている公園。その広場に、八雲以外の者達がい
た。

「ふんっ……………ぬおっ……………」

1人目、腕立て伏せを行っている一誠。

「また邪念が入ってるわよ、イツセイ」

2人目、そんな一誠の背中に座っているリアス。

「だ、だから……ぶ、部長が、何時も、俺の上に乗っているかと思うと……お馬さん根性が、マックスになります……よ……」

「あら？ だつたらアーシアに乗ってもらいましょうか？」

「はうっ!?! わ、私は、イツセイさんがよければ……」

3人目、リアスの提案に頬を染めるアーシアだった。

何故、この3人が早朝の公園にいるのか？

理由は一誠にあった。ハーレム王目標に向かって前へ進む為、強くなる必要があったからだ。

悪魔の世界は圧倒的に力がものをいう。なので、まずは体力を上げる為に、一誠は毎日朝練を八雲とリアスの2人と共にしていたが、一誠の家にホームステイしているアーシアも今回初参加しており、アーシアは主に一誠達に水分補給の水筒やタオルの用意等を行っている。

そして、八雲はと言うと……。

「ふっ……ふっ……ふっ……」

『頑張れ、残り20を切ったぞ』

広場の近くにある木の枝に足を引っ掛けては逆さ吊りになり、腹筋を行っていた。

その光景を見ながら、リアスとアーシアは言う。

「何度見ても朝練の域を越えてるわね。あれで普段の鍛練の3割程らしいわ」

「あれですか！ 何だか、あまりやり過ぎると授業中に寝てしまいそうですが……」

「そうね。私も初めて見た時はやり過ぎだと思つたわ。でも、それが八雲の神器に繋がるのよね……」

そう言い、リアスは最近分かつた八雲の“二十四気の神降機”が持つ機能を語る。

“二十四気の神降機”は、ただシキガミに力を送る事や闘神符を作り出す他、“発動と同時に自らの力を倍にする事が出来る”。つまり、“龍の手”と同じ機能をも持つているのだ。

今まで戦えたのは八雲が持つ身体能力もあるが、やはり“二十四気の神降機”の影響も大きく、前回の墮天使達とも戦えた。最近になつて分かつた八雲は今まで以上に鍛練に打ち込み、自らを鍛えたのだ。

「ブーステッド・ギアは時間経過で更に強くなるけど、トゥワイス・クリティカルは倍にするだけ。でも、両方は基礎が高い程に意味を持つ。八雲のシーズン・ドライブもトゥイス・クリティカルと同じだけど、元々八雲の基礎が高いから強い………いえ、もつと強くなるわ。だからイツセー、最低でも八雲に渡り合えるまで強くなりなさい。そうすれば、ある程度の戦いでも最後まで生き残れる筈よ……」

「う、ういっス……」

「頑張ってください、イツセイさん！」

こうして、朝練の時間が過ぎていくのだった。

「……つしゃ！ 腹筋終わりつと」

『そんじゃあ、次はダツシユ1000本だな』

「分かつてるよ」

「「まだするの（かよ）（ですか）!?!」」

リアス達の言葉が重なった。



朝練後の学園。特に何の変化もなく気が付けば放課後になっていた。

現在、オカルト研究部の部室では、一誠とアーシアが慣れた手つきで仕事用の簡易版魔方阵のチラシをまとめていた。その間、人間である八雲は悪魔の仕事をする必要はないのだが、取り敢えず一緒にチラシをまとめる程度の手伝いをしていた。

話は変わるが、八雲はオカルト研究部ではぐれ悪魔討伐やチラシのまとめの他、グレモリー眷属と様々な事で過ごしている。

リアスとお茶をしたり、祐斗と将棋で勝負したり、小猫とお菓子を食べたり、朱乃と

お茶をしたり、アーシアに日本の事を教えたり、一誠の猥談を無理矢理聞かされたり等々、少々変わっているが青春を謳歌しているのだ。

「それじゃあ、チラシ配り行ってきます。行こう、アーシア」

「はい」

そして準備が終わったのか、チラシを入れた鞆を肩に掛けた一誠とアーシアが立ち上がる。因みに、一誠はアーシアの移動の為に自転車を走らせている。

「待って」

しかし、出かけようとした2人を部長席に座っているリアスが呼び止めた。

「チラシ配りは今週まででいいわ」

リアスの言葉に2人は少し驚いた表情を浮かべた。

「前に言ったでしょう？ 修行の一環としてやってもらったけど、チラシの配布は本来使い魔の仕事なの」

その言葉に一誠が質問する。

「じゃあ、チラシ配りは卒業ってことですか？」

「それにはまず、あなたたちも自分の使い魔を手に入れなくてはね」

すると、リアスは手品のように手元から赤くて丸いコウモリを召喚した。

「これが私の使い魔よ。イツセーは一度会った事があるわね」

「え？」

一誠が疑問を抱いていると、リアスの手から離れたコウモリがボフンと煙に包まれた。そして煙が晴れると、そこには一人の女性が立っていた。

「ああ！ じゃあ、あの時の子が……」

女性に見覚えがあったのか、一誠が納得すると同時に軽く落ち込んでしまった。因みに、リアスのコウモリと一誠の出会い、一誠の初デートの待ち合わせの最中、街で配っていたチラシを受け取った時だ。

「私のはこの子ですわ」

リアスのコウモリが元に戻ると、朱乃は地面に指を向けた後、その先が光り出しては使い魔が現れる。

「こ、小鬼？」

現れたのは手乗りサイズの小鬼。辺りを見渡し終わるとグイツと背伸びをしていた。

「……シロです」

小猫の腕の中に可愛らしい白い子猫がいた。

「僕のは——」

「あ、お前のはいいや」

「つれないなあ」

祐斗の言葉を省こうとする一誠だったが、アーシアは興味があったようで、祐斗は自身の使い魔である小鳥を召喚した。

「「「……………」」」

「ん？」

一通り紹介が終わる中、使い魔達は八雲を見つめていると、ある行動を起こした。

「おっ…………」

リアスのコウモリと祐斗の小鳥が八雲の両肩に乗っては頬擦りし…………。

「おおっ…………」

小猫の子猫は喉を鳴らしては八雲の足下に体を擦り付け…………。

「おおおっ！」

朱乃の小鬼が八雲の足をよじ登り、制服のポケットに入っては顔をちょこんと出して

喜んでいた。

「ふおおおお…………っ!!」

そんな使い魔達の行動に、八雲は頬を染めて嬉しそうに顔を綻ばせる。

「あらあら。可愛らしいですわ」

「へえ、初対面なのにすぐ打ち解けたみたいだね」

「…………ちよつと、羨ましいです」

『八雲は昔つから動物に好かれるんだよ。まあ、オレ達を宿してる影響だろうな』

そんな光景を朱乃、祐斗、小猫、コゲンタが各々反応する中、リアスが一誠とアーシアに説明する。

「使い魔は悪魔にとつて基本的なものよ。主の手伝いから情報伝達、追跡にも使えるわ。臨機応変に扱えるから、イツセーとアーシアも手に入れないといけないわね」

「えつと……その使い魔さん達はどうやって手に入ればいいのですか？」

「それはね……朱乃」

「はい部長。準備は整ってますわ」

朱乃の言葉に一誠とアーシアは怪訝に思う中、リアスは笑顔で告げる。

「という訳で、早速あなた達の使い魔をゲットしに行きましょうか。八雲も行くわよ」

「分かりました。じゃあ、後で【転】の——」

「ああ、その必要は無いわよ」

「え？」

リアスの言葉に八雲は疑問符を浮かべると、朱乃が説明した。

「実はそろそろ、八雲くんの体がこの部屋に漂う魔力に慣れましたので、魔方陣ジャンプが可能になりましたの。眷属の誰かと一緒にあれば、八雲くんも魔方陣ジャンプが可能ですわ」

なるほどと八雲は納得すると、再度リアスが言った。

「それじゃあ、改めて向かいましようか」

こうして、八雲は初めての魔方陣ジャンプを体験しながら、リアス達と共に目的地へとジャンプしたのだった。



転移魔方陣の光が止むと、一誠達は見知らぬ森の中に立っていた。

「……………うっふい」

同時に、八雲は顔を青くして口元を押さえており、祐斗が心配して声を掛ける。

「八雲くん、大丈夫？」

『こりゃあ符力に酔ったみたいだな。普段は「転」の闘神符で移動するから酔わねえが、違う符力に慣れてないから気持ち悪かったんだろ』

「あらあら。では少しの間、私が背中を撫でてあげますわ」

「す、すみません……」

八雲が朱乃に介抱される中、リアスは心配して八雲を一見した後、一誠とアーシアに話す。

「ここは悪魔が使役する使い魔の多く住み着いている森。その入り口よ。ここで今日、イツセーとアーシアには使い魔を手に入れてもらおうわ」

リアスの言葉に一誠は辺りを見渡す。

やたら背の高い巨木が周囲に生え、日の光もあまり届いていない鬱蒼とした森。湿気も感じ、何が出てもおおかしくない雰囲気もあつた。

「ゲットしてえええええ!!」

「なっ!」

「きゃっ!」

突然の大声に一誠とアーシアは驚くと、目の前に現れたのは帽子を深く被ったラフな格好をした青年だった。

「オッス! 俺の名前はマダラタウンのザトウジ! 使い魔マスターを目指して修行中の悪魔だ!」

使い魔マスターを目指しているザトウジの登場に困惑する一誠とアーシアだが、リアスが2人を紹介する。

「ザトウジさん、例の子達を連れてきたわ」

「へえ、冴えない顔の男子と金髪の美少女さんか。そっちの酔ってる男子は誰だい? 見たところ人間だけ……ど……ど……!?!」

すると、ザトウウジが未だに酔っている八雲を一見した瞬間、その隣にいたコゲンタを見て口を大きく開いて興奮していた。

「ななな、何だいその見た事もない使い魔は!? レアだよな? 新種だよな! よければ俺の持つてる使い魔と交換——」

『誰が使い魔だゴラア!』

失礼な発言に怒りを露にするコゲンタ。それを他所に朱乃が口を開く。

「この子はコゲンタちゃん。八雲くんのパートナーのシキガミで、使い魔ではありませんわ」

「はい……。それと、絶対に、コゲンタ達は、渡しません……」

『さすが八雲だ! 嬉しい事を言ってくれるぜ!』

酔いが収まった八雲の言葉に、不機嫌だったコゲンタは一気にご機嫌になった。

「そうなんだ。ちよつとガツクシ……」

そして使い魔ではないと言われてテンションを戻すザトウウジに、リアスは話し掛ける。

「彼は私達の付き添い。使い魔が必要なのはこの子達だけだから、お願い出来る?」

「OK! 任せてくれ! 俺に掛かればどんな使い魔でも即日ゲットだぜ!」

ゲットを強調しながらサムズアップをするザトウウジ。だが「しかし……」と言った

後、先程よりテンションが下がっていた。

「今回は時期が悪いなあ」

「時期？ それってどう言う意味かしら？」

リアスの言葉にザトウウジは答える。

「実は1ヶ月前から、使い魔になる生き物の姿が見つからないんだ」

「生き物が見つからない？ それって1匹も？」

「そうなんだよ！ ウンディーネと言った精霊は勿論、鳥や猫とかの動物、あの迷惑なスライムや触手も全く出ないんだ。おかげでこっちは暇でね、久し振りがつ珍しい彼を見ただから興奮したんだよ」

「迷惑な？」

スライムと触手の言葉に反応した一誠にザトウウジは答える。

「そう。探索中に現れては邪魔をするんだ。スライムは服だけを融かしては食べ、触手は女性の分泌物目当てで襲うんだ」

「……………何……………だ……………？」

一誠は耳を疑った。

服を融かすスライムに、女性の分泌物を食べる触手。それはまさに、一誠が求めていたスケベな使い魔だった。

「まあ、迷惑な生き物でも長い間見ないと寂しい——」

「部長！ 俺、そのスライムと触手を使い魔にしたいです！ 服を融かす！ 女性の分泌物を食べる！ 俺が求めていた人材です！」

ザトウジの言葉を遮りながら、一誠は目をランランと輝かせて宣言すると、リアスは呆れながら溜め息をついた。

「あのね、イツセー。使い魔は悪魔にとって重要なものなのよ？ ちゃんと考えなさい」「うっ……。分かりました」

そして、一誠が暫し目を瞑っては考え込む事、約3秒……。

「やっぱり使い魔にしたいです！」

決意は変わらなかつた……。その直後だつた。

「……………」

八雲は背後から何かの気配を感じ取り振り返ると、茂みから現れた。

「……………」

現れたのは、弱々しく震えているシベリアンハスキーの様な姿をした子犬だつた。

子犬は八雲の足下に来るとその場に倒れてしまい、八雲は抱き抱えた。

「大分弱つてる……。ザトウジさん、こいつは一体何ですか？」

「おおっ！ 久々の生きも、の……!？」

子犬を見た瞬間、ザトウージは目を輝かせながら近付く。

「こいつは驚いた。初めて見る精霊だよ、その子犬。何だろうなあ……。コボルトか、それとも新種のノームなのかも……」

「……っ！」

ギャブリー！

「痛たたたたたたたたたっ?!?!」

そして、ザトウージが子犬に手を伸ばした瞬間、子犬は勢いよくザトウージの手に噛みついたのだった。

「だ、大丈夫ですか、ザトウージさん?!」

「ハ、ハハハ！ だ、大丈夫。普段から噛まれたりしてるから、な、慣れてるよ……」

言葉と笑顔の裏腹に、ザトウージの傷から血が流れており、アーシアは神器を出しては傷を治した。

そんな中、八雲は子犬を見つめては口を開く。

「噛みつく元気はあるのか……」

ポケットに手を入れると、八雲は帰りにでも食べるつもりだった購買のパンを取り出しては子犬に近付けると、子犬は貪る様にパンを食べては平らげた。

「ワンっ！」

「腹が減ってただけか。よかった……」

元気になった子犬は八雲の腕の中で元気に吠ええると、何度も八雲の顔をペロペロと舐めた。

「おいおい、くすぐったいって、あははは！」

「ワンっ！」

「あの子、とても八雲になついたらみたいね」

「あらあら、少し妬けますわ」

八雲と子犬の間に見せる穏やかな空気にリアス達が微笑む中、ザトウジだけは肩を落とすのだった。

「ワンっ！」

すると子犬は八雲の腕の中から抜け出すと、来た茂みの前に立ち止まっては八雲達に振り返る。

「どうしたのでしょうか？」

子犬の行動にアーシアは首を傾げる。

「着いて来いって言うてるのか？」

「ワンっ！」

八雲の声に子犬は嬉しそうに答えると、茂みの中に入った。

「リアス部長。ちよつと向かいます」

「あ、ちよつと八雲！」

そして八雲は子犬を、リアス達は八雲を追う様に、森の入り口と真逆の方へと向かった。



それから暫く、八雲達は子犬の後を追っていた。

近ければ離れ、遠ければ立ち止まる子犬の行動に、次第に八雲達は子犬が持つ高い知性を感じていると、森では珍しく明るい大きな空間に出た。

「……何だこれ？」

すると、八雲は茂みの前に立ち止まると、空間の中央にある物を見つけた。

それを形に例えるなら、薔薇の蕾。八雲を上回る程の大きさを持つであろう巨大な蕾は、とてつもない違和感を醸し出しながら存在を放っていた。

「おかしいな。前に来た時は何も無かったのに……」

「ザトウジさん。この前、この場所に来たのは何時頃かしら？」

リアスの質問にザトウジは答える。

「1ヶ月前だね。この辺りに使い魔となる生き物はいないから………つて、まさか」
 「ええ……。この蕾が、今回の事に関係しそうね……」

そしてリアスは一見すると、蕾に変化が起きた。

ドクンドクンと心臓の様に鼓動しながら蕾が開花し、その中から顔が現れたのだ。

「グガアアアッ!!」

真つ赤な花弁に似合った、黄色いドラゴンの顔が……。

「植物のドラゴン!？」

一誠が驚く中、ザトウージは怒りながら否定する。

「いや、違うぞ少年! 植物の体を持つと言われている華フローラル・ドラゴン 龍は滅んでいるから既に

存在しないんだ! それに微かだが、薬品の臭いがする! 断言しよう………この

生き物は、人工的に作られた怪物だ!」

「まさか……合成獣キメラですわね」

「キメ……?」

朱乃の呟きにアーシアは首を傾げると、祐斗が答える。

「様々な生き物の特徴を混ぜ合わせた怪物だよ。多くは錬金術師が作るんだけど、近く

にそんな人物の気配はしないし……一体誰が……」

「………なるほど。大体分かった」

リアス達の言葉を聞き、八雲は目の前の合成獣を作り出した者を理解した。

「リアス部長。この合成獣を作った奴が分かりました」

「本当なの!？」

「大分前、キョニーと言ったはぐれ悪魔がいたでしょ。アイツなら可能です」

その人物の名を言われ、一誠とアーシア以外のグレモリー眷属は理解する。

はぐれ悪魔キョニー。全世界の女性を巨乳にする為だけに、元主の私財である金髪巨乳のキャラクターの商品を持ち逃げてはぐれ悪魔となった錬金術師の悪魔であり、キョニーの隠れ家には大量の合成獣の苗が見つかった。

だが、朱乃は八雲に言った。

「ですが、合成獣の苗は全て処分しましたわ」

「それは俺も見てました。でも、もしその苗が、〃目の前の合成獣の苗だったら〃……」

『「!」!』

その言葉にリアス達も納得した。目の前の合成獣が最初に作られた……言わば、合成獣第1号なのだと……。

「なるほど。私達が処分したのは、目の前の合成獣から作り出された苗だった訳ね」

「……オリジナルを何処かに隠せば、苗だけ処分されても平気」

「そして隠された合成獣は、この森に住む生き物を捕食して大きくなったのですね……」

リアス、小猫、朱乃の言葉に、ザトウージは決心する。

「グレモリーさん！ 俺にも手伝わせてくれ！ 自然を崩しかねない奴を、俺は許さな
いんだ！」

「ありがとう。じゃあ、被害が更に拡大する前に討伐しま——」

「あああああああああつ！！」

刹那、ザトウージがある方向に指差しては叫んだ。勿論、合成獣に気付かれない様に
小声で……。

「どうしたの！」

「あ、あれは！」

ザトウージのはしやぐ声にリアス達は視線を向けると、蒼い輝きを放つ鱗を持った小
さなドラゴンが、合成獣の後ろに生えた巨木の枝で羽を休めていた。

スフライト・ドラゴン
「蒼雷龍！ 飛来していると情報はあったが、まさかこんな所にいたとは……」

「生で見るのは私も初めてだわ。綺麗な鱗ね……」

「小さいですね。まだ子供でしょうか？」

「そう、子供だ。ゲットするなら今だよ。成熟したら絶対にゲット出来ない。龍王程で
はないけど、ドラゴン族の中でも上位クラスの筆頭だからね」

「そうなんですか。でも……」

アーシアの心配は、この場にいる全員に伝わった。ゲットするにも合成獣に見つかる覚悟をしなければ、蒼雷龍に近づく事さえ出来ないからだ。

そんな中、事態は動いた。

「ウウー……」

「ん？ どうした『くうろ』。唸り声なんて出して……」

「……くうろ？」

「子犬だけじゃあ分からないからな。黒くて綺麗な毛並みだから、くうろ」

聞かない単語に小猫は首を傾げると、八雲はくうろと名付けた子犬を視線で示した。

「ワンっ♪」

気に入ったのか、くうろは嬉しそうに答えるが、すぐにまた唸り声を上げる。

「一体どうしたのでしょうか——」

しかし、アーシアの言葉は最後まで言い終える事はなかった。

「え？」

何故なら、地響きと共に地面が盛り上がり、ある物が生え出したからだ。

「ぎゃあああああつ?!」

「(、(、これは……っ?!)」

現れたのは、数多もの植物の蔓。どうやらリアス達は合成獣の領域テリトリーに知らず知らず

入ってしまい、合成獣の体の一部である蔓が地中から襲い掛かったのだ。

「……ヌルヌル、です」

「あらあら、エッチな触手ですわね」

そのせいで、リアスを含むグレモリー眷属の女子達が蔓に絡め取られ、宙に浮いていた。

叫ぶアーシア。驚愕するリアス。蔓の感触に嫌気する小猫。頬を染めて少し喜ぶ朱乃。……一人だけ反応が違うが、状況は不利になっていた。

「部長！ アーシア！」

「小猫ちゃん！」

「朱乃先輩！」

『抜け出せそうか？』

「ダメね。上手く魔力が練れないわ」

「こちらも、雷撃を発動出来ませんわ」

「……ヌルヌルして、上手く力が入りません」

混乱するリアス達。そんな中、ザトウウジはリアス達に向かって飛び出した。

「その子達を放す——」

ベチンッ!!

「タコスッ！」

しかし、残っていた蔓が襲い掛かり、ザトウジは弾き飛ばされては木に叩きつけられ、気絶してしまった。

「ザトウジ!?!」

「意外と強いね、この合成獣……」

「だな……。——行くぞ、コゲンタ！」

『おう!』

戦闘態勢に入る八雲達。各自が神器を出し、八雲も右腕を突き出した。

「シキガミ、降神！」

腕の宝玉が輝きを放つと、窓が現れ、そこからコゲンタは現れた。

「コゲンタ！」

「おう！ 行つくぜええええええ！」

八雲とコゲンタが飛び出すと共に一誠と祐斗も連れて飛び出し、同じタイミングで合成獣の蔓も襲い掛かった。

「はあっ！」

手刀足刀を駆使して蔓を切る八雲に、剣で一刀両断する祐斗とコゲンタ。

【Boost!!】

「よし、俺も行けるー！」

そして一誠も『赤龍帝の籠手』の効果が発動し、蔓を排除しようとした時だった。

「きゃっ!？」

「大丈夫か、アーシ……ア……」

アーシアの声に視線を向けると、一誠は動きを止めた。別に蔓に捕まって身動きが出来ないのではない。アーシアの……強いてはグレモリー眷属の姿に釘付けになったからだ。

それもその筈。何故なら――

「ふ、服が……アーシアや部長達の制服が、融けてるだとお?!？」

「へ?？」

「はい?？」

一誠の言葉に八雲と祐斗もその場に止まり、視線をリアス達に向ける。勿論その際、襲ってくる蔓は排除しながら……。

その間でもリアス達の服は融け続け、遂には下着も融け始めていた。

「……見ないでください」

蔓のおかげか大事な部分は隠れていたが、小猫の言葉に八雲と祐斗は視線を逸らす。

無論、一誠はガン見だが……。

「……蔓の粘液で融けてる様だったな。でも、衣服だけ融けてたが、体には何も負傷してなかった」

「さすがの観察力だね、八雲くん。……もしかしたら、合成獣はスライムも食べてその特性を得たんだと思うよ」

「じゃあ、絡み付くのは触手の特性か。面倒だな……」

「な……何……だと……!?!」

そんな祐斗の説明に一誠は驚愕する中、合成獣の猛攻は激しくなる。

「あつ……っん……」

「ふぁ……あんっ……」

「……………んっ」

「あああ……いぁ……」

何と、合成獣の蔓がリアス達の露になった胸の先端に張り付き、リアス達は悩ましい喘ぎ声を出してしまっただのさ。

「精気を吸ってるのか!」

「そりゃあ、女性の胸から精気を吸い取る合成獣って話だからな。この森の中じゃあ、餌となる女性も出会わないだろし……!」

蔓への攻撃を止めないコゲンタと八雲の声に、一誠は本日何度目かの驚愕。

「なつ、何て素晴らし……いやいや、何てイヤらし……いやいや、何て恐ろしい攻撃なんだー！」

「何回噛んでるんだよ！　ってか、毎回エロに正直すぎっぞー！」

触手を斬りながらコゲンタは突っ込む中、合成獣にある変化が起こる。

「八雲くん、あれ！」

「合成獣の周りに、実が生ってるだど？」

八雲の言葉通り、合成獣の周りに生えている枝から果実が生っていたのだ。しかもその形は、女性の乳房そのものだった。

すると、祐斗は思い出す。

「そうか！　確かこの前、キヨニーの隠れ家にあつた合成獣の文献に載つてあつたんだ。全世界の女性を巨乳にする為、精気を吸い取つては果実を実らせ、その果実を食べた者は巨乳になるんだつて……」

「な、何だつてー!?」

祐斗の説明に、とうとう一誠は感動して涙を流していた。

「女性のおっぱいに張り付いて精気を吸い出し、巨乳になる果実を作る。なんて………なんて俺に相応しい使い魔だ!!」

「ちよい待て！　まさかイツセー、この合成獣を使い魔にする気か？」

「そのまさかだああああ!!」

「やめろイツセー……」

雄叫びを上げる一誠。それを八雲は止める為に叫ぶが、一誠の行動力が勝利してしまい、合成獣の目の前に出ては両腕を広げた。

「お願いだ合成獣……いや、ドラゴ衛門^{えもん}！ 俺の話を聞いてくれ！」

「イ、イツセー！ あんっ……そ、そんな事で……んっ、止まる訳……ない、じゃない……いあつ、そこっ！」

「部長！ ここは俺に任せて——」

ベシンツッ！

「ぶへっ！」

合成獣の蔓攻撃。だが、一誠は負けずに説得に応じる。

「ドラゴ衛門！ 俺の下に来い！ そうすれば俺の……いや、男達の夢の1つが叶——」

バシンツッ！

「痛っ！ お前がいれば、貧乳の女性の悩みが解決するんだ——」

バチンツッ！

「あ痛っ！ そして、そのおっぱいを見て、社会に落ち込む男達も立ち上がれる——」

バゴンツッ！

「……っだあああああつ!! 人が少しでも擁護してやってるのに、きちんと喋らせろよドラゴ衛門!」

合成獣の猛攻に、さすがの一誠もキレてしまった様だ……。

「擁護する前に……!」

「助けてやれつての……!」

その一方、八雲とコゲンタは無数に生えてくる蔓に対して攻撃速度を上げ、遂にリアス達を拘束していた蔓の排除が完了した。

「コゲンタ、祐斗、イツセー!」

「おう!」

「うん!」

「え? ア、アーシア!」

そして、蔓に解放されて落下するリアス達を八雲達は助けた。因みにリアスと小猫は着地に成功する中、八雲は朱乃を、一誠はアーシアをキャッチし、コゲンタと祐斗は再度リアス達を捕まえようとする蔓に応戦していた。

「助かりましたわ、八雲くん」

「……と、取り敢えず、これを……」

胸を晒けて半裸となった状態の朱乃に八雲は視線を逸らす中、自分が着ている制服の

上着を渡しては羽織らせた。

「ふう……。イツセーにも困ったものね……」

「ぶ、部長！ 俺は全女性の夢と希望を叶える為でして……」

「……おい、あれ」

コゲンタの声に全員が視線を向ける。その先には、空中を羽ばたく先程の蒼雷龍が、合成獣の頭上に停滞していた。

「何だか、あの子ドラゴンの体に電気が走ってる気がするが……」

「気がする……じゃねえぞ八雲。本当に走ってるんだよ、あのチビ助に……。しかも不機嫌だからマズイぞ……」

「マズイって、どういう——」

バリバリバリバリバリバリツ!!

「グギヤアアアア!!」

刹那、蒼雷龍から蒼い雷撃が広範囲に放出され、合成獣に激しい電撃が走り抜いた。「あ、危なかったあ……」

間一髪、八雲とコゲンタ、そしてリアス率いるグレモリー眷属の女性陣は雷撃を免れた。

「な、何で俺まで……」

「あ、あははは……」

だが、一誠と祐斗は雷撃の餌食になり、髪の毛もアフロの様にモツサリしていた。

「確か、あのドラゴンが外敵と定めた相手に雷撃する習性を持つてたな。合成獣やオレ達を外敵として認識してるな……」

「なるほど……つて、コゲンタ!?!」

「何だ——」

瞬間、コゲンタは宙に上がった。

「ぬわあああああつ!?!」

跳躍したからではない。合成獣の蔓がコゲンタの足を捕らえて持ち上げたからだ。

「コゲンタ!?! 今助ける!?!」

コゲンタを捕らえてる蔓を切ろうと、八雲は大きく跳ぶ。

バシンツ!

「ぐはっ!?!」

だが、空中で合成獣の蔓に弾かれてしまい、八雲は地面に叩き付けられてしまった。

「八雲!?!」

「大丈夫ですか!?!」

心配して駆け寄るリアス達に蔓が再び襲い出す中、その横を抜く影が八雲の視界に

入った。

「ワンっ！ ワンっ！」

くうろだ。まるで主人を傷付けた者に噛み付く様に、くうろは八雲達を襲う蔓に噛み付いた。

「ガアアアアアッ！」

「キャインっ！」

「ガー！」

しかし、その行為に合成獣は怒りを感じ、くうろと蒼雷龍を蔓で捕まえてしまった。その光景に、八雲は起き上がりながら言う。

「抜け出せそうか、コゲンタ？」

「ダメだ。虎鉄も落としちまったし、粘液のせいで力が入らねえ……」

（どうする？ 飛び出そうにも空中で蔓の攻撃が待つてるし、リアス部長達も魔力を消費してるから厳しいぞ。何か……）

その時だった。八雲がコゲンタ達を助けだそうと考える中、左手の「二十四気の神操機」の宝玉が輝き、ある事が八雲の頭に浮かんだ。

「……ぶつつけ本番だが、やってみる価値はあるか。——コゲンタ！」

「どうした！」

八雲の呼び掛けにコゲンタは視線だけを向けると、八雲の手には闘神符が2枚握られており、コゲンタはある事を考えては口に出す。

「まさか、オレと交代なのか？ だけど無理だ。蔓のせいでオレの符力が足りない——」

「違うぞコゲンタ。コゲンタを交代する為に出したんじゃない」

「何だと？ じゃあ、まさか……」

「ああ、そのまさかだ！」

そして投げたのは「窓」の闘神符。普段はシキガミを交代する為に使うのだが、八雲は初めて別の使い方を行った。

「シキガミ、降神！」

そう…… “シキガミの複数降神” だ。

まずは1体目。十五夜満月が輝くすつき野原を跳ね回り現れるのは、ロップイヤールサギに似た獣人的な外見を持つシキガミ。修道院の様な和服姿と首に掛かった大きな数珠が清楚で可憐な雰囲気を出していた。

「柸のホリン、見参！」

次に現れたのは、ゴリラに似た獣人的な外見を持ったシキガミ。烏帽子を被った神主の様な姿とは裏腹に、鍛え抜かれた肉体が装束を裂け、その豪腕が “窓” を突き破る。

「榎のコンゴウ、見参！」

「よし、出来た！」

グツと拳を握りしめる八雲は複数同時降神の成功に喜ぶと、ホリンとコンゴウは嬉しそうに語り掛ける。

「さすが八雲はんや。毎朝鍛練をきばったさかい、符力もぎよーさん増えたんやね。おかげでウチ達シキガミも、ぎよーさん呼ばれるよ」

「新たな知恵を身に付けたか。喜ばしい事だ、八雲よ……」

「神器が教えてくれたんだ。おかげで闘いの幅が広がった」

そして、八雲は2人に指示を出す。

「俺がコゲンタ達を助ける！ その間、コンゴウは合成獣を！ ホリンは皆の援護を！」

「あい分かった！」

「はいな！」

指示を受けて2人が駆け出す中、八雲はホリンに印を切る。

「離兌震離！」

「必殺、浄化之産声!!」

すると、ホリンの瞳と首に掛けた陰陽数珠「みどり嬰兒」が神秘的に輝き、口から発せられた念と言霊ことだまが合成獣の蔓を塵に返した。

「リアスはん達、大丈夫ですか？」

「ええ……。新しいシキガミね。助かったわ」

「ホリンです。以後、よろしゅう願います」

軽い挨拶を交わす中、合成獣の蔓がホリンを襲い掛かる。

「服融かすなんて最低なやつぢやな。——ハアッ！」

しかし、ホリンは自身の長い耳をパンチの様に繰り出して蔓に対抗した。

「ほら、そこでアフロなつとるイケメンとエロツ子。きばつて退治すんで！」

「は、はい！」

「ちよつ、エロツ子つて何だよ!？」

ホリンが加わり3人はリアス達を守る一方、コンゴウと八雲も行動していた。

「震兌坎兌！」

「必殺、微塵粉砕下死！」
みじんふんさいおろし

印を切った瞬間、コンゴウは腕を上げては符力で作られたエネルギー状の腕を出現さ

せると、その腕を伸ばしては合成獣の上に雨の如く連続で降り注がれた。

「キャワンっ！」

「ガー！」

微塵粉砕下死が止まった瞬間、くうろと蒼雷龍の拘束が解かれて2匹は落下する。

「危ない！」

そして、今度こそ八雲は印を切った。

「震離坎兌！」

印を切ると同時に合成獣に駆け出すコゲンタを他所に、印を切られたコンゴウの手中に光の粒子が溢れ、陰陽長槍“無双樹”が形成されては矛先を地面に向けた。

「必殺、大樹根地脈鎖！！」

高らかに叫ぶと同時に、コンゴウは無双樹の矛先を地面に突き刺した瞬間、地面から無数の木の根が地面を走り、合成獣に襲い掛かせた。

「グギャアアアアツ?!?!」

その結果、合成獣の強固に張り巡らせた根が全て引き抜かれ、巨体が高く宙へ舞った。

「うおおおおおっ!!」

そこへ追い討ちを掛ける様に、コゲンタはコンゴウが発動した木の根を伝って駆け出しては木の根の先から高く跳躍した。

「八雲お!!」

「ああ！ 離、震、離、兌!!」

合成獣よりも高く上がったコゲンタの言葉に、八雲は印を切る。その直後、コゲンタは西海道虎鉄を天高く翳し、刀身に“二十四気の神操機”から送られた気を集中させた。

「ひっさああああつツ！」

雄叫びと共に刀身に纏った気が噴出し、コゲンタは合成獣の頭上目掛けて唐竹割を繰り出した。

「怒涛斬・魂・剣!!」
どとうざん けん

繰り出されるコゲンタの必殺剣……怒涛斬魂剣。

「ギャアアアアツツ!!」

その結果、合成獣は断末魔と共に一刀両断され、光の粒子となって消え去ってしまった。

「っしやあツ！」

「へへっ、どんなもんよ！」

討伐に成功した八雲は後ろを振り向くと、リアス達も喜んでいた。

仲間を守れて喜ぶ八雲。そんな仲間の笑顔を見て、八雲はコゲンタとコンゴウと共に側に寄るのだった。

「ド……………ド……………ドラゴえもおおおおおおんツ!!」

涙を流しながら、合成獣が爆発した所を見つめる一誠を、そっとしておいて……。

「……ア、アーシア・アルジェントの名において命ず！　な、汝、我が使い魔として、契約に応じよ！」

それから暫くして、リアス達は使い魔の森の入り口に戻っては、アーシアが朱乃のサポートの下、使い魔の契約儀式を執り行っており、たつた今、契約が完了した様で、アーシアの使い魔が彼女にじやれ始めた。

契約儀式の魔方陣の中央にいたのは、あの蒼雷龍の子供。合成獣に捕らえられた時に怪我をしてしまい、アーシアが皆と共に“聖母の微笑”で癒したのだ。その結果、アーシアにとても懐いてしまい、使い魔として迎え入れたのだ。

ザトウウジ曰く、蒼雷龍は心の清い者に心を開き、悪魔に降らないドラゴン。だが、アーシアは誰もが認める清い心を持っており、蒼雷龍の条件をクリアしている。見事アーシアはレアドラゴンをレアな条件でゲットした訳だ。

「うふふ。くすぐったいですよ、ラッセーくん」

「ラッセー？」

リアスの疑問に、アーシアは答える。

「はい。雷撃を放つ子ですし、イツセーさんから名前をいただきました。雷撃を放ちながらもイツセーさんの様に元気な子であって欲しいと思ったので……」

そんな中、八雲はその光景と共にザトウウジの会話に目を向ける。そこには、霊体と
なっているホリンとコンゴウが、ザトウウジに何か説明している。

『一応、うちとコンゴウはんとで森の木々通して符力を流したさかいに、暫くしたら元の
生き物達も戻りなはる』

『当分は観察だけにしておく事だ。また厄介事になれば、生き物のいない森に戻ってし
まうぞ』

「そうか、分かったよ！ いやあ、本当にありがとう！ おかげで使い魔マスターの修行
を再開させる事が出来るよ！」

ホリンとコンゴウに何度も礼を言うザトウウジ。そんな光景を見て八雲は微笑まし
く思う中、隣から聞こえるすすり泣く声に目を向けた。

「……………うう、ドラゴ衛門……………」

その声の主は、今だに合成獣の死に悲しんでいる一誠であり、さすがにかわいそうと
思ったのか、八雲は一誠の肩に手を置いた。

「あんまり悲しむな。今日はアーシアがラッセーを使い魔にただけでも喜ぼうぜ」

「で、でもよお……………」

「それにさ……………」

そあいて、八雲は一誠にだけ聞こえる様に言った。

「世の中の女性が巨乳になっても、所詮見るだけだろ？」

「なっ!？」

刹那、一誠に電撃が走っては冷静に考える。

世の中の女性が巨乳になっても、所詮は横目でそれとなく観賞するだけ……。恋人でない限り、触らせてくれる確率は限りなく0と言えるだろう。

「それに比べてリアス部長はどうだ。眷属を大事にしてくれるリアス部長なら、頑張り次第であの大きな胸を好きにさせてくれるかもしれないぞ？」

「吉川……」

「ん？」

「意外とエロかったんだな……」

一誠の一言に、八雲はずっこけた時だった。

「イツセーさん！ ラッセーくんの契約が終わりました！」

「おお、そっか。よろしくな、ラッセー——」

バリバリバリバリバリッ!!

一誠が気軽にラッセーに近寄った際、無慈悲にも雷撃の餌食となり黒コゲになってしまった。

「言うの忘れたけど、ドラゴンのオスは他生物のメスが好きと同時に、他生物のオスが大

嫌いだ」

何故雷撃を食らったのか分からない一誠に対し、同じく黒コゲのザトウウジが捕捉説明する。その奥で祐斗も黒コゲになっており、女性陣は黒コゲにならなかつた様だ。

「オスなら見境なしですか、ラッセーさん……………つておい!」

そして、一誠はある事に気付いた。

「何で八雲も無傷なんだよ!」

そう…………一誠の言う通り、雷撃を浴びた筈の八雲は無傷だつたのだ。

すると、コゲンタは言った。

『言つただろ。八雲は動物に好かれるんだつて』

「だからつて、一体何処でフラグ立てたんだよ!」

『合成獣の蔓から落ちた時に助けてただろ。あそこで、だよ』

「そ、そんな事で懐かれるなんて……………ズルいだろおおおお!!」

そして、一誠は何度目かの叫びを上げたのだった。



使い魔の森から魔方陣ジャンプで八雲達は戻つて来たが、少々厄介な事態が発生し

た。

「ワンっ！」

「……いつの間に、着いて、来たんだ……？」

酔っている八雲の言葉に全員頷く。どうやら、魔方陣ジャンプの終了間際にくうろが飛び込み、一緒に着いて来た様だ。

「あらあら。部長、どうしましょうか？」

「ひとまず、この部屋に居させましょう。それから八雲。くうろの問題が解決するまでの間、お世話主任として任せるわね。私達も交代でお世話するから」

「わ、分かりました……」

「ワンっ！」

八雲の返事にリアスは頷くと、指を鳴らしてはテーブルにお菓子やジュースを出した。

「それじゃあ、アーシアが使い魔を持てた事を祝してパーっといきましょう♪」

その言葉に皆がはしゃぎ、笑顔で小さなパーティーを過ごすのだった。

「翌朝、あんな事態が発生するとは知らずに」……。

第15話：お世話主任、八雲

「行つてきまーす」

使い魔の森で起こった合成獣騒動から翌朝。何時もの登校時間より早く、八雲は学園に向かつていた。

『ちよつと早いんじゃないか?』

「いいんだよ。くうろの餌やりもしないとダメだしな」

昨夜、使い魔の森で出会った子犬……くうろ。

魔方陣ジャンプ終了間際にくうろが着いてきた際、八雲はリアスにくうろのお世話主任と指名された。そしてその初日、八雲は早い足取りで学園の旧校舎に向かつていたのだ。

「餌はドッグフードでいいよな?」

『でも、あんな森で出会ったんだろ? 市販の餌を食うかどうか……』

「餌の用意はリアス部長がしてくれるらしいな。もし食べなきや、皆に相談してみるか……」

それから学園に到着する迄、八雲はコゲンタと戯れない会話をするのだった。

◆
「あれ？」

『お？』

「あら？」

学園到着後、八雲は部室のある旧校舎の入り口に到着しては朱乃と出会った。

「おはようございます、朱乃先輩」

『おーつす、朱乃ねーちゃん』

「ごきげんよう、八雲くん、コゲンタちゃん」

「朱乃先輩も、くうろが気になって来たんですか？」

「ええ。ザトウージさんでも知らないと言われてましたから、私なりにあの子を調べてみようと思いましたが……」

それから八雲は朱乃と会話しながら部室前に到着すると、朱乃は部室の鍵を取り出しては解錠した。

「では、扉を開けますわね」

「すいません。——おーい、くうろー」

入るなり早々くうろを呼ぶ八雲。だが、返って来たのは別の声だった。
「キユイー」

その者は、昨日アーシアの使い魔となったばかりの蒼雷龍の子供……ラッセーだった。アーシアの使い魔ゲットの祝杯の後、くうろが寂しくならない様にとアーシアが残しておいたのだ。

そして、ドラゴンにも懐かれている八雲にラッセーは八雲の頭に乗ると、八雲はラッセーの頭を撫でながら言う。

「やあ、ラッセー。おはよう。くうろは何処にいるんだ？」

言葉が通じたのか、ラッセーは八雲から離れると、ソファーにある小さく盛り上がった一枚の毛布に向かった。因みにこの毛布はリアスがくうろに用意してくれた物である。

「……あれ？」

『何だか……』

「おかしいですわね？」

すると、八雲達はある事に気付いて小声で話す。

「あの盛り上がり方……。まるで一人一人の大ききですよね？」

そう……八雲の言葉通り、毛布の盛り上がり方がおかしいのだ。丸まっている状

態ではあるが、その大きさは子犬の大きさではなかったのだ。

「あの後は皆帰りましたよね？」

「ええ。同時に部室を後にしましたし……」

『じゃあ、誰かがこつそりと戻って一緒に寝たんじゃねーのか？』

「こつそりって、部室の鍵は限られるだろ？」

「それに、鍵は部長と私が管理を……」

その言葉に、八雲達は会話を止めては視線を毛布に向ける。

「じゃあ、今いるのは部長かしら？」

『でも朱乃ねーちゃん。イツセーの朝練の時にはいたぜ？』

「……………」

それから暫く八雲達は考えたが、八雲は意を決して毛布に近付く。

「取り敢えず起こしましょう。何時までもこのままじゃあいけないし……」

そして、八雲は勢いよく毛布を取り除いた。

「おーい。誰だか知らないけど起き……ろ……よ……よ……」

だが、それがいけなかった。

「どうかしました——」

動きが止まった八雲に朱乃も近付くが、その理由が分かった。

「……すー……すー……」

そこに眠っていたのは、生まれたままの姿の少女。

健康的な肌色、宝石の様に綺麗なシヨートの黒髪、華奢な体に似合うスラリとした手足、それに対する大きな胸。

そんな光景を見て、誰が思考を止めないだろうか？

否、断じて否だ！

『……そろそろ思考を戻したらどうだ？』

「はっ……!?!」

コゲンタの言葉に止まっていた思考を戻す八雲。だが、それより一瞬だが、八雲の目の前に眠っている少女の目がゆっくりと開いた。

「……」

寝惚け眼を擦り、上半身を起こす少女。どこか既視感を感じる光景だが、今はそれどころではない。

「……」

「や、やあ……」

そして、少女の視線が八雲を捉えた瞬間、それは起こった。

「(ィ)……」

「ハハ。」

刹那、八雲は倒れてしまった。無論、少女の裸を見て倒れた訳じゃない。

『おい、大丈夫か?』

八雲は覆い被される形で少女に抱きつかれ、床に倒れてしまったのだ。

「……………えーつと、どなたです——」

「御主人様あ!!!」

「……………へっ?」

『……………だと……………?』

「あらあら……………」

唐突な発言に、八雲は止まってしまう。無理もない。こんな姿の少女に言われては、思考も止まってしまおうだろう。

「御主人様、御主人様、御主人様、御主人様、御主人様♪」

そんな中、少女は甘える様に八雲の体を頬擦りし、御主人様と連呼するのだった。

「……………うふふ」

その際、朱乃は怖い位に微笑んでいた……。

◆ 「なるほど……」

あの後、朱乃はリアスに連絡しては部室に来させると、やつと少女に解放された八雲は事情を話していた。

「つまり……誰も入れない筈の部室に、この子が裸のまままで寝ていた。それに伴って、くうろも行方不明なのね？」

「はい、部長」

リアスの言葉に朱乃は頷いた。因みに八雲はと言うと――

「……………」

「御主人様〜♪」

少女に自身の腕を抱かれてしまい、顔を赤くしながら視線を逸らしていた。尚、少女の現在の姿は毛布に身を包んだだけであり、毛布越しから伝わる女性特有の柔らかさが八雲の緊張を更に高めていた。

すると、喋れない状況の八雲にコゲンタがリアスに話す。

『リアスのねーちゃんよお。まさかだと思うが、この女つてもしかして……』

「コゲンタも気付いてるなら、八雲と朱乃も気付いてるわね」

八雲は無言で頷き、朱乃も肯定で「はい」と一言。

「なら、この子の正体は……………八雲」

「……………は、はい」

リアスの意味を悟ったのか、八雲は隣に抱きつかれている少女に視線を移した。

「……………」

「……………」

暫しの沈黙。ジツと八雲に見つめられる少女はキョトンと首を傾げるが、八雲は意を決して呼んだ。

「……………くうろ」

「はいっ！」

「……………やっぱりか」

「やっぱりね……………」

「やっぱりですわね……………」

『やっぱりかよ……………』

そしてこの場にいる者、全員が確信した。

この少女こそが……………くうろなのだ。

「えっと……………くうろ。質問するが……………」

「はい、御主人様！」

「……………いや、その前にその御主人様つてのは止めてくれないか？」
「何故ですか？」

「何故つて……………じゃあ、どうして八雲を御主人様と呼ぶのかしら？」

「……………何でだろ？」

リアスの言葉にくうろは答えるが、八雲の時よりはテンションは下がっていた。

「でも、何でだか分からないけど、一目見た時に思いました。『この人だ』つて…………。この人と出会う為に、私は向かってたんだつて…………」

「俺に？ つてか、何処から来たんだ？」

「分かりません！」

だが、八雲の質問時にはテンションが戻っていた。どうやら、八雲に話し掛けられるとテンションが高い様だ。

『根はまんま犬だな』

「そう言うお前は猫ですね。見た目は…………」

『だから猫つて言うな！』

コゲンタの言葉を返すところ、くうろにも魔力の類いはあるとリアス達は確信する。すると、八雲は改めてくうろに言う。

「分からない？ じゃあ質問を変えよう。くうろは一体何だ？」

「分かりません！」

「……まさかと思うが、記憶が無いのか？」

「はい！ 正確には、『あの森からやって来た以前の記憶がありません』！
くうろは語る。

曰く、どうやって使い魔の森に来たのか分からず、合成獣が根付く頃には疲労からなのか深く眠っていた。だが、合成獣が活動し始めてからは食べられない様に隠れ住み、突如現れた『懐かしい気配』を感じて向かってみれば八雲達に出会ったのだ。

「それで、くうろはどうするの？」

語り終えたくうろにリアスが口を開く。

「あなたの事で私達がお世話しようと思ったのだけれど、人になっちゃったら必要なさそうね。誰かと共に過ごせば、自然と馴染むもの」

「それって……まさかリアス部長……！」

驚く八雲にリアスは笑顔で言う。

「ええ。くうろもあなたに懐いているしね。——それと心配しないで。家の方には私が説得するから」

八雲は確信した。くうろのお世話主任として、八雲の住んでいるつる屋に居候させるのだと……。

「ありがとうございます、リアスさん！」

「どういたしまして。あ、それとこの学園に通える様に準備もするわ。朱乃、手伝ってちょうだい」

「畏まりました。さあ、くうろちゃん。一緒に来てください」

「あ、はい」

そして、リアスと朱乃はくうろを連れ出した。

「……………どうなるんだ、俺の生活」

『……………さあな。だけど、これだけは言える。何時もより騒がしくなるぞ』

天井を見上げる八雲の眩きに、コゲンタはそう言うのだった。

◆
「……………ふう」

部室での騒動が過ぎ、朝の教室に八雲はいた。登校してくるクラスメートに挨拶するが、八雲は今朝の事で考えていた。

（リアス部長。一体くうろを何処にやったんだ？）

連れ出されて待つ間、時間は過ぎて行く。余り待っていると遅刻してしまうので、八

雲は教室に向かったのだ。

「おはよう、吉川」

「おはようございます、吉川さん」

「ん？ ああ。おはようイツセー、アーシア。つてか、早朝にも挨拶し——」

「アーシアちゃん！ おはよー！」

「おはよう、アーシアさん。今日もブロンドがキラキラ輝いているね」

すると、一誠とアーシアに挨拶する八雲を遮り、松田と元浜がアーシアに近寄っては

挨拶をした。

「おはようございます、松田さん、元浜さん」

勿論、アーシアに挨拶を貰い、感無量となる2人。小さいところで幸せを感じる奴等だと一誠は思う中、松田が一誠の肩に手を置いた。

「そう言えばイツセーくん。聞いたよ」

「何がだ？」

「何でもアーシアちゃんと毎日登校しているんだって？」

「そ、それがどうした」

「おかしいじゃないか。何故に毎日同じ方向から朝登校してくるのかな？」

どうやら、一誠とアーシアが噂になっているのを耳にしたらしく、松田と元浜は青筋

を出し、一誠に負の感情を込めた視線を向けていた。

そしてそれを感じた一誠は、ニヤリと口の端を吊り上げては言った。

「いいか、松田、元浜……。俺とお前達は決して超えられない壁で隔てられてしまった。これは仕方ないんだ」

「な、何を勝ち誇ってやがる！」

「そ、そうだぞ、イツセー。アーシアちゃんと仲良くなつたからって——」

「俺、アーシアと暮らしているんだ。1つ屋根の下で。なあ、アーシア」

一誠の言葉にアーシアは頷く。

「はい。イツセーさんのお家でご厄介になっています」

「へっ!？」

「なっ!？」

絶句する2人。一誠の必殺の一言と、笑顔で答えるアーシアを見て、松田と元浜は最早言葉すら出ない状態の中、一誠の攻撃は続く。

「アーシアには今朝も起こされてしまったな」

「イツセーさんはお寝坊さんですからね。うふふ」

「ひでぶっ!？」

「ご飯をよそって貰ったりもするな。アーシアは気が利く子だって、母さんも褒めてい

たな」

「そんな……照れます」

「たわばっ!？」

松田は床に突っ伏し、元浜は口から赤い液体トマトジュースを出しては膝を付いてしまう中、一誠は頬に手を当てて照れるアーシアを、余裕の表情で朗らかに見守っていた。

すると、回復した松田と元浜は顔を一誠に近付ける。

「お前! 本当は色んな可愛い子と知り合っているんだろ?! 理不尽だ! こんなの絶対おかしいよ!」

「イツセー、1人ぐらい俺達に紹介してくれよ! 頼みます!」

仕舞いには土下座する2人。そんな中、一誠は携帯を取り出してはアドレスを検索しては電話を掛ける。

「ちよつと待ってろ」

『……………どれどれ』

その場で2人を待たせ、教室の隅に行つては電話の相手に確認を取る一誠に、コゲンタは気になって近付いた。

『……………は?』

しかし、一誠と電話の相手の会話を聞いた瞬間、とても嫌な表情をしては戻ってきた。

『おいおい、あの声の何処が可愛い子だよ。ランゲツみたいな声だったぞ……』
『ワシと一緒にするな』

(どうした、コゲンタ?)

『いや、別に……』

コゲンタの反応に疑問を抱く八雲だったが、一誠が戻って来ては松田と元浜に言う。

「これ、紹介出来る子の番号。メールアドレスもあるから。数日中に連絡するらしいぜ。その間、メールで仲良くなればすんなりと——」

「サンキュー——」

「ありがとうございます！ イツセー様——」

刹那、土下座をしていた松田は一誠の携帯を奪い、元浜と共に速攻で番号とアドレスを登録した。その動きは八雲でも見切れたかどうか、僅かな差だったとか……。

「お前達、席に座りなさい——」

そして2人が登録を済ました直後、教室から担任が入って来た。

「やべっ。——じゃあなイツセー！ 休み時間になったら詳しく聞かせろよ！」

そう言つて松田と元浜は自分の席に戻ると、朝のホームルームが始まるのだった。

「では、始まる前にお知らせがあります。何と……今日からこのクラスに入る生徒を紹介します」

担任の言葉に教室中が騒ぐ。転校生の話など情報通な生徒でも聞かされていない中、八雲だけはその転校生を知っているのか驚く事はなかった。

「どうしたんだ吉川。他の奴より、やけに静かだな？」

「何か気になるんですか？」

「……あー、イツセー。アーシア。多分その転校生、お前も知ってる奴だ。ってか、昨日会ってる」

「え？」

「昨日会ってるって、お祝いの後は真っ直ぐ帰りましたので誰も会ってませんけど……？」

歯切れの悪い八雲に一誠とアーシアが首を傾げる中、担任は顔を廊下へと向ける。

「それじゃあ、入ってきなさい」

教室の扉が開かれて入ってくる転校生に、全員が静かになる。それもそのはず。その転校生を見て、担任を含む全員が魅了されたからだ。

綺麗な黒髪、青い瞳、凛々しい顔立ち、制服越しでも分かる大きな胸、スラリと伸びた手足。

（……………マジですか？）

そんな転校生を見て、早朝に出会った八雲でさえも、口をポカンと開けて魅了された

のだ。

そんな状況の中、転校生は黒板に自身の名前を書いては挨拶を始める。

「初めまして。狗牟田いぬむた・Oオーキス・くうろです。分からない事が多いので迷惑を掛けると思いますが……皆さん、よろしくお願いいたします」

その転校生とは、くうろだった。

「……くうろ、さん？」

「くうろって……まさか!？」

名前に気付いたアーシアと一誠に八雲は無言で頷く中、担任が捕捉する様に説明する。

「えー、狗牟田さんは少し前まで海外に暮らしていたが、家庭の都合で日本に戻って、この学園に転校してきたそうさ。皆、分からない事があれば手を貸すんだぞ」

(その捕捉……リアス部長か朱乃先輩が考えたのか?)

担任の言葉に八雲達3人以外のクラスメート全員は「はい!」と答えると、担任はくうろに指示する。

「じゃあ狗牟田さん。席は吉川の隣だ。——吉川、色々と教えるんだぞ」

「あ、はいっ……」

そしてくうろは着席すると、八雲に一言。

「よろしくです、御主……………吉川さん」

「……………ああ。よろしく、くうろ」

「はいっ！」

八雲の一言に笑顔で答えるくうろ。だが、その言葉にクラス中に衝撃が走る。

「よ、吉川がいきなり美少女転校生を名前で呼んだぞ?！」

「えっ、2人は知り合いかな?」

「でも、狗牟田さんの反応。知り合いにしては嬉しすぎると思うわ!」

「まさか……………もう付き合ってるのか!？」

様々な憶測が飛び交う中、八雲は頬を掻きながら言う。

「あー、くうろとは昨日出会ったんだ。道に迷ってたらしくて、教えてるうちに仲良くなったんだよ……………」

一か八かの嘘。しかし、それを全員は納得したが、一誠とアーシアだけは違った。

「なあ、吉川……………」

「狗牟田さんって、もしかして……………」

小声で話し掛ける一誠とアーシアにコゲンタが答える。

『ああ、そうだよ。こいつは昨日、合成獣から助けた子犬だ』

「「ええっ!?!」」

その言葉に、一誠とアーシアは驚くのだった。



それから時間が過ぎていき、放課後のオカルト研究部の部室。グレモリー眷属はくろろについて話し合っていた。

「へえ。あの子犬が女の子の子に変身するなんてね……」

「……まるでギャルゲーに出るキャラクター」

「私も初めて見た時は驚きました。どの様に変身したのか、未だに分かりませんし……。アーシアちゃん。くろろちゃんの様子はどうでしたか？」

「は、はい。くろろさんの人気は凄かったです、ね。ク、クラスの方々に積極的に話し掛けたりして、すぐお友達になってましたし……」

「そう。私と朱乃で考えた設定が役に立てたみたいだし、今のところは問題無しね」
顔を赤くするアーシアの言葉に安堵するリアスは、視線を横に移しては呆れていた。

「こ、こら、くろろ……ダメだ……って、ば……ああっ!!」

何故なら、八雲が恥ずかしながら如何わしい声を上げていたからだ。

「はむっ……。御主人様の味がしまふ……」

無論、原因はくうろにある。ソファ―に座っている八雲の膝の上にくうろが対面で座って抱き付き、首辺りを甘噛みしているからだ。

教室で過ごしていた大人しい姿勢が打って変わり、八雲に過剰に甘える姿を見せるくうろ。そんな光景をある者は顔を赤くし、ある者は呆れ、ある者は苦笑し、ある者はうふふと笑顔を作っては黒い何かを漂わしながら見つめていた。

「……それで、放課後まで初対面として話し掛ける様にキツク言っておいた反動が、アレって訳ね……」

「な、何て羨ましい行動だ、ちくしょうっ！ あの時、俺が助けていたら今頃……ぐへへ」

そんな中、くうろの行動に涎を垂らす一誠は羨ましそうにガン見する一方、くうろは全員に見せつける様に、八雲の頬や首もとを舐めた。

「あ、あの、くうろ？ そろそろ、止めなさい………ひうっ！」

「……あむっ………ペロペロ………はふっ」

『おい、くうろのワン子。そろそろ止めろっての！』

「んっ……うるふあい、です……。今まで我慢……んちゅっ……してた………もん……」

コゲンタの言葉に耳を向けず、抱き付く力を強めては胸を当てるくうろ。そんな過剰

のスキンシップに、八雲は限界だった。

「……いい、加減につ……。——待て!!」

「っ！」

その時だった。八雲の一言に、くうろはさつきまでのスキンシップを急に止めてはテーブルを越えて後ろに跳び、八雲に対峙する様にソファアールへと座った。

「ふう……。やっと解放された……」

ホツと一息をつきながら、八雲はくうろに視線を向けると、くうろは八雲を見つめながらソワソワと足を動かしていた。

(この辺りは、犬の名残かな……。?)

まるで餌を目の前にして許可が降りるまで待たされる犬を彷彿させられ、八雲が小さく微笑んでいるとリアスが指示を出す。

「それじゃあ八雲。今から八雲のお婆様とお爺様に、くうろをホームステイさせてもらえる様に行きましようか。——朱乃。話し合いが終われば戻るから、それまで頼むわね」

「分かりましたわ、部長」

「行くわよ八雲、くうろ」

「分かりました。行こうか、くうろ」

「……………」

未だに待っているくうろに、八雲はやれやれと感じながらも言った。

「……………」

「っ♪」

そして、くうろは動き出しては八雲の腕に抱き付き、リアスと共に部屋を出るのだった。



それから、リアス達はつる屋に到着しては居間で家族会議が行われていた。

「お爺様、お婆様、そういう事情でこの狗牟田・O・くうろのホームステイをお許し下さいますか？」

くうろの事情説明を終え、リアスは優雅に朗らかに無茶な注文を、おつると赤蘭に注文を突きつけていた。因みに、リアスが考えたくうろの設定は以下の通り。

①両親は海外に住んでおり、親の都合で1人日本で住む事となった。

②しかし住所にあつた建物が数年前に無くなっており、所持していた資金で宿泊するがお金が無くなり、次の仕送り迄にどうするか悩む。

③その時に八雲と出会い、見ず知らずのくうろを助けてくれてはお金まで貸してくれた。

④そして今日、八雲はリアスに相談しては「俺の所はどうだ？」と言い、おつると赤蘭に話し合つて決める事とした。

以上が、くうろの設定だ。無論、③の八雲がくうろを助けた事以外は嘘である。

すると、リアスの説明におつるは微笑んで言った。

「大変やったんやね。……リアスさん、くうろちゃんを家で預かりましょう。おじいさんもいいですね？」

「……………」

おつるの言葉に赤蘭は頷くと、くうろは微笑んだ。

「ありがとうございます、八雲さんのお婆様、お爺様」

「畏まらなくてええよ。近所はおつるさんと呼ばれようから、おつるでええんよ。お家の様に寛いでええから。ね、おじいさん？」

「……………」

「は、はいっ！ 八雲さん、おつるさん、赤蘭さん、不束者ですが、これからよろしくお願ひします」

「あら。何だかお嫁さんが来てくれた様で嬉しいなあ。——八雲ちゃん。色々頑張る

んよ」

「ちよ、おばあちゃん！ おじいちゃんまで！ くうろとは昨日出会ったばっかだつて
！」

頬に手を当てながら言うおつるに八雲は頬を染めて反論すると、いつの間にか赤蘭は祝い酒を持つて来ていた。どうやら、まんまと懐柔された様だ。

こうして、くうろは八雲とひとつ屋根の下で暮らす事となり、八雲の隣の空き部屋を整理してはリアスが用意したくうろの荷物を運ぶのだった。



そして数時間後。くうろの部屋の整理を終えた八雲は、くうろと一緒にリアスをつる屋の近くまで見送っていた。

「本当にありがとうございます、リアスさん！」

「別に構わないわ。——くうろの今後の事だけど、オカルト研究部に入ってもらわうわ。私達で無くした記憶を探してあげるわ」

「はい！」

「リアス部長。その事ですが、くうろについて幾つか分かった事が……」

「何か分かったの?」

リアスの言葉に、八雲はくうろを見ながら話し出す。

今日を通して分かったは、くうろには「学業や生活に支障がない程の知識を身に付けている」事だ。しかし、歴史の授業では分からない事が多かつたらしく、誰でも分かる様な日本や世界の歴史は全然分からなかったのだ。

その事を聞いて、リアスは口に手を当てる。

「んー、随分……何と言うか、知っている事と知らない事がちぐはぐね。まるで必要最低限の事しか書かれてない、マニュアルの様な知識ね……」

「もしかしたら、誰かが意図的にくうろの記憶を消したのかもしれませんが……」

「……………」

心配そうな顔をするくうろに、リアスは肩に手を置く。

「そんな顔をしないで。私達が必ず、あなたの記憶を取り戻してあげるわ」

「……………」

「うん。素直でよろしい」

そう言つて、リアスはくうろに離れては言う。

「それじゃあ八雲。くうろの事、お願いね」

「はい。それじゃあリアス部長、また明日。バイス！」

「リアスさん。また明日です」

「ええ、またね」

そして、リアスは歩き始めては、魔方陣ジャンプが出来そうな所まで向かうのだった。

「それじゃあ御主人様。私達も帰りましょうか」

「なあ、くうろ。外でそんな風に呼ばないでくれ」

「えー」

「えー、じゃない。仲間達の前だったら言っていいいが、それ以外の人がいる前では言うなよ」

「……………分かりました、御主——」

「くうろ」

「……………八雲さん」

「よろしい」

そして八雲は笑顔でくうろの頭を撫でると、くうろも幸せそうに笑うのだった。

「ふふっ、何だかいいカップルね。本当に八雲の花嫁になるんじゃないかしら。くうろは……………」

そんな2人の背中を見て、リアスはやれやれといった微笑みで呟いた。

「……………花嫁、か」

その際、寂しげな表情を浮かばせて……。

第16話：悩める紅髪の滅殺姫〈ルイン・プリンセス〉

「……………」

結界が張られた学園。旧校舎にある森の中、小猫は辺りを警戒していた。

堕天使やはぐれ悪魔の類いが現れたのではない。小猫がある者と模擬戦を行っており、朱乃が結界を張っているからだ。

（……………何処なの？）

眷属の中でも気配に敏感な小猫。しかし気配を探るも相手が見つかる事はなく、知らない内に小猫に焦りが生じていた。

（……………気配も無い。ここにはいない——）

刹那、小猫は思考を無意識に止めた。

「……………」

何故ならその瞬間、小猫の真後ろから人影が現れ、小猫の首を絞めようと両手を伸ばしては首を掴んだからだ。

「っ!!」

しかし、それが幸いだった。触れられた瞬間、小猫は反射的に片足で踏ん張り、後ろ

蹴りを繰り出した。

「……………」

だが、蹴りに残った感触に違和感を感じて小猫は後ろを振り返ると、地面に落ちてあつたのは制服の上着とブラウス……。先の違和感の正体は、その2着だけを蹴った感触の様だ。

「……………間一髪でした」

「……………」

そんな小猫に声を掛ける者。小猫は視線を漂わせ、模擬戦開始以来にその者が視界に入った。

木の枝の上。黒いタンクトップと制服のスカート姿で、小猫を見つめるくうろが……。

何故、小猫がくうろと模擬戦をしているのか？

その理由は、くうろが八雲とひとつ屋根の下で暮らす事となつて数日後、くうろの記憶探しの一環として八雲が一誠達の朝練に参加させた時、高い身体能力を見せたのだ。

その身体能力は今の一誠よりも高く、八雲とは互角の組み手をグレモリー眷属に見せており、八雲以外の者と模擬戦をしたいと言つたくうろに、リアスは眷属達にも手伝わせているのだ。

因みに、現在くうろが模擬戦をしたのは八雲と祐斗であり、八雲は引き分け、祐斗はあと一方の所で負けてしまっている。そして今夜は小猫との模擬戦だ。

すると、くうろは枝から飛び降りて着地しては構える。

「そろそろ時間も迫ってます。次で終わらせましょうか？」

「……いいですよ、くうろさん」

見つめ合い構える2人。木々が擦れる音のみの空間で、先にくうろが動き始めた。

(……やっぱり)

ゆっくりと、ゆらりゆらりと向かうくうろの歩みに小猫は確信する。くうろが一步進む度、足音が聞こえないと同時に、くうろ自身の気配が薄れていたのだ。

「っー」

近付いて来るくうろに小猫も動く。自身の小柄な体を駆使しては懐に飛び込み、戦車”の特性である馬鹿げた腕力の拳を与えた……かに見えた。

「え？」

しかし、そんな必中の間合いで小猫の拳は空を切った。逆に――

ズン!!

「か……は……!!」

小猫の見える景色が反転。その瞬間、地に打ち付けられては全身に強烈な衝撃が走

る。拳を切った瞬間、くうろが小猫の後ろに周り込み、技を繰り出したのだ。

「強固な防御力でも、衝撃は伝わるでしょう。なので、力一杯繰り出させてもらいました」

「……負けました」

勝負あり。

くうろは仰向けになった小猫を起こすと、両者称える様に握手を交わした。

「……まさかのスープレックスとは……。私にも教えて欲しいですね」

「さっきのは御主人様から教わったので、御主人様に教えてもらった方が早いですよ」

「八雲先輩が？」

小猫の言葉にくうろは頷く。その時、2人の横から拍手が聞こえた。

「お見事お見事。いい模擬戦だったよ、2人共……」

「御主人様！」

「八雲先輩……」

現れたのは八雲。その後ろに朱乃と祐斗も現れると、くうろは嬉しそうに八雲に抱き付いた。

「御主人様！ 見ててくれましたか！」

「ああ、上手かったぞ」

「えへへ♪」

数日できうろのスキンシップに慣れたのか、八雲はくうろの頭を優しく撫で、くうろも嬉しそうに目を細めた。

そんな中、祐斗と朱乃が小猫に話し掛ける。

「どうだった？ くうろ彼ちゃん女の動きは……」

「……動きに無駄がありませんでした。私には真似出来ません」

「私達も映像で見ました。くうろちゃんの動きは祐斗くんのように速度を駆使するのではなく、気配を切り替えて巧みに小猫ちゃんを翻弄してましたわ」

「珍しい戦闘スタイルだったしね。気配を消して相手が認識する前に倒す……暗殺者に近かった。あの時、僕の足が滑っていなければ、勝てなかったかも……」

「じゃあ、言うなればくうろの戦闘スタイルは サイレント・キリング “無音暗殺者” か……」

「“無音暗殺者”……素敵です、御主人様！」

祐斗の言葉に八雲は命名すると、くうろは気に入ったのか頷いた。その際、コゲンタは『中二病みたいだな……』と、内心思ったとか……。

「では、そろそろ部室に戻りましょうか。アーシアちゃんとイツセーくんが戻ってくる頃でしょうし……」

朱乃の言葉に全員が頷く。

因みに、この場にはない一誠とアーシアは悪魔の仕事をしており、アーシアに至っては初めての仕事なのだが、共に暮らしている一誠がアーシアを過保護に心配し、最初の内はアーシアの助手としてリアスに許可を貰い、同行しているのだ。そして、全員はリアスがいる部室へと戻るのだった。

◆ 「部長。ただいま帰還しました」

一方、オカルト研究部の部室。床の魔方陣が輝き出しては一誠とアーシアが現れた。どうやら、アーシアの仕事を終えて戻った様だ。

「……………」

しかし、一誠の報告はリアスに届いていない様で、リアスは物思いに耽つては深い溜め息をついていた。

「部長、ただいま帰還しました！」

そんなリアスに一誠は少し音量を上げて言うと、リアスはハッと我に返った。

「ご、ごめんなさい。少しボーツとしていたわ。ご苦労様、イツセー、アーシア」

「部長。ただいま戻りましたわ」

その直後、朱乃達も部室に戻ってくると、八雲が一誠とアーシアに話し掛ける。

「お疲れ様。その様子だと、仕事は上手くいったのか」

「はい。イツセイさんにも手伝ってもらった所もありましたが、契約者の方に喜んでもらいました」

アーシアの言葉に八雲は納得する様に頷くと、リアスが全員に言う。

「皆もご苦労様。——八雲、くうろ。今日はもう上がっていいわ。お疲れ様」

「分かりました。それじゃありアス部長、皆、バイス！」

「バイスです、リアスさん！」

2人が出るのをリアス達が笑顔で送る中、一誠はリアスに視線を向けて思った。

「……………」

その時のリアスの笑顔に、違和感を感じたのを……。



「はふう〜♪ 御主人様の手、暖かいですう……」

その日の夜。くうろは八雲と共に八雲の自室で寛いでおり、八雲はくうろのご褒美として膝枕をしながら頭を優しく撫でていた。

「筋肉ついてるから、硬くないか？」

「はい。でも、暖かくって気持ちいいですよ……」

「……そうか」

そんな中、くうろは八雲に言った。

「……御主人様」

「ん？」

「今日のリアスさんの様子、変でしたね？ 悩んでいると言うか、思い詰めてる様な

……」

「……そうだな」

その事については八雲も気になっていた。最近リアスは考える事が多くなり、目を離しているとボーッとしては溜め息も多くなっていたのだ。

「くうろは気になるのか？」

「はい……。リアスさんには、おつるさん達に話し合ってくれた恩がありますしね……」

「……じゃあ、鍛練の時にでも然り気無く訊いてみるか？」

「……いいんですか？」

八雲の言葉に驚いたのか、くうろは起き上がっては八雲の顔を見つめると、八雲は頷く。

「悩み過ぎもよくないだろうしな。理由が分かれば俺達でも役に立てるかもしれない」

「……やっぱり、御主人様は優しいです」

「ありがとう。——それじゃあ、そろそろ寝ようか」

その一言にくうろは頷いては部屋に戻り、八雲も就寝に入るのだった。



その日の深夜の事だった。

「あー、毎夜心身共に疲れますな」

アーシアと共に帰宅した一誠は自室で一休みしていると、突如部屋の床に紅く光る魔
方陣が現れた。

「……って、俺ら眷属の紋様だ!」

現れたのはグレモリー眷属の魔方阵。誰が俺の部屋に……と、一誠が疑問に思う中、
魔方阵から人影が現れる。

「部長……?」

現れたのは、思い詰めた表情を浮かべたりアス。

「部長。どうしたんですか?」

「……イツセー」

何かあったのかと思いい誠は声を掛けたが、リアスは一誠を確認するなり、ズンズンと詰め寄り、開口一番に衝撃的な事を言い放った。

「私を抱きなさい」

「……………はい？」

一瞬、リアスは何を言っているのか分からなかった。

自分の耳がおかしくなったのではと一誠が思う中、追い打ちを掛ける様にリアスはダメ押し的一声を言った。

「私の処女をもらってちょうだい。至急頼むわ」

そんな刺激的な言葉に、一誠の思考がショート寸前となった。

「ほら、ベッドへお行きなさい。私も支度をするから」

戸惑う一誠を前にして、リアスは制服を脱ぎだした。すぐに下着を露にするリアスに、一誠は無意識に生唾を飲み込んでしまう。

「ぶ、部長！ こ、これは！」

「いろいろ考えたのだけれど、これしか方法がないの」

気が付くと、一誠はリアスにベッドへと押し倒されていた。

「既成事実が出来てしまえば文句もないはず。身近でそれが私と出来そうなのは、あな

たしかいなかった」

馬乗りになるリアスの紅髪の匂いが鼻孔をくすぐり、一誠の思考を鈍らせる。

「まだ足りない部分もあるけれど、素質はありそうなものね。頼んでから数分で情事までいつてくれるのは、あなたぐらいなもの」

「ぶ、部長……」

そしてリアスはブラジャーのホックに手を掛けてはホックを外すと、大きな胸が一誠の前に再び見えた。

「イツセーは初めてよね？ それとも経験が？」

「は、初めてです！」

するとリアスは一誠の右手を取り、自身の胸に当てた。

むにとつと極上に柔らかな感触。その感触が五指に伝わり、一誠の頭がパンクしそうだった。

「分かる？ 私も緊張しているわ。胸の鼓動が伝わるでしょう？」

その言葉に一誠はリアスをよく見ると、リアスの白く滑らかな肌が赤みを帯び始める中、リアスは一誠の服を脱がしていた。

「で、ですが！ お、お、俺、自信がちよつとないうな！」

「私に恥をかかせるの？」

その一言で、一誠の頭はボンツと理性が飛んではリアスの肩を掴み、逆に押し倒してしまった。

一誠のベッド。一誠の下にはほぼ全裸のリアス。処女をもらってくれと言われ、一誠は覚悟を決めた……………その時だった。

「……………え？」

突然、カツと再び部屋の床に光り輝き、何事かと思いい床を見ると魔方陣が浮かび上がっていた。その魔方陣はグレモリー眷属のものだったが、今回のそれは白銀に輝いている。

「……………一足遅かった訳ね……………」

それを見たりアスは嘆息しながら忌々しく見つめていた。

「……………」

やがて魔方陣から現れたのは、銀髪のメイドだった。メイドは一誠とリアスを確認するなり、静かに口を開いた。

「こんな事をして破談に持ち込もうという訳ですか？」

メイドが呆れた様に淡々と言う中、リアスは眉を吊り上げる。

「こんな事でもしないと、お父様もお兄様も私の意見を聞いてはくれないでしょう？」

「この様な下賤な輩に操を捧げると知れば旦那様とサーゼクス様が悲しまれますよ」

呆然とする一誠に視線を向けながら言うと、メイドの言葉にリアスは更に不機嫌な様相を見せる。

「私の貞操は私のものよ。私が認められた者に捧げて何が悪いのかしら？ それに、私のかわいい下僕を下賤呼ばわりしないでちょうだい。例え、兄の『女王』であるあなたでも怒るわよ、グレイフィア」

それを聞いたメイド……グレイフィアは嘆息しながらも、床に放置されたリアスの制服に手を伸ばしては上着を掛けた。

「何はともあれ、あなたはグレモリー家の次期当主なのですから、無闇に殿方へ肌を晒すのはお止めください。只でさえ、事の前なのですから」

すると、グレイフィアは一誠に視線を移して頭を下げた。

「初めまして。私はグレモリー家に仕えるグレイフィアと申します。以後、お見知りおきを」

「……………」

クールな印象に、美しい銀色の髪と瞳。グレイフィアに見惚れてしまう一誠に、リアスは無言で頬をつねっては半眼で口をへの字に曲げている。

「グレイフィア。あなたがここへ来たのはあなたの意志？ それとも家の総意？ それとも、お兄さまのご意志かしら？」

「全部です」

グレイフィアの即答に観念したのか、リアスは諦めた様に深く息をつく。

「そう。兄の『女王』であるあなたが直々人間界へ来るのだから。そう言う事よね。分かったわ」

そう言つて、リアスは制服に手を掛けては袖に腕を通していき、一誠は素晴らしい裸体が隠れていく光景を見ては後で後悔する事が分かつてしまった。

「ごめんなさい、イツセー。さつきまでの事は無かつた事にしてちょうだい。私も少し冷静ではなかつたわ。今日の事はお互いに忘れましょう」

「は、はあ……」

「イツセー？ まさか、この方が？」

「ええ。兵藤一誠。私の『兵士』で、『赤龍帝の籠手』の使い手よ」

「……『赤龍帝の籠手』。龍の帝王に憑かれた者……」

一誠の名を訊いては驚愕した表情で見るグレイフィアだったが、突然異質なものでも見る様な目で一誠を見つめる。

そんなグレイフィアに一誠が内心疑問に思う中、リアスはグレイフィアに言う。

「話は私の根城で聞いわ、グレイフィア。朱乃も同伴でいいわよね？」

「『雷の巫女』ですか？ 私は構いません。上級悪魔たる者、『女王』を傍らに置くのは

常ですのぞ」

「よろしい。——イツセー」

チュツ。

「……………え？」

突然だった。

一誠の方に向き直ったリアスは歩み寄り、一誠の頬へとキスしたのだ。

「今夜はこれで許してちょうだい。迷惑を掛けたわね。明日、また部室で会いましょう

……………」

そう別れを告げ、リアスはグレイフィアと共に魔方陣の放つ光の中に消えていった。

その時、リアスはいつても以上に悲しげな表情を浮かべたのとキスや胸の感触が忘れられず、一誠はその夜は一睡も出来なかったとか……………。

◆ 早朝の公園。

そこには、鍛練時に着る柔道着姿の八雲と体操服のくうろの2人だけがいた。因みに、学園指定なのか、くうろの下はブルマだった。

すると、八雲は見ていた携帯の画面を切っては溜め息をつき、くうろは訊いた。

「どうでしたか？」

「……今日は来れないとき。リアス部長とイツセー」

「はあ……。昨夜の作戦が無理になりましたね」

「がっかりと肩を落とすくうろ。どうやら、リアスとイツセーが朝練に来れないと断りを入れてきた様だ。」

『それにしても突然だな。リアスのねーちゃんはともかく、イツセーも来れないなんてな……』

「何かあったのか、それとも体調が優れないのか……。何れにせよ、放課後まで待つのは長いしな。昼休みにでも、あの人にリアス部長の悩みを知ってるか訪ねてみよう」

八雲の言葉にコゲンタも頷いた。

「今日の練習、どうしましょうか？」

くうろの言葉に八雲は答える。

「今日は仕方ない。リアス部長達にも見せたかったが、俺達だけでするか」

『おっ！ それじゃあ、"アレ"を試してみるのか？』

コゲンタの言葉に八雲は頷き、唐突に闘神符を数枚取り出すと、くうろは訪ねる。

「御主人様。一体、何をされるんですか？」

「これか？　『闘神符の新しい可能性』を試すのさ……」
 そして八雲は姿と気配を隠す【隠】の闘神符を数枚、鍛練する場所を囲む様に配置してから鍛練を始めるのだった。



それから時間が経過。朝の学園の廊下で、それは起こった。

「イツセエエエエエエエエエエツツ!!」

「死ねええええええええええ！」

ドゴツ！

げっそりとした状態の一誠に、憤怒の形相をした松田と元浜が高速で駆け寄り、首元に2人のラリアットが炸裂したのだ。

「ツゲホ、いきなりだな——」

「ふ、ふざけんなああああああ！」

「イツセー！　お前って奴は！」

「……ナンダヨ、イツタイ」

わざとらしく知らぬ存ぜぬの態度を取る一誠だが、2人の激昂は止まらない。

「ふざけんなよ！ 何だ、あれ!? どう見ても格闘漫画の強敵みたいな漢おとこじゃねえか！
しかも何でゴスロリ着てんだよ！ 最終兵器か!？」

「どうした、騒々しい」

そんな松田が泣きながら訴える中、一誠達の後ろから八雲とくうろが合流した。

「あつ、おはようございます。吉川さん、くうろさん」

「おはよう、アーシア」

「おはようです。——あの、これは一体?」

くうろの言葉にアーシアも再度一誠を見ると、松田と元浜にダブルブレインバスターを食らわされており、2人は一誠に体裁しては教室へ戻った後だった。

「……大丈夫か?」

「あ、あんまり……大丈夫じゃない……」

それから八雲は一誠に理由を訊いた。

「どうやら、数日前に松田と元浜に教えた連絡先は、悪魔稼業のお得意様であるミルたんであり、ミルたんの事を聞いていた八雲は呆れた顔をして一誠に言った。

「そりゃあ、松田達も災難だったな……。つてか、イツセーもふざけすぎだ」

「……反省します」

反省する一誠に八雲は「よろしい」と頷くと、今朝の事について質問した。

「それで、朝練が出来なかった理由は——」

「御主人様」

すると、くうろが何かに気付いて話し掛けるが、八雲は一見する。

「くうろ」

「あ、ごめんなさい……。——八雲さん」

「どうした？」

「何か、イツセーさんから漂ってるんですが……」

「何がだ？」

「微かに匂います。何と言うか、栗のは——」

『わーわーわーわーわあーっ!!』

刹那、現れたホリンとクラダユウは声を出してはくうろの言葉を遮った。

「どうした？」

『な、何もあらへんよ!』

『ええ! 八雲さんには関係無い事ですので!』

そう言う中、ホリン達はくうろに詰め寄っては小声で話し掛ける。

『あかんよくうろはん。女の子がそないな事を言うんはやすけないよ』

『そうですよ。あまり下品な事を言うと、八雲さんに嫌われますよ』

「っ!? それは嫌だ!」

くうろはイヤイヤと首を激しく横に振る中、八雲は一誠を立たせていた。

「それじゃあ、俺達も教室に行こうか」

「ああ……」

すると、八雲は一誠にだけ聞こえる様に言った。

「それと、体に響くまでエロスに没頭するな。注意するんだぞ」

「どうやら、くうろの言葉は聞こえていた様だ。」

「……………」

その言葉に、一誠は顔を両手で隠すしかなかった。

「……………イツセイさん。どうしたんでしょうか?」

『いや、アーシアは知らなくていいからな』

そして、首を傾げるアーシアにコゲンタは気をつかうのだった。



昼休み。生徒達が昼食やお喋り等を楽しむ時間は、生徒会室でも同じだった。

「……………そう言う訳で、リアス部長が何を悩んでいるか、ソーナ会長は知ってますか」

「？」

「……………そうね」

そんな生徒会室に、八雲はリアスの事についてソーナに教えてもらおうと生徒会室に足を運んでいた。因みにくうろはクラスの女子と交流を深める為に、八雲とは別行動をしている。

「……………」

そんな中、ソーナ以外にも生徒会メンバーの1人が八雲とソーナの様子を見ていた。

「会長。その方が、前に言ってた……………」

「ええ。——紹介するわ。彼女は森羅^{しんら}椿^{つばき}姫。副会長であり、私の『女王』よ」

「森羅椿姫です」

丁寧^{ていねい}に頭を下げる椿姫。

「どうも。吉川八雲です」

『おつす！ コゲンタだ！』

八雲達も挨拶し終わると、ソーナは本題に入った。

「リアスの悩みですが、恐らく家の事情で悩んでいるのでしよう」

「家庭の事情、ですか……………。両親と仲が悪いとか？」

「いいえ」

八雲の言葉にソーナはキツパリと否定しては一言。

「婚姻の事です」

「婚姻って……リアス部長、結婚するんですか？」

「近い内にはするかもしれませんが。……内緒にしてもらいたいのですが、個人的にリアスとその許嫁の方とは似合わないんです……」

悩む表情をするソーナに、八雲は気付く。

悪魔としては種族繁栄に繋がるのでソーナは賛成だが、友人として見ればソーナは反対なのだ……。もっとも、リアスの許嫁を見た事が無いので、八雲としては答えにくいのだが……。

「……難しい問題ですね」

「ええ。——吉川くん。リアスの眷属の皆と協力して、リアスを支えてください」

「もちろん。リアス部長には恩がありますしね。——それじゃあ、俺は戻ります。色々話してくれてありがとうございました」

そして八雲は立ち上がると、ソーナにつる屋の和菓子が入った紙袋を渡した。

「これは話してくれたお礼です。生徒会の皆さんと食べてください」

「ありがとう」

「それじゃあソーナ会長、森羅副会長、バイスです」

『バイス！』

そして八雲は生徒会室を出ると、ソーナと椿姫は扉を見つめては言った。

「会長。バイスとは一体……？」

「さあ……。ですが、とても信頼感を感じました……」

そう言ったソーナの表情は、どこか優しいと椿姫は思ったのだった。



「部長のお悩みか……。多分グレモリー家に関わることじゃないかな？」

放課後。一誠とアーシア、八雲とくうろが旧校舎の部室に向かう途中、祐斗が合流した。その際、一誠はリアスの最近の様子の話をしたのだが、どうやら祐斗にも心当たりはないようだ。

勿論、リアス本人に直接聞くという選択肢もあったのだが、昨日の今日なのでちよつと気が引けるといえるのが、一誠の正直なところだった。

最も、昼休みにソーナに話を訊いた八雲は知っているのだが、ソーナの約束を守っているので一誠達には話していない。

「朱乃さんなら知っているよな？」

一誠の疑問に祐斗は頷く。

「あの人は部長の懐刀だから、恐らく知っているだろう……っ！」

「ん？」

「！」

部室の扉前に到着したところで、一誠とアーシア以外が何かに気付いた。

「……僕がここまで来て初めて初めて気配に気付くなんて……」

「……とても大きな気配を感じます……」

目を細め、顔を強張らせる祐斗とくうろ。

「気のせいか、重たい空気を感じるが……」

そして、八雲は部室から漏れる空気を感じる中、部室の扉を開けた。

室内にリアス、朱乃、小猫が既におり、そしてもう1人……。

「グレイファイア……さん？」

一誠がその人物の名前を呟いた。

「……誰だ？」

「誰でしょうか？」

「……参ったね」

一誠の後ろでは初めてグレイファイアを見る八雲達が疑問に思っていると、祐斗は小さ

く呟いていた。

そんな中、部室内は会話のない張り詰めた空気に支配されていた。

機嫌の悪い面持ちのリアスに、いつもニコニコ笑顔の朱乃だがどこか冷たいオーラを放っており、小猫はなるべく関わらないでおこうと部屋の隅で静かに座っている。

やがて、メンバーの一人一人を確認したりリアスが口を開いた。

「全員揃ったわね。では、部活をする前に少し話があるの」

「お嬢様。私がお話ししましょうか？」

説明をグレイフィアが申し出るが、リアスは手を振っていない。

「実はね——」

リアスが口を開いた瞬間だった。

突然、部屋の床に現れた魔方陣が光り出したかと思えば、突如炎を吹き出しては部室を熱気に包み込んだ。

「熱っ」

「御主人様!？」

チリチリと肌につく火の粉を防ぎながら確認すると、魔法陣に描かれる紋章はグレモリー家のものは異なっていた。

「——フェニックス」

近くにいた祐斗の眩きが聞こえた瞬間、炎上する魔方陣の中から人影が姿を現した。「ふう、人間界は久しぶりだ」

そこにいたのは、赤いスーツを着た1人の男性だった。

見た目は20代前半。スーツを着崩しているせいか、ネクタイもせずに胸までシャツをワイルドに開いている。

(何だかホストっぽい奴だな……)

八雲が内心思う中、男性は部室を見渡しては視界にリアスを捉えると、口元をにやけさせた。

「愛しのリアス。会いに来たぜ」

一方、リアスは半眼で男性を睨んでおり、どう見ても歓迎してる様には思えない。

(……コイツ、もしかして)

リアスの態度に八雲は確信する中、一誠は訊いた。

「誰だこいつ?」

一誠の疑問に男性は少しだけ驚いた様子を見せる。

「……あら? リアス、俺の事を下僕に話してないのか? つーか、俺を知らない奴がいるのか?」

「話す必要が無いから話してないだけよ」

「あらら、相変わらず手厳しいねえ。ハハハ……」

男性は目元を引きつらせながら苦笑する中、グレイファイアが介入する。

「兵藤一誠様。この方はライザー・フェニックス様。純血の上級悪魔であり、古い家柄を持つフェニックス家の御三男……」

そして、次の言葉が八雲を除く3人に衝撃を与えた。

「そしてグレモリー家次期当主の婿殿。即ち、リアスお嬢様のご婚約者であらせられます」

第17話：婚約者は不死鳥へフェニックス

「ななじゅうふたはしら
七十二柱」。

大昔、悪魔には72もの爵位持ちの一族が、それぞれ何十もの軍隊を率いていた。しかし、その大多数が戦争で消滅してしまい、今では半数も残っていない。グレモリー家、フェニックス家、いずれも戦争で生き残った純血悪魔一族である。

本来ならば、リアスは大学を卒業するまでは人間界で自由に生活を送れるはずだったが、そんな彼女にフェニックス家の政略結婚が突然舞い込んだ。純血悪魔の根絶を恐れたグレモリー家とフェニックス家の両家が持ち掛けた縁談であり、リアスの悩みの原因でもある。

「いやー、リアスの『女王』が淹れてくれたお茶は美味しいものだな」

今、一誠達はリアスとその婚約者であるライザーから少し離れた席に集まり、事の成り行きを見守っている中、ライザーは朱乃が淹れた紅茶を誉めていた。

「痛み入りますわ」

何時もの笑顔を浮かべている朱乃だが、何故かそこに感情が感じられず、少し怖いものを感じていた。

（あ、あの野郎……！）

そんな中、一誠は腹を立てる。ソファーに座るリアスの隣についているライザーが、軽々しくリアスの肩を抱いているからだ。

リアスが何度もライザーの手を振り払うが、ライザーは構わず肩やら手やら髪やらを触り、馴れ馴れしい行動をしていた。

（……いや、待てよ）

ふと、一誠は思い出す。

ライザーが幾らリアスの婚約者でも、自分はリアスの胸の感触を知っており、更には美しい裸体を2度も目の当たりにしていた。

（お、俺の勝ちじゃねえか!?!）

そう自己解釈し、一誠は脳内で勝利宣言したのだが、アジアが怪訝そうに訊いてきた。

「あ、あの、イツセーさん。何か楽しい事ありましたか？」

その一言に、一誠は我に返った。

「……卑猥な妄想禁止」

「取り敢えず、涎を拭いた方がいいよ。イツセーくん」

痛烈な一言を発する小猫に、笑顔でハンカチを差し出す祐斗。

「そろそろお茶の時間ですから、お菓子の事を考えて涎が出ちゃったんですね」

「いや、多分違うぞ……」

「くうーん……」

仕舞いにアーシアの屈託のない笑顔と言葉に、窓から空を見上げていた八雲が小声で突っ込み、そんな八雲にくうろは頭を撫でられていた。

そして、一誠の心が痛んだその時だった。

「いい加減にしてちょうだい！」

稀に見ない怒気がひしひしと伝わっていたリアスが、我慢の限界が来たのかとうとう激昂した。ソファーから立ち上がり、低く迫力のある声が部屋に響く。

「ライザー、以前にも言ったはずよ。私はあなたと結婚なんてしないわ」

だが、ライザーは向けられた怒りの視線をどこ行く風でニヤけた面を浮かべていた。

「ああ、以前にも聞いたよ。だがリアス、そう言う訳にはいかないだろう？ 君の所の御家事情は、そんなわがままが通用しない程に切羽詰まっていると思うんだが？」

ライザーはカップの紅茶に口をつけ、更に話を続ける。

「先の戦争で純血悪魔が大勢亡くなった。純血悪魔の血を絶やさないといいのは、悪魔全体の問題でもある。最近は転生悪魔が幅を利かせているが、それでは古い家系である俺達の立場がない。君のお父様もサーゼクス様も、純血悪魔の未来を考えてこの縁談を

決めたのさ」

ライザーの言葉にリアスは鋭い視線を送りながら黙り込むが、それは長く続かなかつた。

「私は家を潰さないわ。婿養子だって迎え入れるつもりよ」

リアスの言葉を聞き、ライザーは満面の笑みを浮かべる。

「おおつ、さすがリアス！ じゃあ早速、俺と——」

しかし、すぐにリアスが言葉を遮った。

「でも、私は私が良いと思った者と結婚する。古い家柄の悪魔だって、それぐらいの権利はあるわ。だから、ライザー……」

そしてリアスは、溜め込んだ感情を一気に吐き出すように言い放った。

「あなたとは結婚しないわ！」

「……………はぁ」

その言葉を聞いた途端、ライザーの機嫌が悪くなったのが分かった。

「……俺もな、リアス。フェニックス家の看板背負った悪魔なんだよ。この名前に泥をかけられる訳にもいかないんだよ。俺は君の下僕を全部燃やし尽くしてでも、君を冥界に連れ帰るぞ」

立ち上がったライザーはリアスの顎に指を添え、猛禽類の如き目つきで彼女を睨み付

ける中、リアスも負けじと鋭い目つきでライザーを睨み返す。

その瞬間、殺気と敵意が室内全体に広がり、両者から放たれるプレッシャーが一誠達を襲う。

「……と、本来なら言いたいところだが」

しかし、何の前触れもなくライザーから威圧感が消えるが、すぐに視線をリアスから離しては殺気を放つ。

「……ん？」

その先にいたのは、八雲だった。

視線と殺気に気付いた八雲はライザーに体を向けるのだが、撫でられていたくうろは中断させられ、ライザーを睨んだ。

「お前、人間だろ？　なんで人間がここにいるんだ？」

「俺もこの部員だ。名前は吉川八雲。よろしく」

不意の質問にも動じず、右手でシユツと敬礼の様なポーズで挨拶する八雲だが、その返答にライザーは呆れた様な溜め息をついた。

「……まったく。まさか、こんな下等種族がリアスの近くにいたとはな……」

そう言うなり、ライザーの手に炎が宿る。

「ちよ——」

ライザーはそれを八雲に投擲し、八雲は両手を合わせては驚いていた。そして——
ボウンツ！

ガシャンツ！

炎の爆発と窓が砕ける音が重なった。

「八雲!?!」

「吉川!?!」

「くうろちゃん!?!」

リアスや一誠達が、白い煙で隠れた窓から落ちたであろう2人の名前を叫ぶ。

「ライザー!?! あなた何をつ!?!」

ライザーの行動に、慈愛の情が深いリアスが今までとは比べ物にならない程の激昂を見せた。

「おいおい、何を怒ってるんだ？ 俺はただ、目障りな猿を燃やしたただけだぜ?」

その言葉で、リアス達はライザーを完全に敵と認識した。

全員、いつでも動ける様に臨戦態勢を取る中、ライザーは何の悪気もなく、殺意を抱く笑みを浮かべては視線を窓に向けようとした時だった。

「危ねーな、おい」

聞き覚えのある声にライザーが……いや、この場にいる者全員の表情が驚愕に変わっ

た。

煙が晴れ、その先に見えたのは、
“八卦の水の障壁”に守られた八雲だった。

「八雲くん！ 無事でしたのね！」

安堵の表情をして駆け寄り朱乃に八雲は頷くと、ライザーを睨み付ける。

「ほお、下等な猿の分際で奇妙な魔力を使うのだな」

「育ちのなっていない奴だな。あんた、火の扱いには注意しろって親に言われてないのか？」

八雲とライザーの間に火花が散る。

一触即発の雰囲気になろうとした瞬間だった。

「——がっ……はっ……!!」

突如、ライザーは体に重さを感じた瞬間、急に息が苦しくなっていた。

「御主人様に何してくれてるんだ、ああん!？」

その正体は、肩車の様にライザーに股がっは膝をつかせ、両腕を掴み上げて三角絞めの要領で首を絞めているくうろが原因だった。どうやら煙に紛れて気配を消し、ライザーに近付いた様だ。

「その辺にしておけ、くうろ」

「でも——」

「俺の為にしてるんだろ？ もういいから、すぐに離れろ」

「……分かりました」

そしてくうろは瞬時に技を解くと、自身の周囲に炎を駆け巡らせるライザーは再び八雲に殺気を向ける。

「き、貴様あ……！ 由緒ある純血悪魔に向かって……無礼だろうが!!」

「先に無礼をしたのはそつちだろ。無礼を無礼で返されたんだ。自業自得つてもんだ」

対して、八雲も怒気を含んだ空気を漂わせ、再び一触即発の時だった。

「落ちていくください」

2人の仲裁に入ったのは、先程の騒動にも動じなかったグレイファイアだった。

「これ以上やるのでしたら、私も黙って見ている訳にもいかなくなります。私はサーゼクス様の名譽の為、一切の遠慮などしないつもりです」

冷静に介入したグレイファイアの言葉には静かな迫力が含まれ、それを聞いたライザーは気を落ち着かせる様に溜め息を深く吐きながら頭を振った。

「……最強の『女王』と称されるあなたにそんな事を言われたら、俺もさすがに怖いよ」
ライザーが戦意を無くした事を確認した八雲も気持ち落ち着かせ、リアス達も臨戦態勢を解いた。どうやら、最悪の状況は脱したようだ。

そして全員の戦意が無くなった事を確認すると、グレイファイアが口を開いた。

「こうなる事は、旦那様もサーゼクス様もフェニックス家の方々も予想されておられました。よって、決裂された最終手段を取り入れる事としました」

「最終手段って……どういう事よ、グレイファイア？」

「お嬢様。それほど御自分の意志を押し通すのでしたら、ライザー様と『レーティングゲーム』にて決着をつけるのはいかがでしょうか？」

「……っ!？」

グレイファイアの通達にリアスは驚いては言葉を失った。

『レーティングゲーム』。

爵位持ちの悪魔が行う、下僕を戦わせて競うチェスに似たゲームであり、ゲームでの強さが悪魔の中での上下関係に大きく影響を与えるのだ。

「あれ？ それって成人した悪魔しか出来ないんじゃないやなかったっけ？」

一誠の疑問にグレイファイアは答える。

「公式なレーティングゲームは成熟した悪魔しか参加出来ません。しかし、非公式の純血悪魔同士のゲームならば、半人前の悪魔でも参加出来ます。この場合の多くが身内同士、または御家同士の歪み合いです」

グレイファイアの言葉にリアスはイラついた様子を見せる。

「……つまり、お父様方は私が拒否した時の事を考えて、最終的にゲームで今回の婚約を

決めようってハラなのね？ どこまで私の生き方を弄れば気がすむのかしら……っ！」
「では、お嬢様はゲームも拒否すると？」

「いえ、まさか、こんな好機はないわ。……いいわよ。ゲームで決着をつけましょう、ライザー」

挑戦的な物言いに、ライザーは嫌味な笑みを浮かべる。

「へー、受けちゃうのか。俺は構わない。ただ、俺は何度もゲームを経験してるし、勝ち星も多い。それでもやるのか、リアス？」

「やるわ。ライザー、あなたを消し飛ばしてあげる！」

更に挑戦的な態度をするライザーにリアスは勝気な笑みを浮かると、両者は激しい眼光をぶつけ合った。

「承知いたしました。お嬢様とライザー様の御意思は私グレイフィアが確認させていただきました。御両家の立会人として、私がこのゲームの指揮を執らせてもらいます。よろしいですね？」

グレイフィアの言葉に2人は了承するように頷いた。

「分かりました。御両家の皆さんには私からお伝えします」

グレイフィアは確認すると、すぐにライザーは何度見ても慣れない嘲笑を浮かべ、当惑する一誠に視線を向けた。

「なあ、リアス。念の為に確認しておきたいんだが、君の下僕は下等種族その2人を除いた面子で全部なのか？」

「だとしたらどうなの？」

それを聞いてハハハと高笑いを上げるライザー。

「これじゃあ話にならないんじゃないか？ 君の“女王”である“雷の巫女”しか俺のかわいい下僕に対抗出来そうにないな」

そう言つてライザーは指を鳴らすと、それに応じるかの様に再び部室の床にフェニックス家の魔方陣が出現し、ライザーが現れた時と同じ様に炎の中から人影が次々と現れる。

現れた人影達は、何れも女性だった。

「と、まあ、これが俺の可愛い下僕達……つまり、駒がフルに揃つてるぞ」

両腕を広げては堂々と言うライザーの周囲を、ライザー眷属の悪魔総勢15名が集結した。

鎧を着こんだ“騎士”らしき者。フードを深くかぶつた魔導師らしき者。チャイナドレスに身を包んだ者。長い棍を持った和服の者。獣の様な耳を生やした双子とTシャツとスパッツ姿の双子に、剣を背中に背負うワイルドな者や顔半分に仮面を被つた怪しい者から、十二単を着た和風の者に西洋のドレスを着る者等々……“王”を含めた

16名の眷属悪魔は、まさに壮観だった。

「全員美少女、美女じゃないか!!」

一方、それ以上に全員が女性の眷属悪魔だと心を捉えられては叫ぶ一誠の全身に電撃が走り抜ける。

ライザーは実現したのだ。男の夢……一誠が夢にしているハーレムを……。

「な、なんて奴だ……」

膝から崩れ落ちた一誠から嗚咽が聞こえると、それを見たライザーはドン引きしていた。

「お、おい、リアス……。この下僕くん、俺を見て大号泣しているんだが……」

「……その子の夢がハーレムなの。きつと、ライザーの下僕悪魔達を見て感動したんだと思うわ」

一誠の姿を見たリアスは困り顔で額に手を当てていると、それを聞いて何か思い付いたのか、ライザーは1人の下僕の名を呼んだ。

「ユーベルーナ」

「はい、ライザー様」

ユーベルーナと呼ばれた眷属悪魔がライザーの下に歩み寄り、ライザーが彼女の顎に指を添えて持ち上げては何の躊躇もなく、その唇を唇で封じた。

「んっ……あふっ……」

しかも舌を絡ませるディーブなもので、くちゆくちゆと両者の唾液が混ざる水音が聞こえていた。

「ライザー様あ……」

呆れて見ているリアス。無表情の顔で僅かに眉の間にしわを寄せる小猫。笑顔の裏から殺気に近い雰囲気を出している朱乃。啞然とする八雲。じつくりと凝視するくろ。珍しく笑みが消え失せた祐斗。赤面して頭をパンクさせるアーシア。絶望で顔面を蒼白させている一誠。目の前の光景に、様々な反応をしていた。

そしてライザーが2回戦を終え、嘲笑しながら一誠を見下しており、一誠は感じ取った。

お前じゃ、こんな事は一生出来まい、と……。

「お前じゃ、こんな事は一生出来まい。下級悪魔くん」

「俺が思っている事、そのまんま言うな！ ブーステッド・ギア！」

嫉妬心全開で怒り心頭の一誠が左腕を構えて叫ぶ。

赤い光を発しながら、一誠の左腕に「赤龍帝の籠手」が出現すると、赤い装甲で覆われた指を突き付けてはライザーに物申す。

「そんな調子じゃ、部長と結婚した後も他の女の子とイチャイチャしまくる気だろ！」

「人間界には『英雄、色を好む』と言うことわざがあるだろう。いい言葉だ。——まあ、これは俺と下僕達とのスキンシップ。お前だって、リアスに可愛がってもらっているんだらう？」

「何が英雄だ！ お前なんか、ただの種まき焼き鳥野郎じゃねえか！」

「や、焼き鳥だとお!!? この下級悪魔ああああ！ 上級悪魔に対して態度がなつてねえぜ！」

一誠の挑発にライザーは憤怒の表情へ変貌する中、八雲は内心呆れていた。

(……何だか、緊迫した雰囲気から一気に同レベルの口論になつてる気がするな)

同族嫌悪なのだろう。そう思う八雲だが、一誠はそんな事はお構い無しだった。

「ゲームなんざ必要ねえさ！ 俺のブーステッド・ギアで全員倒してやらあ！」

【Boost!!】

「イツセイさん！」

アーシアの静止を聞かず、一誠が駆け出す。

「ミラ。やれ」

気合いを入れる一誠に対し、ライザーは嘆息しながら一人の眷属に命令を下した。

小猫と同じくらい小柄で童顔な少女。武闘家が使う様な長い棍を器用に回した後、一誠へ構えた。

「……………あの馬鹿！」

「え？ ご、御主人様！」

それを見た瞬間、八雲は体を動かした。

(こんな小さい子が相手か。やりにくいけど、棍を叩き落とせば戦意もなくなる……………！)
そんな事を思いながら油断したのが、一誠の間違いだった。

「っ!？」

一誠は駆け出して数歩の所で八雲に突き飛ばされ、ミラの素早い棍の突きが八雲の腹部を捉えようとした。だが――

バシツ！

「なっ!？」

棍は八雲を捉えられず、逆に八雲が棍を素手で掴んでしまい、その光景にミラは驚愕した。

驚愕したミラを余所に八雲はライザーを睨む。

「安い挑発を今買ってどうする？ この怒り、ゲームでぶつけてろ」

「ほお…………。先程の魔力といい、人間にしてはなかなかやる様だな」

その光景の後、ライザーが突き飛ばされた一誠を見下しながら鼻で笑う。

「それにしても、凶悪にして最悪のブーステッド・ギアの使い手が、まさか人間に救われ

る程に弱くて下らん男だったとはな！」

ライザーの嘲笑いを受け、一誠はあまりの悔しさに奥歯を激しく噛んだ。言い返したいが言い返せず、不甲斐なさを実感した。

すると、何か思い付いた様にライザーはリアスに言った。

「リアス、その下等種族の参加も認めてやる。そして、ゲームは10日後でどうだ？」
「……私にハンデをくれると言うの？」

リアスの視線にライザーは軽く受け流す。

「嫌か？ 屈辱か？ 自分の感情だけで勝てる程、レーティングゲームは甘くないぞ。それだけの期日があれば、下僕も何とか出来るだろう」

ライザーの視線が一誠へ移る。

「リアスに恥を掻かせるなよ、リアスの『兵士』。お前の一撃が、リアスの一撃なんだよ」

「っ！」

その言葉がリアスの事を想つての一言だと一誠は理解する中、ライザーは魔法陣を出現させた。

「楽しみにしてるよ、愛しのリアス。次はゲームで会おう」

それだけ言い残し、ライザーは下僕達と共に魔法陣の光の中へと消えていったのだっ

た。

◆ 冥界のフェニックス家。

ライザー達が帰還し、魔方陣から一步踏み出した瞬間だった。

ピキ……ッ！

「ん？」

何かの音に気付き、ライザーとその眷属達は音がした方へと視線を向けた。

視線の先は、ミラが持っている棍。八雲が掴んだ箇所箇所に亀裂が出来ており、次第に亀

裂は広がった。そして――

バキィッ！

「わ、私の棍が……！」

ミラの言葉に棍が破壊された事が分かった。その事実事実に眷属達が動揺している中、ラ

イザーは愉快そうに口を歪ませる。

「……このゲーム、楽しめそうだな」

予想外の出来事に、ライザーの瞳には八雲に対する興味と、叩きのめそうとする決意

で満ちていた。



ライザーが帰還して暫く室内の雰囲気はどこか沈んでいる中、グレイファイアが事務的に淡々と言う。

「では、期日は10日後とします。その間、お嬢様は下僕と共に準備を行っておく様、頑張ってください」

淡々と事務的に言うのと、グレイファイアは一礼しては魔方陣を出現させ、冥界へと戻った。

すると、リアスは開き直る様に溜め息を溢した。

「悔しいけど、認めないとね……。——皆、今日はもう上がってちょうだい。期間中の事は後で連絡するから……」

リアスの言葉に全員頷くと、不意に朱乃が八雲に訊いた。

「八雲くん。先程の障壁は一体どうやって行ったのですか？ 【壁】の闘神符とは違って

いましたが……」

「……本当なら、今朝の鍛練でお披露目したかったんですけどね。正体はコレです」

そう言つて八雲が取り出したのは、2枚の闘神符。それを両手で合わせた瞬間、八雲の目の前にライザーの炎を防いだ水の障壁が現れた。

「別々の闘神符を合わせて発動させました。この場合は【壁】と【水】を合わせたので、水の障壁を作りました」

『この方法を、オレ達は『統合符』と呼ぶ事にしたんだ』

「コゲンタ？ 今まで出て来なかつたけど……」

リアスの言葉にコゲンタは大声で言つた。

『出たかつたさ！ あの焼き鳥が八雲を馬鹿にした時、抗議してやろうと思つたさ！ でも、八雲が心の中で言つたんだよ。「今は姿を現すな」つてよ……』

コゲンタの言葉に全員の視線が八雲に向けられる。

「相手に手の内を知らせる訳にはいかないからな。今頃、相手は俺が闘神符を使う奴だと認識してるでしょう」

「じゃあ、まさか向こうが八雲くんをゲームに参加させようと仕向けたのも……」
祐斗の言葉に八雲は首を横に振つた。

「いや、そこまでは考えてないな。イツセーの頭に血が昇つていて冷静も欠けてたから、体が動いただけだ」

「……………」

その言葉で、一誠は静かに握る左手に力を込めた。

「イツセーさん……」

本人は誰にも気付かれない様に行っただが、その姿をアーシアが心配そうに見つめている中、八雲が口を開く。

「期日は10日ある。短いけど、それまでに俺達も強くなるうぜ、イツセー」

「……ああ、分かった！」

その言葉に励まされて一誠は力強く頷くと、室内の雰囲気は少しだけ明るくなったのだった。

こうして、10日後にリアス対ライザーによる非公式のレーティングゲームが行われる事となった。

そしてこのゲームを通し、八雲の存在を多くの観戦者が驚愕する事など、現段階では誰も知らない……。

第18話：修行の始まり i n 人間界

「やつほー」

『やつほー』

どこかの誰かの山彦が聞こえる。

リアスがライザーに宣戦布告した翌日、八雲達オカルト研究部全員は山にいた。昨夜、リアスからグレモリー家が所有する別荘がある山で修行をすると連絡があり、朝早く部屋に到着しては山の麓まで転移したのだ。その際、学園についてはリアスが話をしたので問題無く、八雲の祖父母に関しても話をして許可を得たとリアスが語った。

「ヒー……」

快晴な青空。生い茂る自然豊かな木々。小鳥達の囀り。まさに山の風景としては最高だった。

「ヒー……」

そんな中、一誠はヒーヒーヒーと言いながら、尋常じやない量の荷物を背負っては山道を登っていた。しかも舗装されていない土肌の山道を歩く度に体力を奪われ、沢山の汗を流しながら……。

「ほら、イツセー。早くなさい」

遙か前方でリアスが笑顔で櫓を飛ばす中、隣にいるアーシアは心配そうに見ていた。

「部長、山菜を摘んできました」

涼しい顔をして山菜を抱える祐斗が横を通り過ぎる。彼も一誠の様に多くの荷物を背負っている。

「……お先に」

さらに、一誠の横を倍以上の荷物を背負った小猫が、何時もの無表情で通り過ぎる。その物量差に圧倒され、一誠は言葉を失った。

「御主人様、頑張れ！」

「八雲くん、大丈夫ですか？」

そんな時、前方にいる朱乃とくうろも櫓を飛ばしており、一誠は後ろを向いた。

「大丈夫です！」

朱乃達の言葉を返し、八雲も一誠と大差ない荷物を背負っているにもかかわらず、しっかりとした足取りと気分爽快な表情をして山道を登っていた。

「……………う、おりやああああ!!」

それを見た一誠は負けず嫌いな性格が発動し、再び全身に力を入れては一気に山道を駆け登っていった。

◆ 「ゼー、ゼー……」

グレモリー家が所有する木造の別荘に到着した一行がリビングに荷物を置く中、一誠は床に倒れ込んでいた。

「それじゃあ、着替え終えたらここに集合よ」

リアスの言葉に各自移動を開始する。女性陣は2階へ、八雲と祐斗も着替えを持って移動しようとした。

「覗かないでね」

「マジで殴るぞ、この野郎……」

祐斗の冗談に一誠はそのまま殺意のこもった目で睨むが、祐斗は八雲と共に浴室へと向かった。

浴室へ到着すると、着替え始めた祐斗は八雲を見て気付く。

「八雲くん。その体にある物って、もしかして……」

祐斗の言う通り、八雲の体に巻き付かれていますのは、黒いベルトの様な物だった。しかも服で隠れていたのか、両手足にも巻き付かれています。

「重りだ。全部で30キロはあるかな？」

その言葉に祐斗は哑然とする。先程の荷物を合わせれば50キロ以上にもなるであろう重量を、人間である八雲は山道を登ったのだ。いくら何でも無理がある。

「まあ、昔の親父との修行じゃあ半分の重りだったけどな。俺も成長したのかつて実感するなあ、本当に……」

うんうんと1人で頷く八雲に祐斗は悟った。どうやら、無茶な鍛練を八雲は小さい頃からしていた、と……。

そして祐斗は青いジャージに、八雲は鍛練時の柔道着を着るとリビングに向かう。既に他のメンバーもリビングへと集結していた。

「さて、早速外で修行開始よ」

こうして、八雲達の修行は始まった。



Leesson. 1

「よっはっ」

「おりゃ！ おりゃああ！」

現在、八雲達の目の前では一誠と祐斗が剣術の修行をしていた。

ただ木刀を振り回すだけの一誠に対し、祐斗はそれを的確に往なしていた。

「そうじゃないよ。剣の動きを見るだけじゃなく、視野を広げて相手と周囲も見るんだ」

軽やかな動きで一誠の背後に回り込み、木刀を叩き落とす。

「さすが祐斗だな……」

祐斗の動きと技量に改めて凄さを感じた八雲を他所に、一誠の一瞬の気の緩みを祐斗は見逃さずに木刀を振り下ろす。

バシッ！

「あたっ！」

咄嗟に一誠は白刃取りを試みたが失敗に終わり、脳天に一撃を喰らってしまった。

そんな光景をリアス達はやれやれと見ていると、八雲はリアスに声を掛けた。

「リアス部長。この周辺を見て回っていいですか？」

「どうしたの？」

「日課の鍛練の為に、この辺りの地形を覚えておきたいんです。お願いします」

頭を深く下げる八雲をリアスは見つめると、置いている荷物から地図を取り出した。

「……そう、分かったわ。これがこの周辺の地図よ。迷わないで、納得するまで見て回りなさい」

「ありがとうございます。それじゃあ、行つてきます」

リアス達に一礼した八雲が、その場を離れようとした時だった。

「御主人様！ 私も行きます！」

紺色のジャージを着たくうろが手を上げて言った。

「ダメだ」

「ガーン……」

しかし八雲は即否定してくうろは肩を落とす中、八雲は言う。

「どの位で戻れるか分からないからな。それまで、リアス部長達に色々と教わっておけ。教わった事を物にした分、何かして頭撫でてやるから」

「本当ですか！ 分かりました！ 頑張つて教わります！」

最後の一言にくうろは敬礼して喜ぶと、八雲はその場から離れた。

遠ざかる八雲を見送る皆の中、リアスは手を鳴らしては言う。

「さあ、再開するわよ！」

そして、一誠は再び祐斗と剣術の修行に打ち込んだ。



『それにしても、いい山だ』

「ん？」

地図や看板で森の中を探索し始めた頃、不意にコンゴウが話し掛けた。

『木々も元気に生い茂ってるのは土がいい証拠。木の属性であるわたしにとって、とてもいい環境だ』

『そうか？ オレとしては、木に沢山の養分を吸われるからいまいちだな』

『確かに……。土の属性である我輩達としては、もう少し土肌が多い場所が良いであります』

コンゴウの言葉に現れたのは、げんなりして返すコゲンタと同意して頷くブリユネだった。

「……最近、俺の神器も賑やかになったな」

そんなシキガミ達の会話を聞きながら、八雲は聞こえない様に呟いた。

最初の頃は八雲の生年月日の関係で、コゲンタだけが霊体で活動出来た。しかしシキガミ達も徐々に目覚め、柊一族であるホリンが目覚めてから、コゲンタ以外のシキガミ達も霊体となる事が出来たのだ。

因みに、柊一族が司るのは“靈感”。相手の靈感や魔力、気、内なる力を高める事が出来る一族であり、大昔の戦争で多くの種族とも契約した事があるのだ。

それから暫く、八雲はシキガミ達の会話を聞きながら歩き続けた。



Leesson. 2

剣術の修行を終え、一誠はアーシア、くうろと共に、朱乃の指導で魔力の修行を行っていた。

「魔力は体全体を覆うオーラから流れる様に集めるのです。意識を集中させて、魔力の波動を感じるのですよ」

「ぐぬぬぬ……！」

朱乃から丁寧の説明してもらう3人。しかし、一誠はなかなか魔力が掌に集まらない。

「出来ました！」

そんな中、アーシアは掌に魔力の塊を掌に作り出していた。

「あらあら。やっぱり、アーシアちゃんは魔力の才能があるかもしれませんね」

朱乃に褒められて頬を染めるアーシア。

「こっちも出来ました！」

一方、くうろも掌に魔力の塊を作り出しており、次第に球体から鋭く細い形へと変わると、様子を見ていたリアスが言った。

「上手ね、くうろ。教わってすぐ別の形に変えるなんて……」

「もしかしたら、以前くうろちゃんは魔力の扱いに長けていたかもしれませんわね」
リアス達の会話にくうろは嬉しく思った。

「これで御主人様に褒めてもらえます！」

それよりも、八雲のご褒美を目指している様だが、くうろはもつと上達する様に修行を再開した。

「魔力の源流はイメージです。とにかく頭に思い浮かんだモノを具現化させる事が大事なのです。得意なモノ、何時も想像しているモノならば、比較的早く具現化出来るかもしませんわ」

「はいー！」

朱乃の説明の後、アーシアが気付いた様に言った。

「……それにしても遅いですね、吉川さん。もうすぐお昼ですし、何かあったのでしょうか？」

「……………もしかしたら、アレかしら？」

「アレって、何ですか、部長……」

集中し過ぎて疲労の色を見せる一誠の言葉に、リアスは答えた。

「この山にね、凶暴な熊が出没するらしいのよ」



その頃、八雲は別荘から少し離れた場所にある広場に到着した。

「……ここなら色んな鍛練が出来そうだな」

辺りを見渡しながら八雲は呟く。

小川が流れ、側には岩場と山肌がある場所や古い炊事棟があり、どうやらここは以前キャンプ場として機能していた場所の様だ。

そして偶然なのか、シキガミに関係する『五行思想』が揃っていた。

『看板には閉鎖って書いてあったけど、何でだろうな?』

「……多分、あれだろうな」

コゲンタの疑問に八雲は指で一点を示すと、そこには巨木があった。

しかし、実際は巨木を指しているのではなく、巨木に付けられた爪痕を八雲は指差していた。

「多分、巨大な野生動物がキャンプ場に現れたから来なくなったんだろう。それで経営

も悪化して、やむを得ずキャンプ場を閉鎖した……と思うな」

『なるほど………つて、八雲』

「ん？」

コゲンタの声色が変わった事に八雲は気付くが、特に驚く事なく巨木の爪痕に触れていた。

『気付いてるかもしれないが……』

「気付いてるよ。つてか、これだけ大きな影を落とされてるんだ。気付かない奴はいないって……」

そう言つて、八雲は後ろを振り向いた。

「グルルルル……」

そこにいたのは、全長3メートルはある巨大な熊だった。

「ガアアアアッ!!」

そして、熊は凶刃な爪を八雲に向けた。



「ぬががあああああ」

正午が過ぎた頃、一誠は今日10回目の巨木との熱い抱擁に成功……もとい、小猫のパンチで吹っ飛ばされていた。

「……弱っ」

「ぐふっ！」

小猫の痛烈な一言にショックを受ける一誠だが、小猫は気にせずに腕を振り回しては説明する。

「……打撃は体の中心線を狙って、的確かつ決り込む様に打つんです。……さ、もう1セットです」

そして小猫の拳が一誠に照準を定めた瞬間、一誠は悟った。

（あ、死んだな……）

そしてまた、一誠は巨木まで吹っ飛ばされた。

「……………」

そんな中、くうろは心配そうにソワソワと右へ左へウロウロしていた。

「……くうろ。少しは落ち着きなさい」

そんなくうろにリアスは落ち着く様に言うが、くうろは止まらずに言う。

「ですが、御主人様にもしもの事があつたら……。そう考えてしまうだけで、落ち着く事

なんて出来ません」

「確かに遅すぎますね……。部長、私が探して行きましょうか？」

「っ！ だったら私も探しに——」

朱乃の言葉にくうろも便乗が、その必要は無くなった。

「おーい！」

何故なら、遠くから聞こえる八雲の声がしたからだ。

「あ、吉川さ……………ひっ?！」

アーシアが声を掛けながら八雲に振り向いた瞬間、それを見て驚愕する。

アーシアだけではない。リアスとその眷属達も、八雲が乗っているモノ〃を見ては様々な反応をして驚いていた。

「御主人様！ 心配しましたよー」

唯一、くうろだけは何時も通りに八雲に寄り添っていたが……。

「ごめんごめん。コイツと組み手をして遅くなった」

そう言いながら、八雲は乗っているモノの頭を優しく撫でた。

「グ~~~~~ン♪」

嬉しそうに反応する中、それを見ている一誠は訊いてみた。

「よ、吉川……」

「何だ、イツセー?」

「何だ、じゃねえよ!? どうしたんだよ、その熊は!?」

一誠の言葉にリアス達も頷く。

そう……八雲は熊に乗りながら戻って来たのだ。しかもその熊、リアスが言っていた凶暴な熊であり、危険な動物である。

すると、一誠の問いに八雲は簡潔に説明する。

「歩いてたらコイツと出会した」

「それで?」

「襲ってきた」

「マジか!」

「勝って仲良くなった」

「え?」

「……どうやって仲良くなれたのよ?」

ヤレヤレと溜め息を溢すリアスに答えたのはコゲンタだった。

『襲われたのは事実だぜ。それで、襲われたから力で振じ伏せて気絶させて、その間に傷を治したら熊が目覚めて、いきなり懐かれたんだよ』

「……懐かれたと言うより、殺されない様に従った方がいいと悟ったのね」

リアスの言葉に全員が納得する中、八雲はリアスに言う。

「リアス部長。修行中、コイツも参加していいですか？」

「参加って、その熊は何か出来るの？」

「まあ、重りには使えますよ。勿論、皆を襲う事があれば食材にしましょう」
「ッ?!?!」

八雲の言葉を理解した様に熊は物凄い速さで首を横に振ると、八雲は一言。

「冗談だ」

優しく言葉を掛けながら頭を撫でると、熊は安心したかの様にホッと溜め息を吐いた。

「でも、襲うなよ」

「ッ!」

しかし野生の勘が反応したのか、最後の八雲の言葉に凄みを感じて熊は頷いた。

そして、八雲もリアス達の修行にやっと参加するのだった。

(……しかし、神器もオレ達も闘神符も使わずに熊を撃退したのは驚いたな。まあ、親父さんも素手で同じ事をしたのを、小さい頃に見てたしな……)

そんな中、コゲンタは八雲を見て内心思いながら、シキガミ達に伝えた。

(もしかしたら、八雲は“アレ”を出来るかもしれないな。機会があれば、夜中でも教

えてみるか?)

コゲンタの思いに、シキガミ達は頷いた……。



「美味しい!」

「うんめえええええ!」

初日の修行を終え、全員は別荘の広間で夕食をいただいていた。

祐斗が採った山菜のおひたし、リアスが仕留めた猪を使った牡丹肉の料理、魚の塩焼き等々、各種色とりどりの料理が並んでいた。

「あらあら。おかわりもあるから沢山食べてくださいね」

そう言いながら、和風エプロンを着けた朱乃は八雲にご飯を盛ると、八雲はご飯を受け取っては箸を動かす。

「美味しいです、朱乃先輩。こんな美味しい料理は毎日食べたい程ですよ」

「うふふ、困っちゃいますね」

八雲の言葉に朱乃は微笑む中、お茶を飲んだりリアスは一誠に訊いた。

「さて、イツセー。今日一日修行してみてもうだったかしら?」

一誠は一度箸を置いて正直な感想を口にした。

「……俺が一番弱かったです」

「そうね。それは確実ね」

リアスがハツキリ言い、更に続ける。

「朱乃、祐斗、小猫はゲームの経験が無くても実戦経験が豊富だから、感じを掴めば戦えるでしょう。八雲とくうろは3人より経験は少ないけど、身体能力と戦闘センスが高いから同じね。それに対してあなたとアジアは実践経験が皆無に等しいわ。それでもアジアの回復、あなたのブーステッド・ギアは無視出来ない。相手もそれを理解してはるはず。最低でも相手から逃げる位の力は欲しいわ」

「逃げるって……。そんなに難しいんですか？」

一誠の質問にリアスは頷くと、聞いていたシキガミのフジとブリユネが一誠とアジアに言う。

『逃げるのも戦術だ。態勢を立て直し、勝利を得る方法もある。だが、相手に背を向けて逃げるのは難しいものだ』

『特に実力の差が開いてる者に背を向けるのは、殺してくれと言っている様なもの。イツセー殿とアジア殿には、そんな相手からの逃げ時や面と向かって戦う術を、リアス殿達から教わる事がいいだろう』

「了解っス」

「はい」

シキガミ達の言葉に一誠とアーシアが同時に返事をする中、一誠はアーシアを戦いに巻き込んだ張本人としての覚悟を一層自覚する。

「さて、食事を終えたらお風呂にしましょうか。ここは温泉だから素敵なのよ」

「お、お風呂っ!？」

真剣な面持ちから一変、リアスの言葉で一誠の意識がエロい思考に塗り替わり、どうやって覗こうか瞬時に考え始めた。

「僕は覗かないよ、イツセーくん」

「合意が無ければ、同じく」

「バツカ! お、おまえらな……!」

しかし、祐斗のスマイルと八雲の領きで先制されて動揺してしまう。

「あらイツセー。私達の入浴を覗きたいの? なら、一緒に入る?」

「なっ!」

クスツと小さく笑うリアスの一言により、一誠に衝撃が走る。

「私は構わないわよ。朱乃はどう?」

「うふふ。殿方の背中を流してみたいですわ。特に……」

「ん…………？」

朱乃が満面の笑みで肯定し、誰にも知れずに視線を八雲に向けていた。

「アーシアだって、愛しのイツセーとなら大丈夫よね？」

リアスの問い掛けにアーシアは顔を真っ赤にして俯くが、確かに小さく頷いていた。

「私は御主人様がいいと言えば大丈夫です！」

「くら」

くうろは相変わらず、八雲が絡めば問題無いらしい。

「最後に小猫。どう？」

「…………嫌です」

バツサリと否定する様に、両腕を交差してバツ印を作る小猫。それが有頂天気味の一誠を奈落の底に叩き落とした。

「じゃ、無しね。残念、イツセー」

クスクスと悪戯っぽい笑みでリアスが言った。

「…………覗いたら、恨みます」

「ぐはっ！」

小猫の先制により、一誠の野望は完全に潰えてしまった。

「…………イツセー」

膝を付いて落ち込む一誠に、八雲が肩に手を置いて言った。

「また機会があるさ。修行中は諦めろ」

「うっせええええっ！ 機会って、何時あるんだよおおおっ！」

「そうだイツセーくん。僕が背中を流すよ」

「マジで殺すぞ、木場ああああ！」

この時、一誠の怒りの慟哭が別荘に響き渡った。



「……………それで、こんな時間に何だよ、コゲンタ？」

それから時間が経過し、修行初日の深夜。八雲はコゲンタに話があると言われ、別荘の外に出ていた。

『八雲。今、目覚めてるシキガミは把握してるか？』

「コゲンタ、ブリユネ、ナナヤ、フジ、ヒヨシノ、クラダユウ、ランゲツ、コンゴウ、ホリン。そこから新しく目覚めた奴らを足せば、合計“15人”だな」

八雲の答えにコゲンタは満足に頷く。

『八雲はすげえよ。既に2割も仲間を目覚めさせてるんだぜ。本当、お前がオレ達の契

約者でよかった』

「……いきなり何だよ——」

『そこでだ！』

八雲の言葉を遮る様に、コゲンタは八雲に力強く指差した。

『これから教えるのは、ゲームの勝敗を左右する事になる。ゲームだけじゃない。これからの行く末も左右される事態となる。それでもいいか？』

「……………」

コゲンタの言葉に暫く考えるが、八雲の答えは決まっていた。

「……言っただろ。俺は守る為に戦いたいんだ。もう、戦えない人達だけじゃない。困ってる奴なら、悪魔でも手助けするよ」

『悪魔でも、か……。さすが、でっかい目標だな。気に入った！』

そして、コゲンタも決心した。

『これから教える1つは、オレの信頼の証と思ってくれ。絶対に勝利へと導いてやるからよ』

コゲンタの言葉を皮切りに、目覚めているシキガミ全員が霊体として現れて頷いた。こうして、八雲は遅くまでシキガミ達にある事を教わるのだった。

◆ 八雲達が外にいる頃、アーシアの眠る寝室の扉が静かに開いた。

「……………うみゆう、イツセーしゃくん……………」

慣れない事をしたせいか、アーシアは寝言を言いながらすやすやと心地よく寝ていた。

そんな彼女に足音を立てる事なく人影が忍び寄り、その人物はゆっくりとアーシアに手を伸ばしては肩をゆすった。

「アーシア……………。アーシア……………」

名前を呼ばれ、アーシアが目を覚ました。

「……………イツセーさん？」

寝ぼけ眼を擦りながら起き上ると、目の前に一誠がいた。

思わず声を上げそうになったが、咄嗟に一誠が人差し指を立てて沈黙を促す。

「こんな時間にごめん、アーシア。こんなこと頼めるのアーシアしかいなくて……………」

そして、一誠は真剣な表情をしながら小声で言った。

「アーシア、服を貸してほしいんだ」

「……………はい？」

対して、アーシアは戸惑う事しか出来なかった。



アーシアから服を借りた一誠は、暗い森の中で自主練を始めていた。

「……絶対に、出来るはずだ！」

今日の修行で何かを掴んだのか、そのイメージを確実なものにする為に、自分の望みの為に奮闘する。

「はあっ！」

一誠の放つ魔力が風となり、目の前にあるアーシアの服を被せ、木の枝に吊るした丸太に向かつていくが、結果は服が僅かに揺らめく程度で終わってしまう。

「くそっ！ まだまだあ!!」

それでも諦めず、何度も魔力を放っては服が揺らめく繰り返しだった。

一方、アーシアは居ても立ってもいられずに一誠の元へ向かっていた。

「イツセーさん。あんな真剣な顔で一体何を……?」

アーシアには一誠が何やら切羽詰っている様にも見えていた。湧き上がる不安感を抑えきれず、アーシアは既に日にちが変わった真夜中の山道を駆ける。

そして、アーシアはやっと一誠の姿を見つけた事が出来た。

「このイメージなら、イケる！ はあああああつ！」

「イツセーさん！」

「あ」

しかし、一誠の側に行こうと草むらから飛び出した瞬間、一誠の魔力がアーシアを巻き込んでしまった……。

2人の少年の深夜の修行が行われた。

1人は自分の目標の為に……。1人は自分の望みの為に……。しかし、願いは違うが現時点で目指す所は同じだった。今はただ、リアスの助けとなる為に……。

第19話：特訓の成果

修行2日目の午前。全員がリビングに集まり、一誠とアーシア、八雲、くうろに悪魔事情についての知識をリアス達が教えていた。

「我々悪魔と墮天使、そして天使を率いる神の軍団は、大昔に永久とも言える時間の中で三つ巴の大きな戦争をしたの。結局、勝利も敗北もないまま、全ての勢力が激滅しただけで戦いは終結したわ」

今、リアスが八雲達の前に出ては悪魔の歴史について語っている。

悪魔は永遠に近い寿命を持つ代わりに、出生率が非常に低い為に大戦の影響で種そのものが存続の危機にあった。大戦後に純血の上級悪魔が連なる七十二柱と呼ばれる名門の家系が殆ど断絶してしまったのだ。

その中で、リアスのグレモリー家、ソーナのシトリー家、ライザーのフェニックス家は七十二柱の生き残りなのだ。

「これが、悪魔が人間を転生させて眷属を増やす理由。レーティングゲームはその中で生まれてきたの。ゲームで眷属に実戦経験を積ませ、その主である悪魔自身も実力を示す事が出来るから、今ではゲームの成績が爵位や地位にも大きく影響する様になってる

の

難しい事柄に頭がパンクしそうになる一誠達だったが、それでも真剣に話を聞いており、ある程度教わった後でリアスが改めて一誠に問題を出した。

「私達の仇敵。神が率いる天使の最高位の名とそのメンバーは？ イッセー」

「はい。えっと、確か『熾天使』で、そのメンバーは……ミカエル、ラファエル、ガブリエル……それと、ウリエルです」

「正解」

戸惑い混じりの解答だったが、一誠は正解出来て安心した様に溜め息を溢した。

「次に私達の王、魔王様。その四大魔王様の名前はどうかしら？」

「それならバツチリです！ いずれ、出世してお会いする予定ですからね！ ルシファア様、ベルゼブブ様、アスモデウス様！ そして憧れの女性魔王様であらせられるレヴィアタン様です！」

「正解」

今度は自信満々に答えて一誠はガッツポーズを見せた。

「なら、次はイッセーが一番苦手な墮天使の幹部の名前を全部言ってもらおうかしら」

それを聞いて、苦虫を噛み潰した様な顔になる一誠。墮天使は他の勢力より数が多い上に、名前も複雑だからややこしい。

「えーつと……墮天使の中枢組織を『神の子を見張るもの』と言って、総督がアザゼル、副総督がシエムハザ。それで幹部連中は………アルマロス、バラキエル、タミエル………あー、えーと、えーと、アレ？ ベネなんとか、コ、コ、コカイン……？」

残りの墮天使の名前が出ずに混乱する一誠に、八雲が言う。

「ベネムエとコカビエル。後はサハリエル………だったな。そうですね、リアス部長」

「正解よ。イツセー、これは基本的な事だからちゃんと覚えなさい」

すると、リアスは一区切りつける様に手を叩いた。

「それじゃあ、次はアジアに交代してもらおうわ。お願いね、アジア」

「は、はいー！」

リアスと交代する様に前に出ると、アジアが緊張な面持ちで授業を始めた。

「コホン。では、僭越ながら私、アジア・アルジエントが悪魔祓いの基本をお教えします」

前に出たアジアに一誠達はパチパチと拍手でエールを送ると、途端に赤面してしまふアジアの可愛い反応を見て、一誠は心の中で礼を言っていた。

「え、えつとですね。以前、私が属していた所では、2種類の悪魔祓いがありました。1つは神父様が聖書の一節を読み、聖水を使い、人々の体に入り込んだ悪魔を追い払う。表の悪魔祓いです。そして、裏が悪魔の皆さんにとって脅威となっています」

「何時かのはぐれ悪魔祓いの様なものか？」

八雲の問いにアーシアは頷く中、一誠も理解したのか、脳裏に白髪のはぐれ悪魔祓いを思い出していた。

そんな中、アーシアはバッグから様々な物を取り出した。

「では、悪魔祓い達が持つ道具を幾つか紹介します」

まずは慎重に置いてあつた小瓶を持ち上げた。

「これが聖水です。悪魔の皆さんは絶対に触れない様にしてください。触れると大変な事になります」

「どの様に大変なんだ？」

八雲の質問にホリンが答える。

『えげつないで。皮膚は焼け焦げて、肌が爛れるんや。そこで、体力も精神もぎよーさん削られる』

「詳しいんだな」

『ウチの格好を見て察してほしいで……』

そう言つて、ホリンはくるりと回つては修道着を見せた。

「アーシアも触れちゃダメよ。お肌が大変な事になるわ」

「うう、そうでした……」

そんな中、リアスの言葉にアーシアはシヨックを受ける。元シスターにとって、複雑なものがあるのだろう。

「役に立つかどうかは分かりませんが、幾つか作り方があるので後でお教えします」

気を取り直したアーシアが次に取り出したのは、少し古ぼけた分厚い書物だった。

「次は聖書です。小さい頃から毎日読んでいました。今は一節でも読むと頭痛が凄まじいので困っています」

「悪魔なもの」

「悪魔だからね」

「……悪魔」

「うふふ、悪魔は大ダメージ」

「悪魔だしな」

「悪魔なのです」

「ううう……私、もう聖書も読めません！」

一誠以外の部員から総ツッコミされ、アーシアは涙目になってしまう。

「でもでも、この一節は私の好きな部分で、とても素敵なんですよ！」

そう言いながら、アーシアは聖書を開いては内容を黙読し始めたが、その行為が激しい頭痛を起こしてしまうのを、アーシアはこの時忘れていた。

「あうー！」

ほらね。

「ず、頭痛が……。ああ、主よ。聖書を読めなくなった罪深い私をお許し——あうっ！」
再びお祈りのダメージに苦しむアーシアを置いて、八雲は広げられている聖書を覗いた。

「御主人様、分かるんですか？」

「いや、全然」

くうろの言葉に八雲は否定する。悪魔と同じ“言語”を得ても、文章までは分からない様子だ。

『それだったら、ボクが読んであげるよ』

そう言っただけで現れたのはナナヤ。言語に優れたナナヤなら、聖書も簡単に読めるだろう。

『えーっと、し——』

「ナナヤ。それ以上いけない」

しかし、読んでしまうとリアス達にダメージを与えてしまうので、八雲は聖書を音読しようとしたナナヤを止めた。その際、ナナヤは『冗談だよ』と言っては戻ると、確認したりアスが再び言う。

「さて、今度は八雲の番ね」

「はい……と言つても、俺が教える訳じゃないですけどね。——シキガミ降神」

リアスに促された八雲は前に出ると、「二十四気の神操機」を出現させてはシキガミを呼び出した。

「榎のコンゴウ、見参」

呼び出されたのは、学問を司る榎のコンゴウ。学問繋がりか知らないが、何故か眼鏡を掛けていた。

「今回は八雲とわたし達もゲームに参加するので、改めてシキガミの能力についてお教えしよう」

すると八雲が何処からかホワイトボードを運び込むと、コンゴウはペンを手に持ち、中央に人の絵を描いては左右にある単語を書いた。

「わたし達シキガミの持つ機能は幾つかある。1つは、『契約者、又は契約者が指名した者に、わたし達が司る力を貸し与える事』が出来る。つまり、わたし達の契約者である八雲に力を与えたり、八雲が示した者に力を与える事が出来るのだ。——イツセーよ」

「え？　俺？」

「まあ、取り敢えず来い」

いきなりのコンゴウの指名に一誠は戸惑うが、八雲に促されて前に出た。

コンゴウは一誠に言った。

「確か符力の修行で出した塊は、米粒の大きさだと聞いたが間違いないな？」

「うぐつ。まあ、そうだけど……」

「では八雲。昨晚説明した通りに……」

「ああ……」

コンゴウの言葉に頷くと、八雲は意識を右腕に集中させた。すると、右手の“二十四気の神操機”の宝玉が輝き、“兔を模した紋章”が浮かび上がった。

「貸すぜ、イツセー」

【L e n d !!】

機械音と共に八雲の右手が輝き、その輝きが一誠目掛けて放たれるが、特に変わった様子が見えなかった。

すると、コンゴウは一誠に言った。

「ではイツセー。昨日と同じ様に、符力の塊を作り出すのだ」

「へ？ さつきと何か関係が——」

「作り出すのだ」

コンゴウの言葉に一誠は渋々従っては、体に流れる魔力を掌に集中させた。

「なっ!？」

するとどうだろう。昨日は苦勞して米粒程の大きさしか集められなかった魔力の塊が、昨日アースシアが作り出した時と同じ大きさの魔力の塊が掌に集まったではないか。

その事にリアス達は驚き、一誠はそれ以上に驚愕する中、コンゴウは言った。

「わたしが目覚めてすぐに取り掛かったのは、八雲の神器の調査だった。全てではないが、調べた結果、この神器は『わたし達と同じ契約機能』が備わっていたのだ」

「つまり、今のイツセーくんは八雲くんは八雲くんはシキガミの司る力を与えた結果なのです」

朱乃の言葉にコンゴウは頷く。因みに、八雲が一誠に与えたのは終一族が司る『靈感』であり、一誠の持つ魔力を上げたのだ。

すると、コンゴウが言う。

「ただし、貸し与えた力には制限時間がある。力を与えた量が多ければ時間も多く、少なければ時間も短い。そして、与える量によってわたし達も疲勞が掛かる」

「あ、ホントだ……」

コンゴウの説明が終わると、一誠の魔力の塊も昨日と同じ米粒程の大きさに戻る。どうやらかなり少なめに与えたようだ。

すると、コンゴウは次の説明に入る。

「2つ目。『契約者が指名した相手の力を奪う事』が出来る」

「この前ランゲツが墮天使に使ったアレか」

八雲の言葉に頷くコンゴウ。

「奪われたら一定の間、様々な影響が出る。白虎一族が相手の『信頼』を奪えば、部隊内の信頼が無くなって部隊が崩れたり、終一族が相手の『靈感』を奪えば符力が大幅に無くなってしまう」

勿論、この効果の加減でも制限時間や疲労等の効果はあるとコンゴウは説明すると、終えたのか眼鏡を外した。

「ゲームに役立つとは思いますが、多様は避けた方がいい。依存してしまうと、公式戦で実力を出せないからな」

「……そうね。皆、実力で戦わないと意味がないものね」

「その通りだ。——では八雲、わたしは戻る」

コンゴウの言葉に八雲は了承しては戻すと、リアスが声を掛ける。

「それじゃあイツセー、アーシア、八雲、くうろ。習った事は覚えておくのよ」
リアスの言葉に一誠達は返事をするのだった。



それから暫くして、午後の修行。

一誠、祐斗、小猫の3人はリアスの指示の下、八雲との修行を行っていた。
 「うおおおおおつ!? ヤバいつて!?」

無論、1対3の模擬戦ではない。

「手加減しろよ、皆!」

3対3の模擬戦だ。

「兌離兌震! 兌震兌離! 兌震離兌!」

グレモリー眷属3人と、シキガミ3人による模擬戦だ。

「必殺、暴流登衝撃!!」

まずは1人目。逃げ回る一誠に攻撃を仕掛けるのは、僧服姿でデンキウナギに似た魚人的な外見を持つシキガミ。陰陽三又さすまた「匹夫屠」ひつぷほつぷを操り、地面から電撃を柱の様に放出しては一誠を狙っている。

名は『秋水のエレキテル』。根性」を司るシキガミである。

「必殺、神翼合切剣!!」

2人目。祐斗に攻撃を仕掛けるのは、ハヤブサに似た鳥人的な外見を持つシキガミ。

自身の羽根を無数に手裏剣の様に回転させながら飛ばして攻撃し、自身の持つ陰陽手槍らいめいおう「雷鳴王」で突っ込んで祐斗と鏢競り合いを生じさせた。

希望」を司るこのシキガミ名は、『雷火のフサノシン』。やんちゃで無鉄砲な所があ

るが、シキガミの中でも1、2を争う飛行速度を持つている若いシキガミだ。

「必殺、追撃貫通無双!!」

最後の3人目。小猫と対峙しているのは、熊に似た獣人的な外見を持つシキガミ。自慢の両手の鋭い爪を振るい、避けた小猫は大きな爪痕が出来た地面を見てしまった。

“活力”を司り、戦いにも豪快さを好むシキガミ……『椿のゴロウザ』である。

「ピカアー! おい、リアスの嬢ちゃん“兵士”! 逃げ回る根性があるなら掛かって来いよ!」

「そんな事言っても……うわあああああつ!」

そう文句を言いながら、エレキテルは攻撃の手を緩めずに一誠をしつこく狙い匹夫屠の突きを何度も放つ中、一誠も何度も攻撃をギリギリで回避していた。

「だが、足元が留守だ」

そう呟いた八雲は一誠の近くに「木」の闘神符を投げると、生えた蔓に一誠が躓いてしまった。

「ぶべっ!」

その隙をエレキテルは透かさず狙い、匹夫屠の矛先を一誠の目の前に突き立てた。

「へっへっ、オレっちの勝ち〜!」

誇らしげに胸を張るエレキテルに、一誠は悔しそうに顔を歪めた。

一方、祐斗と小猫も劣勢だった。

「速度が売りの『騎士』でも、オレの速度が追い付けるかよ！」

「くっ！」

祐斗はフサノシンのスピードに追い付けず防戦一方。

「その様な拳で、おれ様が倒れると思うか！」

「……しごとい」

ゴロウザのタフさに、次第に小猫は追い込まれていた。

「あわわ……シキガミの皆さん、お強いですね」

そんな模擬戦の最中、その脇でくうろと共に朱乃の修行を受けているアーシアは様子を見て驚きと不安で落ち着いてなかった。

「そうですわね。でもアーシアちゃん。あまり余所見をしていると、魔力が散ってしまいますわ」

「はうっ！ すみません！」

「出来ました！」

アーシアが謝罪する中、くうろは自身の魔力の塊を別の形へと変化させては朱乃に見せた。

「これって……」

朱乃の疑問にくうろは答える。

「はい、ナイフです」

嬉しそうに言う中、ナイフの構造をまじまじと朱乃は見た。大きめの刃、刃の背に鋸刃を持つそのナイフは、サバイバルナイフその物だった。

「……どうしてそのナイフなのでしょう？」

「この前、テレビでやってたのを見ました」

どうやら、テレビの影響の様だ。

「そこまで」

そんな中、リアスの声が響く。どうやら模擬戦が済んだ様だ。

「3人共、お疲れさん」

結果は無論、八雲率いるシキガミ達だった。

すると、シキガミが戻ってはリアスが言う。

「それじゃあ、次は個人での模擬戦よ。八雲、個人戦でのシキガミの選出をお願い」

「はい」

それから暫く、八雲はグレモリー眷属と模擬戦するシキガミを選んで戦闘させ、状況分析や複数のシキガミの命令伝達の訓練を行うのだった。

◆ それから何日もの間、修行をする八雲とグレモリー眷属、そしてくろう。

確実に皆は成長しているのだが、成果を見せる皆の中、一誠は自信が持てなかった。しかし、ある晩が切っ掛けでリアスに慰めてもらい、少しだけ癒された。

その際、リアスも一誠に言われた言葉に頬を染め、心に小さな何かが芽生え始めたのだが、それが何なのかリアスも分からなかった。

そんな事が起こっていた中、修行期間は過ぎていくのだった……。

◆ 修行開始から1週間、曇りの深夜。

一誠は毎晩の様に特訓を続け、その成果が開花の兆しを見せ始めていた。

「ごめん、アーシア。もう1回!」

今、一誠の目の前では衣服が引き裂かれたアーシアが下着姿の肢体を隠す様に身を振っている。あの日から、アーシアも一誠の特訓に続けていた様だ。

「はい! すぐに着替えてきます!」

しかしアーシアは怒る事もなく、羞恥に泣く事もなく、一誠の特訓に積極的に手を貸している。

そして一誠の魔力が、再び着替えてきたアーシアの衣服を容赦なく引き裂く。端から見れば変態以外何物でもない行為だが、これはあくまでも特訓である。誤解のない様に……。

「で、出来ましたね、イツセイさん！」

そんな常軌を逸した行為を繰り返し、ようやく下着以外の衣服を消滅させるまでに至っては歓喜の声を上げるアーシア。

「違う……！」

しかし、一誠はまだ納得していなかった。

「服だけじゃ未完成だ。でも、後一步なんだ！ すまないけどアーシア、もう少しだけ付き合ってくれ……！」

「はい！ 古着も沢山貰ってますので大丈夫です！ イツセイさん、頑張ってください！」

純粹なのか、どこかずれているのか……。

とにかく、下着姿のアーシアは一誠にとことん付き合う意を示し、夜が明けるまで特訓は続いたのだった。

◆ 一誠が特訓を頑張っている頃、キャンプ跡地である事が起こっていた。

辺りの木々は薙ぎ倒れ、炊事棟は使い物にならない程に壊れ、川も以前より水量が減っていた。

「はあ……はあ……はあ……」

そんな場所の中心に、八雲は大の字に倒れては激しい疲労を味わっていた。

「……………よっしやあー!」

しかし、倒れていながら口の両端を吊り上げて何かを喜んでいた。

『やったな八雲。記録更新だ』

『全く……大した男だ』

『上手く行けば、ゲームでの逆転も狙えますね』

シキガミ達が誉める中、小鹿の様に震えながら八雲は立った。

「でも、使うと俺の中の符力がすっからかんだ……。1度使えば、暫くは動けないし、ゲームでも役に立てないだろうな……」

そう言いながら、八雲は別荘に繋がる【転】の闘神符を取り出した。

『戻ったら汗を流そうぜ。露天風呂だし、ゆっくり浸かれば疲れも吹っ飛ぶぜ』
「……………そうだな」

コゲンタの提案を飲み、八雲は別荘へと戻った。



「ああ……………気持ちいい……………」

戻ってすぐ、八雲は別荘の露天温泉に向かつては汗を流し、疲れを癒す様に浸かって
いた。余程疲れているのか、少々緩んだ表情だった。

『もうすぐ修行も終わりだな』

気持ちが緩んでいる八雲に、不意にコゲンタが話し掛けた。

「……………そうだな。辛かったけど、楽しかった」

『全員が成長する中、一番成長したのは八雲だったぜ。オレ達が保証する』

「そうか？ まあ、コゲンタ達が “アレ” とか “ソレ” とか、色々と教えてくれたから
な」

「あら？ “アレ” とか “ソレ” とは何なのでしょうか？」

「おいおい、アレって言えば……………えっ？」

緩み過ぎたのか、八雲はギギギと聞こえる様な動きで気付かなかった人物へと振り向いた。

「うふふ。こんばんは、八雲くん。コゲンタちゃん」

そこにいたのは、体をタオル一枚で隠した朱乃だった。

「あ、あああ、朱乃先輩?! 先輩、ナンデ?!」

「あら、日頃頑張ってる後輩くんとのコミュニケーションも大事ですよ」

そう言いながら、朱乃も温泉へと浸かった。勿論、タオルを外しているので、リアスに劣らない魅力的な体が露になっていた。

「ちよ、ちよいと……!」

すると、近づく朱乃に驚いた八雲は自分のタオルで視界を隠した。

「あらあら、見てくれても構いませんのに」

「じよ、冗談が過ぎますって……」

『それで、何か用なのか? 朱乃ねーちゃん』

目隠し状態の八雲に代わりコゲンタが訊いてみた。

「最近、八雲くんもイツセーくんみたいに深夜に特訓をしているので気になって……。私達と違い、八雲くんは深夜は活発ではないですし、少し心配したんですよ……」

朱乃の言葉にコゲンタはすまないと思った。

確かに、初日から行っている深夜の特訓のせいで、八雲の生活リズムがずれてしまった。皆が見ていない所では、よく欠伸や転た寝もしていた。

だが、それでも八雲は深夜の特訓を止めなかった。シキガミ達が教えてくれたアレは、まさにゲームの勝敗を左右する力だから……。

「それで、どの様な特訓をしていたのですか？」

『ダメだ』

すると、朱乃の質問をコゲンタが否定した。

『アレは切り札だ。いくら八雲と朱乃ねーちゃん達がある程度信頼してても、こればかりは本番時にしか教えられないな』

「おい、コゲンタ。——すいません、朱乃先輩……」

謝罪する八雲に朱乃は首を横に振る。

「いえ。こちららも勝手に質問してしまつてすみません。ですが、あまり無理なさらないでくださいね」

「はい……」

それから暫く、八雲と朱乃は特に会話もしないまま湯船に浸かっていた。まあ、混浴状態であり、八雲が朱乃の裸体を意識している為、会話なんて出来ないが……。

『……さすがに重いか』

すると、2人に聞こえない様に呟いたコゲンタが会話をした。

『そう言えば、前にリアスのねーちゃんゲームの作戦を考えてたけどよ……………正直、勝てそうか？ あのフェニックスに…………』

「……………とても難しいと思いますね」

「……………どうしてですか？」

目隠し状態でも、朱乃が悩んで答えた言葉に八雲は反応すると、コゲンタが理由を言った。

『フェニックスは命を司る聖獣だ。流す涙はどんな傷をも治し、その身に流れる血を飲めば不老不死を手に入れられると人間界の国々に伝説を残す程だ』

しかし、聖獣であるフェニックスには別の一族が存在する。それが侯爵の地位を持ち、七十二柱にも数えられた悪魔側のフェニックス。

その口を開いたのは朱乃だった。

「人間達は聖獣フェニックスと区別する為に、悪魔のフェニックスを『フェネクス』と呼ぶ様ですが、聖獣と称されるフェニックスと悪魔であるフェネクスは能力的には殆ど一緒ですの」

「つまり不死身ですか…………。方法は無いのですか？」

「無い訳ではありません。倒す方法は2つ…………。圧倒的な力で押し倒すか、起き上がる度

に何度も倒して相手の精神を潰すかのどちらかです。前者は神クラスの力が必要で、後者は相手の精神が尽きるまでこちらのスタミナを保つ事……。例え不死身でも、精神までは不死身ではないのですよ。……最も、神の様に一撃で相手の精神も肉体も奪い去る力があれば、とても楽なんのですが……」

溜め息しながら月を見上げる朱乃。その僅かな声色に諦めの気配を八雲は感じ、視界が見えなくとも、今の朱乃が笑顔をしていない事も分かった。

そして、「前者の方法」なら、ライザーを倒せる事も分かった。

「ねえ、八雲くん」

すると、朱乃が不意に八雲に訊いた。

「八雲くんは、リアスの事をどう思ってますか？」

「え？ 唐突ですけど一体——」

「答えて」

少し迫力のある声色に遮られると、八雲は暫く考えては答えた。

「……立派な人ですね。いや、この場合は立派な悪魔か？ とにかく、尊敬出来る人だと俺はそう思いますよ」

「……そうですか」

何故か朱乃はホッと一息つく中、八雲は言う。

「それに、俺に守る力を教えてくれました。今までの恩を返す気持ちで、ゲームに望む所存です。俺が盾になつてでも、勝ちましょう」

「ええ、頑張りましょう。リアスさえ無事ならば、例え勝率が低くても勝機を生み出せますわ」

「……何言つてるんですか？」

朱乃の言葉に八雲は首を傾げては言う。

「全員、守つてみせますよ。リアス部長もイツセーも、アーシア、小猫、祐斗、そして朱乃先輩も、ね……」

何気なく八雲の口から出た言葉を聞いた朱乃が目を丸くした。その際、偶然にも雲が晴れては満月が現れ、月明かりがスポットライトの如く八雲を照らしていた。

そんな八雲に朱乃は一瞬だけ見惚れてしまい、温泉のせいでもあるが頬が赤く染まっていた。

「あ、あれ……？ 俺、何か変な事を言つてました？」

『いや、寧ろくさかったぞ……』

何となく尋ねるが、コゲンタが代わりに呆れる様に答え、暫くして朱乃は……。

「あはははー！」

笑っていた。

普段の「あらあら、うふふ」とした笑顔ではなく、年相応の少女の様に笑っていた。
「ちよ、笑う事ないでしょ、朱乃先輩」

しかし、目隠し状態で先程の台詞で笑うなど言われるのは無理がある。

「ふふ、すみません。では、私の事も守ってくださいね」

「勿論ですよ」

勢いよく頷く八雲。すると、朱乃は八雲の体に手を伸ばした。

「えっ、ちよっ、ど、どうしたんですか?」

「うふふ。いえ、少しだけ八雲くんに元気をあげようと思ひまして……」

そう言いながら、八雲の胸板を触る朱乃。完全に逆セクハラな光景だった。

「ひゃん!」

「あらあら、かわいい声ね。……それにしても、鍛えている事もあっていい体をしていますわね。触り心地も良くて、ちよっと癖になりそう……」

「く、癖ってなんですか!?!」

「それに、八雲くんの硬いアソコが、私の太股に当たってますわ。とても嬉しい……」

「それは膝ですよ!?!」

『ワーオ、大胆だな』

「コゲンタ! くそっ! 目隠しを取る訳もいらないし……っつて、うわああああああっ

!？」

朱乃の手が下腹部へと向かい、八雲が羞恥で叫んだその時だった。

ガラガラ!

「あら?」

温泉の扉が開き、朱乃も手を止めては扉へ視線を移した。

「……………」

そして視界に写ったのは、タンクトップとパンツという姿のくうろだった。因みに、今のくうろの格好は就寝時である。

「御主人様の悲鳴が聞こえて駆けつけましたが……………この状況、一体どういう事ですか?」

目隠しした八雲。そんな八雲の肌を触る朱乃。端から見れば情事の最中だと間違えられる可能性がある光景を、くうろはまじまじと見ていた。

「その声は、くうろか! すまないけど、この状況は——」

「ズルいです!」

「はい?」

くうろの一言に素つ頓狂な声を上げる八雲に、くうろは言い続ける。

「2人だけ遊んでるなんて…………私だって御主人様と遊びたいです!」

どうやら、くうろにとって八雲と朱乃の光景は遊びの類いに見えた様だ。

「あら、だつたらくうろちゃんも遊ぶ?」

「ちよ、朱乃先輩!」

「やったあ!」

朱乃の許可にくうろは喜ぶと、服を脱いでくうろ自身も温泉へと浸かった。

「だ、だから……やめてくれって、の……ぬおわあああああ?!?!」

そして暫くの間、八雲は朱乃とくうろに触られ続けるのだった。

因みに、八雲の貞操は無事である。だが、幾度となる貞操の危機が続くのを、八雲は知る事はなかった。



それから翌日。本日の修行を始める前にリアスが一誠に言う。

「ブーステッド・ギアを使いなさい、イッセー」

「え?」

いきなりの事で戸惑う一誠。この山に入ってから、一誠の神器を一切禁止されていたから無理もない。

そんな一誠をよそに、リアスは言う。

「相手は祐斗でいいわね」

「はい」

リアスに促され、祐斗が木刀を構えて一誠と対峙すると、再びリアスが口を開いた。

「イツセー、模擬戦を始める前に神器を発動させなさい。そうね……発動から2分後、戦闘開始よ」

「は、はい。——ブーステッド・ギア！」

リアスに言われるまま、一誠は左腕に神器……“赤龍帝の籠手”を出現させると、その能力を発動した。

「ブースト！」

【Boost!!】

一誠の言葉に反応して神器が音声を発する事で、力が元の倍になった。

【Boost!!】

10秒後、更に一誠の能力が倍になる。

【Boost!!】

そして10秒、また10秒と、人間界で言う10秒毎に力が倍になっていく。

倍加を繰り返すといえは聞こえはいいが、実際は能力の増大には限界が存在する。何

故なら、増大する力と宿主に掛かる負荷が比例する為であり、もし増大に耐え切れずに限界を超えてしまうと、宿主は全身の機能が止まる感覚に襲われてしまうのだ。

「……………ふあ……………」

「……………八雲先輩、寝不足？」

その一方、模擬戦の様子を見学している八雲はあくびをしており、気付いた小猫が話し掛けていた。

「ん……………ちよつとな……………」

勿論、寝不足の原因は昨夜の出来事なのだが、人には言えない事なので八雲は適当に誤魔化した。

「ストップ」

すると、リアスの指示が入り一誠は貯めた力を止める。

「いくぞ、ブーステッド・ギア！」

【Explosion!!】

力の増加を止める意味も含むその音声を引き金に、“赤龍帝の籠手”の宝玉が光を放った直後、一層強い輝きが一誠を包んだ。2分間高めた力は尋常なものではないと分かる。

「その状態で祐斗と手合わせしてみてちょうだい。——では……………始め！」

リアスの合図と同時に祐斗の姿がフツと消えた。

気付いた時には「騎士」のスピードで接近する祐斗の木刀が迫るが、一誠は咄嗟の判断で腕を交差させて一撃を防ぐ。

「っー！」

その事実には祐斗は少しだけ驚く様子を見せ、その一瞬を隙と見た一誠は瞬時に拳を振るう。しかし拳が当たる寸前、祐斗は持ち前の速度で回避し、一誠の拳が虚しく空を切った。

「どっだー！」

目を辺りに配らせて祐斗を追う一誠。左右、前、そして背後と探してもいない。

「っー！」

瞬間、一誠が上を見上った時、祐斗が木刀を下へ突き出して降ってきては一誠の頭部に一撃を入れた。

「いつてえ……！」

打たれた箇所を押さえもせず、一誠は地面に降り立った祐斗に蹴りを放つが、拳と同じく空を切った。

「くそっ、また避けられた！」

「イツセー！ 魔力の一撃を撃ってみなさい！」

「な、なくなつてしまいました……」

コゲンタ、八雲、朱乃、小猫、アーシアが言葉を繋げる。

全員の目に、一誠の一撃で大きく抉られた山の全容が飛び込んできた。

「マ、マジで？ マジで、消し飛んじやったの？」

〔Reset〕

あまりの出来事に呆氣に取られる一誠だったが、強化されている時間の終了を知らせる音声が発せられ、全身の力が一気に抜けた。

「そこまでよ」

リアスが一誠と祐斗の模擬戦を止めると、祐斗も木刀を降ろし、一誠も腰を抜かした様に地面へ座り込んだ。

「お疲れ様。さて、感想を聞こうかしら。祐斗、彼はどうだった？」

リアスの問い掛けに祐斗は答える。

「はい。正直、驚きました。最初の一撃で決めようと思つていたんですが、イツセーくんが硬すぎて大したダメージも与えられませんでした」

その証明をするかの様に祐斗は木刀を前に出すと、刀身は既に折れかけていた。

「あのままやっていたら僕は得物を失つて、逃げ回るしかなかったですね」

「ありがとう、祐斗」

確認したりアスは一誠に言う。

「イツセー。この前、あなたは私に『自分は皆より弱く、才能もない』と言ったわね。それは半分正解。ブーステッド・ギアを発動していないあなたは弱いけれど、その力を使うあなたは次元が変わるわ。その証拠があれ……上級悪魔クラスの一撃よ」

消し飛んだ山へ指差すと、リアスは語り続ける。

「基礎を鍛えたあなたの体は、莫大に増加していく神器の力を蓄える事の出来る器となつたわ。前に言ったでしょ？ あなたは基礎能力を鍛えれば最強になっていくの。始まりの数字が高ければ高い程、増大していく力も大きいよ。あなたにとって、それだけでも強大な成長なの」

「……俺の力は、凄……いのか？」

未だに自身の力を疑う一誠に向かって、リアスは自信満々に言い渡した。

「あなたはゲームの要。恐らく、イツセーの攻撃力は状況を大きく左右するわ。あなた1人で戦うのなら、力の倍化中は隙だらけだけど、勝負はチーム戦。あなたをフォロースする味方がいる。私達を……そして、何より自分を信じなさい」

「みんなを……自分……」

一誠は言葉を噛みしめながら辺りを見渡すと、八雲が、シキガミ達が、朱乃が、祐斗が、小猫が、くろうが、アーシアが、そしてリアスが微笑んでいる。

それはとても心地よくて、一誠の中に自信が満ちていくのが分かった。

「あなたをバカにした者に見せつけてやりましょう。相手がフェニックスだろうと関係ないわ。私達がどれだけ強いのか、彼らに思い知らせてやるのよ！」

「『は、い！』」

『『『『おう！』』』』』

全員の力強い返事が、全員の気持ちを一つになったのは言うまでもなかった。

決意を新たに、結束を深め合った山籠り修行合宿は順調に進み、その後無事に終わりを告げる。

そして、決戦当日を迎えた。

第20話：開幕、レーティングゲーム

「……………」

決戦当日、深夜11時。八雲は自室にてゲームの準備を終えてから、開始30分前まで静かに本を読んでいた。

本来なら既に家を出ないといけないのだが、部室まではくうろと共に「転」の闘神符で向かうので、普通に自室で過ごしていた。

因みに八雲の出で立ちは学生服と、手にはバンテージを巻いているのだが、何か入れているのか制服のポケットが少し膨らんでおり、バンテージには見慣れない模様が記されていた。

『もうすぐだな、八雲』

コゲンタに話し掛けられて八雲は本を閉じる。

「ああ……。正直、試合と聞くと楽しみで仕方がない。普段から積み上げた鍛練の成果を出せるしさ……」

『確かに……。ここにきてから、形は違うけど試合は初めてだよな』

以前住んでいた土地では小さな武道大会が開催しており、八雲は小さい頃から参加し

ていた。勿論、表彰台に立った事もあり、去年は格闘技部門で優勝もした。

しかし神器が目覚めてからか、はぐれ悪魔討伐は多くこなすが、試合と言った事柄は出来なく、八雲も知らない内に寂しさを感じていた。

だが、リアス眷属とライザー眷属によるレーティングゲームに参加が認められ、八雲は久しく感じる試合前の緊張感に、誰にも知れずに心を踊らせていたのだ。

『確認するけどよ、アレは使うのか?』

コゲンタの言葉の意図を感じ、八雲は顎に手を添える。

「状況によるかな。イツセーの神器の能力を使えば、ライザーを倒せるしよ」

『そうだな。まあ、もし使う事態になったら使えばいいさ。それで勝率が上がれば儲けもんだしな』

「いざという時はよろしくな、コゲンタ」

そう言つて八雲はコゲンタに微笑むと、不意にノックの音が聞こえた。

「御主人様、入ってもいいですか?」

「くうろか。いいぞ」

許可を貰いくうろは八雲の部屋に入ってきた。出で立ち学園のスカートに、迷彩柄のパーカーとなっている。因みに、パークーは八雲の御下がりであり、くうろのお気に入りの一着である。

「それで戦うのか」

「はい。リアスさんに聞いて、動きやすい服にしました。それに……」
頬を赤く染めながらくうろは言う。

「御主人様のいい匂いがして、まるで御主人様がすぐ側にいてくれる気がして、とつても頑張れるんです」

「……まあ、頑張れるのはいい事だが、前みたいに暴走するなよ」

「うっ………あ、あれは反省してますよ！　もう朱乃さんの巧みな話術に引つ掛かりません！」

『いや、誰がどう見ても巧みな話術じゃねえよ』

「うるさいですよ、このニャンコ！」

『んだとゴラア!!』

くうろの言葉にコゲンタがキレて口論が勃発し、八雲はやれやれと見つめながら「あの騒動」を思い出す。

修行で起こった温泉騒動後、八雲は朱乃とくうろに対して注意する様に叱った。その際、くうろは理解してはひたすら謝ったが、朱乃は「分かりましたわ」と一言だけだった。恐らく、懲りていないのだと八雲は思うが、その真実は朱乃しか知らない。

まあ実際、朱乃はこれからも八雲にスキンシップをするのだが……。

「くうろ」

そんな中、暫く口論するくうろに八雲は声を掛けてある物を渡した。

渡したのは、カードゲームでよく見るデッキケースだった。

「これが言つてた物だ。修行で身につけた『あの技』と組み合わせれば、様々な状況に対応出来るぞ。期待してる」

「ありがとうございます、御主人様！」

『八雲。そろそろ……』

コゲンタの言葉に八雲は頷いては時計を見る。もうすぐ集合の時間だ。

立ち上がると【転】の闘神符を取り出し、八雲は言う。

向かうは、駒王学園オカルト研究部。

「よし……行くぞ、皆！」

「はいっ！」

『『『『『おう！』』』』』

くうろとシキガミ達の決意が籠った声を聞き、八雲達は向かうのだった。



その頃、八雲とくうろ以外のメンバーは既に部室に集まり、それぞれ一番リラックス出来る方法で待機している。

リアスと朱乃はソファに座って優雅にお茶を飲み、オープンフィンガーグローブを嵌めた小猫は椅子に座っては本を読み、手甲と脛当てを装備した祐斗は剣の手入れを行い、その反対側に座る一誠と挟まれる位置にアーシアが座り、静かに時間を待っていた。因みに全員の格好は学生服だが、アーシアだけがシスターの服を着ていた。アーシア曰く、これが一番動きやすいらしい。

沈黙する空気の中、八卦の陣が部室の床に現れて輝き、八雲とくうろが現れた。

「来たわね八雲、くうろ」

「こんばんは、リアス部長。後、これを……」

すると、八雲は自室で読んでいた本をリアスに渡した。

「読み終わったのね。レーティングゲームのルールブック」

そう……八雲が読んでいたのは、レーティングゲームのルールが記載された本なのだ。因みに、八雲でも読める様に日本語に翻訳された物なので、八雲は内容を理解している。

「参考になりそうな所はある程度。それと、全員にもこれを……」

そう言つて制服のポケットから取り出したのは、くうろに渡した物より若干薄いデッ

キケースを人数分。それをリアスに渡した。

「闘神符が入ってます。種類は【壁】【動】【隠】の3枚だけ。公式戦じゃあ俺は参加出来ないの、今回だけ使える物だと思ってください」

「ありがとう。ありがたく使わせてもらおうわ」

そして全員にデツキケースが渡ると、八雲とくうろもソファに座り、開始時間まで静かに待った。

そして開始10分前、部室の魔方陣が光り出してグレイファイアが現れる。

「皆さん、準備はよろしいですか？」

「ええ、何時でもいいわ」

リアスの言葉に皆が立ち上がると、グレイファイアが説明を始める。

「開始時間になりましたら、こここの魔方陣から戦闘フィールドへ転送されます。場所は異空間に作られた戦闘用の世界。ここではどんなに派手な事しても構いません。使い捨ての空間なので思う存分にどうぞ」

グレイファイアの説明が終わると、一誠がリアスに訊く。

「あの、部長。部長にはもう一人、僧侶がいますよね？ その人は？」

「……………」

その質問を受けた瞬間、一誠とアーシア、八雲、くうろ以外のメンバーの様子が変わ

り、一様に口を閉ざした。

そんな中、リアスは一誠に目線を合わせず言う。

「残念だけど、もう1名の『僧侶』は参加出来ないわ。何れ、その事について話す時が来るでしょうね……」

「は、はあ……」

何か訳ありの様だと感じた一誠は話題を終えると、再びグレイファイアが口を開く。

「今回は両家の皆様も他の場所から中継でフィールドでの戦闘をご覧になります。更に魔王ルシファア様も、今回の戦いを拝見されておられます。それをお忘れなき様に……」

刹那、部室の緊張感が更に高まるのが分かった。特にリアスが心底驚く様子を見せた。

「……そう。お兄様が直接見られるのね」

その言葉に一誠は一瞬、耳を疑った。

「え？ あ、あの、今、部長が魔王様のお兄様って……」

「部長のお兄様は、魔王様だよ」

戸惑う一誠に裕斗がさりりと答えた。

「ま、魔王おおおおっ!? 部長のお兄さんって魔王なんですか!？」

「ええ」

即肯定するリアスに祐斗が説明を始める。

「サーゼクス・ルシファー……通称^{クリムゾン・サタン}紅髪の魔王」。それが今の部長のお兄様であり、最強の魔王様。サーゼクス様は、先の大戦で亡くなられた前魔王の一人の後を引き継いだんだ」

祐斗の説明で、魔王の名前は現在では個人名ではなく役職として機能していると、一誠達は理解した。

「……だから、部長は家を継がないといけないのか」

一誠が納得する中、神器の中にいるシキガミ達は驚いた様子で、それでいて誰にも聞こえない声で言った。

『……眠ってる間に、そこまで悪魔情勢が変わってたのか』

『……魔王も亡くなっていたのか』

刹那、全員の目の前に新たな魔方陣が現れると、それを見た全員が一層気を引き締めた。

「そろそろ時間です。尚、一度あちらへ移動しますと終了するまで魔方陣での転移は不可能となります」

グレイフィアに促され、リアスは言う。

「行きましょう」

リアスを先頭に全員が魔方阵に集結し、光が全員を包み込み、転移が始まったのだつた。



『……行つたみたいだね』

リアス達が向かった頃、グレイファイアだけしかいない筈の部屋に男の声が聞こえた。グレイファイアの隣に、紅髪の人物の顔が魔方阵により映し出されていた。

『ふふ、リアスには頑張ってもらいたいね』

紅髪の男が口角を上げる中、その男に向けてグレイファイアが口を開いた。

「お嬢様に勝ち目があるとは」

『ああ、ないだろうね。私は選択肢を与えたに過ぎない。これはリアス自身の判断……グレモリー時期当主としての、ね?』

「はい」

あつさりとした返答にグレイファイアは静かに同意の意を示す中、紅髪の男は言う。

『それにしても、面白い魔力を持つ少年だね』

「少年？ ああ、人間の方ですか……」

『まるで様々な色の寶石を入れた箱の様だった。それに不意討ちとは言え、フェニツクススの炎を防いだと報告は貰っているからね。少し興味を持つよ……』

「……………」

紅髪の男の言葉にグレイファイアも内心納得するが、ある疑問と懐かしさも浮かんだ。

（あの少年……ほんの一瞬だけ、昔感じた魔力を発していた。確か、大戦時に——）

『グレイファイア』

しかし、紅髪の男の声にグレイファイアは考えるのを止めた。そろそろ開始時間だ。

「……………では、私は仕事に掛かります」

『ああ。では、私も観戦しに戻るよ』

そして、その言葉を最後に紅髪の男の魔方陣は消えると、グレイファイアも今回のレーディングゲームの審判として、リアス達に向かった空間に放送した。

「皆様。このたびグレモリー家、フェニツクス家のレーディングゲームの審判役を担う

アーレクター

事となりました、グレモリー家の使用人グレイファイアでございます。我が主、サーゼクス・ルシファアの名のもと、御両家の戦いを見守らせていただきます。どうぞ、よろしくお願い致します」

グレイファイアの説明は続く。

「今回のバトルフィールドはリアス様とライザー様のご意見を参考にし、リアス様が通う人間界の学舎『駒王学園』のレプリカを異空間にご用意致しました。両陣営、転移された先が“本陣”でございます。リアス様は旧校舎のオカルト研究部の部室。ライザー様は新校舎の生徒会室が“本陣”となります。 “兵士”の方は“昇格”をする際、相手の“本陣”の周囲まで赴いて下さい」

懐中時計を手にし、グレイフィアは宣言する。

「開始のお時間となりました。それでは、ゲームスタートです」

バトルフィールドに鳴り響く学園のチャイム。

今、リアス達にとっての初試合の狼煙が上がった。



レーティングゲームの舞台である駒王学園を模した疑似空間。その完成度に感心している暇もなく、作戦を立てたリアス達は動き始める。因みに現在、一誠と小猫は体育館でライザーの眷属達と戦闘を始めていた。

丁度その頃、拠点となる旧校舎の森の中に4つの人影が移動していた。

ライザーの“兵士”……シユリヤー、イル、ネル、ミラだ。

他にも2人の「兵士」……マリオン、ビュレントもいたのだが、途中で二手に分かれて行動している。

「なんか、やけに霧が出てきたわね……」

シュリヤーの言葉に答える様に濃くなる霧。

すると、辺りを警戒しながら一歩踏み出した時、前方から魔方阵が出現しては魔力の矢が放たれたが、4人は難なく避けていく。

「トラップにしては、やけに子供騙しよね」

「初心者らしい一手ね。まあ、簡単に——」

刹那、ネルの視界に蒼白い一閃が横切り、すぐ側の木に突き刺さる。

先程の魔力の矢ではなく、小さな実物の矢が……。

「っ、敵だど!？」

その言葉を皮切りに、魔力と実物2種類の矢が連続して射たれ、4人は木の影に隠れた。

(クロスボウの矢か……。だけど、いつの間に近付いたんだ?)

シュリヤーに戦慄が走る。森に入り、辺りの警戒は怠らなかつた。だが、先程の攻撃は明らかに魔力の類ではなく、グレモリー眷属の誰かの攻撃であると考えた。

しかし、近くに敵の気配を感知出来ない事にシュリヤーは疑問が浮かび、辺りの警戒

を強めた。

パンツ！

その瞬間、シュリヤーは足に激痛が走り膝をついた。

「シュリヤー!?!」

いきなりの負傷に駆け寄るミラ。シュリヤーの傷口に視線をやると、脛には銃創があつた。

「っー」

瞬間、ミラ達の耳に辺りの茂みからざわざわと音が届く。ミラ、ネル、イルはシュリヤーに近付いて辺りを警戒するが、相手の姿はない。

「ミラ、イル、ネル。私を置いて、あなた達だけでも行つて」

「そんな!?!」

ミラは否定する様に悲しむ様な表情をするが、シュリヤーは背中を押す様に強めて言う。

「これはライザー様の結婚が掛かった大事な試合……。一刻も早く抜け出して、一気に相手を蹴散らすのよ」

主の願いを叶えさせる為、そして確実に相手の戦力を削ぐ為、シュリヤーは自分を犠牲にすると決断した。

本当なら、ライザー[±]と共に勝ち残りたかったのだが、確実に勝つと考え、シュリヤーは私情を挟まず決めたのだ。

そして、ミラもシュリヤーの覚悟を悟り、苦渋の決断を言う。

「……………分かった——」

ズドン！

「キャインっ!？」

しかし、ミラの言葉はシュリヤーには届かなかった。野球ボール程の大きさがあつた“何か”がミラのすぐ横を通り、シュリヤーの顔面に当てたからだ。

そのせいか、シュリヤーは鈍い衝撃が顔に直撃した後、何処かの顔の骨が折れると共に気絶し、体が光に包まれては消えてしまった。

『ライザー・フェニックス様の“兵士”1名、リタイア』

審判のアナウンスが鳴り響く。それが聞こえた瞬間、グレモリー眷属は歓喜し、ライザー眷属は驚愕した。

それも束の間、再びミラ達に矢と銃弾が乱射された。

「くっ……………！ イル、ネル！ すぐに敵本陣へ向かうわよ！」

「は、はいいいいっ！」

「ぎやああああっ！」

前方の魔力の矢に、後方の矢と銃弾の雨を掻い潜りながら、ミラ達は旧校舎へと向かうのだった。

「……………ふう」

そんな中、丁度シュリヤーが消えた場所に八卦の魔方陣が現れ、そこからくろろが姿を現してはミラ達の背中を見つめていた。どうやら、【隠】の闘神符で姿を消していた様だ。

「くちらくろろ。〃兵士〃1名を撃破。尚、残りの〃兵士〃をそちらへと誘導させました、御主人様……………」



『先程向かわせたシキガミ達も、距離を取りながら〃兵士〃達を追い掛けています。もうすぐ抜ける頃ですので、作戦通りに…………』

イヤホンマイクタイプの通信機器から聞こえるくろろの言葉に、八雲は微笑む。

「そうか、分かった。——引き続き、くろろは作戦通りに〃各ポイント〃へ向かってくれ。先程、祐斗も〃兵士〃2人と戦闘に入った。俺も〃兵士〃を倒し次第、敵本陣に向かう」

そして八雲の声にくうろは「了解」と言い通信を切ると、八雲は前を見据える。森を抜けたミラ達が現れた。

「あれが敵本陣ね……」

そびえ立つ旧校舎を目前に捉えたミラ、ネル、イル。すぐに「昇格」しようと近付いた瞬間、それは起きた。

「え……?」

「なっ!」

「嘘っ!」

チャンスと思った直後だった。旧校舎全体が歪みだし、ミラ達の目の前で溶ける様に姿を消したのだ。

「上手く誘われたみたいね……」

「その通り」

戸惑うミラの言葉に答える様に、八雲は霧に紛れ歩み寄り、「隠」の闘神符を解除しては姿を現した。

「っ！ あなたは確か……」

敵意を増した視線を向けるミラ達に対し、何時もの様に敬礼の様なポーズをして八雲は名乗る。

「改めまして、吉川八雲だ。——それと、あんた達の行動は森に入った時点で気付いたよ」

言い続けながら、八雲は【壁】の闘神符を出す。

「既にここは俺達の領域だね。祐斗がいる場所同様、閉じ込めさせてもらう」

そう言つて八雲は【壁】の闘神符を頭上へ投げると、八雲とミラ達を閉じ込める様に四方から一筋の光が走り、障壁が完成された。闘神符による結界だ。

これがリアス達が立てた作戦の1つ。

分断した敵を八雲か祐斗がいる場所までおびき寄せる様にトラップを仕掛け、各自で倒す狙いなのだ。

「くっ、トラップに気を取られすぎた……」

初歩的なミスを犯した事に歯噛みをするミラ。だが、結界に閉じ込められては手遅れだ。

「リアス部長の眷属はただでさえ人数が少ないからな。足りない部分は頭で補った」

八雲が人差し指でこめかみを叩く行為が癪に障ったのか、ミラ達が目を細めた瞬間、それに気付く。

「ミラ。お姉ちゃん。あいつの手に着けてるのって……」

「神器……!」

「そうか……そういう事だったのね……」

八雲の「二十四気的神操機」を見てミラは納得した。自身の棍を破壊したのは、神器の力によるものだと……。

だが、棍の破壊が神器によるものではない事を、後にミラは知る事となる。

「さて、と。それじゃあ闘やろうか。さつきと終わらせて、前に行きたいんでね」

戦う気満々の視線を向ける八雲にイルとネルは言う。

「もしかして、3対1で勝てると思ってるの？」

「舐めちゃダメだよ。私達、人間のあなたより強いもん」

「……確かに、1人じゃ辛いな。だから……」

右腕を突き出しながら、八雲は闘神符を1枚前に投げた。

「シキガミ、降神！」

そして、警戒を強めるミラ達の前に、2つの「窓」が現れては同じ数のシキガミが現れた。

「白虎のコゲンタ、見参！」

1人目。北海道虎鉄を構えるコゲンタ。

そして2人目の登場が、これもまた異質だった。

鋼鉄の「窓」から現れたのは、カブトムシに似た機械人的な外見のシキガミ。ロボッ

トアニメのカタパルト発艦シーンの様に飛び出し、
「某自由の機動戦士」と同じ決めポーズで堂々と名乗る。

「赤銅のイソロク、見参！」

現れたシキガミ……コゲンタとイソロクを見た3人は驚愕する。

「召喚獣!？」

「“竜の手”だと思っただけ、全く違うの？」

「イル、ネル、落ち着きなさい。相手が誰であろうと、私達が相手よ！」

改めて棍を構えるミラに言われてイルとネルも愛用のチェーンソーを出す中、八雲達はそれぞれの敵と対峙しようとした。

「これで同等だ。2人共、気を付けろよ」

コゲンタとイソロクに言葉を掛けながら、ミラに対峙する八雲。

「分かっているでござす」

「八雲も頑張れよ」

八雲の言葉に答える様に、コゲンタとイソロクはネルとイルに対峙した。

「……：そーいや、こうして戦うのは初めてだな。前はあんたがイツセーに一撃入れようとして、俺が邪魔したからな」

「あなたはここで倒す。この前ダメになった私の棍の礼、返してもらおう！」

「棍の礼？ ああ、あの時の……か！」

それを皮切りに、八雲とミラは各々拳と棍を構え、同時に駆け出した。目前の敵に向かい、己の持つ力で倒す為に……。

第21話：炸裂、真終牙黄流拳法

「まずは、小手調べ……！」

眩きながら疾走する八雲を迎え撃つ様にミラが駆け出す。棍の間合いに八雲を入ると、透かさず顔を狙い突き出す。

しかし八雲は首を傾けて避け、すぐに次の攻撃が来るが、今度は掌で棍を上弾いて往なした。

「ふっー！」

そして、即座に拳を繰り出してはミラの体を突き飛ばす。

「ぐあっ!？」

刹那、ミラは拳を当てられた部分から激痛が走り、膝をついてしまった。

（な、何なの!?! 人間が繰り出す拳じゃない! ああ神器の力とでもいうの!）

「……よし。効果は抜群!」

驚愕するミラに対し、八雲はバンテージによる効果を確信した。

八雲が巻いているバンテージはホリンが符力を練り込ませた物であり、さらに聖書の文字を書き込んで出来た特注品である。この装備により、悪魔相手に大打撃を与える事

が可能となったのだ。

「……なかなか、やるじゃない！」

「それは……どうも！」

両者が激突する一方、シキガミ達も激闘を繰り広げていた。

「おいどんの力を見せるでござす！」

そう言い、イソロクは陰陽鉄球あさぼらけ「朝洞塊」をイルに向けて豪快に投げた。

だが、その攻撃にイルは跳躍や体をひねるといったアクロバティックな動きで次々と避けていき、イソロクの攻撃はかすりもしなかった。

「バラバラ解体ー！」

そして、朝洞塊の一瞬の隙にイルはイソロクに跳び掛かり、チェーンソーを振り下ろした。

「なんのー！」

ガギギギギツツ!!

「えええええつ!!？」

瞬間、イルは驚愕した。

振り下ろしたチェーンソーは確かにイソロクに直撃した。しかし、直撃場所はイソロクの立派な角であり、チェーンソーとの唾競り合いが出来てしまったのだ。

「おいどんの属性は金。並み大抵の攻撃なんぞ、効かんでござす！」

「離震坎坎！」

刹那、ミラと距離を取った八雲は印を切ると、イソロクは角を振ってはイルを吹っ飛ばした。

「いくでござす！ 必殺、強震きょうしゅう万物崩壊ばんぶつほうかい掌しょう!!」

そして、イソロクの角が眩い光を放ち、雷撃がイルを襲う。

「うわっ!!」

間一髪だった。吹っ飛ばされたイルは見事に着地し、イソロクが放つ雷撃を回避した……その時だった。

「ぎ、ぎやああああ!!」

イルが着地した瞬間、地面から八卦の陣が浮かんでは蔓が生え、イルを拘束したのだ。

【木】の闘神符の力だ。

そんな中、イルを気に掛けていながらコゲンタと戦っているネルが驚く。

「罨!? まさか、相手も被害に合う可能性があるのに仕掛けているの?」

罨は、相手能通过る可能性がある場所に設置するのが基本的だろう。もしも味方、それか仕掛けた本人が罨に掛かってしまうとすれば、その罨は邪魔であろう。

ましてや、相手と戦う大きな空間に設置すると、それこそ邪魔で仕方ない。罨を仕掛

けた本人はあまり動けないのだから。

しかし、八雲はそんな場所でも大きく動いている。今もミラの攻撃を最小限に避け、致命傷を逃れているのだ。

無論、罠に使っている闘神符にはライザー眷属のみ反応する様に仕掛けているので、八雲は気にせず動いてるのだが……。

「あんまり周りを気にしすぎだぜ！」

言われてネルは意識をコゲンタに向けたが、それが遅かった。コゲンタの振るう西海道虎鉄が、ネルのチェーンソーを真つ二つに斬ったのだ。

「しまっ——」

「震坎兌離！」

「必殺、弧月拳舞!!」

その光景を八雲は見逃さなかった。

八雲が一瞬だけミラの攻撃を回避しながら印を素早く切り、コゲンタは弧月拳舞を繰り出す事が出来たのだ。

その結果、ネルはコゲンタの攻撃を受けてしまい、光に包まれながらその場で消えてしまった。

「離離兌震！」

すかさず新たな印を切る八雲。ネルがやられてすぐにでも拘束を解こうとするイルに、目を怪しく光らせたイソロクは至近距離でそれをした。

「必殺、合掌爆殺!!」
がつしよばくさつ

顔の前でのただの合掌。その瞬間――

ドガアアアアアアアアアアア!!

周囲に爆風を起こし、周りの木々と共にイルを吹き飛ばし、光に包まれてはその場で退場させてしまったのだ。

『ライザー・フェニックス様の『兵士』2名、リタイア』

「よくも2人を……!!」

ネルとイルがやられた事に、ミラは八雲の実力を改めた。

悪魔相手に互角以上の戦闘力に、別行動を取りながら周囲の状況を把握してタイミン
グよく指示を出す判断力。そんな前線に出ながら指示を出す指揮官タイプの様な相手
は、自分達を知る中でもゲームの上位ランカーだけであった。

「残り1人だ!」

「頑張るでござすよ、八雲!」

すると、八雲とミラの一騎討ちを観戦する様にコゲンタとイソロクは離れ、イソロク
に至っては徳利と盃を取り出して酒を飲んでいた。

その時、遠くの方で閃光と共に雷の轟音が聞こえては八雲達は視線を向けていた。その方向は一誠と小猫が向かった体育館からだ。

『ライザー・フェニックス様の『兵士』2名、『戦車』1名、戦闘不能』

何ごとかと思つた矢先、審判を務めるグレイフィアのアナウンスがフィールド中に響いた。

「よっしゃー！ イッサーと小猫、上手くやったな」

いい結果に八雲は微笑みながら喜びをあらわにし、対するミラは続けてやられる眷属達のアナウンスに大きく目を見開いていた。

だが、ミラは気を取り直して八雲に集中する。

「こうなったら、あなただけでも倒してみせる！」

その言葉と共に、ミラは先に動いた。高く跳躍し、先端に炎を灯した棍を勢いよく振り下ろす。

「そう言えば、棍の札がどうか言つてたな。まさか、俺の神器の力だと思つたのか？」

しかし、八雲はある闘神符を取り出しては右手に効力を宿し、ミラの棍を掴んだ。その瞬間、棍に灯っていた炎は水を掛けられた様な煙が発生して消えてしまい、その光景にミラは驚愕して動きを止めてしまった。

「炎がっ!？」

「【水】の闘神符の力を右手に宿した。ある程度の炎なら掴んで消せるさ。——さて、ここから棍の破壊の種明かしだ」

言い終わる瞬間、八雲は掴んだ手の指を一瞬だけ力を込めた。

するとどうだろう。掴まれた棍の部分に亀裂が走り、前回とは違い瞬時に棍をへし折ったではないか。

「そんな、新調して硬度を増した私の棍が……!」

「これが正体……武器破壊に特化した技だ。ダイヤでも亀裂を出せば簡単に割れると同じ様に、武器を掴んでは無理矢理亀裂を作つて壊す……と、親父に教わつた」

そして、八雲は掴んでいた棍を投げ捨てては言つた。

「技名を言いながら放つのは少し照れるが、これが真終牙黄流拳法が技の一つ……『鬼更危』だ」

「つー!」

しかし、棍を破壊されてもミラは挑んだ。棒術以外にも拳法を扱えるのだが、相手のレベルが上だった。

「え……?」

その証拠に、何時の間にかミラは空中に放り出されていた。

(掌低を繰り出したのに、何時の間……!?)

内心ミラが焦り冷静さを失っている中、手を合わせていた八雲は腰を落として例の構えを取りながら、落下するミラに言った。

「これが合気道の要領で行う真終牙黄流拳法が一つ、『夜酔津鬼』だ。そして、これからやるのは俺が最も得意とする真終牙黄流拳法……」

刹那、八雲は拳を突き出しては拳圧を飛ばし、それに乗せた闘神符をミラに向けた瞬間、闘神符が爆発したのだった。

そして、光に包まれながら落下するミラに言い放った。

「『武津鬼』だ」

因みに、先程の闘神符は「火」の闘神符2枚を合わせて出来た統合符であり、威力が上がった結果の爆発である。

『ライザー・フェニックス様の『兵士』1名、リタイア』

すぐに八雲の勝利を告げるアナウンスが流れ、コゲンタとイソロクが近付いてくる。

「お疲れ、八雲」

「さすが八雲でござす」

「お前らもお疲れ様。——そっちも、いざと言う時の為に待機してありがとよ」

言葉を交し合った後、八雲は結界を解いては近づく気配を感じながら森側に声を掛けると、あるシキガミが姿を現した。

現れたのは、柴犬に似た獣人的な外見を持ったシキガミ。捻り鉢巻きにサングラス、そして白い特攻服の姿は、宛ら暴走族の様であった。

「いえいえ。まあ、あつしが待機しても意味なんてありませんぜ。何たって、親分が全員倒すと自信を持っていたんでね」

しかし、服装とは裏腹に気さくな雰囲気ですし掛け、ニヒルな笑みを向けては八雲もやれやれと微笑みを返した。

このシキガミの名は『霜花そうかのオニシバ』。陰陽銃『回天かいてん三八式改』による射撃を得意としたシキガミであり、八雲を親分と呼んで慕っている。

「そう言えば、あいつは？」

八雲の質問にオニシバは答えた。

「あいつなら最後の『兵士』が投げられた時に移動しやしたぜ。体育館の方向に進んでつたみたいですが——」

刹那、オニシバの言葉を遮る様に本日5度目のアナウンスが流れた。

『リアス・グレモリー様の『戦車』、リタイヤ』

それは、グレモリー眷属と八雲達に驚きを与える結果となり、八雲は悔しげに拳と掌をぶつけた。

「小猫……………くそっ！」

、あらかじめリアスから説明は受けている。

ゲーム参加者が戦闘で再起不能と判断された場合、リタイヤとなってフィールドから強制的に転送され、その者は転送先の医療施設が整ったエリアで治療を受けるのだ。それは小猫だけでなく、先ほど倒したライザー眷属達も同様の処置を受ける事になっている。

別に死んだ訳でもないのだが、仲間がやられたという事実は受け入れがたいものだ。
(全員守るって、朱乃先輩に言ったのよ……)

「八雲」

悲しみに思考が染まる八雲に、その思考を感じたイソロクが八雲の肩に手を置いて言う。

「悔しいのは分かるが、まだ勝負は終わってないぞ。勝利報告を小猫に届ける為に、今は敵陣へ向かうのが得策でござすよ」

「……………そうだな。ここで落ち込んでちゃ……………」

パンツ!!

「いけないな!」

そして、イソロクの言葉に八雲は気合いを入れる為、自身の両頬をおもいつきり叩いたのだった。

——聞こえるか、八雲。

そんな中、八雲の心に声が聞こえた。フサノシンだ。

実はゲーム開始時、八雲は作戦会議後にフサノシンを降神し、【隠】の闘神符で姿を消した状態にさせた後、上空から敵の動きを偵察させていたのだ。そして赤銅一族であるイソロクの『心』を司る力を『二十四気の神操機』の力により貸してもらい、フサノシンと心の中で連絡を取り合っていた。そのおかげでライザー眷属が森に入る事も分かり、別行動中のくうろに奇襲を成功させたのだ。

これが、八雲が10日間の修行で身に付けた力の一部。今の八雲は、シキガミを5体同時降神する事が出来るのだ。

「フサノシンか。どうした？」

——今、体育館で戦闘が行われてるぞ。朱乃姉ちゃんと、相手は小猫を倒した『女王』だ。

『女王』対決か。心配だな……」

心配するのは、先程の朱乃の攻撃である。

雷は威力が強力な分、連発が不可能であり魔力を大きく消費する。相手のポテンシャルによるが、相手が万全の状態なら今の朱乃に不利だ。

そしてもう1つが、相手がライザー眷属である事だ。ルールブックを読んでいたのが

幸いしたと同時に、八雲は嫌な予感を感じたのだ。

（相手はフェニックス家。『王』か、実力のある眷属が、『アレ』を所持している可能性が大きい。だったら……！）

短い思考を終え、八雲はシキガミ達に命令する。

「コゲンタとイソロクは戻ってくれ。フサノシンは戦闘状況を随時報告。オニシバは俺と共に体育館に向かい、朱乃先輩に加勢するぞ」

「Lend!!」

言い終わると同時に八雲は右手の輝きを飛ばした。その輝きはフサノシンに貸した力と同じ輝きであり、それは体育館の方へと向かって行つたのだった。

「これであいつからも情報を聞ける。——オニシバ、先に向かつてくれ！」

「あいさ、了解」

そして【動】の闘神符の八卦の陣に八雲は乗ると、急いで体育館へと向かうのだった。
「……………」

その移動中、オニシバは八雲が向かう進路と共に、今後の八雲が突き進む『進路』が見えた。

（この道は険しいが、親分の今後の成長に一役買ってくれる様だな……）

霜花一族は『進路』を司る一族。契約者が進む道を導く、又は予想しては忠告する事

を生業としているが、今回見た進路に関して、オニシバは八雲に伝えなかった。

「まあ、馬に蹴られて死にたくないんでね……」

オニシバが呟く中、遠くからの爆音と共にフサノシンから八雲へと連絡が入った。

——八雲。朱乃姉ちゃんがテニスコートに移動してるぞ。

そして、八雲達は爆音が響くテニスコートへと進むのだった。



『ライザー・フェニックス様の『兵士』2名、リタイア』

新たなアナウンスが響く中、朱乃はテニスコート上空でライザーの『女王』であるユーベルーナと戦っていた。

朱乃の雷とユーベルーナの爆発。異なる魔力がぶつかり合うが、競り勝ったのは朱乃であり、ユーベルーナは衝撃で地面に墜落した。

『雷の巫女』、ここまでは……」

ダメージの溜まった体を起こしながら、ユーベルーナは忌々しげに朱乃を見上げる。因みに、『雷の巫女』とは朱乃の通り名である。

曰く、リアスがまだ正規のゲームが出来る年齢ではないので知る人ぞ知る存在だが、

一部の者の間では有名になっているらしい。

「でも、あなたの魔力も既に残っては——」

「心配なく」

ユーベルーナの言葉を遮る朱乃。巫女衣装はぼろぼろで少々きわどい事になっているが、その瞳はSの輝きが爛々と煌めいていた。

「少し休めば回復いたしますもの、『爆弾王妃』ボム・クイーンさん」

「……ふんっ」

朱乃が付けた通り名にユーベルーナは視線を鋭くなる。だが、それは一瞬の事であり次は余裕の笑みを浮かべた。

「そんな余裕……あるのかしら？」

「……それは!？」

そして、ユーベルーナは懐から小さな小瓶を取り出した途端、朱乃の顔色が変わった。「かかったわね」

そんな中、ユーベルーナは小瓶の蓋を開けて中身の液体を浴びた。

その中身こそ、『フェニックスの涙』だ。

フェニックスの涙。どんな傷も完治させ魔力も回復させる規格外のアイテムだが、ルール上2つまで使用する事が認められている。その1つを、ユーベルーナは所持して

いたのだ。

「ふふふ。これであなたに勝ち目はないわね！」

ドオンツツ!!

ユーベルーナは朱乃に爆発を向けた。完全回復した一撃は強力であり、ユーベルーナは勝利を確信した……………かに見えた。

「あら、見掛けない障壁ね？」

煙が晴れて最初に見たのは、複数の八卦の陣が朱乃を守る様に盾となっていた。ユーベルーナの腕が向けられた瞬間、朱乃は「壁」の闘神符を投げたのだ。

「くうっ！」

しかし、爆発の直撃を防ぐ事は出来たが衝撃に耐えきれず、朱乃は地面へと墜落してしまった。

悪魔の翼を広げてユーベルーナが飛翔した。立場が逆転している。

「なかなか楽しかったわ、雷の巫女さん。それじゃあ、撃破テイクといきましょうか」

そして、ゆっくりと腕を向けるユーベルーナを、朱乃の視界に入ると、朱乃は心の中で謝罪していた。

「ごめんなさい、リアス。私はここまでです。でも、あなたならきっと——」
ヒュンツッ!

「……………え？」

刹那、視界に入った何かに朱乃は謝罪を止めていた。

ドゴオンツ!!

それは一直線に向かい、爆発の元である魔力を居抜き、ユーベルーナの目の前で爆発してしまった。

「な、何だったの!」

驚愕するユーベルーナ。

「今の矢は……………まさか」

先程の攻撃に覚えがある朱乃。

「間一髪であったな、姫島朱乃」

そんな2人の横から、ある者が現れた。

バツタに似た青い機械人的の外見。右手に持つ陰陽ポーガン 黄昏たそがれに装填された

符力の矢が、ユーベルーナに向けながら朱乃に近寄る者こそ、先程の攻撃を仕掛けたシキガミ。

「ジユウゾウちゃん!」

その瞬間、朱乃に呼ばれたシキガミ……………青錫あわがねのジユウゾウは転けてしまった。

「ちゃん付けで呼ぶなと言ったでござろう、姫島朱乃!」

立ち上がったのは突っ込むジウゾウ。因みに、朱乃はシキガミ達全員をちゃん付けて呼んでいるが、ジウゾウの様に一部のシキガミには不満気味なのだ。

「怪人？ いや、召喚獣か？ まさか、今のはあなたがしたのか？」

「ご名答。それがし某、体育館へと到着した頃にテニスコートから爆音が聞こえ、墜落した姫島朱乃を見たのでござる。急いで向かったら貴様が符力の塊を向けておったから、移動中に狙撃したのでござるよ」

ジウゾウの言葉にユーベルナは驚くが、それは一瞬だけでまた余裕の笑みを浮かべた。

「いい狙撃だったわ。だけど、あなたが加勢しても無駄な事よ。既に私は完全回復した。

虫が増えただけで——」

「必殺、せんこうからやうち閃光空矢射!!」

刹那、ユーベルナの言葉を遮る様にジウゾウは黄昏から符力の矢を連発したが、ユーベルナは間一髪で回避した。

「……いきなりね」

鋭い視線を向けるユーベルナに対し、ジウゾウは背中の羽で飛びながら閃光空矢射を射ち続ける。

「貴殿が喋り続けているだけでござろう。戦闘の最中、随分と余裕でござるな。某に

とって、それは隙だらけだ！」

ボーガンの一閃と爆発がテニスコート上空で飛び交う。まさに戦場だった。

「しつこいわ——」

刹那、ユーベルーナの背後から気配を感じ取り、ユーベルーナは咄嗟に障壁でガードした。

背後にあるのは、テニスコート近くの森林。そこから符力による銃弾の射撃全弾がユーベルーナに向かい、障壁の一点を集中射撃しては障壁を破壊した。

「かはっ！」

その結果、ユーベルーナは2度目の墜落を経験したのだった。

「今のは、オニシバちゃんぎしばくれつたんの義志爆裂弾！ もしかして……」

頭に思い浮かべた瞬間、朱乃の耳にその者の声が聞こえた。

「朱乃先輩！」

現れたのは、「動」の闘神符の八卦の陣に乗ってはそこから飛び降り、朱乃の側へと駆け寄る八雲だった。

「八雲くん。そちらは終わったのですね」

「何とか終わり……って、ストップ、ストップです！」

すると、八雲は朱乃の現在の格好に気付き、朱乃に静止を求めた。先程墜落したのが

原因か、上半身は既に裸だった。

目のやり場に困る八雲は上着を脱ぎ、朱乃に羽織らせる。

「取り敢えず、魔力が回復するまで着てください」

「私は大丈夫ですよ？」

「……一応、お偉いさんも見てる訳ですし。それに仲間の裸を観戦者に見られるなんて、俺が嫌ですよ」

頬を掻きながら言う八雲の気遣いに朱乃はほんのりと頬を染めていたが、八雲は上半身裸の朱乃に背を向けていたのでその顔を見れないでいた。

「……私の目の前でイチヤイチヤしないでもらいたいわね」

しかし、そんな様子をユーベルーナは見ていた。そのせいか、不機嫌そうに2人を見つめては腕を向けては爆発させた。

「おっと」

しかし、八雲は2枚の【壁】の闘神符を使用した統合符による八卦の陣の様相があるドーム状の障壁を張り、爆発と衝撃を完全に防いだ。

「何時まで保てるかしら！」

だがユーベルーナは諦めない。障壁を破壊するまで爆発を数回向けて放つ中、八雲も右腕を突き出しては印を切る。

「兌兌坎離！ 兌震離兌！」

「うおおおおつ！」

刹那、八雲達の背後から飛び出したオニシバが現れ、高速で回転しながらユーベルーナに突進を仕掛けた。

「必殺、一切合切貫通撃!!」

弾丸の如く一直線に向かうオニシバ。しかしユーベルーナは障壁を張り、オニシバとの競り合いが発生したかに見えた。

「必殺、十方暮鋼崩!!」

しかし、ジウウゾウの黄昏から発射された矢がユーベルーナの障壁に刺さった瞬間、その箇所から障壁が崩れていき、オニシバが障壁を貫通してしまったのだ。

これぞジウウゾウの必殺の技、十方暮鋼崩。

空気中の水分を矢に凝縮させては相手の金属装備を錆びさせる能力を持つのだが、それは金属以外にも有効である。その証拠に、ユーベルーナの張る障壁を弱らせている。

「舐めないで！」

ドガアンツ!!

「うおおおつ!?!」

しかし、ユーベルーナは障壁が破られた瞬間にオニシバに爆発を向けた。近かったせ

いで衝撃を浴びたが、オニシバを地面に叩き付ける事に成功した。

「くっ、オニシバ戻れ！」

八雲は地面に倒れたオニシバを回収した。そして、内心冷静に状況を分析を始めた。（そろそろ俺の符力が少なくなってきたな。ジュウゾウの連絡では相手の『女王』は液体を浴びたと聞いたから、恐らくフェニックスの涙を使っただろう。向こうが完全有利な状況に対し、俺と朱乃先輩は符力が少ない。つまり、この状況を打破するには……）

「八雲くん？」

神妙な顔つきの八雲に気付いて朱乃は声を掛けるが、八雲はこの場にいる者に、静かに聞こえる様に言う。

「ジュウゾウ、フサノシン、戻ってくれ」

「ぬ？」

——おいおい、偵察は終いでいいのか？

「アレをやるぞ」

「!？」

——!？」

『それって!？』

刹那、シキガミ達が反応を見せた。その中でもコゲンタが異様な反応を示しては霊体

となつて現れた。

『……するんだな』

「ああ。今が……」

視線をユーベルーナに向ける八雲。その瞳は決意に満ち溢れ、しっかりと捕らえていた。

その瞳に何かを感じたのか、ユーベルーナの額に汗が滲む。

（雰囲気が変わった？ それに……）

そして――

「切り時だ……コゲンター！」

『二十四気の神操機』が輝いた。

それから暫くして、再びアナウンスが流れた。

『ライザー・フェニックス様の『女王』、リタイヤ』

第22話：片鱗、くうろの力

ライザー眷属の『女王』ユーベルーナが倒されるアウンズが流れる数分前の頃、グラウンドでは『僧侶』美南風、『騎士』シーリス、『僧侶』レイヴェルを合わせ、この場に残りのライザー眷属達が集結していた。

因みに、『僧侶』のレイヴェルはライザーの実の妹である。

ライザー曰くー

「妹をハーレムに入れる事は世間的にも意義がある。ほら、近親相姦つての？ 憧れたり、羨ましがれる者は多いじゃん？ まあ、俺は妹萌えじゃないからカタチとして眷属悪魔つて事で……」

ーといった理由である。

………涙目で口をトランプのダイヤの形にしながら、あえて言う。

変態だあー!!

………話を戻そう。

とにかく、観客を決め込んでいるレイヴェル達の前で、祐斗は『騎士』カーラマイン、一誠は『戦車』イザベラと対峙していた。

「はああああっ!」

音速の世界。『騎士』の祐斗とカーラマインの両者は得物を交えるが、風を切る音と共に競り負けたのは祐斗の闇の魔剣……『光喰剣』だった。

「『光喰剣』が……!」

「残念だが、私に貴様の神器は通用しない!」

炎に包まれた剣を構えるカーラマイン。だが、祐斗は臆した様子も見せず、逆に不敵な笑みを見せた。

「では、僕もこう返そうかな。——残念だけど、僕の神器はこれで全てではないんだ」「何?」

怪訝に言うカーラマインに、祐斗は低く唸る様に言った。

「凍えよ、『炎凍剣』!」

刀身を無くした剣が凍っていく。氷が積み重なり刀身を形作っていき、氷が割れると共に新たな魔剣が現れた。

祐斗は冷気を漂わせる氷の魔剣……『炎凍剣』を手にしていた。
「バカな! 神器を2つも有すると言うのか?」

炎の剣を横薙ぎに放つカーラマイン。しかし、刃が触れた途端、カーラマインの炎が冷え固まり、そしてパリンと儂い音を立てて、崩れて消えた。

「『炎凍剣』。この剣の前では、如何なる炎も消え失せる」
「ちいっ！」

炎凍剣を構える祐斗。しかし、カーラマインは攻撃の手を休めなかった。

早々に剣を捨て、腰に携えていた短剣を抜き放ち、天にかざして叫ぶ。

「我ら誇り高きフェニックス眷属は炎と風と命を司る！ 受けよ、炎の旋風を！」

すると、カーラマインと祐斗を中心にグラウンドに旋風が作られ、炎の渦が巻き起る。その結果、『炎凍剣』がポタポタと次第に融けていき、とうとう氷の刀身が無くなった。

「熱波で僕らを蒸し焼きにするつもりか……。だけど」

そんな中でも、祐斗は余裕の笑みを崩さない。

刀身を無くした柄を前へ突き出し、祐斗は力強い言葉を吐き出す。

「止まれ、『風 凧 剣』！」

瞬間、豪快な音を立てていた旋風が祐斗の剣へと吸い込まれていく。

祐斗の持つ柄には新たに円状の特殊な刃があり、円の中心に不可解な謎の渦が出来ている。そこに旋風が吸い込まれ、ついには数秒もしないうちに熱風が止み、グラウンドがしんと静まり返った。

「き、貴様は一体、幾つの神器を持っているんだ!？」

予想だにしない展開に、カーラメインが焦りを含めた疑問を投げ掛けると、祐斗は首を横に振っては否定した。

「僕は複数の神器を有してるんじゃない。——創ったのさ」

「創る……だと？」

「そう……それが『魔劍創造』。——すなわち！」

祐斗が地面に掌をつける。

「任意に魔劍を創り出せる僕の神器の名称だ！」

すると、地面から様々な刀身の魔劍が勢いよく飛び出してきた。

「くっ……うおおおおお!!」

カーラメインは短劍を握る力を強め、前へと出た。

そんな『騎士』対決の一方、一誠はイザベラの猛攻を必死で回避していた。『赤龍帝の籠手』の強化中は攻撃が出来ず、逃げの一手しかないのだ。

【Boost!!】

一誠の戦闘が始まり150秒。15回目のパワーアップを知らせる音声の流れ、一誠の準備が整った。

「よしっ、ブーステッド・ギア！ 爆発しろ！」

【Explosion!!】

体中に強大な力が集まると同時に、一誠はイメージする。

自分の中で、とてもパワーを放出しやすいイメージ……大好きなマンガの主人公の必殺技を……。

「ドラゴン波ならぬ……ドラゴンショット！」

両手に集めた魔力を感じ、両手を広げて上下に合わせる。その際、合宿で山を消し飛ばした程の威力にならない様にセーブさせながら、魔力の塊を撃ち出す。

「ぐわっ！」

飛び出た魔力の勢いに負けて一誠が後方に吹っ飛ぶ中、イザベラはそんな魔力を正面で受け止めようとしていた。

「イザベラ！ 避ける！」

しかし、カーラマインの言葉にイザベラは途端に回避行動を取ると、目標を失ったドラゴンショットは轟音と共に地面を抉りながら、遙か前方へと飛んで行き、次の瞬間には轟音がフィールド全体を響かせた。

赤い閃光と轟音が止む頃には、学園の風景が一気に様変わりしていた。

「ち、力をだいぶセーブしたつもりなのにな……」

目の前の光景に啞然とする一誠。改めて、『赤龍帝の籠手』の異常に身が沁みた。

「イザベラッ！ その神器はやはり危険だ！ その『兵士』を倒せ！」

「しよ、承知！」

怒号を発するカーラマイン。それに応える様に、肝を冷やして警戒心を露わにしたイザベラは全力で一誠を倒しにかかった。

しかし、焦りに任せた一撃を避ける事は今の一誠にとつては容易であり、拳と蹴りのラッシュを防御してやり過ぎ、一誠は空いた懐に左拳を叩き込んだ。

（触れた！ 発動条件クリア！）

それを確認した一誠は不敵な笑みを浮かべ、修行の成果を發揮した。

「弾ける、『洋服崩壊』！」

叫び、パチンと指を鳴らした瞬間、一誠の目の前でイザベラの衣服が弾け飛ぶ。露わになったイザベラの裸体を一誠は鼻血を出しながらも脳内に記録し、保存を完了させる。

これぞ、一誠がアジアの協力で新たに編み出した新必殺技……『洋服崩壊』。

脳内で女性の服を消し飛ばすイメージを延々と繰り返し、魔力の才能の全てを注ぎ込んだ、一誠らしい努力の結晶。ライザーしよづといい変態である。

「なっ！ 何だ、これはっ！」

「いつけええええ！」

反射的に自分の大事な部分を隠すイザベラ。そこに一誠は間髪入れずに、右手の中で

作り出した魔力の塊を彼女に放った。

「こ、こんな事で——」

魔力の波動がイザベラを包み込み、そして赤い閃光と共にこの場から消えた。

〔Reset〕

『ライザー・フェニックス様の『戦車』1名、リタイヤ』

『赤龍帝の籠手』の効果が切れる音声と共に、グレイフィアの音声が一誠の耳に届いた。
「よつしやあああああつ！」

初撃破を成した一誠が歓喜の声を上げる中、カーラメインが及び腰で苦笑を浮かべた。

「しかし、酷い技だ。いや、恐ろしい技と言うべきか。お、女の服を消し飛ばすとは……」

「……面目ないね。うちのイツセーくんがスケベでゴメンなさい」

「ちよ、身もふたもない謝り方すなよ！」

礼儀正しく頭を下げる祐斗に一誠はいたたまれなくなる中、新たなアナウンスが流れる。

『ライザー・フェニックス様の『女王』、リタイア』

ライザーの『女王』ユーベルーナの脱落を知らせるアナウンスだ。

その知らせが、ライザー眷属達に大きな衝撃を与えた。

「こちらの『女王』が落とされるとは……、そちらの『女王』もなかなかやるようだな」
「さすが朱乃さんだ！」

素直に賞賛を述べるカーラマインに、自慢げに鼻をこする一誠。しかし、その成果が朱乃でない事を、一誠達は知らない。

「その『兵士』さん。アレ、何だか分かります？」

そんな中、突然レイヴエルが話し掛けながらある方向を指差す。ユーベルーナがやられたにもかかわらず、その表情は余裕の笑みを浮かべていた。

その先を追う様に視線を向けると、新校舎の屋上に炎の翼を羽ばたかせる人影と、黒い翼を羽ばたかせる人影を見つけ、黒い翼の人物を見た瞬間、一誠は思わず叫んだ。

「部長!？」

すると、一誠の通信機器からアジアの声が飛び込んできた。

『イツセーさん!』

「アーシア! どうかしたか? もしかして部長の事か?」

『はい。今、私と部長さんは学校の屋上にいるんです。相手のライザーさんに一騎打ちの申し出をいただきました。部長さんが応じたんで、おかげで何事も無く校舎まで入ってこられたんですけど……』

アーシアの説明に言葉が出ない一誠へ、レイヴエルは嫌みな笑みを浮かべる。

『紅髪の滅殺姫』、『雷の巫女』、『魔剣創造』、そして『赤龍帝の籠手』。聞いているだけで尻込みしてしまう様なお名前が並んでおりますけど、あなた方の相手は不死鳥……不死なのですわー！」

「だが、フェニックスにだって弱点がある！」

諦めを見せない一誠の叫びを、レイヴェルは鼻で笑う。

「精神がやられるまで何度も倒すのかしら？ それとも神クラスの力で一撃必殺？ あなた達、このゲームに勝とうとか思っているの？ お笑いね？ まあ、ユーベルーナが倒された事は予想外でしたが、先に『王』を落とされた方が勝利です。——お分かりになりますか？ 不死があなた達にとって、どれだけ絶望的か……」

レイヴェルが手を振って合図を送ると、残りの下僕悪魔であるシーリスと美南風が一誠を囲んだ。

「カーラマイン。その『騎士』の子はあなたに任せますけれど、あなたが負けたら私達は一騎打ちなんてむさ苦しい事はしませんわよ？ これ以上、フェニックス家の看板に泥を塗る訳にはいかないの。いいわね？」

レイヴェルの迫力のある言葉にカーラマインが渋々頷いた……………その時だった。

「っー！」

カーラマインの横から野球ボール程の大きさの魔力の塊が迫ってきたが、カーラマイ

ンは短剣で簡単に弾いてしまった。

「なっ!?!」

しかし次の瞬間、カーラマインは驚愕する。

弾いた魔力の塊の軌道上に小さな八卦の魔方陣が現れては跳ね返り、更に跳ね返った魔力の塊の軌道上に同じ八卦の魔方陣が現れては跳ね返る。

反射反射の繰り返し。

次第に反射の感覚が短くなり、多くの魔方陣が現れては消え、現れては消え……魔力の塊が一誠やライザー眷属達の空間をめまぐるしく乱舞する。遂には魔力の塊はグラウンドにいる者達の視界に捉える事はなく、跳ね回る音だけが不気味に響き、現れては消えていく魔方陣しかなかった。

そして――

「……………っ!?!」

美南風は背中に衝撃を感じると共に、顔面から地面へと盛大に激突してしまった。

「な、なんですよ!?!」

いきなりの事に混乱するレイヴエルやライザー眷属達だが、一誠と祐斗はこの現象を知っている。

「加勢しますよ、2人共」

グラウンドに現れたのは、野球ボール程の銃口を持ったハンドガンを構えたくうろであり、先程の攻撃は合宿中にくうろが編み出した特殊な射撃技能……『跳び跳ねる兎』リフレクト・ラビットである。

「くうろちゃん！」

くうろの登場に一誠と祐斗が驚く中、辺りを見渡してからくうろは2人に訊ねる。

「……御主人様はまだ来てないんですか？ 通信機器にも連絡したんですが、出てくれなくて……」

「吉川？ いや、俺はまだ会ってないけど……」

「僕もまだだよ。でも、陣地に近付いた『兵士』を倒したから、向かっていると思うけど……」

一誠達の言葉にくうろが肩を落としてしまう中、フィールド全体を揺るがす程の爆音が響き、もしやと思い一誠達は屋上を見上げる。

そこで繰り広げられていたのは、紅い魔力と炎の魔力がぶつかりあっており、次第に煙が晴れてはリアスとライザーが対峙していた。

だが、制服の所々が破けているリアスに対し、ライザーに至っては服すら無傷だった。すると、くうろが一誠に促す様に言う。

「イツセイさん。ここは私に任せてリアスさんのところへ行ってください」

「えっ、でも——」

「早く——」

くうろが更に強く促すと、一誠は決意を固めて強く頷いた。

「……分かった！ 頼んだぞ！」

この場をくうろに託し、一誠は走り出す。

「まさか、このまま行かせるとお思いですか？ シーリス！」

「御意！」

レイヴェルに促され、シーリスが背中に背負った大剣を抜いては背を向ける一誠に飛び掛かろうとする。

「させない！」

しかし、それはハンドガンに備わった挿入口に闘神符を入れ、シーリスに向けてくうろが撃った鮮やかな色の煙幕によって阻まれてしまった。

「ごほっ、がはっ！ 一体——」

その時、シーリスに変化が起こった。

「アハハハハハ!! い、一体何だったのだ!!」

煙幕を少し吸い込み咳き込んだシーリスが、大声で爆笑し始めたのだ。

「シーリス！ いきなりどうしたんですの!?!」

説明しよう。先程、くうろが撃ったのは「木」の闘神符の効果で喜怒哀楽を無差別で発動させてしまう特殊な弾丸なのだ。

そしてそのハンドガンは、合宿中にくうろが自身の魔力で創り上げたハンドガンであり、くうろは『闘神銃』と名付けている。

基本的な弾丸はゴムの様に跳び跳ね回る魔力の弾丸なのだが、各闘神符を闘神符専用挿入口に入れる事で、様々な弾丸を撃ち出す事が出来る。

【金】の闘神符なら速度の速い砲丸。【木】なら状態異常を引き起こす花粉や胞子の煙幕弾。【壁】なら念じた角度で展開する小さな障壁で、【壁】だけは一枚につき数十発も撃てるのだ。

尚、闘神銃の構造を参考する際、合宿前に偶然見た特撮番組に出てきたトランプと昆虫をモチーフにした銃使いを参考にすると、後にくうろは語る。

話は戻り、新校舎に一誠の進行を許した事でレイヴェルは歯痒い思いでくうろを睨み付け、起き上がった美南風も鋭い視線を向けていた。

「ひつく……悲しくないのに涙が……」

煙幕の効果が切れないシリーズが涙を流して泣いている中、くうろは自信を持って祐斗に言う。

「祐斗さん。私は3人の相手をしますので、あなたは『騎士』の人を倒してくださいね」

すると、悟ったのか祐斗が訊ねる。

「くうろちゃん。もしかして、アレをするのかな？」

祐斗の言葉にくうろは頷くと、合宿で編み出した力を解放させた。

「……ワオオオオオオオオンツ!!」

遠吠えと共に体が輝くくうろ。

するとどうだろう。頭にはピンとした犬耳、腰とお尻の境界線の部分にふさふさとした尻尾、口元には牙が生えたのだ。

これがくうろの目覚めた力。犬耳と尻尾、牙を生えさせる事により獣特有の身体能力が発揮され、戦闘力を大幅に上げさせる『半獣人化』なのだ。

「獣人ですって!?!」

「獣人じゃない……と思う」

レイヴェルの言葉にくうろは微妙な否定をして首を傾げるが、すぐに表情を戦闘時に移行した。

『無音暗殺者』、狗牟田・O・くうろ。——参ります」

刹那、低く唸る様な声を出したくうろの姿が、レイヴェル達の視界から消えた。半獣人化により『騎士』に匹敵する速度を手に入れた事で、少し力を入れただけでくうろは美南風の目前に迫った。

「ずっと寝てて」

結果、くうろは呟いた瞬間に『闘神銃』の銃口を躊躇なく美南風の腹部に押さえ付け、引き金を引き、「水」の闘神符による弾丸が美南風の全体を包み、地面に貼り付けた。

「み、身動き取れません！」

美南風は仰向けでジタバタするが、「水」の闘神符による粘着弾が美南風の動きを殺していた。

「美南風は脱出に専念しなさい。——シーリス！ 何時まで泣いているのですか！ 向かいなさい！」

「承知い!!」

レイヴェルの怒号の下、煙幕の効果で憤怒の表情のままくうろに飛び掛かるシーリス。背中の大剣を構えるその姿は、獲物を襲う獅子の様だった。

しかし、くうろは大剣を軽々と回避し続け、隙あらば『闘神銃』を発射してはダメージを与えていった。

「面倒なタフさ。……祐斗さん」

すると、くうろは祐斗に声を掛けると同時に、片手で何かをジェスチャーした。

「……分かったよ！」

作戦会議で行ったジェスチャーの意図を悟った祐斗。カーラマインの短剣を弾くと、すぐさま後退した。

「逃がさん！」

しかしカーラマインは祐斗を追い跳び掛かると、祐斗との幾度かの唾競り合いを行っていた。

「祐斗さん」

シーリスに弾丸を撃つ中、声を掛けると同時にくうろはカーラマインに向けて撃つ。だが、カーラマインには簡単に避けられてしまい、離れた地面に着弾してしまった。

次に狙ったのはレイヴェル。しかし狙いは外れ、後ろの地面に着弾。

そしてシーリス、美南風にも撃つが全て外れる。シーリスには避けられ、美南風は動けないにも関わらず、すぐ横の地面に着弾していた。

その光景に、レイヴェルは疑問を抱く。

（あの跳ね回る魔力を正確無比の射撃で跳弾させていたのに、今は全く命中しませんわね？ そう言えば、その魔力も先程の様に跳ねる事も……………）

もしやと思い、レイヴェルは今までのくうろの行動を思い出す。

ジェスチャー後の数回の射撃の内、シーリスに向けて撃つたのは跳ねる弾丸だったが、その内の1発は着弾したまま。そんな同じ弾丸を計4発、全て自分達を狙った際に

起こつた。

「まさか!」

その弾丸が着弾した場所をレイヴェルが確認した瞬間、その答えが浮かんでしまった。

その場所を見ると、四方でレイヴェル達を囲む様に着弾されていた。

「ジャンプ!」

その瞬間、くうろは一言大声で叫ぶと同時に『闘神銃』を自分の真下に向け、高く跳躍しながら弾丸を放った。

そして着弾した瞬間、4ヶ所の着弾点に囲まれた地面から無数の石柱が突き上がった。

「ガハツ!」

「ゴゴッ!」

「へぶうっ!」

その結果、空間にいたカーラマイン、シーリス、美南風は石柱の餌食にあり、光に包まれて消えてしまった。

『ライザー・フェニックス様の『騎士』2名、『僧侶』1名、『リタイヤ』

「……さすがの威力だね、くうろちゃん」

アナウンスを聞きながら、あの空間から回避した祐斗は合宿を思い出していた。

闘神符の使い方方で数枚を用いた使い方は、現時点で2種類ある。

1つは、八雲の専用技術である統合符。そしてもう1つは、一定位置に設置して行う闘神符の結界であり、闘神符を使える者なら誰でも使える技術だ。しかも、その結界は使用者の任意で、防御にも攻撃にも応用出来る。

その技術を、くうろは合宿中に身に付けると同時に、『闘神銃』に応用したのだ。その際、『闘神銃』の構造で闘神符を数枚ストックする事を可能とし、先程見せた【土】の闘神符の攻撃結界を行ったのだ。

「この魔力の威力……。リアス様の下に、あの様な方がいたとは……」

そんな中、レイヴェルが炎の翼を羽ばたかせて空中で留まっていた。どうやら先程の攻撃を予見し、いち早く空中で回避した様だ。

「ウオオオオオオツ!!」

ガシツ!!

「きやあああああつ?!?!」

しかし留まっていた結界、【動】の八卦の魔方陣の上に乗ったくうろがレイヴェルに突撃しては腕を掴み、地面に激突して土煙が大きく広がった。

「くうろちゃん!」

心配して駆け寄る祐斗。だが、土煙で2人の姿は見えず、中から声だけが聞こえる。

「痛たたたたたつ！　ちよつと、髪が乱れるではありませんか!？」

「これは勝負。そんなことでギャーギャー騒がないのですよ鳥娘」

「だ、誰が鳥娘ですつて!!」

「それに、このゲームでいっぱい相手を倒して活躍すれば、御主人様に1つ可能なお願いを叶えてくれる。それで私は、今後から——」

「……いい加減に——」

カツ!!!

「しなさあああああいつ!!!」

刹那、土煙の中から赤い輝きが発した瞬間、レイヴェルの今までにない怒声が聞こえた。

「キヤイイイイイ——」

その結果、レイヴェルの怒りの炎でくうろは遙か彼方へと吹っ飛ばされてしまったのだった。



カーラマイン、シーリス、美南風が倒された頃、テニスコートに2つの影がいた。

「はあ……はあ……はあ……」

1つは、木に背中を預けて座り込んでいる八雲。息切れが激しく、顔色も披露の色が濃い様子で、『二十四気の神操機』も今は装着されていない。

「大丈夫ですか、八雲くん？」

もう1人は、そんな八雲を心配掛けながら隣に座っている朱乃だった。ある程度、魔力も回復したのか何時もの制服を身に纏い、借りていた上着を八雲の足に広げていた。

「……何とか……ですが……体力も……符力も……限界で……休息を……多く……取らない……と……」

途切れ途切れの中、朱乃は八雲に訊いてみた。

「それにしても、アレがコゲンタちゃんの言っていた切り札ですか……」

「……まあ……そうですね……」

その言葉を肯定すると、2人は目の前の光景を見つめた。

既にテニスコートは無く、辺りの木々も倒れている物や斬り倒された物と、朱乃とユーベルーナが戦っていた時よりも無惨な光景だった。

途中、レイヴェルの退場が知らされるアノウンスが流れた後、ある程度落ち着いた八雲は朱乃に言う。

「……朱乃先輩。アレは……リアス部長や皆には、まだ内緒にしてください」
 「え……？」

嗚然とする朱乃に、八雲は続けて言う。

「今のままじゃあ、余程の事が無い限り使えませんからね。鍛え上げて、完全に物にする迄は、ね？」

そう言い、八雲は口元に人差し指を立てると、暫く目を閉じて考えていた朱乃が口を開く。

「……分かりましたわ。——うふふ。2人だけの秘密、ですわね」

八雲と同じ様に指を立てる朱乃。仲睦まじい雰囲気や暫く堪能した後、朱乃は八雲の側を離れた。

「では、私は部長の所に向かいます。八雲くんは、ここで十分に休んでくださいね」

「はい。回復次第、俺も向かいます」

そして八雲は微笑むと、朱乃は翼を広げて行ってしまった。

「……コオオオオ……」

そしてすぐ、八雲は回復を早める為に真終牙黄流拳法が呼吸法……『波津鬼』^{はづき}を使用した瞬間、それは起こった。

ドンッ!!!

「っ!？」

胸に響く様な衝撃の瞬間、フィールド全体を赤い光が覆った。

「今のは……?？」

立ち上がったては視線を巡らせる八雲。すると、新校舎の屋上でライザーと対峙する、赤い龍を模した鎧を纏った人物を視界に捉えた。

「——イイイイイン!!!」

「ちよっ!？」

同時に、吹っ飛ばされたくうろが、目前に迫っていた。

第23話：発動、禁手へバランスブレイカー

新校舎に侵入した一誠は、リアスとアーシアのいる屋上へと目指し、廊下を走っていた。

「昇格！」　女王！」

「昇格」し、一誠の体に「女王」の力がみなぎる。

『ライザー・フェニックス様の「僧侶」1名、リタイヤ』

廊下を一気に走り抜いていると、最後のライザー眷属であるレイヴェルの脱落を知らせるアナウンスが聞こえた。

……実は、レイヴェルはグレモリー眷属に倒された訳でもなく、自らリタイアしたのだ。

理由は勿論、ライザーが負ける訳がないと自信を持っており、観戦だけでは何なので最後はライザーに任せたのだ。

その際、くうろに弄られて縦ロールから強制的にツイントールにさせられた髪に、若干頬を染めて戸惑いながらもその場から消えたのだが、そんな姿は祐斗にしか分からない。

話を戻そう。

「あがつー！」

唐突に足感覚が無くなり、激しく転けてしまった一誠はある事に気付く。
体力の限界が、近付いているのだ。

「くっ……」

しかし、今の一誠に休む暇もない。

「……そおおおおつ!!」

気合いで立ち上がり、上へ上へと駆け上る。

（待ってください……部長！）

やがて、屋上の扉が見えてきた。止まる事なく一誠は勢いに任せて扉を開け放つ。

眼前で対峙するリアスとライザー。そんな2人と少し離れた場所で、オロオロとしながらアジアが見守っている。

「イツセーさん！」

一誠の登場に気付いたアジアの歓喜の声で、リアスとライザーの視線が一誠に集中する。

「ドラゴンの小僧か？ ここまで来るとはな。レイヴェルの奴、見逃したのか」

舌打ちするライザー。だが、すぐに嫌らしい笑みをリアスに向ける。

「リアス。いい加減、^{リザイン}投了したらどうだい？　これ以上は他の場所で見ているキミのお父上にも、サーゼクス様にも格好がつかないだろう。キミが俺を倒す事なんてありえない」

数ではリアス達が勝るにもかかわらず、余裕の表情を浮かべるライザーが諭してくる。

「黙りなさい、ライザー。私は決して諦めたりしない！　『王』である私が倒れない限り、何度でもあなたを消し飛ばすわ！」

激高したリアスが魔力の弾をライザーの顔面に目掛けて放つ。避ける素振りを見せないライザーはそのまま直撃を食らい、頭部が消し飛んだ。

「やったー！」

しかし、一誠が喜んだのもつかの間、消し飛んだ部分から炎が立ち上ぼり、形を成していく。

炎が次第に顔となり、髪となり、ライザーの頭部は元の状態に戻り、何事もなかったかのように首をコキコキと鳴らすライザーを見て、一誠の脳裏にひとつの単語が浮かび上がる。

『不死身』。

初めて目撃するフェニックスの再生能力に戦慄を覚えるが、一誠はリアスの下に走

り、ライザーとの間に入った。

「アーシアー！」

一誠が呼ぶと、アーシアが恐る恐る近づいてくる。

その時、ライザーは移動するアーシアを狙い撃ちすらしなかった。余裕な態度に一誠は歯噛みするが、同時にその余裕がありがたく思えたのも事実だった。

アーシアの手がリアスと一誠に触れると、緑の淡い光が、優しく2人を包み込む。すぐに体から痛みが消えていくのが分かった。

体中の傷が引いていき、失い掛けていた感覚が戻ってくるが、傷は癒えても体力は戻らなかった。

（それでも、動ける分マシだ！）

立ち上がり、一誠はアーシアに言う。

「俺を治療したらアーシアは下がってる」

「っ！」

驚愕するアーシア。一誠にその様な事を言われると思わなかったと分かる表情だ。

「アーシアが残ってれば、俺と部長、後からくる皆を癒す事が出来る。アーシアは俺達の生命線なんだ」

沈痛な面持ちで何かを言いたげなアーシア。だが、すぐに口を閉ざしては後ろへ下

がった瞬間だった。

アーシアの悲鳴と共に、見知らぬ魔方陣がアーシアの足元に出現したのを一誠は見ただ。そして魔方陣から変化が起こり、赤い結界がアーシアを捕縛した。

「悪いな。あまり長引いてもキミらがかわいそうだ。取り敢えず、回復役の“僧侶”を封じさせてもらった。その魔方陣は並大抵の力じゃ壊れない」

ライザーが淡々と言う中、一誠は捕らわれたアーシアを見て悔しむ。

だが、文句を思っていない。

「部長。もうすぐ木場と朱乃さん、吉川、くうろちゃんも来てくれる筈です。でも、アーシアは捕らわれてしまった。長期戦に入ったら、そんな状況は最悪です。でも……」

一誠は口の端を吊り上げ、高々と言う。

「諦めないっす。拳が握れる限り、部長と一緒に最後まで戦います！」

「よく言ったわ！ イッセー、一緒にライザーを倒すわよ！」

「はい、部長！」

「あらあら。お二人だけで、ですか？」

「……！」

言葉を掛けられるリアス達の目の前に、極太な雷が轟音と共にライザーへと直撃した。

「くっ、この技は——」

雷に意識が向いた直後、ライザーは背後から斬り付けられて右腕を奪われた。

そして、ライザーに傷を負わせた者達が、リアス達の前に現れる。

「部長、イツセーくん。僕達抜きで戦おうなんて水臭いよ」

「相手はフェニックス。微力ながら、私も力を貸しますわ」

「木場!! 朱乃さん!!」

「あなた達……」

祐斗と朱乃。2人の眷属の登場により、リアスは喜びの涙を流しそうになった。

だが、それを流すのは今ではない。このラストバトルに勝利しなければいけないのだ

から。

涙を堪えて、リアスは高らかに命令する。

「ええ！ 皆でライザーを倒すわよ！」

「「はい!!」」

主の命令に眷属達も戦意を高揚する直後、それは起こった。

【Burst】

「イツセー!!」

「イツセーくん!!」

“赤龍帝の籠手”からの音声と共に、一誠は全身が鉛のように重くなるのを感じ、宝玉も機能が停止した様に光が消える。

「お前はとつくに限界だったんだよ。リアスの“兵士”」

その場で崩れ落ちる一誠に、腕を再生させたライザーが声を掛けた。

“赤龍帝の籠手”の能力は、想像以上に宿主を疲弊させる。今になって強化した反動が返ってきたのだ。

ライザーを目前に、血反吐を吐きながら遂に崩れ落ちる一誠。一瞬だけ、ライザーがこちらを嘲笑う様に見下すのが見えた。

「イツセー！」

リアスの声がぼやけて聞こえてくる。

立ち上がるうとしても、体が全く動かせず、そのまま疲労による睡魔が一誠の意識を奪った。



一誠は赤い夢を見ていた。

周りに灼熱の炎が揺れている。

「はい、は……？」

『十数日振りだな、小僧』

何者かの声が響く。

だが、一誠は声の主の正体がすぐに分かった。

燃え盛る炎に紛れ、目の前に現れたのは巨大な怪物。

全身を覆う鱗はマグマを彷彿とさせ、広げた翼が圧倒的な存在感を一層引き立たせている。

「お前は……あの時のドラゴン！」

目の前の怪物……ドラゴンが、口の端を釣り上げて話し掛ける。

『今回はよく頑張った方だが、今のままじゃお前は何時まで経つても強くなれない』

本質を突かれた正論。一誠は言い返せない。

『お前はドラゴンを身に宿した異常なる存在。無様な姿を見せるなよ。そんなんじや、

“白い奴”に笑われちまう』

「白い奴？」

『負けるのはいい。死ななければ敗北も力の糧になる。だが、それは次に勝つてこそ意味のあるものだ。これから勝って勝って勝ち続けろ……いずれ、奴はお前の前に現れる。そうさ、俺とあいつは戦う運命にあるからな』

語る内容がいまいち理解出来ない中、ドラゴンはいよいよ掛ける。

『兵藤一誠。お前に問う。何を望む?』

「……………どういう意味だ?」

『言葉通りの意味だ。お前は今、何を欲する?』

唐突な問い掛けだが、すぐに答えは出た。

「部長と仲間達が、こんなどうしようもない俺を信じてくれてるんだ。——俺は、そんな皆を……………部長を助けたい! フェニックスだろうが何だろうが関係ない。俺が欲しいのは……………目の前に立ちはだかる敵をぶっ飛ばす力だ! だから……………俺に力を貸しやがれ!」

思った事をそのまま目の前のドラゴンにぶつけた一誠。お互い沈黙が続いたが、ドラゴンは向けられる鋭い視線を見つめ返しては全てを悟った。

『いい覚悟だ。合格だ。俺の力、その本来の使い方をお前に教えてやる』

すると突然、一誠の左手に“赤龍帝の籠手”が現れた。

ドラゴンが翼を羽ばたかせては炎の勢いが増すと同時に、それに反応する様に籠手の宝玉から強烈な光を放った。

「ハ、ハこれは……………」

籠手の変化に戸惑いを見せる一誠に、ドラゴンが語り掛ける。

『お前が望めば俺は何時如何なる時でも力を分け与える。だが、力を手に入れるにはそれ相応の代償を払う事になる。なに、犠牲に似合うだけの価値は与えてやるさ。お前を嘲笑った連中に見せつけてやればいい。』ドラゴン“ って存在をな”

ドラゴンが不気味な笑みを向けてくる。

「お前は一体……？」

『ああ、まだ名を名乗ってなかったな。いいだろう……』

不気味な笑みから一変、目の前のドラゴンが勇ましく、高らかに言い放った。

『我が名は『赤い龍ウエルシユ・ドラゴンの帝王』』ドライグ。来るべき日の為に強くなれよ、相棒』

目の前でドラゴン……ドライグが含み笑いを向けたのを最後に、燃え盛る炎の流動が一誠の意識を夢から現実に引き戻した。



「うおおおおおおおおおおおっ！」

フィールド全体に一誠の咆哮が轟いた。その叫びと呼応する様に、
“赤龍帝の籠手”
の宝玉から赤い閃光が放たれた。

「な、なんだ……!？」

「イツセー?」

「イツセーくん?」

「あらあら……?」

倒れたと思った矢先の突然の変化に、その場にいた者達が驚愕を露にする。
対する一誠は体中に力が駆け巡るのが分かり、そのまま立ち上がると閃光を放つ籠手を天高く掲げる。

【Dragon booster second Liberation!!】

初めて聞く音声が籠手から発せられ、左腕に変化が訪れる。

甲の部分にあった宝玉の他に、もう1つの宝玉が肘の部分に現れ、全体のフォルムも赤い装甲が追加された事により少しばかり変わっている。

しかし、それでも変化は止まらなかった。

「もつとだ! もつと、輝きやがれえええええツツ!! オーバーブーストオツ!!」

【Welsh Dragon over booster!!!】

フィールド全体が赤い光に覆われ、一誠の体が真紅のオーラに包まれる。

そして現れたのは、ドラゴンの姿を模した赤い全身^{プレット Armour}鎧を纏った一誠。

左手の籠手と同じものが右手にも装着されている。

頭部すら覆う鋭角的なフォルム。

左手と同じ右手にも装着された籠手。

両手の甲の他、両腕、両肩、両膝、胴体中央に出現した宝玉が輝く。

背中にはロケットブースターの様な推進装置が付いている。

『どうやら上手くいった様だな』

一誠の脳裏にドライグの声が響いた。

『先に言っておくが、この姿でいられるのは10秒だけだ。それ以上はお前の体が保てん』

「十分だ！ それだけあれば、俺は……俺達はいいつをぶん殴れるっ！」

赤いオーラを振り払い、一誠がライザーを睨み付ける。

「鎧だど!? まさか、赤龍帝の力を鎧に具現化させたのか!？」

赤い兜を通してライザーがさらに驚愕をあらわにしていた。

「これが龍帝の力!」
バランスブレイカー 禁手ブレストッド・ギア・スケイルメイル、赤龍帝の鎧! 俺を止めたきや魔王様

に頼み込め! 何しろ、禁じられし忌々しい外法らしいからな!」

【X】

発せられた10秒間の無敵モードのカウントダウンに、一誠が動き出した。

両の掌の間に生み出した魔力の塊を一気にライザーに撃ち放つ途端、魔力の塊が巨大な帯状に肥大化してライザーに迫る。

「デカい！」

「っ!？」

その量の魔力に一誠自身も驚き、ライザーも受け止めることをやめて避ける体勢を作り出していた。その威力は先程グラウンドで放ったドラゴンショットの比ではなかった。

〔IX〕

一誠はライザーが避けるであろう先に向かって飛び出す。鎧の背部にある噴出口から魔力が噴き出し、一誠に爆発的な速度を与えた。

「ぐ……っ!？」

体に掛かるGの影響でまともに動けないまま、ライザーとの距離を一気に詰めていく。

避ける先に一誠が猛スピードで迫ってきたせいかわ、ライザーは驚き、対応も出来ない状態で身構えていた。

(チャンス！)

そう思った一誠は攻撃しようとしたのだが制御が効かず、一誠は気が付くとライザーの遥か頭上にいた。

「なんだ、この力とスピードは!? 本当に不愉快な小僧だぜ！」

【Ⅷ】

一誠を見上げるライザーが警戒を強める。

「赤龍帝の小僧！ 悪いが手加減しないぜ！ 認めたくないが、今のお前はバケモノだ！ 主であるリアスの前で散れええええつ！」

凄まじい魔力のオーラを覆い、咆哮を上げるライザーの背中に巨大な炎の両翼が出現する。ライザーの全身に炎が渦巻き、周辺を激しい熱気が包み込む。

眼下でリアスと朱乃がアーシアと祐斗を庇う様に障壁を産み出していたのが見え、その危険度を察した。

「火の鳥と鳳凰！ そして不死鳥フェニックスと称えられた我が一族の業火！ その身で受けて燃え尽きろツツ！」

眼前に広がるあり得ない質量の炎。そのシルエツトは宛ら火の鳥そのものだ。

『フェニックスの炎はドラゴンの鱗にも傷を残す。食らい続けるのは得策じゃない』

その言葉に小さく頷く一誠。だが、リアスが見ている目の前で、一誠は決意した。

【Ⅶ】

「てめえのチンケな炎で、俺が消える訳ねえだろおおおつ！」

吼えながら背中から噴出口から魔力の火を出す一誠と火炎に包まれたライザーが、お互い目掛けて距離を詰める。

そして、全力を込めたお互いの拳がお互いの顔面に鋭く入り込んだ瞬間、力と力が生み出した波動がフィールド全体を振動させた。

新校舎の上空、一誠とライザーの力比べが始まった。

一撃一撃を食らう度に、一誠の全身へ重い衝撃が響き渡る。ライザーの拳から伝わる業火の炎熱と本来の実力差を感じてしまい、恐怖を感じてしまった。

「怖いか！ 俺が怖いか！ 当たり前だ！ お前はその鎧が無ければ、俺の拳が届く以前に業火の熱で消失している！ お前からその籠手を取ったら、お前は何の価値もないクズだ！」

【Ⅵ】

「ゴバツ！」

クロスカウンターの要領でお互いの顔面に鋭く入り込んだ瞬間、一誠の口から鎧の間を縫い、大量の血が吐き出された。

その様子を見てライザーがにやける中、同時に一誠も兜の下でにやけ、見せつける様にライザーの眼前で握った拳を開く。

「っ!？」

掌にあったソレを見た途端、ライザーの表情が余裕から戦慄に変わった。

一誠の掌にあったのは、米粒大の魔力の塊。

すぐに回避行動を取ろうとするが、先程の一撃で体が大きく仰け反っていた為、間に合わなかった。

「ドラゴン……シヨットオオオオツ!!」

巨大化したドラゴンシヨットが一瞬でライザーを飲み込み、そのまま直下する魔力の塊がグラウンドを大きく抉った。

肩で息をしながら、一旦着地して様子を窺う一誠。

すると、煙の中で睨み付けるライザーと目が合った瞬間、ライザーは一誠の変化に気付く。

「貴様……!」

無機質の質感に見える全身鎧。

その一部が……左腕が、まるで生きているかのような脈動を続けていた。

「籠手に宿るドラゴンに、自分の腕を支払ったのか!」

「ああ、そうだ」

“相応の代償”。

ドライグの絶大な力を使う代償として……禁手をする代償に、一誠は自身の左腕を売り払ったのだ。

「そんな事をすれば、もう2度と元の腕には戻らない! それが分かっているのか、お前

は!？」

「それがどうした」

〔V〕

カウンントが迫る中、一誠は言う。

「俺みたいな奴の腕一本で、部長を勝たせてあげられるんだぜ？　こんなに安い取り引きは無いだろう？　その為なら……」

ドラゴンの腕を突き出し、一誠は叫ぶ。

「部長の為なら、俺はどんな奴だつてぶっ倒してみせる！　このブーステッド・ギアで！　俺の唯一の武器で！　部長を守ってみせる！　俺は部長の……最強の“兵士”になるんだ!!」

それは誓い。

その発言にリアスは人知れず頬を染め、ライザーは目元を引きつらせていた。

「イカれてるな……。“兵士”の力でよくここまでやったと褒めてやろう。本当によくやったよ、お前は。正直、ここまでやれるとは思わなかった」

飛翔しては賞賛を送るライザー。その表情は真剣なもので、すぐに冗談ではないと分かっていた。

「怖いな。初めて俺はお前に心底畏怖した。——だから！　ドラゴンの恐ろしさを教え

てくれた事に敬意を表して、俺は全力でお前を倒すっ！」

ライザーが叫び、圧倒的質量の熱気が集まると、頭上に巨大な火の玉を形成する。距離が離れているにもかかわらず、その熱気が伝わってくる。

【Ⅳ】

「いくぞー！ ライザー・フェニックス！」

これで決着を付けようと、一誠は残った魔力全てを込めた拳を握り締めては一気に駆け出した瞬間、それが起こった。

【Count over】

一誠の体にかつてない程の脱力感が押し寄せ、盛大に転倒した。

何が起きたか分からないでいると、一誠は自分の変化に驚愕を露わにした。

「よ、鎧が消えた……!?!」

一誠の全身を覆っていた鎧が消えており、抜き身の姿と左腕の「赤龍帝の籠手」だけが残されている。

「まだ時間じゃないのに、どうしてだ!?!」

『残念ながら、今のお前の基礎能力ではこれが限界だ』

一誠の精神世界でドライグの声が響いた。

「俺が弱いからか？ 何で俺は、肝心な場面で……!」

自分の不甲斐なさに悔やんでも悔やみきれない一誠を、ドライグが語り掛ける。

『鎧が解除される瞬間、僅かだがドラゴンの力を宝玉に移せた。だがそれでも、フェニックスの再生能力に対抗するには及ばないだろう』

「それでも、俺は……………絶対に、諦めない！」

意識を現実に戻し、震える足に踏ん張りを利かせて立ち上がる。

「どうやらこのゲーム、勝利は俺の様だな！」

ぼやける視界にライザーが作り出した業火の火炎弾が映る。

「終わりだ、小僧っ！」

ライザーが放った火炎弾が迫るが、今の一誠に攻撃を避ける余力はなかった。

（くそっ！……ここまで——）

内心、諦めを抱いた一誠。だが——

ドオオオオオオオオオオッ！

「え…………？」

後ろから放たれた赤黒い巨大な魔力の塊が火炎弾と衝突し、激しい爆音と共に相殺という結末を迎えては消え、代わりに辺りに吹き荒れる暴風が一誠に迫って来た。

「イツセーくん！」

耐え切れず倒れそうになる。だが、駆け付けた祐斗が一誠の体を受け止めた。

「木場……?」

見上げると、先程の魔力で自分を助けた人物が誰なのか自ずと予想出来た。

紅の髪をなびかせて優雅に舞い降りるリアス。先程の魔力は、リアスによるものだ。静かに歩み寄ったリアスは一誠の頬に手を当てた。

「イツセー、大丈夫?」

「部長……」

リアスの顔を見る。今、リアスは慈しむような視線を一誠に向けていた。

「すいません。もう少しで……あいつを倒せそう、だったのに、俺……」

「いいのよ。よく頑張ったわ、イツセー。ありがとう……」

一誠に優しい笑顔を向けた後、リアスは立ち上がり眼前の敵を鋭く睨み付ける。

「後は、私達に任せなさい!」

仲間にも、そして自分に誓いを立てる様に、高らかに叫んだ。

しかし、その様な光景をライザーは鋭い視線を向けて言った。

「これで決着としよう、リアス! この業火で、キミ達を一気に消し炭にしてやろう!!」
今ある魔力の全てを、一撃で仕留める為に作り上げた炎の波動としてライザーは放つた。

「俺の……勝ちだあああああつ!!」

例え魔剣が貫こうと、雷が起きようと、滅びの魔力が来ようとも、その波動は止まる事なく迫る中、“ソレ”は起こった。

「っ!？」

「これって……!？」

突如、フィールドに立ち上がる青い光の柱。

5本の光がそれぞれ繋がり、新校舎を中心に“五芒星の青い結界”が作られた。

「やっとなたわね!？」

「なっ、何だこの光は!？」

結果、リアス達は歓喜の表情を浮かべ、ライザーは驚愕の表情を浮かべた。自分が持つ最強の一撃の波動……フェニックスを模した炎が徐々に小さくなり、遂にはリアス達の目前で消えてしまったのだ。

そして、ライザーも異変に気付く。

ライザー自身が持つ魔力が発揮出来ず、遂には炎の翼も消えてしまい、ライザーは着地した。

「俺の翼が!?! この光、まさか——」

しかし、ライザーは最後まで喋る事はなかった。

「どりゃあああああっ!!!!」

何故なら、八雲とくうろが落下しながら真下にいるライザーに向けて、八雲はバンテージ状態の拳で殴り、くうろは闘神銃と同じ要領で創り上げたナイフで背中を切り付けたからだ。

「ウボアアアアツ?!?!?」

聖書の力が付加された拳。 “二十四気の神操機” が装着されていないので拳の威力は小さいが、それでも聖書の力はライザーに高い力を発揮させ、殴られた箇所を押さえながら悶え苦しんでいた。

あまりの展開に目を丸くするリアス達。

「八雲くん。もう体は……」

そんな中、朱乃が心配する様に話し掛けると、八雲は笑みを浮かべては腕を掲げ、天を指差しながら宣言する。

「符力共々完全回復！ 俺は今、戦いたい思いが爆発しそうでヤバイ位です!!」

その表情からリアス達が今まで見た事のない程に、八雲の戦意が高揚しているのが分かった。

そんな中、苦しみから解放されては立ち上がっているライザーが八雲を睨み付ける。

「くっ！ 貴様には、数日前の借りを返さないと……下等種族が!!」

「上級悪魔には効果が薄いか。でもまあ……」

そう言い、八雲は「二十四気の神操機」を出現させては笑った。

「ここからは俺達の戦舞台だ！ シキガミ、降神！」

降神させたのは、八雲の相棒とも言ってもいいシキガミ。

「白虎のコゲンタ、見参！」

コゲンタの登場にライザーは一瞬驚くが、すぐに憎悪を込めた視線を向けては、八雲と同時に言った。

「叩きのめす!!」

「思う存分、闘やり合おうか!!」

「行くぜ行くぜ行くぜえ!!」

瞬間、3人は同時に走り出した。

第24話：反撃、2人の切り札

時はゲーム以前、合宿中で行つた何度目かの午前中の座学にまで遡る。

「では、今回は陰陽五行いんようごぎょうについて学ぼうか」

降神されたコンゴウが何時ものホワイトボードにペンを走らせる。

そこには1つの五芒星が書かれ、五芒星の点に5種類の文字が書かれ、さらに五角形の様に矢印を文字同士で結んでいた。

「わたし達シキガミは陰陽五行を基礎として生を受けている。それにより、わたし達にも得手不得手があるのだが………では、元神社の子である朱乃くんに問おう。陰陽五行とは何だ？」

唐突な問いに朱乃は答える。

「この世に存在する万物は、【火】、【水】、【土】、【木】、【金】……5つの属性から成り立ち、全ての存在は【陰】と【陽】の2つの性質を持つという考えですわ」

朱乃の言葉と同じ、五芒星の頂点から反時計回りで5つの属性の文字が書かれている。

「いい答えだ。ありがとう。——その陰陽五行だが、2種類の考え方があ。それが」

五行相剋^{ごぎょうそうこく}”と 五行相生^{ごぎょうそうじょう}”だ

「そうこくと、そうじょうか？ どんな意味なのでしょうか……？」

まだ日本語に慣れないアジアは首を傾げる中、コンゴウは説明した。

「まずは五行相剋。これは一方が他方を抑制する五行同士の闘争の意であり、所謂属性の相性だ」

その言葉を聞き、八雲と朱乃を除くメンバーは属性同士で引かれている矢印の意味を理解した。因みに、八雲はシキガミ達から陰陽五行の事は教えてもらっていたので理解している。

コンゴウは矢印をなぞりながら言う。

「火は水に消される故に、火は水に弱い。これが 水剋火^{すいこくか}”。矢印の方向に従い、一方の属性が他方の属性を打ち消したり、弱らせたりする事が出来るのだ」

「……ゲームみたいです」

「まあ、簡単に言えばそうだ」

小猫の言葉にコンゴウが苦笑する中、残りの五行相剋の説明は続く。

火剋金^{かこくこん}”。金は火によって溶かされる故に、金は火に弱い。

土剋水^{どこくすい}”。水は土に染み込む故に、水は土に弱い。

木剋土^{もくこくど}”。土は木に養分を吸われる故に、土は木に弱い。

〃金剋木〃。木は金によって切り倒される故に、木は金に弱い。

という具合に、木↓土↓水↓火↓金↓木の順に相手を弱める影響をもたらすという事が、〃五行相剋〃である。

「次は五行相生だ。一方が他方を生み出す五行同士の循環を意味する」

そう言いながら、コンゴウは五芒星をなぞる様に矢印を引いては説明した。

〃火生土〃。火は灰から土を成す故に、火は土を生む。

〃土生金〃。土は内部に金属の原石を内包する故に、土は金を生む。

〃金生水〃。金の表面には水滴が浮かぶ故に、金は水を生む。

〃水生木〃。水は植物を生長させる故に、水は木を生む。

〃木生火〃。木は燃えて火が現れる故に、木は火を生む。

「五行相生は、わたし達の力を高める事が出来る。火生土の場合、土を生み出しては土属性の力を強める事が出来る様に、火の技で土属性の要素を作り出せるのだ」

一区切り説明し終わると、コンゴウはペンを置いた。

「悪魔が使う力は四大元素を軸にしているらしいが、陰陽五行でも一応は対応出来る。例えば相手が四大元素の水を司るのなら、火属性のシキガミには勝るが、土属性のシキガミには劣る。また、司る力が複数あっても相剋も相生も得る事がある」

「とすれば、フェニックスは火と風と命を司るから、水剋火が成立するという訳ね」

「但し、忘れないでくれ。五行相生は相手を強めるので常によく、五行相剋は相手を弱めるので常に悪い……という捉え方ではない。相手の実力差で、この考えは効かない時もある。だが……」

そして、コンゴウは自身の胸を軽く叩いた。

「気持ち……心が強ければ、シキガミは強くなるのだ」

◇

時は戻り、現在。

戦場に青い五芒星の結界が神秘的に輝く。

フィールドとなったプリカの駒王学園。その新校舎の屋上で、ライザーはたった一人で八雲、コゲンタ、そして2人の攻撃のタイミングを見計らって水の魔力をぶつける。朱乃と、水の魔剣を振るう祐斗の4人の相手をしている。

（くそっ、やはりこの結界は俺の力を抑えるのか！）

回避しながら内心毒づくライザー。そして、その考えは正解だった。

この結界は、合宿で学んだ五行相剋を利用した「【水】の結界陣」。火を司るフェニックス相手にとって有効であり、水の魔力は威力が増す仕様だ。

因みに、「水」の結界陣を提案したのは八雲。そして結界陣の各ポイントに闘神符を設置したのはくうろである。

「おうらあっ!!」

「っしやああ!!」

同時に飛び掛かる八雲とコゲンタ。

ライザーは避けようとせず、2人が近付く瞬間に膨大な熱波で吹き飛ばそうと考えては魔力を練る。「水」の結界陣で普段より数倍の魔力を消費してしまうが、結界を作り出したであろう八雲を倒せば消えると考え、ライザーは容赦無く熱波を放った。

「なっ!?!」

しかし、ライザーの作戦は成功しなかった。

目の前に現れた見覚えのある障壁が……「水」と「壁」の統合符により攻撃を防がれ、八雲は障壁を押し出す様に殴り付けてはライザーに激突させた。

「やるじゃないか、人間のくせに……」

「そつちもやるな。チャラチャラした印象だったが、改めるよ。——久し振りに燃えるなあ!」

立ち上がり余裕の笑みを見せるライザーに、戦意が高まっている八雲は嬉しそうに微笑む。

この時、ライザーは余裕を装うと同時に焦りを覚えていた。ありえないと思いつつも、どうしても脳裏に過る。フェニックスは“不死”であるが、決して“無敵”ではない事実を……。

(コイツら……)

ライザーは4人の狙いに気付く。

フェニックスを倒すには神クラスの圧倒的な力で押し倒すか、起き上がるたびに幾度となく倒して精神を潰すかの2つ。

短期戦と持久戦^{前者}。4人が選んだのは、後者である持久戦だとライザーは気付いたのだ。

現在、ライザーの精神は疲弊している。

眷属全員の脱落。一誠、そして八雲達との猛攻。その連続で、ライザーの精神に大きなダメージを与えていた。

ライザー自身、初陣の相手に追い詰められるとは予想だにしなかった。しかし、“兵士”の殆どを敵本陣へ向かわせ、“女王”へ“昇格”させては相手に圧倒的な勝利を考えていたが、その事を後悔してしまう。

結果、序盤に“兵士”全員と“戦車”1名の大打撃を受け、更に中盤で“女王”をも倒され、残りの眷属も次々と倒されてしまった。

まさに、戦況は四面楚歌。

「調子に乗るなよ……貴様ら!!」

だが、それでも投了する事はプライドが許さないライザーだった。



「フェニックスの涙ですって!?!」

そんな激戦のすぐ側で、リアスはくうろの言葉に驚愕していた。

一方、くうろはライザーの放った結界に捕らわれたアーシアの周りを回っている。

「はい。御主人様のあのテンションは、恐らくフェニックスの涙を飲んだ事が原因なんです」

「ちよ、ちよつと待ってくうろ。フェニックスの涙を一体どうやって手に入れ……」

戸惑う中、リアスはライザーとの戦いの最中に見た光景を思い出す。

グラウンドに一瞬だけ見た、「土」の攻撃結界。それを回避した「僧侶」に突っ込み、攻撃で吹き飛ばされたくうろ。

そして、自ずとリアスは答えを見つけた。

「まさか、レイヴェルから入手したのね」

くうろは赤い結界を見ながら言う。

「乱闘中、いつの間にか私の尻尾に紛れてました。最初は危険物だと思っただんですが、御主人様がそれを見て回復薬だと知っていました」

「八雲はルールブックを読んでいたわね。だから初めて見ても、フェニックスの涙だと分かったんでしょう」

「でも、飲み干した瞬間にテンションが高くなりました。テニスコート最後のポイントに闘神符を設置した後、御主人様はそのまま皆さんの所に向かうと言って一緒に……」

「【動】の闘神符で移動して、上空から飛び降りた……と言う訳ね」

「奪ってはいけないルールは無かった様ですしね」

「でも、フェニックスの涙をねえ……。浴びるだけでいいのに……」

くうろの肯定にリアスは呆れる様に呟く中、くうろはアジアに「闘神銃」の銃口を向けて言う。

「アジアさん。結界陣の効果で力が弱まってる内に破壊します。しやがんでください」

「は、はいっ！」

【金】の闘神符を入れて引き金を引く。そして鉄球が撃ち出され、赤い結界はガラスの様にパリンと音を鳴らして割った。

「では、私は御主人様に加勢しますので……」

「私も行くわ。アーシア、イツセーをお願い」

くうろとリアスは八雲達に合流する中、アーシアはイツセーに回復を施す。結界内でイツセーの傷付く姿を見て涙を揺らしていたが、遂に涙を流した。

「すげえ……」

アーシアに回復してもらう中、一誠が呟いた。

最初に思ったのは、圧倒的。

リアス、朱乃、くうろの攻撃で絶えず聞こえる爆音が、加減のない一撃だという事を物語っている。

そして、不死身の肉体を持つ相手に果敢に立ち向かう八雲と祐斗とコゲンタの姿。

ただ、ライザーもたった1人で6人の猛攻を互角に渡り合っていた。

「俺も、こんなところで………つー！」

自分も加勢しようとして体を起こそうとするが、上手く体に力が入らない。

「ダメですイツセーさん！ まだ傷が、治ってないんですよ……」

涙で濡らした顔で珍しくアーシアが高圧的な声を掛けてきた。

アーシアの治療を受けながら一誠は何も出来ない歯痒さに悩まされる。それはアーシアも同じだろう。

ただ、ここでアーシアが前に出て巻き添えを食らえば本末転倒だ。

(どうする？ どうすれば——)

刹那、諦めずに必死に出来る事を模索している中、一誠はある事を思い出した。

「……おい、ドライグ」

『何だ？』

一誠の呼び掛けにドライグが答えた。

「お前、残った力を宝玉に移したとか言ってたよな？」

『ああ。だが、さっきも言ったがそれは一時的なもの。フェニックスを倒すまでには至らない』

ドライグの復唱する返答に一誠は勝利への可能性を見出しては小さく微笑む。

「……でも、それなら『アレ』が出来るよな？」

『……なるほど、そう言う事か』

一誠の含んだような言い方にドライグも察しがついた。

『だが、それで勝てるという保証は無いぞ？』

「それでも、やらないよりははずとマシだ。第一、今まで俺の中にいたのなら分かつてるだろ？ 俺の性格」

『別に止めはしない。俺はお前の選択に従うだけだ』

「……」でドライグとの会話を打ち切り、一誠はアジアに視線を向けた。

「アーシア。頼みがあるんだ」

「え……？」

「もう一度、俺に力を貸してくれ」

いつになく真剣な表情の一誠。

それを見て、心から一誠を慕う彼女が断る筈がなかった。



リアス、くうろを加えた6人だが、未だに苦戦を強いられていた。

半端なダメージを与えてもすぐに回復されてしまう為、手加減などしてられないが、八雲とコゲンタを除く4人の体力は限界に近付いていた。

「借りるぞ、ホリン！」

『はいな！』

瞬間、声と共に左手の“二十四気の神操機”の宝玉が禍々しい輝きを発せられ、一族の紋章が浮かび上がった。

「はあっ！」

同時にライザーへ殴り付けるが、ライザーはその拳を受け止めては八雲を投げ飛ばし

た。

【Capture!!】

「何だ……………ぐっ!？」

聞き慣れない音声と共にライザーは体から何かを失う感覚に襲われる中、八雲はしてやったりと口元を吊り上げる。

「っしやあ! 奪取成功!」

この技も、〃二十四気の神操機〃が成せる技である。シキガミが司る同じ力を、相手から奪ったのだ。しかし、相手に直接触れないと発動しないので、使用するタイミングを掴まないといけないが…………。

『八雲はん。奪った符力はすぐに戻ってまうから、はようして!』

ホリンの言葉に促されながらも八雲は辺りを見渡す。

結界陣も時間に余裕がない。ライザーを見据えながらどうするか考えていると、通信機からリアスが話し掛ける。

『八雲。この結界はどの位までもつかしら?』

「もつて一分も無いですね。一瞬でも隙が出来れば、俺とコゲンタで何とか出来ると思いますすが…………」

『何か策があるの?』

「策と言いますか……」

一瞬、八雲はコゲンタを見ては微笑んだ。

「コゲンタ曰く、『最強の一撃』と、言っていました」

その笑みに、未だに苦悩する表情を含ませながら……。

そんな中、リアスは通信機越しで全員に問う。

『なら、私は八雲とコゲンタに賭けるわ。皆はどう思う？』

『なら、私達は八雲くんのサポートに徹すればいい訳ですね』

『御主人様の為なら、頑張ります！』

『僕もそれでいいと思います』

リアスの言葉に朱乃、くうろ、祐斗は通信機越しで賛成した。だが、6人の猛攻を一人で防ぐライザーの力に隙が出来るのか疑問だった。

「鳥野郎から隙を作るのは難しいぞ。作るにも、皆の技を上げさせないと……」

コゲンタが話す中、呼び声がした。

「部長オオオオオツ！ 朱乃さああああん！ 木場アアアアツ！」

「なっ、イツセー!?!」

声の聞こえる方を向くと、アーシアに支えられながら身を起こす一誠がいた。

「皆の力を、解放しろオオオオオツ！」

一誠の叫びに同調する様に、
「木場アツ！」
「赤龍帝の籠手」の宝玉が強く輝いていた。

最初に名前を呼ばれ当惑する祐斗だが、すぐに真剣な表情に移しては剣を地面に突き刺し、高らかに吼える。

「ソオオオド・バアアアス!!」

数多の剣の光り輝く地面に一誠は拳を放った瞬間、新たな第2の力を発動した。

「ブーステッド・ギア・ギフト!」

一誠は「赤龍帝の籠手」で高めた力を地面に流し込む。

目的は祐斗の魔剣を創造する能力。

【Transfer!!】

途端に、金属が激しく擦れる音と一緒に、屋上全域が刃の海と化した。

至る所から様々な形状の刀身が天に向かって鋭く飛び出している。その全ては祐斗が創造した魔剣だ。

「これは……!」

リアスが目の前の光景に驚嘆する。

これが、一誠が新たに会得した「赤龍帝の籠手」の第2の力……
「ブーステッド・ギア・ギフト」
赤龍帝からの贈り物」。

その効果は、籠手で高めた力を他の者、もしくは物に譲渡し、力を爆発的に向上させる事が出来る。その能力でアーシアの神器の効果を向上させ、再起を果たしたのだ。

「ぐあつ!?!」

辺り一帯に出現した刃がライザーを空中に突き飛ばした瞬間、結界陣が霧散してしまった。

これで、ライザーの力を抑えていた力が解放された。

「があああああああああつ!」

宙を舞いながら炎の翼を背中に生えさせ、怒り狂うライザーから放たれる爆炎が周辺の魔剣を焼き払った。

【Boost!!】

だが、一誠の反撃は終わらない。

「朱乃さん!」

【Transfer!!】

「行きますわよ!」

籠手から放たれた波動が朱乃を包み、手を天に掲げると巨大な雷が雨のようにライザーに飛来した。

「ギニャアアアアアアア!?!?!」

「炎の翼を広げ回避しようと試みるが、全てを避けきれず、直撃した雷が体を焦がした。こんな……俺はこんなところで………負ける訳にはいかないんだよおおおおつ!!」

炎の暴風を巻き起こすライザー。その一撃で一誠を倒せば、力の譲渡を阻止出来る。「この婚約は、悪魔の未来の為に必要で大事なものだ!? お前の様な何も知らない小僧悪魔がどうこうする様な事じゃないんだ! それを………分かれええええつ!!」放たれたライザーの一撃が一誠を襲おうと一直線へと向かった。だが、その軌道上にいた者をライザーは気付かない。

「阻止します!!」

「闘神銃」に装填される【木】、【土】、【水】、【火】、【金】の闘神符。五行の力を一気に解き放つかの様に、くうろは引き金を引いた。

刹那、極太の5色の光線が撃たれ、ライザーの攻撃を相殺した。

その光景に驚愕するライザーをよそに、一誠は言う。

「あんたの難しい事は分からねえよ。でもな、これだけは分かってるんだ……」

脳裏に浮かぶのはリアスの顔。

処女を貰う様に現れた時も、合宿の夜中に話した時も、彼女から笑顔が………何時も見せていた笑顔が消えていた。

「部長の心が泣いてたんだよっ！ 涙なんて似合わない。あの人は、威風堂々としてなきやだからいけないんだ！ だから……俺達は部長を絶対に守ってやるんだよっ!!」

【Boost!!】

「部長おっ！」

【Transffer!!】

もう一度、今度はリアスに高めた力を譲渡した瞬間、一誠は糸の切れた人形の様に膝から崩れ落ちた。完全に魔力が尽きたのだ。

「イツセーさん!?!」

アーシアが急いで一誠の顔を覗き込む。

「……へへ。ありがとな、アーシア……」

何とか意識を保っていた事を確認して安堵する。

後は、天に任すだけ……。

一誠の健闘に、リアスは小さく微笑んでいた。

「イツセー……。——行くわよ、ライザー!」

そして、力強い視線をライザーに向けては魔力を集めだした。

掌に消滅の魔力が集結し、最終的に黒い巨大な太陽の如く変貌を遂げる中、ライザーも掌に炎を集めていく。

「舐めるなアツ！」

同時に両者が放った赤色と漆黒の太陽が激突し、辺りに衝撃が渦巻く。

だが、力の均衡が崩れ始めるのに時間はかからなかった。

「はあああああああつ！」

「な……………だどっ!？」

純血上級悪魔の代表としてのプライドを賭けた魔力の競り合い……勝ったのはリアスだった。

驚愕する間もなく黒い魔力に容赦なく蹂躪される中で、ライザーは意識を保つのがやっとだった。

魔力の奔流から解放され、上着が消滅したライザーには、すでに体も精神も限界が迫っていた。『赤龍帝の籠手』で高めた力を譲渡されたりアス達の猛攻が、ライザーに予想以上の負担を与えていたからだ。

「ライザー・フェニックス」

最後に、虫の息状態のライザーの前に現れたのは八雲とコゲンタ。

それを見たライザーは戦慄する中、八雲は何かを決心した表情で見つめた。

「あんたの敗因は3つある。——1つは、自分の能力に過信し過ぎだ。策や何らかの勝因が崩れたら、最後に待つのは負けしかない」

「2つ。イツセー達グレモリー眷属を甘く見すぎた事だ。特に、イツセーの意外性には、オレも驚いたけどな……」

「この、人間がああああつ！」

ライザーが咆哮を上げ、身体に業火を纏う。リアス達に向けて放った業火より勝る火力を持つそれは、次第に大きくなっていく。

だが、炎を見据える2人は臆する事なく、八雲は右腕を突き出し、コゲンタは八雲の前に出ては言い放つ。

「3つ。人間を——」

「シキガミを——」

「侮った事だ!!」

刹那、業火を放つと同時にライザーへと突っ込むコゲンタ。

「うおおおおおおおおおおつ!!!」

八雲の咆哮。

力強く印を切ると同時に、脳裏にコゲンタの言葉が甦る。

——オレの信頼の証と思ってくれ。絶対に勝利へと導いてやるからよ。

「離!」

——但し、この技を使えばオレは暫く動けないらしい。昔、一部の過激な墮天使達を

追い払った際、深く眠ってたんだ。

「坎！」

——何で知ってるのかって？ その時、一緒にいた『ゲンにい』に聞いたんだよ。

「震！」

——でもよ、その一撃を放った威力は「最上級に渡り合える」と言ってたぜ！ だから、これはオレの切り札だ。

「……震!! 離れろ!!」

——その技は……。

最後の印が切られた瞬間、八雲はリアス達に指示を飛ばした。

「ひっさあああああああつツ!!」

刹那、八雲が送る印がコゲンタの体を白く輝かせ、咆哮と同時に目が赤く輝く。

「なっ!!」

荒々しく叫ぶその迫力に当てられたのか、ライザーは顔を強張らせ、コゲンタの一撃を見つめた。

「百鬼滅衰撃ひゃっきめつすいげきイイイイツ!!」

ガオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!

放たれたのは、コゲンタの持つ全ての符力。

それを攻撃エネルギーへと変えて放たれる際、獣の咆哮に近い放射音と巨大な虎の幻影が、相手が最後に見る光景となる。

その威力は凄まじく、シキガミの中で最も強力な必殺技。

それがこの……百鬼滅衰撃だ。

「まさか、この俺が——」

刹那、ライザーの業火と百鬼滅衰撃が激突する。

ぶつかり合う衝撃がライザーを、コゲンタを、そして八雲を包み込む。

瞬間、新校舎が崩壊する光景を、離れたグレモリー眷属達の視界に映された。

第25話：芽生えた想い

2つの力がぶつかり合い崩壊していく敵本陣。その衝撃は次第に広がり、グラウンドをも飲み込んでいく。

「御主人様!？」

「ダメだ、くうろちゃん!」

「行けば、くうろちゃんも危ないですわ!」

そこへ突っ込もうとするくうろを止める為、祐斗と朱乃が押さえていた。

「吉川……」

そんな中、リアスに肩を借りて見つめている一誠が呟いたその時だった。

「あ、あれは!」

何かに気付くアーシア。その声色に歓喜が含まれるのに気付くと、アーシアが指差す方向へと視線を向けた。

「……………おい……………」

崩壊した新校舎から聞こえる声。

リアス達は目を凝らすと、空中に漂う者を見つけた。

「おーい！ おーい！」

【動】の八卦の魔方陣に乗り、コゲンタを背負う八雲の姿があった。

「八雲！」

「吉川！」

「八雲さん！」

「八雲くん！」

「御主人様！」

「八雲くん！」

一斉に八雲の名を呼びアス達。降り立った瞬間、くうろが八雲に抱き付いては涙を滝の様に流した。

「うわあああああん！ 御主人様あ！」

「心配掛けたな、くうろ。取り敢えず泣き止めよ」

コゲンタが落ちない様にくうろを撫でていると、近付いた朱乃が訊いてきた。

「あの衝撃の中でよく無事でしたわね。一体、どうやって抜けたのですか？」

「そうですね……」

すると、八雲はゆっくりとコゲンタを降ろしては話した。

コゲンタの百鬼滅衰撃であるエネルギーの放流が収まってはコゲンタが倒れた後、八

雲は崩壊寸前で【動】の闘神符を発動。瓦礫の山に潰されずに済んだ。

崩れていく新校舎の中、落下するコゲンタを無事に回収したが、衝撃で一時的に動きが止まってしまい、【壁】の闘神符で衝撃を防ぐ事にし、収まった所で脱出したのだ。

説明しながらコゲンタを戻し終えると、八雲は見上げながら言った。

「……それで、判定はどうですか？ ライザーが光に包まれたのを、俺は見ましたよ。
審判^{アビーター}」

すると、八雲に言われて気付いたのか、本日最後のアナウンスが流れた。

『……ラ、ライザー・フェニックス様の脱落を確認。よってこのゲーム、リアス・グレモリー様の勝利です』

思わぬ事態で若干グレイフィアの言葉が詰まるのを、内心リアスは珍しく思った。

「……勝った」

だが、このアナウンスを聞いた瞬間、誰かが呟いた。

それは次第に伝染し、リアス達に歓喜が湧き出ていた。

『『勝ったぞおおお!!』』

そして八雲が、グレモリー眷属が、シキガミ達が歓喜の声を出していた。

（よかった。本当に、よかった……）

誰もが喜ぶ中、一誠はリアスを見つめて思っていると、リアスも視線に気付いたのか、

一誠に笑顔で返した。

久し振りに見た笑顔は、心の底から喜んでいたのを、この場にいた者達は理解したのだ……。



その一方、観客席である一室に見知った人物がいた。

「よかったですね、会長」

「ええ。彼に託したのは正解でした」

その人物とは、ソーナと彼女の『女王』である椿姫だった。リアスの友人として見届ける為、今回のゲームを観戦していたのだ。

すると、ソーナは席を立てて観客席から出ようした際、椿姫に訊かれた。

「会長。リアスさんの所へ向かうのですか？」

椿姫の言葉にソーナは振り返り画面を見るが、否定する様に小さく首を横に振った。リアス達は既に戻る準備をしていた。

「今の幸せはリアス達だけのもの。私達が入っては、何かと問題があるでしょうしね。それよりも……」

そんな中、ソーナは八雲の姿をジッと見つめては小さく微笑んだ。その顔は、椿姫でも見るのには珍しいと言われる程だと……。

「……会長？」

「何でも無いわ。リアスには、時を見てから祝いの言葉を掛けましょう」

そして、ソーナは観客席を出たのだった。

（交渉の準備も進めておかないとね……………吉川くん）

1つの決意を考えながら……。



同時刻、別の観客席の一室。どうやら観客席は、一室毎に区切られている様だ。

「……………」

そこにいたのは、画面をジッと見つめている1人の男。見た目は一誠や八雲達と同年。しかし筋肉質な体格が年上のように錯覚し、まるで武闘家の様だった。

「……真終牙黄流」

すると、男は眩き目を閉じては先程の戦いを思い返す。

（棍を破壊した『鬼更危』。受け流しては投げ飛ばす『夜酔津鬼』。そして拳圧を飛ばした

『武津鬼』。どれもあの男が見せた技だった……」

そう思い、男は昔を思い出す。

数年前、男が人間界へ修行へ赴いた際に出会った人間。力を欲していた男はその人間に手合わせを願い勝負をしたが、結果は惨敗。

しかし、その人間は男との勝負を気に入り、少しだけ男の修行に付き合っただのだ。その結果、男は今の様に強くなり、真終牙黄流拳法も把握したのだった。

「……冥界へ戻る時、名字は聞いたが名前を聞くのを忘れていたな。だが、あの拳法は真正銘、あの男の親族しか知らない技だ。それに名字も同じで確定だな……」

すると、男は観客席を出ては言葉を呟いた。

「機会があれば手合わせ願いたいな、吉川八雲。この俺と……」

八雲の戦いに魅せられて感化したのか、武闘家特有の覇気を流しながら……。



初勝利を飾り、早々に部屋に戻ったりアス達は改めて押し寄せる疲労感を感じている中、八雲とくうろは立ち上がった。

「リアス部長。俺とくうろは先に帰りますので……」

「ええ、お疲れ様。2人が参加してくれて本当に助かったわ」

「うふふ。今回は八雲くんとイツセーくんの活躍のおかげですからね」

リアスと朱乃が話していると、八雲の袖を引く者がいた。

「……八雲先輩」

小猫だ。

「ん？」

「……お疲れ様です。それと、最後の戦い見ました。凄かったです」

「ありがとな」

そう言つて八雲は小猫の頭を撫でると、表情は変わらないが、小猫の頬が赤く染まっていた。

小猫の頭から手を離し、八雲は自室に繋がる「転」の闘神符を出しては八卦の転移魔方陣を出現させた。

「それじゃあ皆、また明日。——バイス！」

「バイスです！」

「……バイス！」「……」

魔方陣と共に消えた八雲とくうろを見届け終えるリアス達。すると、交代するかの様に別の魔方陣が現れた。

「皆様、お疲れ様でした」

出現する魔方阵から現れたのはグレイフィアと、彼女が付き添っている紅髪の男性。その人物を確認した途端、リアス、一誠、アーシア以外の人物がその場で跪く中、リアスは困惑を隠せないでいた。

「お兄様!?!」

「お兄様って……じゃあ、この人が……!?!」

「魔王、サーゼクス・ルシファー様!?!」

リアスの言葉に驚く一誠とアーシア。

そう……目の前の男性こそ現四大魔王の1人であり、リアスの実兄であるサーゼクス・ルシファーその人だった。

「お兄様、どうしてここに?」

驚愕の声でリアスが訪ねると、サーゼクスはにこやかに微笑みながら答えた。

「妹の勝利を直接祝いたくてね、改めて言わせてもらおうよ。——リアス、初勝利おめでとう」

「い、いえ。そんな……」

珍しくリアスは冷静を忘れていて、不意にサーゼクスがリアスに訊いた。

「ところでリアス? 確か、吉川八雲さんと、狗牟田・O・くうろくんだったね。彼らは

いないのか？」

「入れ違いで、既に帰っていききました」

「そうか。彼らにも礼を言いたかったのだが……」

肩を竦めると、サーゼクスはリアスに知らせた。

「私の父も、フェニックス卿も反省していたよ。お互いの欲が強すぎたと、ね……。当然、この縁談は破談が確定した。それもみな、君達のおかげだ。兄として礼を言わせてもらいたい。本当に、ありがとう……」

そして、サーゼクスはリアス達に頭を下げたが、その行為にリアス達が対応に困るのは必然だった。

「頭を上げてください、お兄様！ 魔王であらせられるあなたが、こんな事で頭を下げられたら——」

だが、リアスは最後まで言えなかった。

「さつきも言っただろう？ 今は魔王としてではなく、1人の兄として私はここにいます」

「兄が妹の幸せを喜んで何か問題でもあるのかな？」

そして、その時のサーゼクスの表情はとても晴れやかなものだった……。

◆
 軽い挨拶を済ませ、サーゼクスとグレイフィアは冥界に帰還していた。冥界も今は夜であり人間界とは違う夜空だが、星々はとても美しく輝いていた。

すると、サーゼクスとグレイフィアは夜空の下で話し始めた。

「まさか、『赤い龍』がこちら側に来ると思ってもよらなかったな」

「『白い龍』。2匹が出会うのも、そう遠い話ではないのかもしれない」

「ああ。だが、もっと重大な事が……」

「吉川様の事……ですね？」

グレイフィアの問いに頷きながら、サーゼクスは今回のゲームを思い返していた。

サーゼクスはグレモリー家とフェニックス家の親族と一緒に今回のレーティング・ゲームを観戦していた。サーゼクス本人も含めて、その場にいた全員がライザーの勝利を確信していた。

しかし、その確信は特例で参加したゲストの1人……闘神士によって覆された。

確かに『赤龍帝の籠手』の『禁手』も、リアス達の勝利の要因の1つであるが、それ以上に闘神士の戦いに目を奪われていた。

相手を奔走させる巧みな拳法。

札を用いた未知の魔力。

彼が使役する召喚獣……否、絶滅したと思われた神々達と、未知の魔力を感じた犬耳の少女。

そして、ライザーの『女王』との戦いで見せた力。

それらがライザー眷属の半数以上を倒し、ライザーを倒したのも闘神士の彼とシキガミだ。

正直、彼らがいなければリアス達の勝利は難しかっただろう。それほどの戦いを繰り広げた彼らに衝撃を受けたのだ。

ただ、両家の親族が騒然とする中で、サーゼクスはシキガミを見ては懐かしんでいた。「まさか、シキガミもリアスのもとにいたとは………懐かしいな」

そう呟くサーゼクスは、戦前を思い出しては言葉に出した。

「私とグレイフィアが両派閥に追い詰められた時、目の前に現れたのだったな。覚えてるかい、グレイフィア」

「ええ。あの光景は、忘れる訳がないわ……」

思い出すのは、光と闇を放つモノ。多くいた両派閥の刺客をひれ伏させ、若かった2人を祝福しては消えた。その光景を知る者が劇を作り、今でも冥界では伝説になっているのだ。

「シキガミが復活した今、何処かで現れるかもしれない……」

『審判ジャッジメントの四季トドラゴン龍』コウリユウ。何処かにあるとされる『シキガミ界』の初代統治者……」

そして、そのドラゴンの姿と八雲の姿を、サーゼクスは重ねては呟いた。

「吉川八雲くん。シキガミ達と共に行く先は光か、はたまた闇か……」

期待する様な面持ちで、サーゼクスはグレイフィアと共に夜空を見上げたのだった。



ゲームが終わって暫くして、部室にはリアスと一誠だけが滞在していた。どうやら、他の者は先に帰った様だ。

「バカね」

苦笑しながらも、何処か安堵の表情を浮かべるリアス。しかし、一誠の左腕に視線を移しては言葉を失い、沈痛な面持ちで擦っていた。

「腕をドラゴンに支払って、あの力を借りたのね？」

「はい。俺みたいに才能の無い奴が、片腕で最強の力が手に入ったんです！ まあ、ライザーを倒したのは八雲達ですが、おかげで部長を守る事が出来ました」

「……でも、本当にそれでよかったの？」

無理矢理な笑みを浮かべる一誠に、リアスは訊ねた。

「もう、この左腕は元に戻らないのよ？　今回は破談に出来たけど、何時かまた婚約の話が来るかもしれないのよ？」

その顔は、どこか悲痛で歪んでいる様に見えた。今回のゲームで一誠の戦う姿を見て、彼に罪悪感を自覚してしまったのだ。

悲哀に暮れるリアスに、一誠は笑って答える。

「だったら、次は右腕を支払います。その次が来たら目を、足を、体を支払います。何度でも何度でも、部長を守り抜いてみせます！　俺はリアス・グレモリーの“兵士”ですから」

「……っ」

その笑顔にリアスは見とれた。見とれてしまった。それと同時に芽生えた罪悪感が消え去り、代わりに新たに芽生えた思いが溢れてきた。

一度その思いに気付くと、抑えが利かなくなる。

そして、リアスの迷いは消えた。

「……イッサー」

擦っていた腕を止め、一誠の頬にその手を添えた。

「……」

次の瞬間、一誠の唇が何かに塞がれた。

リアスが一誠の首に手を回し、唇を重ねたからだ。

所謂、キス。接吻。チュー。

その行為を理解した時、一誠の視界は頬を染めるリアスの顔で埋まっていた。

柔らかな唇の感触と紅髪の甘い匂いが一誠の思考を止める。リアスの想いが伝わるには十分な程だ。

1分程唇を重ねた後、リアスは唇を離してはフツと笑う。

(……………キ、キスウウウウ!?)

内心、リアスとキスした事実に一誠の頭は弾け飛びそうだった。

「私のファーストキス。日本では、女の子が大切にするものよね?」

「……………え? ファ、ファーストキスウウウウ!?」

驚愕に重ねてまた驚愕。一誠は声に出して心底驚いていた。

「いい、いいんですか! お、俺なんかで?」

「あなたは私と唇を重ねるだけの価値のある事をしたのだから。ご褒美よ」

微笑みながら頬を撫でるリアス。

その時の笑顔は、今まで見た中で一番だったと一誠は心の中で思っていた。

◆ この一件の後、周りに変化が訪れた。

まずはライザー。生涯初めて味わった敗北のショックで寝込んでしまい、長い間塞ぎ込んでしまった様だ。

次にコゲンタ。ゲームから約2日後、コゲンタは眠りが覚めた。特に体に変化は無い様で、八雲達は安堵した。

さらにくうろ。ゲームで頑張ったくうろは願いを聞き入れてもらい、毎夜一緒のベツドで八雲と寝る事が出来る権利を得た。無論、それなりの条件を八雲はくうろに出したが……。

そして一誠。ドラゴンの腕と化した左腕だったが、リアスと朱乃、そしてヒヨシノのおかげで見た目を元の腕へと戻せる事に成功した。ドラゴンの力を散らせば、見た目だけでも戻る様だ。

最後に、リアス。

「と、その様な感じで私、リアス・グレモリーもこの兵藤家に住まわせてもらう事となりました。ふつつか者ですが、どうぞよろしくお願いしますわ」

一誠の家に住む事となった。その際、一誠はリアスの突然の提案に首を傾げ、アーシアはリアスの気持ち悟っては深刻そうに呟いたりしていた。

最も、一誠の両親は女の子が増える事に賛成の様で、すぐに了承したのだが。

「イツセー。荷物の整理が終わったらお風呂に入りたいわ。——そうね……。背中、流してあげるわね」

「マ、マジっすか!?!」

「もう! 裸のお付き合ひなら私もします! イツセーさんも部長さんも、私だけ仲間外れにしないでください!」

周りが変化する中、分かる事がある。

「アーシア。悪いけど、そう言う事だから。宣戦布告って事でいいかしら?」
「うう、負けたくないけど、負けそうです!」

どんだん賑やかになっていく様だ……。

いい意味でも、悪い意味でも……。

戦闘校舎のフェニックス

く 謎の少女、現れます！ く

【完】

月光校庭のエクスカリバー　くダチの為、闘います！く 第26話：勧誘、八雲

「……………ん」

早朝、何時もの様に八雲は起きた。

早朝鍛練の為だが、最近の起き方に内心複雑していた。

「ん〜……………くしゅじんしゃま〜……………」

横から眠気を誘う声が聞こえ、チラリとその原因に目を向けた。

そこにいたのは、かわいらしい桃色のパジャマを着たくうろだった。そのまま視線を落とすと、自分の左腕がくうろに抱き着かれている。

「はあ……………」

思わず溜め息を吐き、この様な状況が起きたのか思い返す。

ライザー・フェニックスとのゲームを終え、くうろはライザー眷属を4人も倒した功績として、一緒に布団で眠る権利を得たのだ。

しかし、思春期真っ只中の八雲にとって最初はその提案は受け入れなかったが、頑なに折れないくうろに八雲は折れた。しかし、一緒に寝る時は服装を変える様にしろと

くうろに言うのと、くうろはそれを了承。寝る時はタンクトップとパンツ姿だったが、普通の寝間着へと変えたのだった。

(さて、これはどうしたものか……)

二の腕から伝わるくうろの柔らかさと体温。寝間着越しにも関わらずその豊満な胸の感触に張りを感じ、八雲はこの感触を毎晩悩まされると同時に、男子高校生としての嬉しいシチュエーションを感じていた。

一誠が見れば喜びそうな光景だが、一誠も一誠でリアスに抱き枕の様に抱き付かれて
いる事など、八雲は知らない。

(悩んでも仕方ないよな)

そう思い、八雲はくうろの肩をゆっくりと揺らす。

「くうろ。起きろよ」

「……………あれ？」

寝惚け眼のままくうろは目を覚まし、八雲は腕を離してはベッドから抜け出した。

「おはよう」

「……………あ、ほあよう(こ)あいましゅ……………」

「ほら。顔を洗って、鍛練の用意しなよ」

「……………ふあい」

ゆつくりとベッドから出ては洗面所へと向かうくうろを見届け、八雲は鍛練の準備を始める中、コゲンタが話し掛ける。

『最近、くうろの奴は寝不足だな』

「そりゃあ、毎晩寝る前まで激しく求めるからな。俺も受ける際は疲れるさ」

『……確かに、神器を通して八雲の苦労は感じてるぜ。男の性って奴だろ？ 毎夜毎夜とアンアン鳴かれちゃ、色々保つのに疲れるしな』

その表現の仕方に八雲は苦笑するしかなかった。

因みに、くうろは毎晩八雲とのスキンシップを激しく求めており、八雲はそれに応える様に、時に繊細で大胆に撫でてやり、気持ちを落ち着かせているのだ。

無論、性的な事は一切行っていない。寧ろ、くうろも頭や背中を撫でてもらうだけで十分満足しているのだ。

「それじゃあ、今日もやりますか」

窓を開け、空を見上げる。

雨雲の心配も無い、爽やかな朝。

絶賛、鍛練日和であった。

◆ 「イツセーの家で、ですか？」

暫くして、何時もの公園に何時ものメンバーが集まり鍛練を行う中、リアスが不意に話し出した。

「ええ。今日の放課後のオカルト研究部会議は、イツセーの家で行うわ」

「えつと……どうして、ですか？ うげげ……」

それは一誠も初めて聞かされ、八雲との上体反らし中にリアスに訊いた。

「そろそろ旧校舎の中を全体的に掃除する時期なのよ。だから今日、使い魔達に掃除させようと思って」

「なるほど……」

納得する八雲と一誠。だが、八雲は悩む様に呟いた。

「なら、あの事は後日部室で話すか……」

「あら、何か悩みかしら？」

呟きに反応したのか、リアスは八雲に訊いた。

「悩みと言うか……最近、ポストにこんな物が入ってるんですよ」

取り出したのは、輪ゴムで纏めたハガキの束。それをリアスが受け取り一枚だけ見ると、文面を見ては苦笑した。

そして気になったのか、一誠とアーシアも許可を貰い、それぞれ手紙を拝見した。

「……部長、何て書いてるんですか?」

「これは……悪魔文字でしょうか?」

「アーシアの言う通りよ。冥界から八雲の家に届けられた、謂わば勧誘の手紙ね」

そう。八雲がリアスに渡したのは、上級悪魔達が八雲宛に送った「転生悪魔のスカウト」の手紙だ。

この様な事が起こったのは、ライザー眷属とのレーティング・ゲームが発端だった。グレモリー家やフェニックス家に縁のある一部の悪魔が、偶然にも八雲とシキガミ達の活躍を見てしまい、それが瞬く間に広がったのだ。

それに伴い、八雲を是非とも我が眷属にしたいと両家に話しを持ち出したが、非公式と言う事もあり、グレイフィアやサーゼクスが丁寧に話しを持ち出したが、非公式にアピールしているのが、現在の手紙を送る悪魔なのだ。

「ナナヤに翻訳してくれた時は驚きました。七十二柱の悪魔もいるみたいですよ」

「アモン家、ベリアル家、アガレス家……どれも有名なところ……って、えっ、ベルフェゴール家にアバドン家って、どれだけアプローチされてるのよ……」

どうやらレーティング・ゲームでの上位チームの手紙もあるらしく、アプローチの凄まじさにリアスは呆れるしかなかった。

「スゲーな吉川！ でも、どうして吉川だけに手紙が来てるんだよ」

「……シキガミ達の活躍に興味が出たんじゃないか？」

「確かに……。どの家も大戦を生き抜いているから、シキガミの事も知っている可能性が高いわね」

そう言い、リアスは口到手を当てて考えようとするが、八雲は口に出した。

「そんな事より、鍛練を再開させましょうよ。来週には球技大会がありますしね」

「……確かにそうね。それじゃ近い内、部活動中に球技大会へ向けての練習を入れるわよ」

そして、八雲達は鍛練を再開したのだった。

「……………」

◆
時間は過ぎて、昼休み。

モグ、モグ……

ズ……ズズ……ズ……

ムシヤ、ムシヤ……

バリツ、バリツ……

現在、食堂で好物の牛丼を食べている八雲の正面に、見知った人物を含めた3人が座っては見つめていた。

取り敢えず、見つめられていては食事が取りにくいので、一旦八雲は箸を置いて訊いた。

「……えーつと、何か俺に用ですか？ 支取会長」

その人物とは、支取蒼那ことソーナ・シトリーだった。

学園でも珍しい組み合わせなのか周りの生徒は声を掛ける事が出来ないでいるが、興味があるのか2人の姿を生徒達は気にする様に見ていた。因みに、一般生徒がいる前、八雲はソーナ会長ではなく支取会長と呼んでいる。

そんな中、声を掛けられたソーナは口を開いた。

「この前のゲーム、優勝おめでとう。それと、リアス達に協力してくれてありがとう」

「いえ、あの試合は皆が力を合わせたおかげで勝てたも同然。俺だけの力じゃ無いですよ」

「謙遜なのね。嫌いじゃないわ……」

小さく微笑んだ瞬間、ソーナは表情を戻しては本題に入った。

「吉川八雲くん。あなたの人柄、学園での態度、そしてゲームで見せた力、どれも素晴ら

しいわ。是非とも、生徒会に入って欲しいです。今なら好待遇で迎え入れますよ」
「……それって、つまり支取会長の眷属になって欲しい、と……」

肯定する様にソーナは頷くと、そこから上級悪魔の交渉術が始まった。

冥界に來た際の特典やサービス、システムの説明が載った書類説明から、悪魔による仕事方法や学園におけるメリット等、ソーナの巧みな話術が八雲の勧誘を続けていた。無論、一般生徒からは悪魔に関する言葉を悟られない様に話して……。

そして、ひとしきり説明を終えたソーナは再び八雲に視線を向けて返事を待つと、八雲は口を開いた。

「……すいません、支取会長。俺は悪魔になる気はないです」

「え……。そ、それはどうして……」

それは否定の言葉だった。さすがのソーナも一瞬だけポカンとした表情をする中、八雲は理由を言おうとしたが説明は出来なかった。

『ボクが説明するよ、八雲』

何故なら、新たなシキガミが霊体となって現れたからだ。

現れたのは、イルカに似た魚人的な外見を持ったシキガミ。肩で鋭利な刃の鉞を担ぎ、ソーナを前に対面しては話し掛けた。

『こんにちはソーナ・シトリー。ボクは消雪のタンカムイ。〃安定〃を司るシキガミさ。』

キミの事は、ソーナちゃんって呼ばせてもらおうよ』

「え、ええ……。——では、何故吉川くんが転生悪魔になりたがらないのか、説明をお願いします」

『それじゃあ言うよ。それはね……。ボクらが反対なんだよ。八雲が転生悪魔になるなんて』

非難めいた表情をしながら、タンカムイは説明し続ける。

大戦時、シキガミは多くの種族に手を貸していたが仲間にはなっていない。あくまで中道を歩み、契約上でのみ手を貸していたに過ぎなかった。

一方の種族にのみ力を貸しておけば、他種族から反感や憎悪が向けられ、その結果はシキガミの絶滅へと繋がってしまうからだ。

その教えは、長きに渡ってシキガミ達が守ってきたもので、八雲もシキガミ達の教えを尊重した結果なのだ。

『これが理由さ。まあ、ボクらは八雲が転生悪魔になりたいのならいいんだけど、八雲はボクらの教えを尊重してくれたんだよね。——ホント、心配してくれて嬉しかったよ』

「……………」

穏やかに微笑むタンカムイを見て、ソーナは八雲が如何にシキガミを大切にしているのか理解した。

自分の私利私欲の為に使わず、相手を思いやる行動を見せられ、ソーナは瞳を閉じては言った。

「……そうですか。少し残念ですが、仕方ありませんね」

少々名残惜しくも、ソーナは八雲に微笑んでは八雲の勧誘を諦めたのだった。

すると、立ち上がったソーナに八雲は口を開く。

「支取会長。勧誘はダメですが、困った時があれば手を貸しますよ。それだったら、シキガミ^替達も協力してくれますから」

「いいのですか?」

『無茶苦茶なお願ひ以外ならね』

「……分かりました。いい関係を築きましょう」

そう言い、ソーナは食堂を出たのだった。

暫くソーナが出た場所を見つめる中、八雲は問い掛ける。

（もし、リアス部長やシトリー会長以外の悪魔が来て、勧誘してきたらどうするか……?）

『その時は、また説明すればいいんじゃないかな?』

『もし無理矢理にするのなら、オレ達が追い返してやるよ』

（……ありがとう、タンカムイ。コゲンタ。——まあ、追い返す際は穩便に、な……）

「そう、あなたにも分かるのね。うれしいわ」

瞳をランランと輝かせ、2人だけの世界へと入ってしまうのを一誠が見る中、不意に扉が開いた。

「ただいま戻りました」

「ただいまです！」

現れたのは八雲とくうろ。手には本を持っており、それをリアスに渡そうとしたが……。

「あらあら、お疲れ様です。——まあ……」

横から朱乃が介入してはその本を取ってしまい、開いては頬を染めていた。

八雲が持つてきた本……それはアルバムだった。

一誠の母親がアルバムを見せた際、小さい頃の八雲はどうだったのかリアス達が訊いてきたので、八雲は律儀にもアルバムを取りに一旦戻っていたのだ。

朱乃を筆頭に、小猫と一誠も八雲のアルバムを見ていた。

「最近の写真ばかりですが、持つてきました」

「吉川。表彰台に立ってるって、何の大会なんだ？」

「この写真は去年行った武道大会で優勝した時のヤツだ。格闘技部門のな……」

「あらあら。では、こちらの集合は？」

「駒王町に引越す前、友人達と最後に撮った記念撮影です」

「……八雲先輩。この猫と一緒に写ってる写真は？」

「ん？ ああ、そいつは中学の頃に見つけた野良猫だよ。怪我してたから看病したんだけど、怪我が治った途端にどっか行っちゃよ」

各々に写真の説明を八雲がする中、不意に一誠が祐斗に気付く。

「……つて、おい！ 木場！ それは見るな！」

祐斗が別のアルバムを見てみると、咄嗟に一誠が飛び掛かってきた。だが、祐斗は軽快な動きで避けていく。

「ハハハ、いいじゃないか。もう少しイツセーくんのアルバムを楽しませてよ」

「イツセー。あんまり暴れるなつて」

「うおつ、吉川！ 離せええええつ！」

羽交い締めにして一誠の動きを止めた八雲。

するとその時、祐斗の視線がとあるページに止まった。その視線は、何か予想外のものを見つけた様子だった。

「どうした、祐斗？」

祐斗の様子に疑問を思った八雲は、一誠と共にそのページを覗き込んだ。

そこには、園児時代の一誠と同一年の園児が写っている写真のページだった。

「……凄いな。同い年の子にコブラツイストを掛けられているのか、イツセー」
「待て待て！ 木場の視線とは違うだろ！」

一誠の訂正に、八雲は祐斗の視線の先にある写真を見ると、そこには一誠と一緒に同い年の園児と、その父親らしき人物が写っている写真だった。

祐斗は園児の父親……正確にはその人物が携えている模造品らしき剣を指差して訊ねた。

「これ、見覚えは？」

真剣に問う祐斗の声が何時もより低く聞こえた。

「うーん………いや、何分ガキの頃過ぎて覚えてないけどな……」

「こんな事があるんだね。思いもかけない場所で見かけるなんて……」

一誠が一人ごちている中、祐斗は苦笑を浮かべていた。

「……祐斗？」

八雲は心配するが、祐斗の目には寒気がするほどの憎悪で満ちていた。

「これは聖剣だよ」

そこには、何時もの祐斗の面影は無かった。

「……………」

「ん〜♪」

その日の夜。八雲は自室にてくうろに膝枕をしているのだが、その視線はくうろに向けられておらず、天井の一点を見つめていた。

「御主人様、何か考え事ですか？」

「ん？ ああ……。祐斗の事がな……」

「どうやら、祐斗の事で考えていた様だ。」

アルバムを一通り見た後、何時もの様にオカ研会議が始まったのだが、祐斗は難しい表情で何かを考え込んで話に参加しなかった。

それは祐斗らしくなく、八雲は心配しているのだ。

「確かに……。あの後の祐斗さん、何だかポーツとしてましたね」

「聖剣に反応してから、な……。しかし、あの憎悪を滲ませた瞳は尋常じゃなかった……」

「何かあったのでしょうか？ 祐斗さんと、聖剣との間に……」

「……機会があれば話でも訊いてみるか。——それじゃあ寝るか」

そう言いながら、八雲はくうろを退かしては改めてベッドに寝転ぶと、その隣にくう

ろが寝転んだ。

「おやすみなさい、御主人様」

「ああ、おやすみ……」

そして目を閉じると、八雲は眠る前に思い付く。

(……少し、相談してくれるか?)

そう思い、意識を『二十四気の神操機』へと向けたのだった。

『……………ふうう』



“窓”が連続で開いては閉じ、開いては閉じの繰り返しが終わわり、広い空間が出現しては八雲は足を地に着き、前方に見える一点を見る。

夏の草木を抜けた先にあるのは、野点を行う時に見る傘と毛氈もうせんが被せられた長椅子。そこを中心に四方を四季折々の草花が囲み、幻想的な空間を作りあげていた。

「八雲ー！ こっちだー！」

そして、そこに集まっては鎮座しているシキガミ達の内、コゲンタが声を掛けてきた。そう。ここは“二十四気の神操機”の精神とも言える中なのだ。その証拠に八雲は霊体であり、シキガミ達は実体を持って過ごしているのだ。

実は、八雲が“二十四気の神操機”の中に潜るのは数回程行っていた。特にライザー戦の後、こうして寝る前にはシキガミ達と話し合い、幻想的な景色を見ては野点を行うのだ。

『何時もすまないな。ちょっと相談してくれるか？』

「いいですよ。あ、お茶ですが……」

そう言いながらクラダユウは茶を点てて八雲に差し出し、それを飲んだ八雲はホッと一息ついた。

因みに、野点に出される物で八雲は腹を満たしてはいない。あくまで雰囲気で行っているものだ。

しかし、シキガミ達は腹を満たしている。出される茶菓子や茶は、八雲が摂取する食事、又は空气中に漂う微量な魔力や氣によって作られた物。別に形作っては口に運ぶ事もしないでいいが、これも気分の問題なのだ。

「それで、悩みとは木場の事か？」

そんな中、唐突にフジが訊いてきたが、八雲は頷いて肯定した。

因みに、野点に集まっているシキガミ達は全員ではない。コゲンタ、クラダユウ、フジを入れて5人だけであり、他のシキガミは四方を囲む景色の何処かにいるのだ。

それから八雲は祐斗の事を話すと、各シキガミは悩みながらも言葉を返す。

「確かに心配だよな」

「あの木場の憎しみは異常だった。聖剣に恨みでもあるのか？」

祐斗と模擬戦を交わした事のあるフサノシンとフジ。

「でもなあ……」

「どんな悩みなのか分かんねえからな……」

腕を組んでは悩むホリンとコゲンタ。

そんな中、クラダユウは手を挙げて言った。

「あの、祐斗さんの悩み事を占いで探りましょうか？」

『占い？』

「ある程度の事なら、わたくしの祓々で探る事が出来ますよ」

クラダユウの言葉に暫く考え、八雲は頷いた。

『……頼む。聖剣との関係だけでも知れればいいからな』

「分かりました。——陰陽錫杖祓々よ。少年騎士と聖剣の因果を、我に教えたまえ……」

クラダユウが構えた袂々が、浮かんでは回り始める。

回転は次第に速度を増し、輝きを放つてはクラダユウの目の前に倒れると、クラダユウは口を開いた。

「……断片的にですが、祐斗さんの関係が浮かびました」

『どうだった？』

「……教会……悪意……復讐……。どうやら、聖剣との憎しみの関係が強いです」

『憎しみ、か……』

「しかし何故、教会が浮かび上がるのだ？ 木場は悪魔だから教会とは無関係だと思うのだが……」

「そこまでは分かりません。あくまで聖剣との関係ですので……」

フジの言葉にクラダユウは首を横に振ると、八雲は立ち上がる。

『取り敢えず、聖剣に向ける憎悪は教会に関係する様だな。ありがとう、クラダユウ。それと皆も……。そろそろ寝るよ……』

「おう、おやすみ」

「おやすみなさいませ、八雲さん」

シキガミ達と言葉を交わした八雲は消える様に、“二十四気の神操機”から出たのだった。

そして、クラダユウの言葉の意味を、後に八雲は知る事となる。
それが、今回の騒動の始まりでもあった……。

第27話：球技大会の闘神士

一誠の家で行ったオカ研会議から数日が経過した頃、昼休みの廊下にて八雲とくうろが歩いていていた。

「さてと、今日の放課後は何の練習だろうな？」

2人が向かっているのは、無論オカルト研究部の部室。もうすぐ始まる球技大会に向けて部員達は昼休みにミーティングを行っている中、昼食を学食で取る八雲は毎回くうろに迎えられ、部室に行っているのだ。

球技大会の種目には、クラス対抗戦や男女別競技の他、部活対抗戦がある。この手のイベントが大好きなリアスも気合いを入れ、放課後は目ぼしい球技の練習を行っているのだ。

「野球、サッカー、バレーボール……。一通りの団体球技はしましたね。私個人としては、サッカーが楽しかったです。走ってボールを追い掛けるのが特に……」

「体を動かすのはいいからな」

「元が犬(?)だからか、くうろは頬に手を添えては嬉しそうに言う中、八雲も頷いた。「部活対抗戦は余程のハマしなかったら負けなからな。まあ、俺の場合は個人種目で

へましない様にしないと……」

そう言い、八雲はリアスから借りている本……テニスのマニュアルを読み歩く中、くうろが声を掛ける。

無論、学園内での呼び方で……。

「吉川さんって、テニスは初めてですか？」

「ああ……。テレビの中継で見た事あるが、ルールはさっぱりだからな。全く、男女個人種目を当日間近で発表すんなよ……」

「練習はどうします？」

「そうだな。今日の放課後にでも、テニス部に頼んで一戦してもらうか……って、お？」

すると、視界に一誠とアジアの姿が入り、八雲達は声を掛けた。

「よー、お二人さん。昼飯は済んだみたいだな」

「吉川、お前もか？」

「ああ……って、イツセー？ 何故にアジアの顔が赤いんだ？」

「い、いえええ！ 何でもありませんので気にしないでくださいいいい！」

紅潮した顔を横に振るアジアをよそに、一誠が小声で説明した。

松田と元浜と共に悪ふざけした後、一緒に旧校舎へ向かおうとアジアを呼んだのだが、その時に同じクラスの女子……桐生藍華きりゆうあいかが一誠の事を彼氏と呼び、アジアを動揺

させたのだ。

無論、いきなりアーシアの彼氏認定されて一誠も相当恥ずかしくなり、アーシアを連れて早足に教室を出たのだ。

「あー……なるほどね」

そんな騒動を、八雲は想像しては納得した。

因みに、八雲も藍華の事は知っている。一誠達を唯一嫌っておらず、普通の友人として接している女子であり、同時に豊かないかがわしい知識を持つ事から、一部の生徒から『匠』と呼ばれているのだ。

「でも、藍華さんの言葉も分かりますね。私も時々、イツセイさんの周りでそんな雰囲気を感じます」

「え、ええええええ!?!」

突然のくうろの発言に一誠も動揺しては顔を紅潮させる中、ホリンも出ては頷く。

『それはウチも感じたなあ。部長はんも恋する乙女の視線を送つとるし……』

「な、何で部長が出てくる………って、まさか、部長に彼氏が!」

『……ほんま、恋愛にどんくさいやつぢやな』

やれやれとホリンは首を振りながら戻ると、八雲が手を叩いては一誠達に注目させた。

「取り敢えず部室に向かおう。リアス部長達が待つてるだろ？」

「……そ、そうだな」

「は、はいいい……」

「行きましょう」

そして、4人は旧校舎へと向かうのだった。

（あ、でも、朱乃はんが八雲はんに送る視線もせやつたな……）

内心、ホリンが思い出した様に思うのを知らずに……。



「失礼しまーす」

八雲を先頭に部室に入る4人。既に他の部員が顔を揃えていたが、その中に部員ではない人物達がソファアーに座っており、一誠が驚きの声を上げた。

「せ、生徒会長……?」

その人物達とは、ソーナと椿姫だった。

「あの、どちらさまですか?」

唯一、彼女達の事を知らないアーシアが小声で一誠に尋ねた。

「この学校の生徒会長、支取蒼那先輩だよ。隣は副会長の森羅椿姫先輩……ってか、生徒会メンバー勢揃いじゃん」

一誠がソーナと椿姫に戸惑う中、付き添いであろう男子生徒が呆れた様に口を開いた。

「なんだ、リアス先輩、俺達の事を兵藤に話してないんですか？ 同じ悪魔なのに気付かない方もおかしいけどさ」

「サジ、基本的に私達は『表』の生活以外ではお互いに干渉しない事になっているのだから仕方ないのよ。それに兵藤くんは悪魔になって日が浅いわ。知らなくても当然の反応をしているだけ」

「な、何ですと!? まさか……」

今の説明に一誠は理解したのか、八雲が説明した。

「察しの通り、会長は上級悪魔シトリー家の次期当主。真名はソーナ・シトリーだ」

「なっ………って、どうして吉川が知ってるんだよ!？」

「イツセーが転生する前に紹介してくれたからな」

予想外の展開に絶句する一誠。まさかリアス以外にも上級悪魔が存在する事に心底驚く中、八雲と交代する様に朱乃が説明した。

「この学園は実質グレモリー家が実権を握っていますが、『表』の生活では生徒会……つ

まり、シトリー家に支配を一任しております。昼と夜での分担を分けたのです」

「そ、そうだったのか………って、まさか生徒会のメンバーって……？」

すると、ソーナが付き添いの男を紹介する様に口を開く。

「彼は匙さじ元士郎げんしろう。2年生で私の『兵士』です」

「『兵士』の兵藤一誠。『僧侶』のアーシア・アルジエントよ」

同じくソーナに続いて、リアスが新たな下僕となった一誠とアーシアを紹介すると、一誠は元士郎を見ては口を開いた。

「最近書記として追加メンバーになった奴だよな。へー、お前も『兵士』か。それも同学年なんて奇遇だな」

「はあ……。俺としては変態3人組の筆頭であるお前と同じなのが酷くプライドが傷付くんだけどな……」

「なっ、なんだとこの野郎！」

同じ『兵士』同士に一度は嬉しそうな声を上げた一誠だったが、その思いとは裏腹に元士郎が溜め息と共に嫌味を言い、怒りの感情を顔に出していた。

「お、何だやるか？ こう見えても俺は駒4つ消費の『兵士』だぜ？ 最近悪魔になつたばかりだが、兵藤なんぞに——」

「お止めなさい、サジ」

しかし、すぐに挑発してくる元士郎をソーナが鋭い睨みで制した。

「今日ここに来たのは、最近下僕にした悪魔を紹介し合う為の、上級悪魔同士の会合です。私の眷属なら、私に恥をかかせないこと。それに、兵藤くんは駒を8つ消費してるのよ。今のあなたでは、まだ勝てません」

「駒8つって、全部じゃないですか！ こんな冴えない奴なのに……信じられない」
「うつせえ！」

目元を引きつらせながら見る元士郎に一誠は吠えるが、八雲が肩を掴んでは押さえつけた。

「落ち着けよ、イツセー」

「だけどよ、吉川……」

「吉川？ そうか、お前が……」

すると、元士郎が八雲の前に来ては睨み付けた。

「初めましてかな。俺は吉川八雲だ。よろしく」

「知ってるぜ。会長直々の誘いを拒んだ奴だろ？ せっかく会長が練りに練った勧誘プランを台無しにしやがって、どういいうつもりだ！」

「あら、ソーナ。八雲を勧誘したの？」

「ええ。結果はダメでしたけど」

リアスの言葉にソーナは苦笑する中、八雲は元士郎を落ち着させる様に言う。

「聞いてないのか？ ソーナ会長には事情を説明して納得してくれた。色々協力はするからいいだろう」

「うっ……。で、でも、俺は納得しねえぞ！」

「なら、どうしたら納得するんだ？ 一応言うが、お前に頭を下げるのはゴメンだね。ソーナ会長には納得してくれたんだからな」

睨み合う八雲と元士郎。だが、そう長くは続かなかつた。

『だったら、今度の球技大会で白黒着けたらいいんじゃないかねえか？』

コゲンタが現れ、提案を申し立てたのだ。

「うおっ！ 何だソイツは？」

「あら、コゲンタくん。お久し振りね」

『おっす、ソーナのねーちゃんと椿姫ねーちゃん』

「て、てめえ！ 会長を褒に馴れ馴れしく呼ぶな！ 俺がボッコボコにしてやんぞ！」

『あ？ だったら勝負してやろうか？』

しかし、八雲の代わりにコゲンタが一触即発の雰囲気となり、八雲とソーナは2人を静止させた。

「やめろ、コゲンタ」

「サジ、いい加減お止めなさい。今のあなたでは、絶対に吉川くんにもコゲンタくんにも勝てません。先日のゲームでフェニックス家の三男を倒したのは彼らなのだから」

「はあ!? あのライザーを……フェニックスを、こいつらが倒したんですか!?!」

信じられないと言う様に、八雲とコゲンタを見つめる元士郎。

そんな中、椿姫が思い出した様に言う。

「確か、ライザーの“女王”を倒したのも吉川くんでしたね」

「「「ええっ!?!」」」

その一言に、一誠、リアス、アーシア、小猫、くうろは驚愕した。だが、その光景を見た朱乃と、ぼんやり虚空を眺めている祐斗は驚きを見せていなかった。

「マジか吉川! 俺はてつきり朱乃さんが倒したものだ……」

「……私も驚きです。治療を受けながら眠っていたので、分かりませんでした」

「はわわ! 凄いですね……」

「はい! やっぱり御主人様は凄いです!」

「リアスは知らなかったのですか?」

「え、ええ……。あの後、八雲達もすぐに帰ったから事情は聞いてなかったわ……。今度、ゲームの映像を借りないかね」

そんな騒ぎの中、コゲンタは再び元士郎に言う。

『それで、どうなんだ？ 今度の球技大会で勝負して、その結果で勝負を着ける。因みにお前は何に出るんだ？』

「テ、テニスだ。個人種目の……」

それを聞いて、ニヤリと口を吊り上げるコゲンタは言った。

『丁度いいじゃねえか。八雲もテニスだ。これで試合に当たれば正々堂々勝負出来るだろ』

「なら、私の方で調整しましょうか？」

すると、コゲンタの会話に乗る様にソーナが提案した。

「か、会長!? いいんですか!？」

「お互い溝を深めて学園の平和に影響するなら、ぶつかり合つて和解した方がいいでしょう。その為なら、私も協力します」

『ありがとな、ソーナのねーちゃん』

「ありがとうござい、ソーナ会長。この貸しは何れ返します」

一先ず八雲と元士郎の勝負に一段落したのか、ソーナは一誠とアジアに頭を下げる。

「ごめんなさい、兵藤くん、アルジエントさん。うちの眷属はあなた達よりも実績が無いので、失礼な部分が多いのです。よろしければ新人悪魔同士、仲良くしてあげてください」

い。——サジ」

「え、は、はい……………よろしく」

ソーナに促され、どこか不満が含まれている様に見えるが渋々と頭を下げた。

「はい、よろしくお願ひします」

「悪魔ではありませんが、こちらこそよろしくです」

アーシアが屈託のない笑顔を浮かべ、くうろも微笑んでは挨拶を返すと、元士郎は2人の手を取った。

「こちらこそ！ いや、アーシアさんやくうろちゃんみたいにかわいい子なら大歓迎だよ！」

その途端、元士郎は一誠とは正反対の行動を取っては握り返してきたが、すかさず間に割り込んだ一誠が引き離し、思い切り力を込めて握手を交わした。

「ハハハ！ 匙くん！ 俺の事もよろしくね！ つーか、アーシアに手を出したらマジ殺すからね、匙くん！」

「うんうん！ よろしくね、兵藤くん！ 金髪美少女を独り占めだなんて、本当にエロエロな鬼畜くんなんだね、兵藤くん！ やー、天罰でも起きないものかな！ 下校中、落雷にでも当たって死んでしまえ！」

お互いに無理矢理な笑顔で見つめながら、暴言を暴言で返しあう光景に、殆どの者が

呆れていた。

『誰かオレつちを呼んだ？』

「呼んでないよエレキテル」

「大変ね」

「そちらも」

『それで、勝負の後はどうするんだ？』

そんな珍妙な光景を見ながらリアスとソーナも嘆息していると、2人の間にフジが現れた。

「あら。あなたもコゲンタくんと同じシキガミかしら？」

『黒鉄のフジと言います。以後、お見知りおきを……。——それで、勝負内容はテニスで決定だ。敗者の罰は如何に？』

黒鉄一族が司る力は「勝負」。勝ち負けに拘りを持つと同時に、勝負事の審判役やルールの提案、敗者の罰ゲームを行う事もするのだ。

それから暫く、八雲は口元に手を当てて考えると口を開いた。

「なら、俺が負ければ匙に頭を下げ、尚且つ生徒会の仕事を1ヶ月間手伝うよ。思う存分、扱き使って構わない」

「だったら俺は、お前の命令に何でも1回だけ聞いてやる！ 神器無しで、悪魔と人間の

圧倒的身体の差に腰抜かすなよ！」

2人の間に火花散る雰囲気の中、フジは八雲に言う。

『では2人共。俺の言う通りに契約書を書くんだ。八雲、書いたら神器に契約書を近付けてくれ』

フジの言う通りに八雲と元士郎は契約書を書いてはリアスとソーナにサインを貰い、“二十四気の神操機”を装着した八雲が契約書を宝玉に当てると、契約書は光の粒子となつて宝玉に吸われ、フジの手元へと渡つたのだつた。

『確かに受け取った。お互い悔いの無い様、全力を出し切れ』

そう言い残したフジは戻ると、ソーナ達は立ち上がった。

「予定外の事態が起きりましたが、お互いのルーキー紹介は十分でしょうね。では、私達はこれで失礼します」

「会長……いえ、ソーナ・シトリー様。これからもよろしくお願いします！」

「よ、よろしくお願いします！」

「ええ、よろしくお願いします」

頭を下げる一誠とアジアに返事をし、ソーナは微笑んではリアスに言う。

「リアス、球技大会が楽しみなね」

「ええ、本当に」

「逃げんなよ、吉川！」

「逃げねえよ、匙」

元士郎の言葉を最後に、ソーナ達は早足に部室を後にする中、八雲はチラリと祐斗の方へと視線を動かした。

「……………」

祐斗の視線は、やはり虚空を見つめるだけだった。



元士郎と勝負の約束をして数日後、球技大会前夜。

『フンツ、フンツ！』

現在、八雲は「二十四気の神操機」の精神空間の南側にて、夏の草木の領域にある広い空間で具現化したラケットを振り、同じく具現化したテニスボールを打ち返していた。

この精神空間はシキガミ達が度々集合する中央広場を拠点に、東は春、西は秋、南は夏、北は冬と言った、それぞれの領域があり、シキガミ達は司る節季の領域に留まっている。そして、八雲が来れば一部のシキガミが中央に集まり、談笑や悩み事、または精

神空間における鍛練を手伝ったりしているのだ。

今回は、元士郎との対戦の為に精神空間での最後の鍛練をしていた。精神空間での鍛練なので、イメージトレーニングに近い扱いであるが……。

「ええ調子やな、八雲」

すると、新たに目覚めたシキガミが声を掛け、八雲は素振りを止めた。

現れたのは、ハリネズミに似た獣人的な外見を持つシキガミ。首に掛けた紐に幾つもの巻物が吊るされ、その一本を手に取りながらシキガミは笑みを浮かべていた。

まるで、八雲が鍛練に打ち込む姿を喜んでいるかの様に……。

「せやけど、そろそろ明日に備えて寝なアカンで。休むのも鍛練や」

『分かったよ、マスラオ。だけど……あと少しだけするよ。練習では編み出せたから、ここで物にしておきたい』

八雲の言葉にシキガミ……『繁茂のマスラオ』は感動するかの様に涙を流していた。

「く~~~~~~~~っ！ 偉いで八雲！ ワイは努力する奴がめっちゃ好きや。イツセーにも感じたけど、八雲の周りには努力家が多くて嬉しいで！」

因みに、繁茂一族が司る力は「成長」。契約者が成長する事に喜びを感じ、何より繁茂一族自身も努力家集団だ。特に繁茂一族にとって、八雲の様な鍛練を続けている者は至高の喜びなのである。

『確かに、イツセーの成長も、早いな。早朝訓練も、最初の頃より、ましになってる』
素振りしながら会話する八雲にマスラオも頷くと、暫く八雲は口を閉じてはボールを何回も打ち返した。

「……しっかし、ラケットを大きく振り抜くなんて、異常なスピンの掛かるとちやうんか？ それにトップスピンとスライスも交互に打つとるし……一体どんな技やる？」

そんな中、マスラオは誰にも聞こえない声で呟きながら、八雲の鍛練を見つめるのだった。



『リアス・グレモリーさん、支取蒼那さん、同位優勝です！』

そして、球技大会開始から数時間が経った。

現在、クラス対抗戦が終わり男女別個人種目の時間。3年生が使用しているテニスコートでは、先程まで激戦を繰り広げていたリアスとソーナが健闘を称える様に握手を交わしていた。

「楽しかったわ、ソーナ。また機会があればやりましょう」

「そうね、リアス。小西屋のうどんは次回に持ち越しね」

微笑んでは握手する2人を見て、観戦していた生徒達が歓声を上げる。

すると、別のコートからも大きな歓声が聞こえた。

「向こうも盛り上がりつつあるわね」

「確か、2年生が試合してるコートね。一緒に見に行きましょう」

ソーナの言葉にリアスも同意してはコートを出ると、リアスには一誠とアーシアが、ソーナには椿姫が、タオルとドリリンクを渡した。

「お疲れ様です、部長！」

「部長さん。試合、とっても凄かったです」

「ありがとうイツセー、アーシア。朱乃達はどうしたの？」

「朱乃先輩と小猫ちゃん、途中から吉川の試合を見に行きました」

「確か、木場さんも連れて行きました。くうろさんは吉川さんの所ですつと見てるはずですよ」

「そう……。なら、私達も八雲の試合を見に行くわよ」

リアスの言葉に一誠達も了承すると、八雲がいるコートへと向かうのだった。

そして、コートに到着したリアス達はすぐに朱乃を見つけた。

「あら部長。試合は終わりましたか？」

「ええ。同位優勝だけだね」

「おめでとうございます、部長……」

「ありがとう、小猫。——それで、八雲の状況はどうしてるの？」

「あちらを……」

朱乃が指差す方へと向けるリアス達は驚愕した。

現在、スコアボードは1ー5。

八雲の圧勝である。

しかし、リアス達が驚いたのはスコアボードだけじゃない。

「はあ……はあ……」

「……………」

コートに立つ2人の内、元士郎は息を上げて疲労感が見られ、八雲は少しの汗を流しているだけだからだ。

「ちよ、神器無しで匙を圧倒してるじゃないか!？」

「くうろ。あなたは最初から見ていたわね。それまでの八雲の試合状況はどうだったの？」

「そうですね……」

リアスの言葉に、くうろは試合報告を語り始めた。

長い攻防の果て、最初は元士郎が先取した。だが、特に八雲は焦りもせず、冷静に元

士郎の打球を観察していたのが印象だ。

そして、それは正解だった。次のゲームからは元士郎の動きを見極めたかの様に、八雲は打球を返しては同点に追い付き、逆転に成功した。

それが続いていき、くうろは気になる事を口に出した。

「度々、匙さんの腕が止まっています。特に御主人様とのラリーが続いた時には……」
「それって、今の様な状態？」

くうろの言葉にリアスはコートを見ると、八雲と元士郎がラリーを続けており、八雲の打ち方に気付いたのか小猫が呟く。

「……トップスピンとスライス。八雲先輩はそれを交互に打ってますね」

「……………あ、そっか」

すると、リアスは八雲の行動を見ては、思い出した様に手を叩いた。

「何かのスポーツ雑誌で見た事があるわ。相手の筋肉を交互に動かして、一瞬だけ麻痺させる技術……………確か、スポットだったかしら？」

「だあつ！」

バシイイイイツ!!

「15-00！」

リアスが語り終えると同時に八雲に得点が入る。その際、元士郎の腕も振る動作の途

中で止まっていた。

「すっげえ……」

一誠が驚く中、リアスは首を傾げた。

「でも、あれは相当な技術よ。数日で物に出来る代物じゃないのに、どうやって覚えたのかしら？」

「あ、それは確か、テニス部にあつた雑誌を見て真似たら、色々出来たと言つてましたよ………御主人様が」

「………たつたそれだけで出来たの？」

「あらあら。技を見ただけで出来るなんて凄いですわね」

「………眼力が半端ないです」

それぞれが驚く中、八雲の技は続く。

大きく跳躍してからのスマッシュ。綺麗な弧を描くボレー。ボールの跳ね際を狙つて返すライジング。大きく振り抜き異常なスピンを掛けて打つバギーホイップショット。

「はあっ!!」

そして、最後に決めた技。トップスピンの気味に跳ねては元士郎の顔を横切つたツイストサーブが決まり、審判は声を上げる。

「ゲームセット！ 優勝、吉川八雲くん！」

その瞬間、リアス達の試合に劣らない程の歓声が起こる中、八雲と元士郎はネット前に集合していた。

「全く、お前って本当に人間か？ 完全に初心者動きじゃないぞ」

「勝つ為に努力したただけだ。楽しかったぜ、元士郎」

差し出された八雲の腕を見て、元士郎は頭を掻いては微笑んだ。

「……まあ、勝負云々は置いといて。俺も楽しかったぜ、八雲」

そして、2人は固い握手を交わしては、盛大な拍手が送られた。

「あ。契約書の件、絶対に忘れるなよ」

瞬間、笑顔の八雲を見た元士郎は、顔を青ざめてしまうのだった……。

第28話：復讐の騎士へ〈ナイト〉

元士郎との試合を終えて、昼休み。

あの後、八雲は元士郎と交わした契約書で『何でも1回だけ命令を聞く権利』を得たのだが、八雲はすぐに権利を使わず、何時か使うと言ってはリアス達の所へ行つてしまったのだ。

その際、元士郎はホツとしたと同時に権利がどのタイミングで使われる心配に駆られてしまったが、その権利が数日後に使われる事をまだ知らない。

そして現在、オカルト研究部メンバーは部活対抗戦の為に集合していたのだが、アジアが何処かに行つてしまい、未だに集合していない状況になっていた。

「お、お待たせしました……」

「アーシア。何処に行つて……」

刹那、やつて来たアーシアを見た一誠は固まってしまった。

「……何故にブルマ？」

そう……。八雲の言葉通り、アーシアは学園指定のハーフパンツからブルマに変わっていたのだ。

「ア、アーシア!? その格好は一体……」

固まっていた一誠が口を開くと、アーシアは恥じらう様に体を動かし、顔を真っ赤にしては言った。

「……あ、あの、桐生さんから聞いたんです。ドッジボールの正装はブルマだって……。ダメ、ですか?」

ズキューーン!!

すると、恥ずかしそうに上目遣いで訊いてくるアーシアの姿に、一誠の心は弾丸を撃たれた様な衝撃を受けては萌えたのだった。

「ううん、最高だよ、アーシア。ありがとうございます。そして、ありがとうございます!」

一誠がアーシアに感謝する中、八雲はそんなアーシアの格好を見ては思う。

(さすが桐生^君と言ったところか。しかし、後でアーシアには誤解を解いておかないと……)

だが、アーシアをジッと見ていたのがまづかった。

「あらあら、八雲くんもブルマに興味がありますの?」

「いや、ブルマはくうろが鍛練時に着るので……って、朱乃先輩!」

何故なら、反応しては振り向こうとした瞬間、朱乃が八雲を背中から抱き付いたから

だ。そのせいか、背中に伝わる朱乃の胸の柔らかさに八雲は顔を赤くした。

「えええ、えつと……何故に抱き付くんですか？」

「うふふ。いえ、別に深い意味はありませんわ。ただ、興味があるのなら、私も着替えてあげようかと思いましたが」

「マジですか!？」

朱乃の言葉に反応する一誠。だが、その直後に膨れつ面のアーシアに足を踏まれたのだった。

「それで、八雲くんはありますか？ ブルマ」

「え、えつと、興味はその……」

『八雲も思春期男子だもんねー。でも、興味としてはチャイナミニが——』

「おいナナヤアアアアツ!!」

抱き付かれたまま八雲は困惑する。何故、朱乃がこの様な行動をするのか分からないからだ。

後に度々起こす朱乃の行動が、自分を振り向かせる為の小さな嫉妬心だと理解するのは2人が付き合ってからなのだが、それはまだ長い先のお話……。

「朱乃さん！ 御主人様が困ってますから離してください！」

「もう少しだけいいじゃないですか」

「私が嫌なんです！」

「はいはい。そろそろ始めるわよ」

くうろが朱乃を剥がそうとする中、リアスは注目させる様に手を叩いた。しかし、未だに朱乃とくうろが止めなかったので、最終的に小猫が『戦車』の怪力で2人を八雲から離れたのだった。

「あなた達、気合いを入れなさい。ドツジボールと言えど、チーム一丸となって勝ちにいくわよ！」

『『はー！』』』

気合いを込めた返事をする八雲達。すると、一誠が何かを取り出した。

「皆！ これを巻いてくれ！ 夜なべして作ったんだ！」

取り出したのはハチマキ。その中央には『オカルト研究部』と刺繍された、一誠のお手製だった。

「イツセーって意外に器用ね。上手く出来てるわ」

「はい。イツセーさんが皆さんと一丸となって勝負に挑もうとして作ってくれたのです」

「……予想外の出来映え」

「確かに、他の部活動ではチーム一丸になる為の物を着用してますね」

「うふふ、そうですわね。帽子だったり、ユニフォームだったり」

リアス、アーシア、小猫、くうろ、朱乃と順にハチマキが渡される中、八雲もハチマキの出来映えに感心しては羨ましく感じた。

「凄いなイツセー。簡単な裁縫でも、俺はダメダメだから羨ましいぜ。なあ、祐斗」
「……え。う、うん。そうだね」

しかし、祐斗は未だにブーツとしてた様で、八雲は肩に手を置いては言う。

「しつかりしろよ。試合に集中しないと、負けちまうぞ」

「……そうだね。負けると全てが無駄になる……。勝つ事が大事だ……」

意味ありげな口調で祐斗はハチマキを巻くと、ちようどアナウンスが流れてはリアス達はグラウンドへと向かった。

初戦は野球部。オカルト研究部の戦いの幕が上がった。



それから時間が経過し、球技大会が終了した放課後。

あれからリアス達オカルト研究部は、途中一誠の負傷でメンバーが少なくなる事態もあつたが、リアス達悪魔の強力な投球や八雲の投げた変化球等で一方的に攻め、途中で

ら一誠も復帰し、結果はオカルト研究部の優勝となり球技大会は終わりを迎えたのだ。そして現在。球技大会の片付けを終えて八雲達は部室に集合していた。

外は予報通りに雨が降り、雨音と一緒に無数の雨粒が部室の窓ガラスを叩く中、パ
ンツと外の雨音に混じって部室に乾いた音が響いた。

リアスが祐斗の頬を叩いたからだ。

「どう？　これで少しは目が覚めたかしら？」

ドッジボールには優勝出来た。だが、祐斗だけは非協力的な所が目立ち、試合中もリアスは怒っていた。もしリアスが怒っていなければ、八雲や一誠が怒っていただろう。

「……」

リアスに頬を叩かれた祐斗は何も返さなかった。だが唐突に、先程まで無表情と無言で通っていた祐斗がニコニコ顔になった。

久方振りに見た八雲は懐かしく思うと同時に、何故かその笑顔にナニかを覚えた。

「もういいですか？　球技大会も終わりました。もう練習もしなくていいでしょうし、夜の時間まで休ませてもらってもいいですよ？　それと、少し疲れましたので普段の部活は休ませてください。昼間は申し訳ございませんでした」

「木場、お前マジで最近変だぞ？」

「キミには関係ないよ」

さすがに祐斗の変貌ぶりを無視する事に限界を感じた一誠が訊くが、祐斗は作り笑顔で冷たく一蹴した。

「関係ないって……さすがに俺だって心配しちまうよ」

一誠の言葉に祐斗は苦笑する。

「心配？ 誰が誰をだい？ 基本、利己的なのが悪魔の生き方だよ？ まあ、主に従わなかった僕が今回悪かったと思っっているよ」

祐斗の言葉に一誠は立場が完全に逆転している事に戸惑いを覚えた。

「チーム一丸で纏まっていこうとしていた矢先でこんな調子じゃダメだろ。これからもお互い足りない部分を補う様にしなきゃダメなんじゃねえか？ 仲間なんだからさ」

その言葉を聞いた祐斗は、今度は表情を陰らせた。

「仲間か……。相変わらずキミは熱いね。——イツセーくん、僕はね、こここのところ、基本的な事を思い出していたんだよ」

「基本的な事……？」

「ああ、そうさ。僕が何の為に戦っているのかを、ね……」

「部長の為じゃないのか？」

「違うよ」

祐斗から笑顔が消えて、地の底から響くような声色が室内に木霊した。

「僕は復讐の為に生きている。『聖剣エクスカリバー』……それを破壊するのが僕の戦う意味だ」

祐斗の決意を秘めた表情。その姿を見て、誰も何も言えなくなっていた。

『一体どうしたんだ？ 祐斗の奴……』

コゲンタは部屋の扉に目を向けては疑問を口にする。

あの後、祐斗は皆に背を向けて部屋を出て行ったのだ。八雲は後を追おうとしたのだが、辺りを見渡しては雰囲気沈んだメンバーを放っておけず、部屋に残る事を選んだ。沈黙を破る様に、リアスが溜め息をつく。

「ようやく忘れてくれたと思ってたけど、それでもなかったみたいね」

『んっ？』

「リアス部長は、祐斗が聖剣に拘る理由に心当たりがあるんですか？」

コゲンタの反応と同時に八雲がリアスに声を掛けると、リアスは瞑目しては静かに口を開いた。

「……聖剣計画」

「聖剣計画？」

その単語を鸚鵡返しに言った八雲の言葉に、リアスは静かに頷いた。

「そう。祐斗はその計画の生き残りなのよ」

そして、八雲達は祐斗の過去の一部を知る事となった。

「数年前まで、キリスト教内で聖剣が扱える者を育てる計画が存在したの」

「……初めて知りました」

「どうやら、聖女として一時祭られていたアジアにすら知らされていない極秘の計画らしい。」

「聖剣は対悪魔にとつて最大の武器。聖剣に触ればたちまち身を焦がし、斬られればなす術もなく消滅させられる。神を信仰し、悪魔を敵視する使徒にとつては究極とも言える兵器ですわ」

「ゲームや漫画みたいですね」

八雲はリアスの隣にいた朱乃が聖剣について説明を入れてくれて納得した。勿論、一誠も八雲と同じ考えをしていた様で理解した。

「そして、祐斗は聖剣……特にエクスカリバーと適応する為、人為的に養成を受けた者の一人なの」

「じゃあ、木場は聖剣を使えるんですか?」

一誠の質問にリアスは首を横に振っては答えた。

「残念ながら、祐斗は聖剣に適応出来なかった。それどころか、祐斗と同時期に養成された者達も全員適応出来な様だけど……」

あれほど剣に精通し、数多くの魔剣を扱う祐斗ですら聖剣は扱えなかったらしい。しかし、あれほど聖剣に憎悪を抱えている姿を見ると返って納得出来た。

「適応出来なかったと知った教会関係者は、祐斗を含む被験者を『不良品』と決めつけ、処分に至った。ただ聖剣に適応出来なかったと言う理由だけで……」

「っ!？」

『……何だよ、それ!？』

処分の言葉が心に重くのし掛かつては八雲とコゲンタは驚愕し、リアス達も不快に思ったのか目を細めている。

「そ、そんな……主に使える者がその様な事をしていい筈がありません」

アーシアに至っては真実を知り、瞳を涙で潤ませていた。信頼していたモノに何度も裏切られれば、当然の反応だろう。

「教会の者達は私達を悪魔邪悪な存在だと言うけれど、人間の悪意こそが、この世で最も邪悪だと思おうわ」

そう呟くりアスの瞳は憂いを帯びていた。

「私が祐斗を悪魔に転生させた時、あの子は瀕死の中でも強烈な復讐を誓っていたわ。生まれた時から聖剣に狂わされた才能だったからこそ、悪魔として生きる事を有意義に使ってもらいたかった。祐斗の持つ剣の才能は、聖剣に拘るには勿体無いもの」

聖剣によって無惨な人生にされた祐斗を、悪魔に転生させる事で少しでも救いたい。それがリアスの細やかな願いであり、生来の優しさだった。

「でも、あの子は忘れられなかった。聖剣を、聖剣に関わった者達を、教会の者達を……」
「……………」

リアスが溜め息をつく中、八雲は腕を組みながら天井を見つめて考える。

祐斗の過去。聖剣計画。教会の人間の悪意。様々な事柄が、数日前のクラダユウの占いと一致した。

（壮大な過去を持ってたんだな……）

だが、それだけで十分だ。

（でも、復讐だけで生きるのはしんどいぞ、祐斗……）

それらを踏まえ、八雲は祐斗の本心を聞きたくなかった。

苦しみを少しでも理解したかった。

「御主人様？」

くうろは反応する中、静かにソファーから立ち上がった八雲は部室の扉に手を掛けていた。

突然の八雲の行動にリアスが問い掛ける。

「八雲、どこ行くの？」

「あー、少しお手洗いに……。それじゃあ……」

戸惑いながら八雲は部室から出ると、リアスと朱乃は察した様に言葉にした。

「部長。八雲くんだけで大丈夫でしょうか？」

「……今は信じましょう。今の祐斗に近付けるのは、このメンバーの中では八雲だけだ
と思うわ……」



祐斗は土砂降りの中を傘もささずに歩いていた。

冷たい雨が熱で上がった思考をいい感じに冷やしてくれている。

祐斗は激しく後悔していた。『木場祐斗』の名を与えてくれた恩人に、救ってくれた主に反抗した事に……。

だが、聖剣エクスカリバーへの復讐を忘れる事は出来なかった。

今でもあの時の悪夢を思い出せる。

(想いを果たすまで、皆の分を生きていいなんて……)

犠牲になった同志達の事を思うと、これ以上の幸せを得る事を自ら拒んでは自身を戒めている中、それは聞こえた。

ぴちや

「あれは……」

雨とは違う水の音を祐斗の耳が捉えた。

視線を向けると眼前に神父がいた。十字架を胸に付け、神の名のもとに聖を語るその人物は、今の状態の祐斗に接触させてはいけない存在である。

ここで牽制しても構わないとさえ祐斗は思ったが、それは起こらなかった。よく見ると神父の腹部は血で滲ませ、口から血反吐を吐き出してはその場で倒れ伏した。

「ツー」

何が起こったのか分からないでいると、祐斗は異常な気配を察知し、瞬時に魔剣を創り出した。

ギイイイインツ!!

雨の中で銀光が走り、火花が散った。

殺気に向けた者は、眼前で死んだ聖職者と同じ格好をした神父だった。

「やつほ。おひさだね」

嫌悪を覚える笑みを見せる神父を見た瞬間、祐斗は不快な表情を見せた。

「……まだこの町に潜伏していたようだね？ 今日は何の用かな？ 悪いけど、今の僕は至極機嫌が悪くてね」

祐斗は眼前の神父……フリード・セルゼンに怒気を含んだ口調で告げるが、フリード本人は嘲笑うだけで軽く流した。

「そりやまた都合がいいねえ。俺つちとしてはキミとの再会劇に涙涙でございますよ！」

相変わらずのふざけた口調が神経を逆撫でする中、祐斗は気付いた。

「その剣……まさか！」

フリードの持つ長剣が聖なる光を発し、その光を目にした祐斗はさらに憎しみの色を濃くした。

「神父狩りも飽きてたところでさ、丁度いいや……」

フリードが足元に転がる神父の死体を踏みにしり、蹴飛ばしては笑みを浮かべた。

殺気で歪んだ、狂気的笑みを……。

「お前さんの魔剣と俺様のエクスカリバー、どちらが上か試させてくれないかな？ もちろん、お礼は殺して返すからさ！ ヒヤハハハハ！」

瞬間、フリードは駆け出しては手に持つエクスカリバーを振るおうとしたが、それは出来なかった。

バコンッ！

「うおっ!？」

「なっ！」

何故なら、祐斗とフリードの間からアスファルトの壁が飛び出してきたのだ。

「誰だよ、俺の勢いやった奴は……」

咄嗟に足を止めたフリードは辺りを見渡すと、祐斗の後ろに人がしゃがんでいるのが見えた。

そして祐斗もフリードの視線を追い、眼前に捉えては驚いた。

「大丈夫か、祐斗」

「八雲くん！ どうしてここに……」

そこにいたのは、傘を差した八雲だった。

八雲は部屋を出ては祐斗を探して見つけたが、フリードがエクスカリバーに手を伸ばした瞬間、八雲の勘で【壁】と【地】の2枚による統合符を発動し、祐斗を守る様に発動させたのだ。

因みに、今回使用した統合符は地面で作られた壁を任意の場所に作り出す効果を持っており、一定の距離でも壁を作り出せるのだ。

「お前を探していたけど、何やら不穏な雰囲気だったから急いで来てみれば……。それで、あれは知り合いなのか？」

祐斗に近づく八雲が訊ねた。

「嫌な意味でね……。名前はフリード・セルゼン。墮天使レイナーレの配下にいた、はぐれエクソシストだよ」

簡単な説明だったが、八雲は以前レイナーレ達との一戦で祐斗と剣を交えた神父だと理解出来たと同時に、敵意を込めた視線をむけた。

すると、フリードが八雲に視線を向けてきた。

「……話で聞いた通り、嫌な程に殺気を感じる危険人物だな」

「おんやあ？ そちら様は初めて見る顔だね？ もしかしてもしかなくても、その悪魔くんの知り合いなのかな？」

「同じ部員で、ダチだ」

目の前のイカれた神父に警戒しながら八雲は拳を構え、祐斗は魔剣を創り出した。

「なるほどねえ。つまり、キミはそっちの人間って事かあく。なら……ここ殺つちやっても問題ナツシングって事だよねええええええ！」

発狂するフリードが祐斗に駆け出しては聖剣を振るう。

甲高い音と共に魔剣は聖剣を受け止めるが、たった数秒後に魔剣の刀身が折れてしまった。

聖剣の刃が祐斗に迫る寸前、祐斗は後ろに跳んで斬撃を避けた。さすがに聖剣の脅威を理解する程の冷静さは残っている様だ。

「ヒヤッハー！」

すかさずフリードが聖剣で横風ぎに斬り掛かってくる。

「はあっ！」

その瞬間、八雲はフリードの横を狙い素早く拳を突き出し、その隙を新たな魔剣を創り出した祐斗が一閃を繰り出した。

「甘い甘い甘いなだよおおお！」

だが、そのコンビネーションをフリードは聖剣の大回転斬りに起きた衝撃により防ぎ、八雲と祐斗は弾き飛ばされてしまった。

「祐斗！」

瞬時に神器を出しては着地に成功した八雲は祐斗を見ると、立ち上がるがすぐに膝から崩れてしまっていた。

祐斗は体の内側から力が抜けていく感覚に襲われ、衝撃だけの威力に畏怖を覚える中、それでも憎悪に染まった表情は崩さない。

「ヒューッ！ さすがは聖剣エクスカリバー。くそ悪魔の魔剣もぎっくり折っちゃうなんて、伝承に伝わる力は伊達じゃないね！」

聖剣の光がフリードの異常な笑みに狂気の影を映し出す中、フリードは祐斗に向かって再び走り出す。

「させるかよー！」

しかし、フリードが走り出した瞬間、八雲は「巨」の闘神符を自身の腕に当てた。その結果、八雲の右腕が巨大化し、フリードを捕まえる為に勢いよく伸ばした。

「はあっ!? 何だよそりゃあっ!?」

背後に気配を感じたフリードが振り向いた瞬間、巨大な獣の口の如く開かれた手に捕まってしまった。

「八雲くん! これは僕の戦いなんだ!」

「だからって、ダチを放っておけないだろ!」

祐斗の避難に八雲は声を荒げて言い返す中、フリードは思い出す様に笑った。

「キヤハハハ……まさか、あのくそ生意気なイツセーくんがした一撃は、キミの力って訳か! だったら余計に殺らないとねえ! だ・か・ら・放せゴルアツ!」

逃れようと盛大に暴れるフリードだが、首と両腕を指と指の間で固定され、完全に自由を奪われている。

取り敢えず、このままフリードの手から聖剣を奪えば問題は解決する筈……。

丁度、八雲がその後の処理について考えていた時だった。

『っ、上だ!』

「っ!?!」

コゲンタの声と自身の勘で察知した八雲はフリードを投げ飛ばし、「巨」の闘神符を解除した瞬間、フリードと八雲の間に閃光が落ちては甲高い音が鳴り響く。

「……………」

そして、飛来してきたモノを見て八雲は漸く口を開いた。

「……………女の子?」

現れたのは、フリードの持つ聖剣と同じ長さの剣を持った、エメラルドグリーンの長髪をした少女。

左手に剣、右手にコンビニの袋、そして何より服装がロングスカートのメイド服とあった、とても違和感を放つ存在だった。

そんなメイド姿の少女は姿勢を正すと、八雲に立ち塞がる様にフリードの前に立ち、エメラルドの瞳をフリードに向けた。

「雇主こしゅの所を出てはこんな所で油を売っていたのですか?」

少女が無表情のままに呆れ気味の声色で嘆息する中、フリードはやれやれと手を振った。

「いやいや、助かつちやましたねえ。いやね? じいさんが聖剣に慣れろと命令したもんだから、こつちなりに努力してた訳なんですわ、はい」

調子の良さそうな事を言うフリードをよそに、少女は興味なさげに溜め息を吐いた。

「……とにかく一度戻ってください。雇主の方々が待ってますよ」

「あいさ了解！ そんじやまあ、こっちはこれで失敬させてもらうぜ。けど、また機会があれば正々堂々……存分に殺し合おうさ！」

そう言い残し、フリードは足早にその場から去って行った。

「待て！ フリード！」

フリードの行為に声を荒げたのは祐斗だった。どうやら既に聖剣の毒気は抜けており、立ち上がっては「騎士」のスピードで駆け出した。

「ちよ、祐斗！」

残念ながら、八雲の叫びは届かなかった。

「逃がしてしまいましたか……まあ、いいでしょう」

少女が呟き、無表情の視線を残った八雲に向けながら剣を構えた。

「雇主の方々の命令では、計画を知る者に生きていられるといろいろと面倒だから消す様にと言われていますが、マスターからは殺生を行うなど言われています。よって、アナタに恨みはありませんが、記憶を消す為に気絶させてもらいます」

刹那、少女は人間離れた速度で駆け出しては剣を振った。その必殺の一閃から逃れられる者はまずいないだろう。

「ふんっ」

パキン

だが、八雲は違った。『二十四氣の神操機』の効力で身体機能が強化されており、少女の一撃は八雲の動体視力に見切られた挙げ句、剣を捕まれては砕かれてしまった。

「!?」

少女の瞳が大きく開く。だが、それも一瞬。すぐに少女は無表情となるが、その一瞬を突かれてしまった。

「はあっ!!」

八雲から繰り出されるは両腕を突き出しての掌低。

腹部に直撃した掌低から衝撃が発せられ、少女は大きく弾き飛ばされるが、塀に激突する寸前で少女は踏ん張り、激突する事はなかった。

ビリイイイツ!!

しかし、踏ん張りで止まった瞬間、スカートと袖部分、更には掌低を喰らった部分が大きく破かれてしまい、少女の肌が露になってしまった。

これぞ真終牙黄流拳法が技の一つ。掌低による衝撃を相手の外面に与え、皮膚に衣類、装飾品だけに衝撃によるダメージを与える技……『身勝鬼』だ。

(今の感触は……)

『おい八雲。あの女、まだ立ってるぞ』

八雲が自身の腕に視線を向けている中、コゲンタの声に促されては視線を少女に向けた。

「……なるほど、そう言う理由か」

そして今の少女の姿を見て、先程の違和感の正体を知った。

露になった少女の肌。八雲は少女を相当な実力者と認めて響を手加減せずに放ったのだが、肌には傷が全く出来ていなかった。

だが、メイド服が破れた結果、少女の正体が判明した。

人間の肌にはない光沢。袖が露になって見えた関節。そして、各部分に見える模型特有の合わせ目の数々。

その結果、八雲は口に出した。

「あんだ、人間じゃないのか……」

「……………」

沈黙。

だが、暫くして少女は姿勢を正しては口を開いた。

「はい。ワタシはマスターに作られた人形の第一号です。数ある中から高性能に作られたので、マスターから『オートマータ』の形式名称を貰い受けました」

「オートマータ？ 確か、自動人形の意味だったか。それで、あんだ達はこの町で何する

つもりだ？」

「機密を言う訳にはいけません」

すると、人形少女は持っていたコンビニ袋を光の粒子と化して消すと、別の光の粒子が人形少女の右腕を包み込んだ。

その結果、光の粒子が形作り前腕部を纏い、大きな銃口を備えたロボットの腕となった。

「アナタの存在は雇主の計画に支障を起こす可能性が高いと再確認致します。完全勝利の後、アナタの記憶消去を行います」

人形少女は語りながらロボットの様なブーツも装着する中、八雲は闘神符を取り出した。

「記憶消去は勘弁してもらいたいね。それに、ここで戦ったら辺りに被害が及んでしまう。だから——」

刹那、新たに会得していた「場」の闘神符を2枚使用。その結果、八雲と人形少女は光に包まれていく中、2人を包んだ光の球体が空高く浮かんだ。

◆ 「……………」は一体？」

視界が回復した人形少女は辺りを見る。

襖障子が浮かぶ空。大岩が転がる草原。先程いた住宅街から別の場所に連れて来られたのか疑問に思う中、目の前に立つ八雲が語り出す。

「俺達が編み出した闘神符の疑似空間だ。この空間は殆どの奴が認識しないから、これで心置き無く戦えるだろ」

これが【場】の闘神符の効力。八雲が行う激しい鍛練の為、何時もの公園に損害を与えない様に編み出した闘神符である。その際、【火】や【水】等の五行の闘神符を【場】の統合符に加える事により、各属性が高まる戦闘空間も作り出せる。

そんな中、人形少女は納得した様に頷いた。

「なるほど。住民を巻き込まない様にしたのですか。お優しい方ですね。アナタとは、もつと別の出会いをしたかった」

初めて見せる人形少女の微笑。

だが、すぐに両者は対峙しては構えた。

「駒王学園2年。闘神士、吉川八雲。参る！」

「KC—AM00、マルフ。行きます」

そして、
両者は激突した。

第29話：赤い来訪者

「……………いない」

雨の降る中、くうろは傘を差しては辺りを見回る様に下校していた。

八雲が祐斗を探しに出て長い時間が過ぎた頃、さすがに遅いと心配したくうろは八雲を探しに部室から出たのだ。その際、見つけたらそのまま帰宅するとリアス達に言っており、くうろは下校しながら八雲を探している最中なのだ。

「御主人様も祐斗さんも、一体何処にいるんだろ？ この雨じゃあ半獣人化^{へんしん}しても鼻が効かないし……」

もし半獣人化すれば、くうろは確実に八雲を見つけられるだろう。毎夜八雲の匂いを嗅いでいる彼女なら、例え目を瞑っていても位置を完璧に把握し、瞬時に駆け出して見つけては嬉しそうに飛び付くからだ。

「御主人様ー！ 祐斗さーん！ 何処に……………つて、あれ？」

下校してくうろは漸く気付いた。何時もの登下校の道にも関わらず人気は無く、立ち止まっては注意深く辺りを見渡した。

（おかしい。通行人が全くいないなんておかしすぎる。人払いの気配は特に無いのにど

うして……)

瞬間、くうろはある一点に視線を向けては止まった。

その一点は上空。目を凝らして見たくうろの視界に、光の球体が映った。

「あれって、御主人様が作った疑似空間の結界！ どうしてこんな所に……」

そしてくうろが驚愕する中、それは起こった。

光の球体に幾つもの亀裂が走り、ガラスが割れる様な音と共に球体が壊れてしまったのだ。

「うおっとー！」

「っー！」

その結果、光の放出と共に八雲がくうろの目の前に着地し、八雲と戦っていた自動人形であるマルフも八雲と距離を取る様に着地したが、すぐに膝を潰してしまった。

「ご、御主人様!？」

「ん？ ああ、くうろか。どうした？」

「どうした、じゃありません！ 御主人様こそどうしたのですか！ 制服も所々破れてますし、それにあの人は誰ですか！」

傘を投げ出し、すぐに近付いたくうろが心配しながら体を触る中、八雲はくうろに促される様にマルフを見た。

現在、2人の容姿は戦闘により衣服がボロボロなのだが、八雲は袖口や服の端の一部だけであり、マルフに至ってはロボットの様な腕が壊されて火花が散りながら元の腕が露になり、足も同じ様な状況で、八雲より酷いありさまだった。

すると、マルフは立ち上がっては無表情のまま八雲を見つめた。

「まさか、ワタシがここまで追いやられるとは思っていませんでした……」

「いや、切り札を使わなかったら俺も危なかったよ。それで、まだやる気か？」

八雲の問い掛けにマルフは首を横に振る。

「例え挑んでも、次はアナタのお仲間も参戦するでしょう。さすがにワタシの魔力も切れてしまいますので、もう戦う意思はありません」

そう言いながらマルフはロボットの様な腕と足を光の粒子へと変換し、元の手足と成っては言う。

「それに、そろそろ戻らないとマスターの機嫌が悪くなります。早く戻っておやつを渡してあげないと……」

「そうか。じゃあ、これで終わろう。また邪魔するんだったら、容赦しないぞ」

「忠告ありがとうございます。次は、戦わずに会いたいですね。それでは……」

その言葉を最後に、マルフは背中と足裏に内蔵されたブースターを展開して、空を飛んで何処かに行ってしまった。

「……行つたな……くっ！」

「御主人様!？」

マルフが見えなくなつた頃、八雲は疲労の表情と共に倒れてしまい、咄嗟にくうろは優しく受け止めた。

「すまない、くうろ」

「……事情は後で聞きます。ですから、今は家に戻りましょう。リアスさん達には許可をもらつてますから……」

「くうろ。お前……」

すると、雨に濡れるくうろの頬から、別の水が流れていた。

「わたしが御主人様と一緒に祐斗さんを探していれば、御主人様がこんなに傷付く事は無かつた筈です。御主人様、本当に、ごめんなさい……」

「……」

すると、落ち込むくうろを八雲は優しく頭を撫でた。

「ごしゆ、じん、様?」

「心配掛けたな。でも、俺はここにいる。生きてる。だから泣くな。くうろやイツセー、リアス部長達が俺を信じてくれるなら、俺やシキガミ達は死なないから……」

「……………はい……」

そして暫く八雲に撫でられながら、くうろは心に暖かい感情が溢れるのだった。



同時刻。以前レイナーレが拠点として利用していた廃れた教会に、2つの人影がいた。

「……………」

1人は、装飾の凝った黒いローブを身に纏う若い男の墮天使。聖壇の前に佇み、飾られている折れた十字架を憎悪が込められた瞳で見上げていた。

名をコカビエル。聖書に記される古からの強者であり、墮天使中枢組織『神の子を見張るもの』の幹部の1人である。

「全く、フリードは何処をほつつき歩いている。聖剣の具合を見なければならぬのに……………」

もう1人は、神父の格好をした初老の男。コカビエルから離れた場所で、何やら心配そうに同じ所を行ったり来たりしていた。

名をバルパー・ガリレイ。ある事情で異端の烙印を押された元神父だ。

「ただいま戻りました、コカビエル様。フリード様は……………まだ戻られていませんか」

すると壊された入り口からマルフが現れ、振り返るコカビエルはマルフの姿を見て口を開いた。

「その姿はどうした？」

「マスターの任務の帰り道、フリード様が悪魔に捕縛されていたので救助を行いました。その際の負傷です」

「何!?! 聖剣は無事なのだろうか!?!」

「はい。フリード様は逃走しながらも聖剣を握り締めていました」

フリードよりも聖剣を優先して心配するバルパーの言葉を返しながら、マルフは自分の創造者であるマスターがいる地下へと足を運ぼうとしたが、コカビエルに「待て」と言われて足を止めてしまった。

「戦闘で俺の配下を多く葬った貴様に、それほどの手傷を追わせた奴は誰だ?」

「この町に住む男子学生です。フリード様を襲った悪魔と知り合いの様でしたので、恐らくグレモリー家の長女か、シトリー家の次女と関わりを持った者でしょう。——それでは、ワタシはマスターの所へと向かいます」

従者の様に丁寧な頭を下げ、マルフは無表情のまま祭壇下の階段へと足を運ぶのだった。

「……私と組む前に何かあったのか?」

すると、バルパーは問い掛ける。

バルパーがマルフとそのマスターに会ったのは、コカビエルが既に組んでいた時に出会った。初めは只のメイドだと思い特に興味も無かったが、コカビエルの言葉に興味を抱いた様だ。

コカビエルは視線を向けずに言った。

「あの『人形使い』の実力を探る際、俺の配下である初級・中級墮天使を向かわせたが、初級は全滅、中級も辛うじて生存者がいたが、殆どの者がこの計画に加えられない有り様だった。それも、あの人形のみでだ……」

その際、コカビエルはマルフのマスターと直接会合しては契約を持ち出した。その戦力を計画に加えれば、確実に自身の野望を達成出来ると思ったのだ。

「交渉は上手くいった。だが、俺は多くの配下を亡くし、金も全て失った……」

刹那、コカビエルは10枚の翼を広げ、その余波で十字架を粉碎した。

「だが、その犠牲も報われる。計画が始まれば、俺の心を潤せる。地獄の様な戦争を起せる。戦争を……この退屈な世界に、地獄以上に悲惨な戦争をツ!!」

狂気を宿すコカビエルの笑み。

その時、バルパーは思うのだった。

やはり、この墮天使と組んだのは正解だった、と……。

すると、コカビエルは翼を収めながら、マルフの報告に上がった者に興味を持った。「しかし、逆に知りたいものだ。あの人形を退けたその人間とやらに……」
口元を歪めて薄い笑みを浮かべながら……。



その日の夜。八雲は自室にいた。

あの後、八雲とくうろは帰宅しては何時もの様に祖父母と過ごし、就寝の時にくうろは提案した。

「御主人様、今日はゆっくり休める様に自室で寝ますね。だから……体調がよくなったら、また一緒に寝てください」

そう言うてくうろは自室に戻ったが、その際に哀愁漂う表情を、八雲は見てしまった。（明日辺りでも、元氣付けてやるか……）

そして現在、八雲はベッドに寝転びながら放課後の出来事を思い返していた。

「オートマータ、か……」

『手強かったよな。オレの攻撃も簡単に弾きやがったし……』

「コゲンタ……」

急の登場に八雲は眩く中、コゲンタは語り続ける。

『オレだけじゃねえ。フサノシンのスピードも、フジの剣技も、タンカムイの妙技も、ゴロウザの怪力も、八雲を入れた同時攻撃すら防ぎやがったのは目を見開いたぜ』

『真終牙黄流の技もことごとく打ち返されたしな。『卯通鬼』と『歩観通鬼』の一撃離脱戦法で幾らか稼げたが、それも対応されて苦戦したよ』

『速度重視の足運びに先手必勝を主眼にした一撃のコンボでも、あの人形には対して脅威じゃなかったんだよな。だから……』

「ああ。だから切り札を切ったんだ」

『それほどの強敵だしな。——でもよ八雲、切り時は分かるが多用は控えなよ。切り札でも未完成なんだからよ』

心配する様なコゲンタの声に八雲は一言分かったと声を掛けようとするが、それは出来なかった。

『おーい、ヤクモー!』

何故なら、青い龍のシキガミが現れて声を掛けられなかったのだ。

現れたのは、龍に似た獣人的な外見を持ったシキガミ。同じ種族のブリユネと違い、少年が龍のマスクを被った様にも見える。

名前をキバチヨ。『青龍のキバチヨ』である。

「キバチヨ。そんなに慌ててどうした？」

すると、キバチヨは八雲の問いに答える。

『詳しい事は神器コツチで。お客さんだよ』

「何だ客か………つて、え？」

キバチヨの言葉に、八雲は首を傾げるしかなかった……。



「来たか、八雲殿」

『二十四気の神操機』の精神空間。

八雲はキバチヨに誘われは精神空間の中央に現れると、そこにはブリユネの姿もあったが、八雲の視界にソレが入った。

『………えーつと、ソレって何だ？』

普段なら野点が行われているその場所に、赤い光がフワリと浮かんでいたのだ。

「キバチヨ。オレが八雲と話してた間、何があつたんだ？」

「ぶらぶら歩いてたら、シキガミじゃない何かの力を感じてね。向かったらこの赤い光が現れていたんだよ」

「我輩はこの場所にいたので、最初に発見したのであります。八雲殿に知らせる様に、我輩が指示を出したのだ」

『なるほど。——それにしても、これがシキガミじゃないとすると一体……』

八雲は赤い光をジツと見つめた。

『久し振り……と言えばいいか、闘神士』

そして、赤い光から声が発せられた。

「その声は……!?!」

『知ってるのか、コゲンタ!』

八雲の言葉に頷くコゲンタ。そして、赤い光が声を発した。

『おいおい、一度だけ俺の所に入って来た奴が忘れたのか？ まあいい。改めて名乗らせて——』

「こやつはドライグ。『赤い龍の帝王』と恐れられた、二天龍の一角であります」

『……おい』

だが、ブリユネに名乗りを中断させられた赤い光……ドライグから不満の声が聞こえ

た。

『ドライブグって、イツセーの神器に封じられたドラゴンじゃないか！ どうしてこんな所に現れたんだ？』

その疑問はシキガミ達にとって最もだった。

一部の強力な神器には、封じられた魂が宿っている。『赤龍帝の籠手』もその一つであり、例外とすると複数のシキガミを宿らせた『二十四気の神操機』である。

何故、他の神器の魂が別の神器の精神空間へと現れたのか？

そんな疑問を浮かぶ中、ドライブグは言う。

『俺にも分からん。相棒と話し終えてから懐かしい力を感じてな。そしたら何故か此処に来ていた』

『懐かしいって……ドライブグはこの景色を知ってるのか？』

『ああ。シキガミ達が暮らしていた『シキガミ界』と同じだ』

『え？ ドライブグ。お前はオレ達の居場所に来た事があるのか？』

コゲンタの問いに答えずドライブグは浮かび上がる。まるで辺りを全て見渡せる様に。

『分からん。だが、何だろうな。貴様の持つ神器から発せられる僅かな魔力が、俺を導いたんだろう。そしてこの四季折々の風景……断片的にだが、懐かしさを感じるんだ』

『懐かしさ、ねえ……』

「まあ、確かに似てるけどな……」

腕を組む八雲と顎に手を当てるコゲンタ。

疑問と納得。互いが違う反応の中、ドライグは八雲の前に降りては語る。

『ところで鬪神士。お前が現れるまで、この神器に刻まれた記憶を少しばかり見させてもらったが……なかなか面白い生活だな』

『人の個人情報を手に見るなよ……』

『ククク、しかし相棒と同じ色を知らないか。今日、相棒もグレモリーとその眷属の元シスターの事で悩んでいたが、そこはお前さんも似た様なものだな』

『童貞で悪いかよ……って、ドライグ』

微笑するドライグだが、その赤い光が次第に薄れていくのを八雲は気付いた。

『お前、消えるのか？』

『どうやら、この場所にいるのも時間がない様だな。まあ、ドラゴンの力が高まれば来れる事が分かっただけでもよしとしよう』

そして完全に消える前、最後にドライグは八雲に言った。

『また機会があれば会おう、鬪神士。俺と出会えたのなら、『パニシング・ドライグ白い龍』の奴とも出会うと思うぜ……』

そう言い残し、ドライグは精神空間から完全に消えてしまった。

そんな中、八雲はキバチヨに語り掛ける。

『キバチヨ。最後にドライグが言ったのって……』

「二天龍の最後の一匹さ。——しかし赤龍帝か。本物を見たのは久し振りだね」

「大戦の最中で見た時以来だしな。その二匹が大喧嘩した際、三種族も鬱陶しそうにしてたな」

キバチヨの言葉にコゲンタも懐かしむ様に、腕を組んでは頷く中、ブリユネだけはドライグの言葉を思い出していた。

（ドライグ殿はこの光景を見て懐かしんだ。それはシキガミ界に来たか見た事があると同じ意味。だが、シキガミ界に来るには統治者の許可、又はシキガミ界出身の者でなければ来れない。……まさか、ドライグ殿は……）

しかし、その可能性をブリユネは否定した。

（……あり得んな。二天龍がシキガミ界出身であれば、『ツイガ様』も知っている筈だし……）

そう思い、ブリユネは襖障子の空を見上げるのだった。



「……………はあ」

次の日の放課後。神器を装着している八雲はソファに座り、誰もいない部室の天井を見上げては溜め息を吐いていた。

ドライグとの話を終えてすぐに就寝した八雲は、何時もの様に起きては鍛練し、その後くうろと共に登校した。

鍛練の際、一誠達にドライグの事で話したところ驚愕していたが、何故その様な事が起きたのか分からず、結局その話題に進展は無かった。

しかし、今の八雲はドライグと『二十四氣の神操機』の関係で気掛かりになっていなかった。

気掛かりにしているのは、祐斗の事だ。

あの後、祐斗がフリードを追い掛けてどうなったのか分からない。だが、今朝見掛けた祐斗に外傷は無く無事だとホッとしたが、代わりに誰が見ても分かる程の憎悪と怒りの表情を露にし、その日祐斗が笑顔を見せる事はなかった。

因みに、昨日の事を八雲はリアスに伝えていない。祐斗を心配しているリアスに新たな心配事を与えれば、心も参ってしまおうと思つての事だ。

それが本当にリアスの為なのか、自信を持っていないが……。

『あまり考え過ぎると、様々な事に支障をきたしますよ』

進展しないままの状況に八雲が頭を悩ませている中、クラダユウが心配そうに話し掛けた。

「心配掛けたな」

『いえ。八雲さんが友達を大事にするのは、よく知ってますから……。しかし考える事も大事ですが、時には息抜きをして気分をリフレッシュするのも大事ですよ』

「ああ。ヒヨシノが戻って来たら何かするか。くうろは小猫と外で模擬戦中だし……」
顎に手を当てては思考を始める八雲。すると、部室の扉が開いては振り向いた。

「ただいまー、やくもー」

「お帰り、ヒヨシノ」

現れたのはヒヨシノだった。

部室に入るなり、ヒヨシノは八雲に近付いては膝へと抱き付いてきた。

「イツセーの儀式はどうだった？」

「うん！ あけのおねーちゃんがしてくれたから、うまくいったよ！ あとは、ぼくのおくすりをのんだあとにりあすおねーちゃんがきて、いつしよにどこかいっちゃった！」

「そっか。ご苦労様」

「にへへー！」

犒いの言葉と共に八雲が頭を撫でると、ヒヨシノも嬉しそうに笑顔を向けた。

因みに八雲の発した儀式の内容とは、一誠の左腕に溜まったドラゴンの力を散らすというもの。

数日前に行われたレーティングゲーム。一誠がライザーとの一戦を交わした時、一誠は不完全とはいえ『禁手』を得たが、その代償として左腕を一誠の神器に宿るドライトに支払った。

つまり、今の一誠の左腕はドラゴンの腕と言っても過言ではない。

それ故、定期的に儀式を行っては一誠のドラゴンの腕を一時的に元の状態を保っているのだ。

そして、その儀式を行えるのは現在2人。ヒヨシノが言った朱乃と、上級悪魔であるリアス。尚、ヒヨシノは儀式後に一誠の魔力を安定させる薬を飲ませるだけであり、直接儀式に関わる事はないのだ。

ヒヨシノはシキガミの中では最年少であり、癒火一族が司る力はまだ未熟なもの。ドラゴンの力を散らす儀式も残りの癒火一族なら可能だが、ヒヨシノはまだ儀式を行う事が出来ず、今はそれを勉強して努力するのだった。

「それじゃあ、ぼくはかえってあたらしいくすりのちようごうをためすね！」

「分かった。頑張れよ」

頷くと同時に襖障子が現れ、ヒヨシノが戻るのを確認した八雲は神器の装着を解除し

た。

「……しかし、儀式はどうやって行うのだろうか？」

その眩き通り、儀式の具体的な内容を八雲は知らない。ドラゴンの力を散らすと聞かされただけであり、どの様に力を散らすのか見た事がないのだ。

そんな事を思っていたせいも、はたまた悩み事が多いせいも、注意力は八雲自身も知らない内に著しく落ちていた。

その結果、後ろにある部室の扉が開いた事に遅れてしまった。

「あらあら、何か考え事ですか？」

部室に入ってきたのは、朱乃だった。

「ん？ ああ、朱乃先輩。おつ——」

後ろを振り向き、朱乃の姿を見た八雲は言葉が止まってしまった。

何故なら、今の朱乃は制服姿ではなく白装束の着物で身を包んでおり、何時もはポニーテールで括ってある艶のある黒髪を下していた。

「オ、オツカーレ……」

そこまでならまだ大丈夫なのだが、実際はそうではなかった。

今の朱乃の肢体を包み込んでいる白装束の布が濡れており、肌が透けて見えていたのだ。おまけに水気で長い黒髪が張り付き、官能的な雰囲気醸し出していた。

そんな朱乃の姿を八雲は無意識の内に凝視してしまい、やっとの事で八雲は犒いの言葉を出すのだった。

「うふふ。そんなに見つめられると、何だか恥ずかしいですわ」

「すすす、すみません!!」

八雲の視線に気付いた朱乃は、わざとらしく豊満な胸を強調する様に手を回してその身を振らせる中、我に返った八雲はすぐに視線を逸らした。

しかし、朱乃は八雲の隣に座ってしまい、結局八雲は目のやり場に困るのだった。

さすがに沈黙にしたくなかったのか、八雲は戸惑いがちに訊いた。

「……………えっと、朱乃先輩。その格好って……………」

「これですか？ 実は先程、ヒヨシノちゃんと一緒にイツセーくんの儀式を行っていたものですかから」

「ま、まさか、儀式の時は何時も……………」

「ええ。水を浴びて精神を統一してから行いますの」

「そ、そうですか……………」

男の性か、八雲は極僅かに一誠の事を羨ましいと思ってしまったと同時に、そんな考えが思い浮かんだ事に不謹慎と思ってしまった。

そんな考えに染まる前に、八雲は改めて訊いてみた。

「と、ところで、儀式つてどんな風にしてるんですか？ ドラゴンの力を散らすと聞きましたが、どうやって散らすのか知らないんで……」

「そうなのですか？ では、教えて差し上げますわ。こんな風に……」
すると、朱乃はおもむろに八雲の手を取った。

「え？」

ちゅぷ。

「うえっ!？」

動揺していたせいか、気付いた時には卑猥な水音を立てて、朱乃が八雲の指を口に含んだ。

「んっ……ちゅ……」

何とも言えない感覚が指から伝わってくる。

「ほ、ほわああああああああ朱乃ののせせんばばい!？」

顔を真っ赤にする八雲は今にも爆発しそうに叫んでしまうが、依然としてその指は朱乃の口に含まれたままだ。

「ちゅび、ちゅぱ……ちゅっ……んん、ちゅぶ、ちゅる……んふっ……」

八雲の反応を楽しむかのように、朱乃は卑猥な音を立てては吸引し、指の腹をチロチロと舌先で舐めてきている。

その瞳に宿るSの光と悪戯っぽい笑みを見れば、その行為はわざとだと分かるだろうが、今の八雲にはそんな余裕がなかった。

「あふっ」

やがて、唇から離れた指には朱乃の唾液の糸がツーツと垂れ、その際に八雲は変な声を出してしまった。

「あらあら。そんなウブな反応を見せられると、こちらとしてもサービスしたくなってしまうすわ」

「はあ……はあ……サ、サービス？」

「ええ。私も後輩をかわいがつてもバチは当たらないと思いますもの」

そう言うと、朱乃は妖艶な微笑を浮かべては八雲に体を近付けてきた。

「ちよ、ちよつと……つて、おわっ!？」

反射的に下がろうとした八雲だが、ソファーから手が滑り落ちては体ごと床に落ちてしまった。

「うふふ………えい♪」

むにゆ。

「!？」

突然、床を背にする八雲の体に冷たい感覚が走り、そしてすぐに温かい感覚と同時に

柔らかな感触を覚えた。

「あ、朱乃しえんぷあい!？」

構図としては今、八雲は覆い被される形で朱乃に抱き付かれていた。その為、視線を落とすと八雲の胸板に押し付けられている朱乃の柔らかな胸で出来た谷間が、これでもかというぐらい強調されていた。

(あ、ヤバイ……立つ、たっちやう、タッチまう)

これも男の性か。八雲は朱乃を離せず、かつ視線を逸らせず、己の欲望が膨張しそうになっていた。

そんな中、八雲の耳元で朱乃が艶っぽい声で呟いた。

「私、これでも八雲くんの事、気に入ってますわ」

「お、俺の事、ですか?」

欲望と戦いながら疑問を返す八雲に、朱乃の吐息が掛かる。

「ええ、最初はかわいい後輩でした。でも、最近は違うの。特にこの間のフェニックスとの一戦。相手の『女王』から私を守ってくれた姿もそうですし、何度も諦めずに拳を振るい、ついには不死身と呼ばれるフェニックスを打ち倒した時の姿も……。——あんな素敵な戦いを演じた殿方を見たら、私も感じてしますわ」

「か、感じる……?」

八雲を直視して「うふふ」と笑う朱乃。

「時折、あなたの事を考えると胸の辺りが熱くなってきて、どうしようもない時があります。それにこうして八雲くんを楽しませていると、いじめっ子としての本能が疼きますわ。……これって、恋かしら？」

「い、いや、俺に言われても……。つてか、俺、いじめられてるんですか!？」

残念ながら、八雲は朱乃の疑問に対する回答を見つける事が出来ず、いじめられている事に驚愕してしまった。

「でも、あなたに手を出すとくうろちゃんに怒りそう。あなたの事をとても慕っていますもの……。うふふ、罪な男の子ですわね、八雲くんは」

と、朱乃は八雲の首に手を回し、更に距離を詰めてきた。しかも白装束をわざとはだけさせ、大胆に胸を見せていた。

そんな事態に八雲は声を上げる間もなく、互いの鼻先が触れ合った時、朱乃の視線と合った。

吸い込まれそうな程に澄んだ瞳に狼狽する八雲じぶんが映り込み、あと少し力を加えるだけでキスしてしまう程の距離に迫り、朱乃はゆっくりと艶のある唇を動かした。

「ねえ、八雲くん」

「あ、はいっ……」

「浮気、私としてみる?」

「はい……………つて、ふえ?」

朱乃の言葉に八雲は何度目かの思考停止をした。

え? 何? 浮気つてどゆこと?

様々な疑問が浮かぶ中、朱乃が口を開く。

「これから起こる事を内緒にしてあげますわ。部長にも、イツセーくんにも、そしてくろちゃんにも……………。燃えるでしょ? 二人だけの秘密つて」

(こ、これはあの風呂場での出来事に近い! たた、助けてコゲンタ! クラダユウ! ホリン! フジ!)

心でシキガミ達を呼び掛ける八雲。だが何故か、八雲の言葉に応答せず、どのシキガミも霊体として現れなかった。

(……………え? どうして誰も出ないの?)

——す、すまねえ、八雲。

(コゲンタ! 何だか弱々しいぞ)

——ついさつき、朱乃のねーちゃんが指吸つてただろ。無意識だったんだろ。符力が吸われてよ……………霊体になれず、八雲にしか声が届かないんだよ……………すまん。

(ま、マジか……………)

偶然起こった事態に困惑しながらも、八雲はこの状況の打開案を考えようとした。
ちゅつ。

「ふあっ!?!」

だが頬に何か触れた瞬間、思考する事を止めては視線を向けると、朱乃の唇が八雲の頬に触れており、八雲の唇に2〜3センチは離れていた。

唇を離れた朱乃が再度口を開く。

「私も一度体験してみたいの。年下の男の子に肉欲のまま貪られるのって。意外とMの気もあるのよ、私。それにそろそろ一度ぐらい男性のを受け入れてみてもいいと思いますし」

一誠が聞いたら必殺であろう単語が発せられる中、八雲は気付いた。

「そろそろって? え? も、もしかして朱乃先輩……」

「ええ、私、処女ですわよ。うふふ、この事は殿方の方が経験豊富と聞きましたし、リードしてくれると嬉しいですわ」

「そんな噂はでたらめです! お、俺だって……む、無経験……ですし……」

朱乃の聞いた噂を否定しつつ、八雲は恥ずかしい告白としては次第に声音は小さくなっていた。

「あらあら、意外ですわね。毎日くうろちゃんを撫でてますから、てつきり凄いでござ美を

毎晩してあげてると思っていたのですけれど……」

「いや、寧ろ欲望を抑えるのに精一杯と言うか、手を出さない様にしてると言うか……大変でした。今は慣れましたが……」

「なるほど……。だから、ここが大きかったんですね」

納得した瞬間、朱乃の視線は既に八雲の下半身を見ていた。

「あああああバレたああああ!!」

恥ずかしさに耐え兼ね叫ぶ中、朱乃は右手を八雲の体をなぞる様に撫で、ある部分で動きを止めた。

「ひうつ!? そ、そこは……」

「うふふ……だんだん硬くなってますね。——かぶ」

「耳ツ!?!」

外をチロチロ、中をクチュクチュ。

八雲の耳を舐める朱乃の目にSの光と燃え上がる劣情を宿しては楽しみ、遂にズボンのベルトをゆつくりと解いていこうとした……その時だった。

「とうわあああああつ!!」

ガシヤアアアアアアン!!!

「うおっ!?!」

「…………あら？」

窓が勢いよく割れては誰かが飛び込んで部屋に入り、八雲が驚くのに対して朱乃はこの事が事前に分かった様な反応をし、2人は侵入してきた人物に視線を移した。

「ふ…………ふ……………」

ゆつくり立ち上がるのは、半獣人化状態のくろろ。

旧校舎の外で小猫と模擬戦中に聞こえた叫びと気配を感じたくろろは、旧校舎の壁に手を掛けて窓から部屋を覗き込んで朱乃に押し倒された八雲を見た。

そこからの会話も聞き入ってしまい、不快さと羨ましが爆発してからのくろろの行動は素早く、旧校舎の壁を蹴っては後ろの木に足を触れた瞬間、弾丸の様に飛び出しては窓に突っ込んだのだ。

顔を真っ赤にしては尻尾の毛を逆立つくろろは、ジト目で視線を2人に向けた。

「一体、これはどういう事ですか？」

明らかに激怒しているくろろに対し、朱乃は淡々と答える。

「うふふ。八雲くんドラゴンの力を散らす儀式を教えていただけですわ」

(絶対違うでしょ!?)

心で突っ込む八雲。もし口に出していたら、何とも言えないプレッシャーに耐えられないだろう。

「嘘ですっ!! 儀式は私も見た事がありますもん! どう見ても過激なスキンシップじゃないですかあ!」

「あらあら、本番をするつもりはありませんわよ?」

「限度を弁えてください! と言うか、本番って何ですか!」

「限度って……くうろちゃんも最初の時はペロペロと舐めてたではありませんか」

「うっ……と、とにかく!」

刹那、くうろは朱乃の反対方向へと陣取っては抱き付き、八雲は2人に挟まれてしまった。

「ひえ!」

そして、そのまま反対側の耳をくうろは舐めて言う。

「ご、御主人様を取らないでください!」

嫉妬を含んだその言葉に感じたのか、きよとんとした表情の朱乃は微笑んだ。

「嫉妬だなんてかわいいですわ。じゃあ、時々でいいので、くうろちゃんが毎晩八雲くんにしてもらっている事を、私にも体験させてください。そうすれば、本番の事を教えてあげますから……」

「だ、だから朱、乃……せん、ぱい……」

さすがに限度が来てしまったようだ。

妖艶な姿と吸い付きに興奮し、押し倒されて過剰なスキンシップに加速し、最後に2人の柔らかい体に挟まれてしまった結果……。

「ご、御主人様!?!」

八雲の鼻から血が吹き出す事態へと発展してしまった。

「……何これ」

そんな光景を、後から入ってきた小猫がそう呟いた。

第30話：教会からの使者

少々18禁に発展しかねないハプニングから数時間後、八雲とくうろは家路についていた。

何時もなら、学園からだいたい離れた所でくうろが八雲の腕に抱き付いて談笑しながら帰るのだが、朱乃との一件が尾を引いているのか、とぼとぼと八雲の少し後ろを歩いている。

「……………」

くうろの表情から寂しさと切なさが感じられる。まるで、主人に怒られた犬の様な光景だ。

「……………」

さすがに気まずい空気に耐え兼ねず、八雲は立ち止まってはくうろに言う。

「…………くうろ。もう怒ってないから元氣出せ」

「…………ごめんなさい」

「…………はあ」

これで何度目だろう……と、八雲はくうろの謝罪の言葉に溜め息をしては振り向き、

鼻に詰めたティッシュを取った。

「自身が誓いを立てて失敗する事なんて何度もある。もし次も同じ事が起きれば、前回の失敗を起こさない様に頑張れ」

「……分かりました。でも、自信が無いんです。朱乃さんが御主人様を取るんじゃないかと思うと、胸の辺りが苦しくて……」

人はそれを嫉妬と呼ぶ。

そんなくうろの思いを感じ、八雲は男としての喜びを内心で喜ぶと、くうろの頭を優しく撫でた。

「……まあ、頑張れ」

「……はい！」

機嫌を取り戻したくうろは八雲の腕に抱き付くと、2人は再び進み出すが、家に近付いた所でくうろが急に立ち止まった。

「どうした？」

「……匂います」

「え？ ああ、止まっただけだからまだ血が乾いて——」

「違います。これは……」

八雲の勘違いを冷静にツツコミ、くうろは鼻をひくひくさせては言った。

「光の匂いです。それも、闇を滅ぼす程に強力な匂いです」

「何？」

くうろの言葉に八雲は辺りを見渡すが、それらしいモノは見えず、思考を始めた。

（恐らく、光の匂いは教会に関係する者。昨日の件を考えれば、あのイカれ神父の可能性が高いな。——くそっ！ オニシバなら鼻で詳しく探れるが、今は皆を休ませないと……！）

もしもシキガミが健全なら、くうろの言う光の匂いを感じていたであろう。だが、未だに朱乃に吸われた力が回復しておらず、現在シキガミ達は神器に深く潜っては眠っているのだ。

それから進む毎に光の匂いが強くなる中、2人はつる屋の近くまで帰って来た。

そして、くうろは口を開く。

「……匂う！ お店の中から、光の匂いがプンプンします！」

「っ！」

緊張が走り、八雲は走り出す気持ちをギリギリ抑えて入り口付近に身を隠した。

もしも祖父母に何かあれば、八雲は飛び出してその者に制裁を加えるだろう。だがくうろは光の匂いだけ感じており、祖父母に関しては何も変化が無いと言った。

取り敢えず、八雲は祖父母の安全を最優先に考えながら、中の状況によって行動しよ

うとした。

「……………あれ？」

しかし、つる屋の入り口からゆつくりと中を覗き込んだ八雲は間拔けな言葉を発した。

「はい、これ。昔好きやったでしょ？」

何故なら、店の中でおつるが2人の女性客に和菓子を振る舞っていたからだ。

「……………ん？」

だが、その女性客が一般ではないのを八雲は理解した。

服装は白いローブを着込み、時折ローブの下から見えるボンテージの様な黒い戦闘服。

きわめつけに十字架を胸に下げている事もあり、彼女達がキリスト教会の関係者だと分かった。

「……………っ！ おいしい！ 味も昔のままで、懐かしいわ！」

長い栗毛をツインテールにしている女性が懐かしむ様に和菓子を堪能する中、おつるも懐かしむ様に微笑む。

「あの頃はよく一人で店に来とつたしねえ。おじいさんに可愛がられとつて、よく新作の和菓子も振る舞とつたし……………」

「そういえば、おつるさん。赤蘭さんはいないんですか？」

「おじいさんは、町内会の人らと将棋しに出掛けたばかりなんよ。戻って来るんが知つとつたら……あ……あ……あ……」

(あ、バレた)

おつるの勘の良さに察した八雲はくうろと共に出てきた。無論、今帰って来たかのように、女性客にも怪しまれない様に振る舞いながら。

「ただいまー」

「ただいまです、おつるさん」

「八雲ちゃん、くうろちゃん、おかえり」

「……えーつと、おつるさん。どちら様ですか？」

ツインテールの女性の質問におつるは答える。

「ああ、イリナちゃんは初めてやね。孫の八雲ちゃんと、家にホームステイしとるくうろちゃん。仲良くしてな」

おつるの言葉に八雲は女性客に頭を下げる中、ツインテールの女性も頭を下げては自己紹介した。

「そうなんだ……。——あ、はじめまして。紫藤イリナです。小さい頃、近所に住んでたんだよ」

「……………」

そんな中、八雲はジツと見つめられている視線に目を向く。

緑色のメツシユを髪に入れていいる外国の女性。黙々と和菓子を食べるにも関わらず、その女性には隙が少なく、なかなかの実力者だと八雲は感じた。

だが八雲は、それよりも異様な存在を感じていた。

(あれって……)

その女性の傍らに置かれた、布に巻かれた長い物体。何故巻かれているのか今は分からないが、微かに感じるソレは、知らずに汗を流させる程の物だと理解した。

「……………私の物に何か?」

メツシユの女性が和菓子を食べ終え、声を掛ける。

だが、もし八雲が会話を始めてしまえば、何時の間に外国人と話せるのかとおつるが驚くだろう。

「え、えーつと……………紫藤さん。彼女は今何と?」

故に、この場を誤魔化す為に八雲は英語を理解出来ない「フリ」をした。

「ああ、気にしないで。見つめられて気になっただけだから」

イリナは手を振って愛想笑いをすると、メツシユの女性は時計を見ては言葉を発した。

「イリナ、そろそろ戻ろう。時間を掛けすぎている」

「え？ うわつ、もうこんな時間!？」

「おや、もう帰るんかい?」

メツシユの女性の言葉にイリナは驚く。

おつるもお茶を出しては言葉を投げ掛ける中、イリナはお茶を一気に飲み干しては言った。

「……つぶはー! はい。任………じゃなかった。ホテルにチェックインして報告しないと! それじゃあ、おつるさん。また機会があれば来ますね」

「ええ、また来てな。ほれ、これも持っていく。ホテルに着いたら、二人でお食べ」

「ありがとう、おつるさん! ああ、主よ。心優しきお方に御加護を」

イリナは胸で十字を切ると、お土産の和菓子詰め合わせを受け取ってはメツシユの女性と共に店を出た。

「どう、来てよかったでしょ?」

「ああ。ジャポネーゼ・スウィーツ……とても上品な味わいだった……」

「任務が終わったら、また行きましょ♪」

会話をしながらホテルの道のりを歩く2人。

そんな2人の背中を見て、八雲は疑問を口に出した。

「……任務？」

翌朝、その疑問の答えが分かるのだが、今は知らない……。

◆ 「教会の関係者が潜り込んでいるらしいの」

昨日のつる屋の件が終わった翌朝、八雲は一誠達と何時もの様に公園で鍛練する中、それは唐突にリアスから聞かされた。

昨日、リアスは一誠とアジアと共に家へ帰って来ると、僅かだが教会の関係者が訪れた痕跡を感じたのだ。

その際、悪寒を感じた一誠は血相を変えて家に入るが何も事態は起こっておらず、一誠の母親がリビングでくつろいでいただけだった。

だが、一誠達が帰って来る前、一誠の母親は教会の関係者と談笑していたらしく、その証拠として昔の写真を一誠達に見せたのだ。

以前見た聖剣が写った写真であり、男の子だと思っていた女の子の写真を……。

「男の子っぽかったけど、今じゃ立派な女の子になってビックリした……って、母さんが言ってたんだぜ？」

「まあ、確かに写真だけじゃあ男の子だよな。それで、名前は知ってるのか？」

「二人の内、一人は外国人だそうだな。それで、写真の写ってる子が紫藤イリナって言うたぜ」

「紫藤イリナ？　すると、昨日の二人組がそうか……」

「まさか、接触したの？」

リアスの言葉に八雲は頷いた。

「お客として来てたので挨拶だけですが。まあ、怪しまれずに済んだのはよかったです」
「そうなの？　でも教会の者なら僅かな魔力でも察知する筈よ。シキガミを宿している体なら尚更。それなのに無事なのは不思議ね」

そんなリアスの疑問に答えたのは、コゲンタだった。

『オレ達が寝てたから気配を探る事が出来なかつたんだろうよ。まあ、不幸中の幸いだぜ』

「寝てたって、何かあったのか？」

「あー……まあ、色々とな……」

一誠の質問に八雲は言葉を濁した。もしも昨日起こった事を話せば、羨ましさと嫉妬を込めた涙を流しながら迫るだろうと感じ取り、話す事を拒んだのだ。

その様に思う中、リアスが口を開いて話を進める。

「それで、昼間に彼女達と接触したソーナの話では、彼女達はこの町を縄張りしている悪魔リアス・グレモリーと交渉をしたいそうなのよ」

その言葉に八雲だけが驚く。敵対の関係であるにもかかわらず、キリスト教から交渉するなど余程の事でないと起こらないだろう。

「……何か、嫌な予感がするわね。信徒にとつて邪悪な存在である悪魔に依頼をする位なのだから、相当切羽詰まっています、かなりの厄介事なのは確実ね。話ではこの町を訪れて来た神父が次々と惨殺されているみたいだわ」

「……………」

リアスが難しい表情をする中、八雲も思考する。

（神父の惨殺に関しては違うだろうな。おばあちゃんからは不審者も何も聞かされてなかったし……）

ふと、八雲はある事を思い出す。

（そういえば、あの布に巻かれた物から感じた力、よくよく考えれば何処かで感じたな。つい最近……）

思い出そうとするが今は鍛練の最中だ。取り敢えずこの事は置いておき、八雲達は鍛練を再開するのだった。

教会の関係者との交渉が、着々と近付いていく。

◆ 「やっと終わった……」

その日の放課後、日直を終えた八雲とくうろは部室へと向かい、部室の扉前にいた。
「くうろ。中の様子は分かるか？」

八雲の言葉にくうろは目を閉じて意識を集中すると、暫くして口を開いた。

「……皆さん以外に、昨日と同じ気配が二つ。それとギスギスと一部の空気……という
か、雰囲気が何というか……」

「昨日と同じ……とすると、もう来てるのか」

『一部の空気ってどういう意味だ？』

「そこまでは……」

コゲンタの言葉にくうろは困惑する中、八雲は扉に手を伸ばす。

「……まあ、取り敢えず入ろう。それと、コゲンタ達は昨日と同じ気配を消しといてくれ」

『分かった』

了承したコゲンタを確認すると、八雲は扉を開けた。

「すいません。遅くなりまし、た……」

入った瞬間、八雲は肌に険悪な雰囲気を感じてしまったが、視線を交互に移した。

一方は、ソファーに座るリアスと朱乃と向かい合う様に、昨日出会ったイリナとゼノヴィアが座っていた。それぞれ一瞬驚いたが、イリナは邪氣の無い笑顔を向けて手を振り、ゼノヴィアは注視する様な視線をしてはリアスに視線を向けた。

もう一方は、部室の片隅に集まっている一誠達4人。皆が緊張した面持ちをしている中、祐斗は怨恨の眼差しで睨みを利かせていた。

ひとまず、八雲とくうろはリアス達の話し合いを邪魔しない様に一誠達の場所へと近づき、確認する様に一誠に訊ねた。

「話し合いはどの辺りまで進んでるんだ？」

「少し前に来たばかりだぜ。話そうとした途端、吉川が来たから全然進んでない」

「そうか」

一誠の答えに八雲は現役信徒達に視線を向ける中、リアスと朱乃にイリナは話し掛ける。

「リアス・グレモリー。あの男の子、一般人よね？ どうしてこんな所に来てるのかしら？」

「八雲は私達の協力者よ。特にはぐれ悪魔の討伐時は、助けられてるわ」

「無理矢理に入れた……訳じゃないね」

「無理矢理ではありませんわ。八雲くんは八雲くんの意思で、私達を助けてくれますの」
「……世間話はそこまでしよう。今はこちらの話しだ」

そんな中、ゼノヴィアはイリナ達の会話を中断させては話を切り出した。

「先日、カトリック教会本部ヴァチカン及び、プロテスタント側、正教会側に保管、管理されていた聖剣エクスカリバーが奪われた」

その言葉にグレモリー眷属は目を見開く中、八雲は先日戦ったフリードを思い出し、手にしていた獲物が聖剣だと予想がついた。

だが同時に、聖剣がカトリック、プロテスタント、正教会の“3ヶ所”から盗まれたという内容に、八雲と一誠は疑問を持った。

「聖剣エクスカリバーそのものは現存していないの」

そんな心の中の疑問を見透かしたようにリアスが答え、その言葉に呆気にとられた。

「ごめんなさいね。彼らの中には悪魔に成りたての子がいるから、エクスカリバーの説明込みで話を進めてもらっても構わないかしら？」

リアスの申し出にイリナが頷いた。

「イツセーくん。エクスカリバーは大昔の戦争で折れたの」

「今はこのような姿さ」

一誠の方に顔を向けて言うイリナの言葉に続く形でゼノヴィアが傍らに置いていた長い得物を手に取った。それには呪術らしき文字が記された布が何重にも巻きつけられているのだが、彼女はそれをスルスルと解きはじめた。

そして、今まで隠されていたそれが姿を現した。

「これが、エクスカリバーだ」

美しい刀剣。その姿を見た瞬間、例えようのない存在感に八雲は目を奪われては、フリードの持つ聖剣と似た力を感じ取った。

一方、一誠達も似た表情を浮かべていたが、それは八雲が抱くものではなく、心の底から本能で恐怖するものだった。

「大昔の戦争で四散したエクスカリバーだが、折れた刃の破片を拾い集め、錬金術で新たに7本の聖剣を作り出したのさ。これがそのひとつ、『破エクスカリバー・デストラクション壊の聖剣』。七つに分かれた聖剣のひとつだよ。カトリックが管理している」

説明を終えたゼノヴィアは封印する様に再び布で手に持つ聖剣を覆い始めた。

そして、彼女に続いてイリナが懐から取り出したのは長い紐の様な物だった。すると、その紐は意志を持ったかの様にうねうねと動き始め、やがて1本の日本刀へと形を変えた。

「私のは『擬態エクスカリバー・ミミックの聖剣』。こんな風にカタチを自由自在に出来るから、持ち運び

にすつごく便利なんだから。この様にエクスカリバーはそれぞれ特殊な力を有しているの。こちらはプロテスタントが管理しているわ」

「イリナ……悪魔にわざわざエクスカリバーの能力を喋る必要もないだろう?」

「ゼノヴィア。いくら悪魔だからと言つても信頼関係を築かなければ、この場ではしようがないでしょう? それに私の聖剣は能力を知られたからといって、悪魔の皆さんに後れを取るなんて事ないわ」

自慢げに語るイリナにゼノヴィアが溜息交じりに口を挟むが、余裕綽々の様子でイリナは屈託のない笑みで返していた。

「……………」

そんな彼女達にかつてない程のプレッシャーを放つ者がいた。

祐斗だ。

敵意、怨念、憎悪……………様々な黒い感情が入り乱れる形相で、彼女達と聖剣を睨んでいた。

種類は違えど、つい先日に取り逃がしたばかりのそれと同類である聖剣が、今こうして目の前に現れたのだ。感情を表に出すなという方が無茶な相談なのかもしれない……………

(最悪、祐斗を取り押さえられる様にはしないと……………したくはないけど……………)

最悪を想定して八雲は警戒すると共に、このまま無事に事態が収まる事を心中祈る中、リアスは真摯な態度で敵対組織と会話を再開させた。

「……それで、奪われたエクスカリバーがどうしてこんな極東の国にある地方都市に關係あるのかしら？」

「現状、聖剣はカトリック、プロテスタント、正教会に二本ずつ管理し、残る一本は大昔の戦争の時に行方不明となった。その内、各陣営にあるエクスカリバーが一本ずつ奪われた。奪った連中はこの国に逃れ、この地に持ち運んだって話なのさ」

ゼノヴィアの言葉にリアスは呆れた様に額に手を当てた。

「私の縄張りは出来事が豊富ね。それでエクスカリバーを奪った連中に心当たりは？」
リアスの問いにゼノヴィアは目を細めた。

「奪った連中は『神の子を見張る者』。その主犯格は墮天使幹部……コカビエルだ」

予想外の答えに八雲と祐斗以外の面子は目を見開き、リアスは苦笑を浮かべた。

「コカビエル……。古の戦いから生き残る墮天使の幹部……。聖書にも記された者の名前が出されるとはね」

彼女達の会話から、八雲は何となくだが、現在の状況を把握する事が出来た。どうやら教会が悪魔に交渉を求める程に、事態は切羽詰まっているようだ。

（エクスカリバーの奪還の為、協力してくれってところかな。なら、俺も手伝える事があ

れば……)

だが、八雲の予想とは裏腹にゼノヴィアはハッキリと言った。

「私達の依頼……いや、注文とは私達と墮天使のエクスカリバー争奪の戦いに、この町に巣食う悪魔が一切介入してこないこと。——つまり、今回の事件に関わるなど言いに来た」

的外れな内容にリアスは眉を吊り上げた。

「ずいぶん言い方ね。それは牽制かしら？　もしかして、私達がその墮天使と関わりを持つかもしれないと思っているの？　手を組んで聖剣をどうにかすると」

「生憎、本部は可能性が無い訳ではないと思っっているのね」

リアスの瞳に冷たいものが宿るのが、グレモリー眷属達に感じたが、構わずゼノヴィアは言い続ける。

「上は悪魔と墮天使を信用していない。聖剣を神側から取り払う事が出来れば、悪魔も万々歳だろう？　だから先に牽制球を放つ事にした。墮天使コカピエルと手を組む様な事があれば、例え魔王の妹君であつても、我々はあなた達を完全に殲滅させる。……これが私達の上司からの言伝だ」

リアスの威圧に臆する事なく、ゼノヴィアは淡々と言つてのけた。

「……私が魔王の妹だと知つているという事は、あなた達も相当上に通じている者達の

様ね。ならば、言わせてもらおうわ。私は墮天使などと手を組まない。絶対によ。グレモリーの名にかけて、魔王の顔に泥を塗る様なマネはしないわ！」

暫く両者の間に拮抗状態が続いたが、ゼノヴィアがフツと笑って沈黙を解いた。

「その言葉が聞けただけでもいいさ。一応、コカビエルが盗んだエクスカリバーを持つて潜んでいるという事をそちらに伝えておかなければ、何か起こった時に私が……教会本部が様々なものに恨まれる。まあ、協力は仰がない。そちらも神側と一時的にでも手を組んだら、三竦みの様子に影響が出るだろう。それが魔王の妹なら尚更だよ」

ゼノヴィアの言葉を聞き、リアスは強張った表情を緩和させて軽く息を吐いた。

「正教会からの派遣は？」

「上は今回この話を保留した。仮に私とイリナが奪還に失敗した場合を想定して、最後に残った一本を死守するつもりなのだろうさ」

（潔いというのか、軽率というのか……聞くこつちが呆れるなあ……）

心中呆れる八雲と同じく、呆れた様子でリアスが問う。

「二人だけで墮天使の幹部からエクスカリバーを奪還するつもりなの？ 無謀ね。死ぬつもり？」

「そうよ」

「私もイリナと同意見だが、出来るだけ死にたくはないな」

イリナとゼノヴィアは真剣な眼差しで平然と言い切る中、リアスは本日何度目かの呆れ声を漏らした。

「まさか、死ぬ覚悟で日本に来たというの？ 相変わらず、あなた達の信仰は常軌を逸しているのね」

「私達の信仰をバカにしないでちょうだい、リアス・グレモリー。ね、ゼノヴィア」

「まあね。それに教会は墮天使に利用されるぐらいなら、エクスカリバーが全て消滅しても構わないと決定した。私達の役目は最低でもエクスカリバーを墮天使の手から無くす事だ。その為なら、この命など惜しくはない」

そんな覚悟を目の当たりにした八雲は、シキガミ共々呆れていた。

（これが信仰心ってヤツか……。命を無駄にするなつての……）

「……………」

「……………」

そんな事を思っている内に、いつの間にか両者が見つめあったまま会話は途絶していった。

そして、イリナとゼノヴィアが目で合図を送りあうとおもむろに立ち上がった。

「それでは、そろそろおいとまさせてもらうかな。イリナ、帰るぞ」

「そう、お茶は飲んでいかないの？ お菓子ぐらい振る舞わせてもらうわ」

「いらない」

「ごめんなさいね。それじゃ、おじやましました」

リアスの誘いをゼノヴィアは手を振って断り、イリナも手を合わせながら断ると、そのまま部室を去ろうとした。

だが、ふとゼノヴィアの視線が一ヶ所に止まった。

「入室してすぐ見かけた時、もしやと思ったが、『魔女』アーシア・アルジエントか？
まさか、この地で会おうとは」

彼女が口にした『魔女』という言葉に、アーシアはビクツと体を震わせる。

それに気付いたのか、イリナもまじまじとアーシアを見つめた。

「あなたが一時期、噂になっていた『魔女』になった元『聖女』さん？ 悪魔や墮天使を癒す能力のせいで教会から追放されたと聞いていたけれど、悪魔になつていいるとは思わなかったわ」

「……………あ、あの……………私は……………」

言い寄られ、対応に困るアーシア。

「大丈夫よ。ここで見た事には伝えないから安心して。『聖女』アーシアの周囲にいた方々に今のあなたの状況を話したら、ショックを受けるでしょうからね」

「……………」

イリナの言葉にアーシアは複雑極まりない表情を浮かべていた。

「しかし、悪魔か。『聖女』と呼ばれていた者。堕ちるところまで堕ちたものだな。まだ我らの神を信じているか？」

「ゼノヴィア。悪魔になった彼女が主を信仰しているはずはないでしょう？」

呆れた様子でイリナは言うが、ゼノヴィアは即座に否定した。

「いや、彼女から信仰の香りが感じ取れる。抽象的な言い方かもしれないが、私はそういうのに敏感でね。背信行為をする輩でも罪の意識を感じながら、信仰心を忘れない者がいる。それと同じものが彼女から伝わってくるんだよ」

ゼノヴィアが目を細めると、イリナは興味深そうにまじまじとアーシアを見つめる。

「そうなの？ アーシアさんは悪魔になったその身でも主を信じているのかしら？」

イリナの問いかけに、アーシアは悲しそうに暗い表情で呟き始めた。

「……捨てきれないだけです。ずっと、信じてきたものですから……」

それを聞いたゼノヴィアは、布に包まれた聖剣を突き出した。

「そうか。それならば、今すぐ私達に斬られるといい。今なら神の名の下に断罪しよう。罪深くとも、我らの神ならば救いの手を差し伸べてくださるはずだ」

そのままアーシアに近付こうとするゼノヴィアに、八雲は咄嗟に動こうとしたが、その前に一誠がゼノヴィアに立ちはだかった。

「触れんな」

怒気を含んだ口調で、アーシアを庇う様に立つ一誠が告げる。

「あんだ、さつきアーシアの事を『魔女』だと言ったな？」

「そうだよ。少なくとも今の彼女は『魔女』と呼ばれるだけの存在ではあると思うが？」

平然と言つてのけるゼノヴィアへの怒りで、一誠は奥歯をギリギリと噛み鳴らした。

「ふざけるな！ 救いを求めていた彼女を誰一人助けなかったんだろう！？」 自分達で勝

手に『聖女』にして、少しでも求めていた結果が違つたら、今度は『魔女』呼ばわりし

て見捨てんのかよ？ そんなの、おかしいだろ!？」

激昂する一誠は腹から込み上げてくる感情を吐き出すかの様に、さらに続ける。

「アーシアの苦しみを、優しさを、誰も分からなかったくせに何が神様だ！ 現にその神

様だつて、アーシアが助けを求めた時に何もしてくれなかったんだ

ぞで!？」

「神は愛してくれていた。何も起こらなかつたとすれば、彼女の信仰が足りなかつたか、もしくは偽りだつただけだよ」

だが怒りを露わにする一誠に、ゼノヴィアは悪びれる事なく返答し、その態度がさらに一誠の沸点を上げる。

「君はアーシア・アルジェントの何だ?」

今度はゼノヴィアが聞いてきた。

だから一誠は正面から鋭い目つきを睨み返し、ハッキリと告げた。

「家族だ。友達だ。仲間だ。だから、アーシアを助ける。アーシアを守る！ お前達がアーシアに手を出すなら、俺はお前ら全員を敵に回しても戦うぜ」

一誠の挑戦的な物言いに、ゼノヴィアはさらに目を細めた。

「それは我ら教会全てへの挑戦か？ 一介の悪魔にすぎない者が、大きな口を叩くね。教育不足ではないか？ グレモリー」

「イツセー、お止めー」

「ちようどいい。僕が相手になろう」

リアスは今にも一触即発しそうな両者を落ち着かせようとしたのだが、彼女を遮る様に祐斗が前に出た。

「誰だ、キミは？」

問いかけるゼノヴィアに、剣を携えていた祐斗は不敵に笑った。

「キミ達の先輩だよ。……最も、『失敗作』だけどね」

その瞬間、部室内に無数の魔剣が出現した。

(……最悪以上になったな)

ゼノヴィアの言葉に憤怒を貯めていた八雲は、想定外の出来事に冷静になるのだっ

た。

現状、何も出来ない自分に、誰も聞こえない様に舌打ちしながら……。

第31話：結成、聖剣へエクスカリバー〉破壊団

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………だあああッ！　いつまで黙ってるんだよ！」

しびれを切らしたコゲンタが叫んだが、八雲は頷くだけで再び考え込んでしまう。

放課後の騒動から数時間が経過した。一誠悪魔と祐斗副、ゼノヴィア教とイリナ副の戦いは、教

会側の勝利で幕を閉じたのだ。

思えば敗因要素は多くあったが、中でも印象なのは祐斗が普段の力を出しきれないの大きい。相手のゼノヴィアと力比べをした時点で、八雲は内心呆れる様に呟いたくらいだ。

そして、勝負が決まった後に祐斗が立ち去ったのだが、その別れ際のリアスの悲しそうな顔に、八雲も一誠達も見えられなかった。

これが、前回の勝負の回想である。

「コゲンタ」

暫くして考え込んでいた八雲は名を呼ぶと、コゲンタは笑みを浮かべていた。

『分かつてるぜ。今、八雲が考えてる事なんて、オレ達には筒抜けだしな』

「そうか。なら、協力してくれるか？」

『ああ！』

「ありがたい。明日は学園も休みだし、朝から行動するか」

「何の行動ですか、御主人様？」

八雲が小さく呟くと、不意に背後から声をかけられては振り向いた。

そこにいたのは勿論くうろだった。先ほどまで風呂に入っており、髪はしっとりしていた。

「いや、祐斗の事だな……。ダチの為に、ちよつとお節介を焼こうと思つてな」

「お節介、ですか？　なら、私も協力させてください！」

『おいおい、大丈夫か？　くうろの実力は認めてつけどよ、事件の首謀者や教会側に危険視されるんじゃないか？』

「それでもッ！」

心配するコゲンタをよそに、くうろは八雲に体を密着するほど乗り出した。

「御主人様がお友達の為に危険を承知で進むなら、私は御主人様の為に身を挺してでも守りますッ！ だから、私にも協力させてくださいッ！」

くうろの言葉に感化されて正面を見る八雲。くうろの瞳には揺らぎない決意を宿しており、暫く見つめていた八雲は苦笑して一言。

「……くうろ、お前の覚悟は受け取った。だけど一つだけ言っとくぞ。俺がお前も守つてやる。だから、お前はお前の成すべきことをやるんだ」

「御主人様……」

八雲の言葉にくうろは頬を赤く染める。その表情は先ほどの決意に満ちた顔から一変し、まるで恋する乙女であった。

『あー……もういいか？』

しかし、コゲンタの言葉に反応しては八雲はくうろを体から離れさせた。

「お、おう。そうだな。それじゃあ、明日の行動なんだがー」

◆ 翌日、八雲とくうろは駅前のベンチで座っていた。

昨日の事もあり、今朝の鍛練では一誠とリアス、アーシアは不在であったが、八雲達

は鍛練を終えてすぐに家を出たのだ。その際、朝食も取らずに出てしまったので、それぞれの膝上には駅前のハンバーガーショップで買った商品が入った紙袋が置かれていた。

すると、八雲は紙袋からハンバーガーを取り出しては話し、ハンバーガーを食べているくうろは耳を傾ける。

「それじゃあ、昨日の確認だ」

「ふぁいッ！」

「祐斗はエクスカリバーを憎んでいる。その憎しみのせいで昨日、リアス部長の言葉に従わなかったのは知ってるな……はむっ」

「……んぐっ、はい。勝負の後、部長の静止を無視してどこかに行きました」

「……………ごっくつ。なら、祐斗にエクスカリバーを破壊させれば、抱えている憎しみと仲間の無念も晴らせると、俺は考えた」

「そこで、この前に御主人様が会った首謀者の神父を見つけるんですね」

「そうだ。見つけるには俺達だけでも相当な時間も掛かるが、ダチの為に頑張るしかない」

「ふおうですね。……むきゆっ、それじゃあ、どこから向かいますか？」

「そうだな……」

くうろの言葉に悩みながら、八雲は残りのハンバーガーを頬張っては何げなく空を見上げると、それは突然に起こった。

「嫌だあああッ！ 俺は帰るんだよおおおッ！」

「んぐ!？」

「ちよ、御主人様!？」

聞き覚えのある声の悲鳴が聞こえたせいで、八雲は喉を詰まらせてしまいが、くうろがドリリンクを渡したので大事に至らなかった。

「……………つ、ぶはく……………今の声って……………」

そして八雲は声の方へ視線を向けると、そこにいた。

「兵藤！ どうして俺なんだよ！ それはお前ら眷属の問題だろう!？ 俺はシトリー眷属だから関係ねえ！ 関係ねええええッ！」

「そう言うなって、匙。俺が知ってる悪魔で協力してくれそうなのはお前だけなんだよ」「ふざけんなッ！ 俺がためえの協力なんてするかよ！ そんな事したら、俺は会長に殺されちまうだろうがあああッ！」

「……………」

号泣する元士郎を逃げないように捕縛する小猫。そして毒気を抜かれた様子で立ち尽くす一誠という、珍しい組み合わせが八雲達の視界に入っていた。

「お前んところのリアス先輩は厳しいながらも優しいんだろうよ！ でもな！ 俺んところの会長は、厳しくて厳しいんだぞッ！」

恐怖で青ざめる元士郎。しかし、その絶叫は適当に頷く一誠といつもの無表情の小猫に流されるのであった。

「……………あ」

そんな中、小猫はある方向に顔を向けた事で八雲達の存在に気付いた。

「ん？ 小猫ちゃん。どうかした……………あ」

「よっ」

そんな小猫に釣られるように、一誠も同じ方向に顔を向けると、八雲が手を上げていた。



「すると、2人も俺と同じ考えだったのか」

「まあ、そうだな。でも、イツセーほどに考えてなかったな。俺達だけで行動してたし……………」

それから暫くして、八雲とくうろは一誠達と共に街中を歩きながら話を聞いていた。

内容としては、八雲が立案した物より予想を上回る驚きの内容だったが、同時にそれなら両者の利害が一致する内容でもあり、その手があったかと感心してしまった。

しかし、それは下手をすれば互いの関係が悪化するかもしれない危険な賭け。命がけの交渉だが、仲間の為にと八雲達も同行する事を決めた。無論、リアスとアーシア、朱乃には内緒で……。

「チクシヨウ……………俺に拒否権は無いのか？」

一方、元士郎は俯きながら八雲と一誠の後についていく中、ホリンが話しかけていた。『ええやないの。あんたが活躍しとたつて、シトリーはんによーけ言つたるさかい。そないなつたら胸キュンになる可能性あるで』

「ほ、ホントか!? マジなんだなツ!! だったら、少しだけなら手伝つてやるか」

ホリンの言葉に元士郎はやる気を出す中、小猫は「単純」と、ホリンは『ちよろいなあ』と一言呟いた。

「とりあえず、彼女達を探さないと始まんないな。早く見つかればいいんだが……」

「そうだよな。でも極秘任務中だつて考えると、長期戦覚悟したほうがいいんじゃないかねえか?」

『だつたら、オレ達にいい考えがあるぜ』

「本当か、コゲンタ!」

一誠の言葉にコゲンタは自信満々に頷き、その方法を口に出そうとした瞬間だった。
「えー、迷える子羊にお恵みを〜」

「どうか、天の父に代わって哀れな私達にお慈悲をおおおッ！」

街中探索、約30分。簡単に見つかった。

「……………なあ、吉川」

「分かつてる」

『……………こりゃあ、出番はいらないみたいだな』

「……………」

苦笑する一誠、八雲、コゲンタに、何とも言えない表情をする小猫、くうろ、元士郎。距離はあるが、6人の視界に探し人2人……ゼノヴィアとイリナは会話を続ける。

「くっ……………これだから信仰の匂いもしない国は嫌なんだ」

「毒つかないでゼノヴィア。路銀の尽きた私達がこうでもしないと、食事も摂れないのよ？」 ああ、パンのミミさえ買えない私達ッ！ こんな事なら、おつるさんの和菓子を残しておけばよかったわッ！」

「ふん。そもそも、路銀が尽きたのはイリナが詐欺紛いのその変な絵画を買うからだ」

「何を言うの！ この絵には、聖なるお方が描かれているって、展示会の関係者も言っていたわ！」

「じゃあ、誰なんだ？ 私には誰も脳裏に浮かばないな」

「……多分、ペトロ……様？」

「……ああ、主よ。これも試練ですか？ どうしてこんなのが私のパートナーなのだ……」

「ちよ、ちよつと、頭を抱えないでよ。あなたつて、沈む時はとことん沈むわよね」

「うるさい！ これだからプロテスタントは異教徒だというんだ！ 我々と価値観が違う。聖人をもつと敬え！」

「何よ！ 古臭いしきたりに縛られるカトリックの方がおかしいのよ！」

「何だとツ！」

「何よツ！」

「ぐぬぬぬ……ツ！」

「……これ以上は、さすがに見過ぎせないか」

ついには顔をぶつけながら喧嘩を始める2人。さすがに街中で騒ぎとなると一般人にも迷惑になると判断し、八雲は先に前へと出た瞬間、それは聞こえた。

ぐううううう……ツ！

大きく腹を鳴らしては、ゼノヴィアとイリナは地べたへと崩れてしまった。その姿から、遠巻きに見ていた一誠達は昨日部室で啖呵を切った人物と同一だとは思えなかつ

た。

「……まずは、どうにかして腹を満たそう」

「……そうね。そうしないと、エクスカリバー奪還どころじゃないわ」

「……ちよつといいかな？」

ゼノヴィアとイリナが考えようとしたが、不意に声を掛けられては顔を向けた。

「えつと………今から食事に行くんだけど、一緒に行くか？」

そんな八雲の言葉に、2人はひもじさの宿った瞳から生気が戻り、素直に頷いた。



「ンまああああああいッ!!」

注文した料理を口にした途端、ゼノヴィアとイリナは周りの人目を気にせずには叫ぶ。

現在、八雲達は近所のファミレスに来店し、ゼノヴィアとイリナに食事を奢っていた。最初2人は八雲に感謝しようとしたが、その際に一誠達を視界に入れてしまった。それでののか、ファミレスに到着するまでブツブツと懺悔を呟き、気まずい雰囲気のまま連れていったのだった。

「うまい！ 日本の食事はうまいぞ！」

「うんうん！ これよ、これなのよ！ これが故郷の味なのよ！」

しかし、そんな雰囲気も今は無い。注文した料理が運ばれてはガツガツと彼女らの腹に収められ、それはそれは幸せそうな表情を浮かべては涙を流した。

そんな中、八雲達は小声で話している。

「よっほど空腹だったみたいだな」

「平らげる速度が尋常じゃねえよ。お金が足りるか心配だ」

「……私も少しは出せますよ」

「俺も……正直ピンチだけど、出してやる」

「小猫ちゃん。匙……」

「その心配は無い。今回は、俺が全額払うよ」

「ちよ、平気か八雲!? どう見ても1万以上はあるぞ」

元士郎の驚きに八雲以外の面々は同意する。現にゼノヴィアとイリナの横には食べ終えた皿が積まれており、その中にはファミレスの中でも高額な品もいくつか入っている。しかも全額払うという事は、一誠達が頼んでいる品も奢るという意味もある。因みに八雲と一誠、小猫、元士郎はソフトドリンクを頼んでおり、くうろはパフェを食べていた。

「少し前にリアス部長から謝礼を渡されたんだよ。最初は拒んだけど、どうやらリアス

部長の家族からの謝礼らしくて、最終的にこつちが折れたんだ」

無論、所持している金額はほんの一部だが、この食事代なら余裕で払える。もしも金額を所持していれば、ファミレスの全メニューを数百回は制覇可能だ。因みにその謝礼は銀行に預けていれば八雲の家族が不審に思う恐れがあるので、とあるシキガミが管理しているのだ。

そんな八雲とリアスのやり取りに啞然としていた一誠達。すると、食事の音が途切れたのか、一誠達は気になって視線をゼノヴィアとイリナに向けた。

「ふう……落ち着いた。まさかキミ達悪魔に救われる日が来ようとは、世も末だな」

「おいおい、奢ってもらっておいでそれかよ……」

ゼノヴィアの皮肉に口の端を引きつらせる一誠。だが、奢るのは八雲なので一誠達は関係ない。

「はふうー、ご馳走様でした。ああ、主よ。心優しき悪魔達にご慈悲を」

「「うッ！」」

イリナが合掌した後に胸の前で十字を切った結果、悪魔である一誠、小猫、元士郎の3人は頭痛に襲われ、頭に手を当てた。

「あ、ごめんなさい。つい十字を切ってしまったわ。てへっ♪」

少しばかり悪びれた様子でかわいらしく笑うイリナ。一応、故意ではなかった様だ。

「で、私達に接触した理由は？」

水を飲んで一息ついたゼノヴィアが改めて訊いてきた。

さつそく本題に入り、気を引き締め直した八雲と一誠が答える。

「あんたら、エクスカリバーを奪還する為にこの国に来たんだよな？」

「そうね。それについては、この前の説明した通りよ」

空になったコップをテーブルに置き、イリナが肯定した直後、八雲が訊ねる。

「だけど同時に、墮天使に利用されるぐらいなら、エクスカリバーが全て消滅しても構わない……って言ってたよな？」

「……………」

八雲の言葉に何かを感じ取ったのか、ゼノヴィアは目を細める。そして、真剣な表情を浮かべる八雲と一誠は言葉を発した。

「エクスカリバーの破壊に協力したい」

2人の発した一言によって、店内の一角がシンと静まり返った。緊張の為か、ゴクリと生唾を飲む音が妙によく聞こえた気がした。

一誠が持ちかけたのは、エクスカリバーの破壊許可をイリナとゼノヴィアから貰うというものだった。これなら、祐斗が聖剣を破壊する事で自分と同志の復讐を果たし、イリナとゼノヴィアは墮天使の手から奪還できると考えた一誠は、彼女達と接触を図ろう

としていた。その結果、八雲とも行動を共にする事が出来たのだ。

ただ、一誠は今になって自分達と結託し、エクスカリバーを破壊する事は彼女達を侮辱する行為ではないのかと、内心で冷や汗をかいていた。

「……………」

「もぐもぐ……………」

一誠と同席する八雲、小猫、元士郎は黙りながら、くうろはパフエを食べながらゼノヴィアとイリナの反応を伺う中、先に静寂を破ったのはゼノヴィアだった。

「そうだな。破壊可能であれば一本ぐらい任せてもいいだろう。ただし、そちらの正体がバレない様にしてくれ。一時的とはいえ、こちらもそちらと関わりを持っている様に、上にも敵にも思われたくはない」

意外とあっさりと許可が下りた事に八雲達は嘩然と見つめていると、ゼノヴィアの返答にイリナが異を唱える。

「ちよつとゼノヴィア。いいの？ 相手はイツセー君とはいえ、悪魔なのよ？」

「イリナ。正直言つて私達だけで3本回収とコカビエルとの戦闘は厳しい」

「それは分かるわ。けれどッ！」

「最低でも私達は3本のエクスカリバーを破壊して逃げ帰ればいい。私達のエクスカリバーも奪われるぐらいなら、自らの手で壊せばいい。それで奥の手を使ったとしても、

任務を終えて無事帰れる確率は3割も無い」

「それでも高い確率だと覚悟を決めてここに来たはずよ。それこそ私達、信徒の本懐じゃないの」

「気が変わったのさ。私の信仰は柔軟でね。何時でもベストなカタチで動き出す」

開き直る様な言い方をするゼノヴィアに、イリナはさらに声を上げた。

「あなたねツ！ 前から思っていたけれど、信仰心が微妙におかしいわよ!」

「否定はしない。だが、任務を遂行して無事に帰る事こそが、本当の信仰だと私は信じてる。生きて、これからも主の為に戦う。違うか？」

「……違わないわ。でも」

食い下がるイリナをゼノヴィアは遮った。

「だからこそ、悪魔の力は借りない。代わりにドラゴンの力を借りる。上もドラゴンの力は借りるなどは言っていない」

ゼノヴィアの視線が一誠に……否、彼の中に宿る赤龍帝に向けられ、彼女は嬉々として語る。

「まさか極東の島国で赤龍帝と出会えるとはね。悪魔になつていたとはいえ、ドラゴンの力は健在と見ているよ。伝説通りなら、その力は最大にまで高めれば魔王並になれるんだろう？ それだけの力ならエクスカリバーも破壊出来るだろうし、この出会いも主

のお導きと考えるべきだね」

「た、確かにドラゴンの力は借りるなどは言つてこなかったけど、屁理屈すぎるわよ！ やっぱりあなたの信仰心は変だわ！」

「変で結構。しかし、イリナ。彼はキミの古い馴染みだろうか？ なら、信じてみようじゃないか。彼のドラゴンの力を」

自信に満ちたゼノヴィアの言葉に、イリナは沈黙しては静かに頷いた。

「どうやら上手くいけたな」

「そうだな。じゃあ、さっそく今回の俺のパートナーを呼んでもいいか？」

安堵する中、一誠は携帯を取り出した。

無論、連絡相手は祐斗である。



「……話は分かったよ」

一誠から連絡を受けて数分後。ファミレスに顔を出した祐斗は説明を受けた後、嘆息しながらコーヒを口に含んだ。

「……正直、キミ達にエクスカリバー破壊を承認されるというのは遺憾だけだね」

「随分な言い様だな。そちらが『はぐれ』だったら、問答無用で斬り捨てているところだ」
ゼノヴィアと睨み合う祐斗にイリナが訊ねる。

「やはり、『聖剣計画』の事で恨みを持っているのね？ エクスカリバーと教会に……」
「当然だよ」

鋭さを宿らせる瞳を細めながら、祐斗は冷たい声音で肯定した。

「でもね、木場くん。あの計画のおかげで聖剣使いの研究は飛躍的に伸びたわ。だからこそ、私やゼノヴィアみたいに聖剣と呼応出来る使い手が誕生出来たの」

「だが、計画失敗と断じて被験者のほぼ全員を始末するのが許されると思っているのか？」

祐斗に憎悪の眼差しを向けられて反応に困るイリナ。

そこへ、ゼノヴィアが言う。

「その事件は、私達の間でも最大級に嫌悪されたものだ。処分を決定した当時の責任者は信仰に問題があるとされて異端の烙印を押された。今では墮天使側の住人さ」

「墮天使側には？ その者の名は？」

ゼノヴィアの言葉に興味を惹かれたのか、祐斗が訊ねた。

「『バルパー・ガレイ』。『皆殺しの大司教』と呼ばれた男だ」

バルパー。その人物が祐斗の仇敵なのだろう。

その名前を覚える中、八雲は横にいる祐斗を見た。その瞳には新たな決意の光が宿っており、目標が分かっただけでも大きな前進と確信した。

「僕も情報を提供した方がいい様だね。先日、エクスカリバーを持ったエクソシストに襲撃された。その際、神父を1人殺害していたよ。殺られたのはそちらの者だろうね」

「それ本当なのか、木場?!」

祐斗の言葉に驚き、思わず一誠が訊ねる。

「まあね。その時、八雲くんも一緒にいたよ」

全員の目が八雲に集中すると、八雲は「ああ」と言っただけで頷く。

「少し交戦したけど、途中でメイド服の人形に邪魔された。殺った奴の名前は覚えただけで、その後の行方はどうなったんだ?」

「向こうの逃走が一枚上手だったよ。あの時は正直、悔しかったね……」

「それで、その相手って誰ですか?」

「フリード・セルゼン。以前、ある事件に加担していたエクソシストらしい」

くうろの問いに八雲は答えると、それを聞いた元士郎を除く全員が僅かに顔をしかめた。交戦した八雲でも、あの不快な雰囲気は嫌になっちゃおう。

その言葉に、ゼノヴィアとイリナは同時に目を細めた。

「そうか、奴か……」

「フリード・セルゼン。元ヴァチカン法王庁直属のエクソシスト。13歳という若さで悪魔祓いになった天才。次々と悪魔や魔獣を滅していく功績は大きかったわ」

「だが、奴はあまりに殺りすぎた。奴には信仰心なんてものは最初から無かった。あつたのはバケモノへの敵意と殺意。そして同胞すらも手をかける、異常なまでの戦闘執着。異端にかけられるのも時間の問題だった。なるほど。フリードは奪った聖剣を使つて同胞を手にかけていたか。あの時、処理班が始末出来なかつたツケを私達が払う事になるとはね」

忌々しげに呟くゼノヴィアの言葉に、この場の全員は内心で納得した。

「まあいい。とりあえず、エクスカリバー破壊の共同戦線といこう。何かあつたらこへ連絡をくれ」

ゼノヴィアはテーブルに置いてあつた紙ナプキンを取り出してペンを走らせると、連絡先が書かれたモノを一誠と八雲に渡した。

「サンキュー。じゃあ、俺の方もー」

「あ。イツセーくんの携帯番号はおばさまからいただいたわ」

「マジかよ！ 母さん！ 勝手な事をツ！」

微笑むイリナの言葉に思わず一誠は耳を疑っていると、八雲もゼノヴィアと同じ様に連絡先を記した紙ナプキンと、何時の間にか用意した封筒を渡した。

「俺の連絡先だ。それと少ないけど、お金も貸しておく。無くなったら店に来てもいいぞ。おばあちゃんとおじいちゃんやんが和菓子をご馳走させるだろうしな」

「本当に!?」 食事も奢ってくれて、それにお恵みを貰えるなんて……。ああ、主よ。この優しい者に祝福を……」

「「うっ！」」

神に祈るイリナの姿に一誠達はまたしても頭痛に襲われるが、祐斗だけは情けない姿を晒さない様になっていた。

「では、そういうことで。食事の礼と恩は、何時か返させてもらうぞ。ではな、赤龍帝の兵藤一誠と……」

「吉川八雲」

「そうか。またな、吉川八雲」

「食事ありがとうね、イツセーくんと吉川くん！ また奢ってね！ 悪魔だけど、イツセーくんの奢りならアリだと主も許してくれるはずだわ！ ご飯なら何時でもOKなのよ！」

そう言つて2人が席を立つと、八雲達は店を出るまで見送つたのだった。

「「「ふうふうう……」」」

その後、緊張が解けたのか祐斗とくろう以外のメンバーが大きく息を吐いた。

「何とか上手くいったな」

「ああ。我ながら大胆すぎる作戦でした」

「……八雲くん。イツセーくん。どうして、こんな事を？」

静かに訊ねる祐斗に対し、八雲と一誠は答える。

「ま、仲間で眷属だしさ。お前には助けられた事もあったから借りを返す……つて訳じゃないけど、力になろうと思つてさ」

「悩んでるダチの為に力になりましたかった。それに下手に動けば、リアス部長に迷惑が掛かるしな。『はぐれ』にさせたくない。まあ、向こうと協力態勢が取れたし、結果オーライさ」

「私も御主人様と同じです！」

くろうも答えたが、その言葉に祐斗はまだ納得しない表情だった。だが、そこへ小猫が口を開いた。

「……祐斗先輩。私は、先輩がいなくなるのは……寂しいです」

普段は無表情の小猫。だが今、祐斗を思う小猫の表情は少し寂しげで、その変化はこ

の場にいる全員に衝撃を与えた。

「……お手伝いします。だから………いなくならないで」

キユン……

(や、やべえ。木場じゃないのに俺がきゅんときたぜ)

(普段は無表情だけど、こう………何かと別の表情を見せられると、胸が高鳴る俺がいるな。これが所謂、ギャップなのか?)

『あー、男どもはこれやから』

そんな表情の小猫の訴えに一誠と八雲がときめく中、ホリンはジト目で呆れた様子で、祐斗は小猫の行為に困惑しながらも苦笑していた。

「まいったね。小猫ちゃんにそんな事を言われたら、僕も無茶は出来ないよ」

「それじゃあ……!」

期待する言葉に、祐斗は頷いた。

「今回は皆の好意に甘えさせてもらうよ。イツセーくんと八雲くんのおかげで、真の敵も分かったしね。でも、やるからには絶対にエクスカリバーを倒す」

その瞳に決意を宿して祐斗は宣言すると、一誠と八雲は気合いが入り、小猫とくうろは安堵しては小さく微笑んだ。

「よしッ! 俺達エクスカリバー破壊団結成だ! 頑張つて、奪われたエクスカリバー

とフリードのクソ野郎をぶっ飛ばそうぜ！」

「ああ！ 俺、イツセー、祐斗、小猫、くうろ、シキガミ達が力を合わせれば、どんな困難にも打ち勝てる。この任務、必ず成功させようぜ！」

『『『おおおおッ！』』』

八雲の言葉にシキガミ達が気合いを入れて叫ぶ。友の為、その気持ちシキガミ達にも伝染した様だ。

こうして、八雲達と教会側の共同戦線が結ばれたのだった。

「…………えーつと、俺も？　結構、蚊帳の外なんだけどさ…………」
『『『』』』……………『『『』』』』

その言葉に、全員が一時だけ元土郎の存在を忘れていたのに気付いたのだった。

第32話：スケベ達の目標

『聖剣計画』。

カトリック教会が秘密裏に計画し、剣に関する才能と神器を有した少年少女を被験者にして行われた、聖剣に対応した者を輩出するための非人道的な実験。

被験者は散々実験を繰り返され、自由を奪われ、人として扱われず、生を無視された。だが、彼らは耐え続けた。特別な存在になれると信じて、神に愛されていると信じ込まされて、その日が来るのを待ち焦がれながら生きてきた。

その結果が、被験者たち……聖剣に対応できなかつた者たちの処分だった。

施設の一箇所に集められた際、被験者たちは一切恐怖を抱かなかつた。だが、研究者に撒かれた毒ガスにより倒れ、一つ、二つと命が次々と消えていき、ようやく彼は理解した。

ああ、自分は殺されるのだ、と。

そして彼がいた被験者グループの番となり、毒ガスが散布される。息を止めようにも限界があり、微量ながらガスを吸い込み、呼吸のために徐々に体へ取り込んでしまう。

全身に痛みと痙攣、朧気になる視界の中、被験者の1人が研究者を突き飛ばし、強引

に扉を開けては彼を逃がした。

「逃げて！ あなただけでも！」

その言葉に、彼は研究施設を脱出した。死にたくない一心で、追っ手に執拗に追われながらも、最後の最後まで逃げ続けた。

だが山の森、雪が降る中で訪れた死の兆候。ついに彼は静かに倒れ込み、意識が消失する中、視界に紅あかが映り込む。

「あなたは何を望むの？」

薄れていく視界に、紅髪の少女の微笑みを彼は見た。

それが彼……木場祐斗とリアス・グレモリーとの出会いだった。



「同志たちの無念を晴らしたい。いや、彼らの死を無駄にしたくない。僕は彼らの分も生きて、エクスカリバーよりも強いと証明しなくてはいけないんだ……」

その言葉を最後に、祐斗は自身の過去を語り終えた。以前リアスにも祐斗の過去を聞かせてもらったが、悲しい過去に八雲たちは沈痛の面持ちで静かに聞いていた。

「う、うううう………ッ！」

そんな中、1人のすすり泣く声が聞こえて自然に視線が向けられた。

このメンバーの中でただ1人、祐斗と聖剣の関係を知らなかったシトリー眷族である元士郎だった。今の元士郎の顔面は、目、鼻、口と、顔から出る汗を出しては号泣していた。

「木場あ！ 俺は今、非常にお前に同情している！ 辛かっただろう、キツかっただろう！ その施設のヤツらやエクスカリバーに恨みを持つ理由も分かるぞ！」

そんな表情で力説する元士郎を誰も笑わない。その熱い気持ちに一誠は無理矢理連れて来て申し訳なかった気持ちが消え、八雲も感心するように頷いた。

「俺も協力するぞ！ ああ、やってやるさ！ 会長にいいところ見せるよりも、俺たちでエクスカリバーの撃破だ！ 俺も頑張るからさ、お前も頑張つて生きろよ！ 絶対に救ってくれたリアス先輩を裏切るな！」

顔面汗まみれな元士郎が祐斗の手を取り言う中、多くのシキガミたちも現れては言った。

『微力ながら、我輩も是非協力させてもらおう』

『例え邪魔が入っても、この剣で木場の道を守り抜こう』

『それにしても、意外と根性あるんだなシトリーの『兵士』さんよお。オレっちも根性見せねえとなあ！』

ますますエクスカリバー破壊に積極的になるシキガミたち。すると、汗まみれな顔を拭いた元士郎が唐突に言った。

「いい機会だ。俺の話も聞いてくれ！ 共同戦線張るなら俺の事も知ってくれよ！」

その行為は悪くない案だと八雲は思った。他人を知れば小さな絆が生まれ、それは様々な事に繋がるのを知っていたからだ。

そんな思いの中、気恥ずかしそうにながらも瞳を輝かす元士郎。彼の口が開いた。

「俺の目標は……………ソーナ会長とデキちやった結婚をすることだッ！」

「……………え？」

「でもな、デキちやった結婚ってモテない奴にとってみたらハードル高いんだぜ？ そもそもデキちやう相手がいないし…………。でも、いつか会長とデキちやった結婚するんだ、俺…………」

「……………」

気恥ずかしそうにながらもランランと瞳を輝かせて語る元士郎。その結果、殆どの者の表情から先程の熱意が徐々に消え、困惑することとなった。

だが、ただ一人、元士郎の理解する者がいた。

「ッ!!」

元士郎の告白に共感し、滝のように涙を流してはその手を無言で取り、一誠は確信し

た。

同じであり、同類であり、同種であり……同志だった。

「聞け、匙！ 俺の目標は部長の乳を揉み………そして吸うことだッ！」

「……ッ!!!」

一誠の力説に元士郎は目を見開き、再び涙を流す。既に雰囲気は別の熱気が発生していた。

「ひ、兵藤ッ！ お前は分かってるのか？ 上級悪魔……しかもご主人様のお乳に触れるのが、どれほど大きな目標かということを」

「匙、触れるんだよ。上級悪魔の……ご主人様のおっぱいに俺らは触れられるんだよッ

！ 実際、俺はこの手で部長の胸を揉んだことがある」

「そんな……嘘だろうッ！ そんなことが可能なか!？」

「嘘じゃない。ご主人様のおっぱいは遠い。けど、追いつけない程の距離じゃないんだッ！」

「………いつまで続くんだ？ このスケベ談義は」

一誠と元士郎の語らいが白熱する中、八雲は嘆息しては考える。

聖剣を奪取した者たちが、この駒王町のどこかにいるのは教会側の説明で聞かされた。だが、たかが地方都市でも広い。探すには膨大な時間がかかり、盗人が逃げる時間

が増えてしまう恐れもある。

人海戦術で探すにしても、教会側を含めて計8人。単独捜査で行けば発見は早いですが、戦闘になった場合の危険度が跳ね上がり、取り返しのつかない可能性が出てしまう。

『なあ、八雲』

「ん?」

『オレたちにいい考えがあるぜ』

そんな八雲の悩みに、コゲンタは自信満々な笑みを浮かべた。



『このあたりでいいぞ』

コゲンタの言葉に全員の手が止まる。

ファミレスで行われた長い語らいは、一誠と元太郎の信頼を構築することに成功した。だが、熱意からなのかテンションが高い中、一誠は八雲にも何か告白しろと言われたのだ。

メンバー内の男子で目標を語ってないのは八雲のみ。小猫は半目で「イヤです」とキツパリ拒否し、くうろはファミレスの料理に夢中で言わなかった。そして、八雲もコ

ゲンタの提案を聞いてすぐに行おうと思い、全員に説明してはファミレスをあとにしたのだ。

結果、ファミレスでの語らいは一誠と元士郎の信頼が構築され、祐斗のはぐれ悪魔への道を閉ざすなどプラスに働いたのだった。

そして現在、八雲たちがいる場所は路地裏の広い空間。ファミレスからも近く、尚且つ人目がかかないような所だ。そんな場所の四隅に八雲は【隠】の闘神符を投げ、人払いの結果を発動させては『二十四気の神操機』を装着した。

「シキガミ降神！」

前に突き出した腕の前に『窓』が開かれ、現れたシキガミは猫の獣人的な外見を持っていた。隠しきれない色気が出された体に、胸元が大きく開いたチャイナ服が更に色気を拡散。その色気が一誠の鼻の下が伸びては小猫に制裁が加えられる中、シキガミが言葉を発する。

「豊穣のルリ、見参」

「ルリ。早速だが頼む」

「いいわよ。そのイケメン君の目標達成に協力するわ」

その言葉とともにルリは首にかけていた『陰陽鎖・瑠璃』を手にし、妖艶な舞を披露する。時折シャランと綺麗な音が瑠璃から発せられ、八雲たちを魅了する中、それは起

こつた。

「あ」

真つ先に反応したのは小猫。自分たちに近づく複数の気配を感じ取り周囲を見渡すと、ゾロゾロと現れた。

「にゃあ」「みゃあ」「んなー」

「なーご」「みー」「ふみゃー」

「んあー」「なー」「んみゃー」

猫、猫、猫……………。

「つて、どんだけいるんだよ!」

一誠の言葉に全員が同意した。何せ、この場に現れた猫は数十匹もなり、あつという間に足の踏み場もないのだ。

「このくらいでいいかしら……。——ねえ、あなたたち。この辺りで最近、怪しい人間を見かけたことはあるかしらはいそのきじとら柄ツ!」

色っぽい声色でルリが猫たちに訪ねる。いきなり指名された猫は驚くが、その猫の鳴き声に納得するような相づちをするルリの行動に、一誠が八雲に訪ねる。

「なあ、八雲。本当にこれで分かるのか?」

「さあな。だけど、この猫たちの方が町の隅々まで知ってるだろうよ。協力を司るルリ

だから可能な手段だし、先行投資も買ったからな」

これこそコゲンタたちシキガミが考えた作戦だった。

豊穰一族が司る力は『協力』。豊穰一族の秘伝の舞で猫を呼び集め、最近の出来事を教えてもらい犯人探しに協力してもらおうとしているのだ。

無論、ただで情報を貰う訳ではない。ルリはギブ&テイクを心情にしており、情報をくれた猫に八雲が道中買った煮干しを数匹渡して情報を払っている。その結果、後に数匹の猫がルリに町の情報を持ってきては餌を貰い、小さな情報ネットワークが形成されるのだった。

「ふう……。八雲、終わったわよ」

そんな未来を知らない八雲たち。すると、いつの間にか猫たちは姿を消しており、ルリが八雲に結果を報告した。

「この数日での犯罪者は複数。空き巣、ひったくりとかの犯罪を起こした人間もいたみたいけど……殺人で、しかも白髪の神父服の男が1人いたようよ。まあ、恐怖ですぐに逃げたからどこにいるのか知らないようだったけど……」

そんな外見を持つ者に交戦した経験を持つ八雲とグレモリー眷属が顔をしかめる中、ルリの報告は続く。

「それと、何匹かは人間の姿をした人形と接触したみたいよ」

「人形？ まさか、前に戦ったメイド服のか？」

「外見を見た子もいたから合つてると思うわ。何でも、箱に入れられて川に捨てられた時に助けてもらったとか、野良仲間の集会にたまに現れて餌を貰ったとか、近所のお婆さんが歩道橋を上がる時に背負ってあげたりとか、そんな話が聞けたわ」

「なにそのいい人」

それから暫くしてルリの報告は終わり、この場で全員解散することとなった。

祐斗はいつでも戦えるように準備をする為に帰り、一誠、小猫、元士郎はリアスとソーナに勘繰られないようにしながら計画を話し合いながら帰り、この場には八雲とくろうろ、シキガミたちが残った。

だからなのか。八雲は声を発し、くろうろは闘神銃を構えた。

「……そろそろ出てきたらどうだ、おふたりさん」

その言葉に若干遅れ、アハハと苦笑するイリナと、目を細めるゼノヴィアが現れた。



八雲と教会側が出会っている頃、コカピエル一派の隠れ家である廃教会。レイナーレがアーシアの神器を奪うために行った儀式の間である地下に動きがあった。

以前の地下空間はグレモリー一行とレイナーレ配下の悪魔祓いたちの乱戦が繰り広げられて崩壊寸前だった。だが今はそんな形跡などなく、まるで新築のような一室へと戻っていた。

「フンフンフン♪」

そんな地下空間で、上機嫌な鼻歌を口ずさむ人物がいた。

雪のように綺麗な白い肌、宝石の如く青い瞳、腰まで届く金髪、そして小学生のような体型の少女が、目の前に浮かんでいる複数の魔法陣を見ながら、楽しそうに手袋をした手を動かしていた。

少女のピアノを奏でるような指さばきに連動するように、魔法陣が世話しなく紋様を変化させる。それが暫く続くと同時に、1つの魔法陣に変化が訪れる。

その魔法陣を簡単に説明すれば、設計図。

人の形を象ったソレが、別の小さな魔法陣に被さっては形を変える。それが数回される内に、設計図のソレは完成された。

「こんなものかナー。そんなじゃまあ、実行っト！」

設計図を見た少女が納得するように喋り指を鳴らす。すると設計図が眩い光を放ち、設計図のソレが具現化したではないか。

無機質で金属の装甲、性能面を追求した体格、鋭利な刃を連想させる黒い鋼の翼。

機械の墮天使が降臨した。

「かーんせーい。とりあえず『機体墮天使（仮）』の名称で、このフォルダに保存しちゃいましょうカ」

そんな中、少女の着けている手袋が機械の墮天使を光の粒子にして吸い込まれると、地下空間の扉が開いた。

「ただいま戻りました、マスター」

現れたのは、以前八雲と戦ったオートマータと呼んだ人形少女のマルフだった。同じメイド服を身につけ、その手にはコンビニ袋を持っていた。

「お帰りマルフ。さてさて、頼んだ物は……………つて、マールーフ」

近づくマルフに少女はコンビニ袋を奪うと中身を確認した。だが、笑顔だった顔が次第に眉をハの字に変え、マルフを睨む。

「アタシが頼んだのと違うのがあるんだけど。カスタードホイッププリンが、どうして普通のプリンなわけサ？」

「残念ながら売り切れだったのです。この町にある同じコンビニでは隣町まで行かなければなく、雇主との契約ではこの町に離れられないので買えなかったのです」

「ムムム、売り切れなら仕方ないナ。全く、契約の行動範囲はもう少し広めにしてほしかったさネ……………」

無表情で答えるマルフに少女は納得してない表情をしているが、プリンを一口食べてはすぐにニコニコ笑顔となった。

そして少女がプリンを食べ終えるのを見計らい、マルフが話しかける。

「ところでマスター。進捗具合はどうですか？」

「ついさつき完成したヨ。物量を優先してるから性能面は中級以上で上級未満。武器に關してはワンオフじゃないから、量産品を使うサ」

「それで雇主が納得しますかね？」

「こつちも商売で契約してるんだ。積まれた金額に応じて、アタシは契約者の要望に答えた人形を作りだす。その後の人形の扱いは契約者が責任を持つて取り扱うことサ」

少女が言い終えると、新たな魔法陣の設計図を空中に浮かばせては作業を開始した。

「そんじゃまあ、アタシは他の契約者の人形を作らないといけないサ。終わるまでは、マルフの今日の晩ご飯を楽しみにしながら仕事するヨ」

「畏まりました。ですが、何度も言いますが休憩もしてください。もういい歳なんですから」

「アハハ。このカーディナル家が家長、キテユン・カーディナル。まだ40にもなつてないから、徹夜しても平気へっちゃらサ」

そんな軽口を聞き、マルフはヤレヤレと顔を振つては地下空間を出たのだった。

「さーて、始めますかネ」

そして少女……^{合法ロリ}キテュンは魔法陣に目を向けながら、楽しそうに作業を始めるのだつた。